



TITLE:

「笑道論」 譯注

AUTHOR(S):

「六朝・隋唐時代の道佛論争」研究班

CITATION:

「六朝・隋唐時代の道佛論争」研究班. 「笑道論」譯注. 東方學報
1988, 60: 481-680

ISSUE DATE:

1988-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66677>

RIGHT:

「笑道論」譯注

解題

ここに譯注を施す「笑道論」は、北周の甄鸞が道教を攻撃した文章であって、『廣弘明集』の卷九辯惑篇に收められている。「笑道論」は北周の武帝によって廢佛が斷行される前夜、天和五年（五七〇）に發表されたが、それが發表されるに至るまでの事情、その發表がもたらした波紋などを伝える「周滅佛法集道俗議事」の一文についても譯注を施し、「笑道論」の前に置く。「周滅佛法集道俗議事」はおなじく『廣弘明集』の卷八辯惑篇に收められ、その書の編著者である道宣自身の文章である。

「笑道論」の著者甄鸞は正史に立傳されていない。そのため傳記を十分に詳らかにしたいことを憾みとするが、「笑道論」を北周の武帝に上呈するにあたっての「啓文」の末尾に、「大周の天和五年二月十五日、前司隸毋極縣開國伯臣甄鸞啓す」とあって、その肩書を知ることができる。また幸いにも、唐の張説に「唐故廣州都督甄公碑」（『張説之文集』卷一八）が存する。開元五年（七二七）に卒した碑主の甄竄は、實に甄鸞の五代の孫なのであって、甄氏が中

「六朝・隋唐時代の道佛論争」研究班

山無極（河北省無極縣）の人であること、また漢の甄邯の十六代の孫として甄鸞が生まれたことを、「邯の十六代にして鸞を生む。齊に仕え、太山太守・司隸校尉・無極縣伯たり。笑道論を撰し、代に行なわる」と記したうえ、鸞から竄に至るまでの世系を、鸞の子の隋の汾州刺史族、族の子の隋の沁州刺史紹、紹の子の隋の市令協、協の子の唐の單于大都護府錄事參軍贈宋州刺史封、そして封の第四子が竄であると傳えている。甄鸞が「齊に仕え」というのは「周に仕え」の誤りであり、また司隸校尉であったというのは司隸大夫の誤りであろう。王仲犛『北周六典』（中華書局、一九七九）四四三—四四頁參照。またその碑文に、甄姓の由來を記して、「舜は陶甄の職に居り、命づけて甄氏と爲す。姓を賜うこと生に因り、堅の讀の如きも、形聲轉注し、眞を以て音と爲す」というのは、甄は Zhen シンと讀むべきであることを教えている。

かく、甄鸞の傳記について知られるところはごくわずかであるが、『隋書』經籍志にはその著書數種が著録されている。すなわち、史部雜史類に「帝王世錄一卷、甄鸞撰」、子部天文類に「周髀一卷、甄鸞重述」、子部曆數類に「周天和年曆一卷、甄鸞撰」、「七曜術算

二卷、甄鸞撰」、「九章算術二卷、徐岳甄鸞重述」、「九章算經二十九卷、徐岳甄鸞等撰」と著録されているのがそれである。また子部曆數類に「七曜本起三卷、後魏甄叔遵撰」の著録があり、『唐書』藝文志は甄鸞の著作の一つとして「七曜本起曆五卷」を著録する。もし兩者が同一の書物であるとするならば、甄鸞の字は叔遵であった。

これらの著作のうち、「周髀一卷」とは、現在も漢趙君卿注、北周甄鸞重述、唐李淳風等奉敕注釋として行なわれる『周髀算經』。能田忠亮『周髀算經の研究』（東方文化學院京都研究所研究報告第三冊、一九三三）、參照。「周天和年曆一卷」に關しては、『隋書』律曆志中に、「西魏の入關するや、李業興曆を行なう。周の武帝に逮んで、乃ち甄鸞有つて甲寅元曆を造り、遂に參用推歩す」、「武帝の時に及んで、甄鸞は天和曆を造り、上元甲寅より天和元年丙戌に至る……」などの關連の記事がある。またおなじく律曆志上に甄鸞「算術」からの引用が見られる。ともかく、これらの著作リストを通して知られるように、甄鸞はもっぱら天文、曆數の專家であつたのであり、「笑道論」のなかに數字にもとづいての議論が目だつものなるほどと首肯せられるのである。たとえば九「日月周徑」章において、道經の『文始傳』に「日月の周圍は六千里、徑は三千里」とある記事を、「法に據れば則ち圍は九千里、如何ぞ但だ六千に止まらんや」と、「圓三徑一」、すなわち圓周率三の計算をもつて反駁しているのなどは、もっとも得意とするところであつたらう。『周髀算經』では一貫して「圓三徑一」で計算が行なわれているからである。ちなみに、「笑道論」の著録は隋志にはなく、『舊唐書』經

籍志、『唐書』藝文志の丙部子錄道家類に三卷として著録されている。また、わが藤原佐世の『日本國見在書目錄』雜家の項に、それらにさきだつて「咲道論二、甄鸞撰」と見える。「二」は「三」の誤りであろう。

「笑道論」は、北周の天和五年、佛教と道教二教の優劣について論ぜよとの敕命が下つた時、道教の笑うべき點を逐條的にとりあげ、佛教が道教に優ることを論じた文章であつて、三卷三十六條をもつて構成された。三卷であるのは道教の三洞を笑つてのこと、三十六條であるのは道教經典の三十六部を笑つてのことであるという。

「笑道論」のなかで、甄鸞はただ一度だけ自分のことに言及し、「臣、年二十の時、道術を好み、觀に就きて學ぶ」（三十五「道士合炁法」章）と述べている。もしこれを信じてよいとするならば、彼は攻撃すべき相手である道教のことをよく知悉しており、それだけにかえつて機鋒も鋭いのであらう。三卷三十六章の構成、すなわち一章から八章までが上卷、九章から二十二章までが中卷、二十三章から三十六章までが下卷を成していたことは目次についてうかがうことができるが、ただし『廣弘明集』に收められたものが全文ではなく抄録であること、「笑道論」の標題の下に、「其の文は廣ければ、笑う可き者を抄取す」と記されている通りである。そしてそのことは、「笑道論」の二十七「隨劫生死」章、二十九「儉改佛經爲道經」章、三十「儉佛經因果」章、三十一「道經未出言出」章、三十五「道士合炁法」章、三十六「諸子爲道書」章のあわせて六章にそれぞれ對應する文章が、法琳の『辯正論』卷八「出道僞謬篇」に

「靈寶太上隨劫生死謬」、「儉改佛經爲道經謬」、「儉佛法四果十地謬」、「道經未出言出謬」、「道士合氣謬」、「諸子爲道書謬」としてあり、『辯正論』の文章が『廣弘明集』のそれよりも詳細であることによって確認しうるであろう。當該各章の注を参照していただきたい。つまり、『廣弘明集』には「笑道論」のいわばさわりの部分だけが取られたのであって、読みづらい部分の少なくないことの一半の理由はその點に存するのかも知れない。あるいはまた、道宣自身の筆が加わっている部分があるかも知れない。

かく抄録ではあるけれども、「笑道論」の内容がそもそも廢佛をもくろむ北周の武帝の意圖に反するものであったため、「即ちに殿庭に於いて焚蕩」されたといわれながら、『廣弘明集』に收められて今日にまで傳えられたことは、まことに貴重であるとしなければならぬ。六朝後期における道佛二教の論争がどのようなテーマをめぐってなされたのかを知るうえに一つの材料を提供してくれるからであり、あるいはまた、相手のあげ足を取り、時には自説を有利に導くために經典を偽作することも肯えて辭せず、そのように泥仕合としか表現しようのない様相をもって展開された論争の有様を具體的に理解させてくれるからである。「笑道論」を通してうかがわれる道佛二教の論争は、やがて唐初の傳奘と法琳をそれぞれの代表として争われる論争に繼承されるであろう。また「笑道論」には、道教がいかに馬鹿馬鹿しい内容のものであるかを笑うために、實にさまざまな道教經典が引用されている。それらが六世紀後半に確實に存在した道教經典であることを確認しうることもまた貴重であり、

それらのうちのかんりのものについて、今日の道藏に收められている道教經典のなかに對應を見出すことができる。詳細は注について見られたいが、譯注の作業を進めるうえでの一つの收穫であった。

ちなみに、清の俞正燮の『癸巳類稿』、その卷十四に「道笑論」の一文がある。「廣宏明集辨惑篇に云わく、周の天和五年、甄鸞は笑道論を上つる。五月十日、群臣詳議す。以て道法を傷蠹すると爲し、即ちに殿庭に於いて焚蕩す。法苑珠林は則ち盛んに其の書を誇り、今の僧徒は私かに之を寶とす。書は滅す可からず、故に道家聊か焉を笑う」と述べたうえ、「笑道論」から數條をとりあげ、「道家笑つて曰わく……」と反論を加えた文章である。『法苑珠林』が盛んに「笑道論」を誇っているというけれども、『法苑珠林』が「笑道論」に言及するのはただ二箇所のみである。すなわち、道教經典が偽造にかかることを述べる卷五五破邪篇の「妄傳邪教」に、北周の張賓、焦子順、馬翼、李蓮の四人について、「天和五年を以て、故城内の字眞寺に於いて佛經を挑攪し、道家の僞經一千餘卷を造る。時に萬年縣人の索岐裝演す。但だ甄鸞の笑道の處を見て並びに之を改除す」と記し、つづけて「笑道論」三十六「諸子爲道書」章の文章を「甄鸞の笑道論に云わく、道家は妄りに諸子三百五十卷に注して道經と爲す。又た玄都目錄を驗するに、妄りに藝文志の書名を取り、矯つて八百八十四卷に注して道經と爲す」と引用したうえ、「此れに據つて言へば、虚謬を明らかにするに足れり」というのが一つ（T53・703a~b）。卷一〇〇傳記篇の「雜集部」に、「笑道論三卷。右一部三卷、周朝の武帝、前司隸母極伯甄鸞に敕して佛道二

教を詮衡せしめし作」と著録するのがまた一つである (1022b)。

本譯注は一九八二年四月から一九八六年三月までの四箇年にわたり、「六朝・隋唐時代の道佛論争」研究班において『廣弘明集』の會讀を重ねてきた成果の一部である。『廣弘明集』の譯注としては、その卷四に收められる彦琮「通極論」のそれが、「隋唐の思想と社會」研究班の成果として、本誌四十九冊と五十一冊の二回にわたって掲載されている。その時と同様に今回も、東京増上寺の御好意により、同寺所藏の高麗板大藏經にもとづく寫眞版をテキストとして用いた。句讀を付したうえ末尾に掲げておく。他のテキストによって文字を改めた場合には、大正新修大藏經五二卷の校勘記にもとづき、そのつど注のなかでことわっておいた。「周滅佛法集道俗議事」にも明らかなように、『廣弘明集』卷八に收められる道安の「二教論」は、「笑道論」とおなじ狀況のもとにあい前後して發表されたものであって、「笑道論」三十一「道經未出言出」章と「二教論」十「明典眞僞」章には類似の文章が見られる。「二教論」については、東京大學東洋文化研究所教授蜂屋邦夫氏の「北周・道安二教論」注釋(『東洋文化』六二號)が備わる。蜂屋教授は一九八二年四月から一九八五年三月までの三年間、比較文化客員部門助教として本研究班に参加され、多大の裨益を與えられた。厚く感謝する次第である。

(吉川 忠夫)

注略號表

Tは『大正新修大藏經』の略號。その後の數字は冊番號を、冊番號の後の數字とa・b・cは頁數と上段・中段・下段を示す。

Dは『正統道藏』の略號。その後の數字は冊番號を示す。Sは同藝文印書館縮印本の略號。その後の數字は冊番號と頁數を示す。

周が佛法を滅ぼそうとして出家と

俗人^①とを集めて議論させたこと

周の高祖武帝は猜疑心にこりかたまり、殘忍なことを平氣でやってのけて不和を生じた。大冢宰の晉國公宇文護が政治の萬般を審議し、^①もろもろの政務の決裁をつけていたのを、武帝はひそかに嫉み、帝位を奪われるのではないかと恐れて、宇文護を官中に召し入れ、みずから手を下して誅殺するとともに、重臣の六家もろとも一族皆殺しの刑に處した。武帝はこうして天下を思いのままにし、^②心配の種はなにひとつとしてなくなった。

しかし、讖緯を信じてそれを用い、^③もっぱらそのことに心を奪われた。昔からの言い傳えに、「黒は得なり」というのがある。^④黒の相をもつものが天下を得るであらう、との意味である。あたかも漢末の流言に「黃衣のものが王者となるであらう」といわれ、黃が赤にとって代ることを天命を受けるしるしであるとしたようなものであって、黒もそうだといふのである。そこで周の太祖(宇文泰、字黑獺)は魏の王室を擁して西のかた長安に奔るとき、衣服や旗さし

ものの色をすべて黒に變え、それによって怪しげな豫言記の言葉に期待をかけた。¹⁸これも後漢の光武帝流の名残りである。

昔、高洋（文宣帝）が齊の國を開いたときにも、世間に同様の謠言が行なわれた。高洋は黒とは僧稠禪師のこと、これが黒衣の天子になるのだと言いふらし、誅殺しようとした。たまたま稠禪師には深い洞察力があり、それに氣づいて免れることができたこと、別に詳しく述べたとおりである。だから、周の太祖が佛法を重んじ、沙門にへり下った當初から（沙門に）すべて黄衣を着けさせたのは、黒を禁ずるためだったのである。

ここに道士の張賓なるもの、うそいつわりで主上を欺き、私情をまじえて仲間をひきたて、黒衣の沙門は國の疫病神、黄老こそ國の福の神だと述べた。武帝はその言葉を聞き入れ、道教を信じ、佛教を輕んじて親しく符籙を授かり、みずから道士の衣裳と冠を身に着けた。もと僧侶であつた衛元嵩なるものが張賓とぐるになつて煽動し、武帝の氣持ちを迷わせてかういった。「僧侶には怠惰なものが多く、財産を貪り食物をあさつております。尊敬するに足りません」。武帝は百人の僧侶を宮中に召し入れ、七夜にわたつて勤行させた。（僧侶たちは）そのとき帝の意圖を内々察していたので、おの心のこめて勤行につとめた。帝のほうでも、僧侶と起居を共にしてその得失をさぐり、僧の姿をして經典を讀誦したり、梵唄を唱えて禮拜懺悔したりした。僧侶たちはみなびりびりと心をひきしめ、帝がおしのびで參加したのを不思議に思わぬものはなかつた。やがて七日の期限も満ち、なにごともなく終つた。

天和四年（五六九）、己丑の歲、三月十五日になつて、敕旨をもつて有徳の僧、名だたる儒者、道士、文武百官二千余人を召し出した。武帝は正殿に出御し、儒佛道三教を論評し、儒教を先、佛教を末、道教を最上とする、なぜなら（道は）言葉が生まれる以前から存在しており、天地の外に超出しているからである、とした。そのとき、議論に參加した人たちはざわざわと騒ぎだて、めいめい勝手な意見が互にかみ合はず、何も決まらぬまま散會となつた。

その月の二十日になつて、前回同様に討論集會がもたれたが、贊否の兩論は一層輪をかけ、帝の心になうことがなかつた。武帝はいった。「儒教と道教とはこの國が常に遵奉してきたものである。佛教は後になつて傳來したものである。朕は佛教を公認しないでおこうと思うが、みな意見はどうか」。そのとき、議論に參加した人たちは陳述を行なつたが、佛教を撤廢する手だては見つからなかつた。武帝がいった。「三教が世の中に行なわれているが、並立できる道理はないのだ」。

四月の初めになつて、あらためて前回同様に集會がもたれ、是非とも思ひのたけを盡くして陳述し、うわべだけ従つたふりをしてはならぬ、とのことであつた。また司隸大夫の甄鸞に對して、佛教道教の二教を詳しく比較検討し、兩者の優劣を定め、その眞偽を明らかにせよ、との敕旨が下つた。

天和五年（五七〇）、甄鸞はそこで『笑道論』三卷をたてまつた。それによつて道教の三洞という名稱をあざ笑つたのである。五月十日になつて、武帝は盛大に群臣を集め、甄鸞がたてまつた論

文を詳しく検討した末、道教の教法をそこなうものであると考へた。帝みずから道教の教法を授かつていたこととて、本來の意圖にかなわす、ただちに御殿の庭ですっかり焼却された。

時あたかも、道安法師がまた『二教論』をたてまつった。〔二教とは〕内教と外教である。精神を修鍊する術を三乗と名づけ、内教である。肉體を救う術を九流と名づけ、外教である。道教には特別の教えがあるのではなく、そのまま儒家者流に収まるのであり、それは『易經』にいう「謙謙」、へり下ることに他ならぬ、というのがその趣旨である。武帝はこの論文を読み、それについて大臣たちに諮問したが、太刀うちできるものがなく、かくてそのままうやむやになつてしまつた。

それから五年が経過し、建德三年甲午の歲（五七四）五月十七日に至つてはじめて佛教・道教の二教を禁止した。沙門と道士はそろつて還俗させられ、三寶の福財は臣下にばらまかれ、寺院・道觀・塔廟は王公に下賜されたことなど、その他のことは別に述べるとおりである。そのとき衛王宇文直はこの處置に我慢がならず、ただちに宮城に打ち入つて乾化門を燒き、武帝を攻めたが、落ちない。虎牢まで退却したところを捕らえられて都にひきたてられ、父子十二人が共謀者ともども誅殺された。

注

- (1) 道俗 慧遠「三法度序」『出三藏記集』卷一〇、T55・73a
「自昔漢興、逮及有晉、道俗名賢、並參懷聖典」。

- (2) 猜忌爲心 『三國志』卷七魏志呂布傳「布雖驍猛、然無謀而多猜忌、不能制御其黨、但信諸將」。「莊子」在有「世俗之人、皆喜人之同乎己、而惡人之異於己也、同於己而欲之、異於己而不欲者、以出乎衆爲心也」。

- (3) 安忍嫌隙 『左傳』隱公四年「夫州吁阻兵而安忍、阻兵無衆、安忍無親、衆叛親離、難以濟矣」。「三國志」卷二七魏志胡質傳「武伯南身爲雅士、往者將軍稱之不容於口、今以睚眦之恨、乃成嫌隙」。

- (4) 大家宰晉國公護權衡百揆 『周書』卷三孝閔帝紀元年「（二月）甲午、以……大司馬晉國公護爲大家宰」。同卷一一晉蕩公護傳「護立高祖、百官總已以聽於護」。沈約「齊故安陸昭王碑文」〔文選〕卷五九「爰自近侍、式贊權衡」、李善注「淮南子曰、准繩連體、權衡合德、百工繇焉、以定法式、輔弼執玉、以翼天子也」。「尚書」舜典「納于百揆、百揆時敘」、孔傳「揆、度也、度百事、總百官、納舜於此官、舜舉八凱、使揆度百事、百事時敘、無廢事業」。

- (5) 決通庶政 『史記』卷六秦始皇本紀三十二年「始皇之碣石、使燕人盧生求羨門高誓、刻碣石門、壞城郭、決通隄防」。「周易」賁象傳「山下有火、賁、君子以明庶政、无敢折獄」。

- (6) 陵奪 『後漢書』傳六二董卓傳論「夫以剗肝斷趾之性、則群生不足以厭其快、然猶折意縉紳、遲疑陵奪、尙有盜竊之道焉」。
- (7) 召護入內、親自誅之 天和七年（五七二）三月十八日のこと。その経緯は『周書』卷一一晉蕩公護傳に詳しい。「入内」の語

は、後文にも「帝召百僧入内、七霄行道」と見える。

(8) 并大臣六家、並從族滅 『廣弘明集』卷六「列代王臣滯惑

解」上の周祖武皇帝の條 (T52・125b~c) にも、「大冢宰晉國公宇文護、太祖之猶子也、躬受遺詔、輔翼帝國、雄略控御、光時佐國、恐有廢立、便引入内殺之、并子十人、族大臣六家、改元建德」とあるが、具體的なことはわからない。『周書』卷五武帝紀上には、「誅大冢宰晉國公護、護子柱國譚國公會、會弟大將軍莒國公至、崇業公靜、並柱國侯伏侯龍恩、龍恩弟大將軍萬壽、大將軍劉勇等」とあり、同卷一一晉湯公護傳には、「殺護訖、乃召宮伯長孫覽等告之、即令收護子柱國譚國公會、大將軍莒國公至、崇業公靜、正平公乾嘉及乾基乾光乾蔚乾祖乾威等、并柱國侯伏侯龍恩、龍恩弟大將軍萬壽、大將軍劉勇、中外府司錄尹公正袁傑、膳部下大夫李安等、於殿中殺之」とある。「大臣」の語は、『禮記』中庸「凡爲天下國家有九經、曰、修身也、尊賢也、親親也、敬大臣也、體群臣也、子庶民也、來百工也、柔遠人也、懷諸侯也、……敬大臣則不眩……」。「族滅」の語は、『史記』卷一二二酷吏列傳「於是景帝乃拜（郅）都爲濟南太守、至則族滅。闕氏首惡、餘皆股栗」。

(9) 得志於天下 『老子』三十一章「夫樂殺人者、則不可以得志於天下矣」。

(10) 信任讖緯 王褒「四子講德論」(『文選』卷五二)「先生獨不聞秦之時耶、遼三王、背五帝、滅詩書、壞禮義、信任群小、憎惡仁智」。左思「魏都賦」(『文選』卷六)「昔藏氣讖緯、闕象竹

帛、迴時世而淵默、應期運而光赫」、李善注「說文曰、讖、驗也、河洛所出書曰讖」。

(11) 黑者得也…… 『廣弘明集』卷六「列代王臣滯惑解」序 (T52・124a)「周祖已前、有忌黑者、云有黑人、次膺天位……」。

同周祖武皇帝條 (T52・125c)「時有讖記、忌於黑衣、謂沙門中次當襲運」。

(12) 訛言 『詩經』小雅正月「民之訛言、寧莫之懲」、鄭箋「小人在位、曾無欲止衆民之爲僞言、相陷害也」。

(13) 黃衣當王、以黃代赤 道安「二教論」服法非老第九(『廣弘明集』卷八、T52・140b)「……而張角張魯等、本因鬼言、漢末黃衣當王、於是始服之、曹操受命、以黃代赤、黃巾之賊、至是始平」。また「笑道論」七「觀音侍道」章に、「……時傳黃衣當王、(張)魯遂令其部衆、改着黃衣巾帔」とある。

(14) 承運之像 孫楚「爲石仲容與孫皓書」(『文選』卷四三)「太祖承運、神武應期」、李善注「春秋緯曰、五德之運、各象其類、宋均曰、運、籙運也」。

(15) 周太祖……衣物旗幟、並變爲黑、用期訛讖之言 『廣弘明集』卷六「列代王臣滯惑解」序 (T52・124a)「周太祖初承俗讖、我名黑泰、可以當之、既入關中、改爲黑皂、朝章野服、咸悉同之」。『周書』では、卷三孝閔帝紀につきのようにある。「元年春正月辛丑、即天王位、……百官奏議云、帝王之興、罔弗更正朔、明受之於天、革民視聽也、……今魏曆告終、周室受命、以木承水、實當行錄、正用夏時、式遵聖道、惟文王誕玄氣之祥、

有黑水之讖、服色宜烏、制日可。「衣物」の語は、『後漢書』傳三三朱暉傳「道遇群賊、白刃劫諸婦女、略奪衣物、昆弟賓客皆惶迫、伏地莫敢動、暉拔劍前曰、財物皆可取耳、諸母衣不可得、今日朱暉死日也……」。「旗幟」の語は、『史記』卷八高祖本紀「乃立季爲沛公、祠黃帝、祭蚩尤於沛庭、而擊鼓、旗幟皆赤」。

(16) 漢光武之餘命 後漢の光武帝は讖緯を信じ利用したことで有名。たとえば『後漢書』傳一八上桓譚傳に、「是時帝方信讖、多以決定嫌疑」とある。「餘命」の語は、向秀「思舊賦」(『文選』卷一六)「託運遇於領會兮、寄餘命於寸陰」。

(17) 昔者高洋之開齊運…… 高洋は北齊の文宣帝。注(15)に引いた『廣弘明集』卷六「列代王臣滯惑解」序にいう。「故齊宣惶怖、欲誅稠禪師、稠以情問、云有黑人當臨天位、稠曰、斯浪言也、黑無過漆、漆可作耶、齊宣妄解、手殺第七弟渙、故可笑也」。

(18) 流俗 『禮記』射義「幼壯孝弟、耆耄好禮、不從流俗」。曹植「七啓」(『文選』卷三四)「正流俗之華說、綜孔氏之舊章」。

(19) 遠識 『風俗通』正失「如其聰明遠識、不忘數十年事、制持萬機、天資治理之材、恐文帝亦且不及孝宣皇帝」。

(20) 周祖初重佛法 『歷代三寶記』卷一一(T49・100a)にいう。「周衆經要二十二卷、一百二十法門一卷、右二部二十三卷、魏丞相王宇文黑泰與隆釋典、崇重大乘、雖攝萬機、恆闡三寶、第內每常共百法師、尋討經論、講摩訶衍……」。

(21) 下禮 この語の使用例未見。

(22) 並著黃衣 注(15)に引いた『廣弘明集』卷六「列代王臣滯惑解」序のつづきにいう。「令僧衣黃、以從讖緯」。

(23) 道士張寶謫詐罔上 『續高僧傳』卷二三靜藹傳(T50・626b)「屬周武之世、道士張寶謫詐罔上、冒增榮寵、潛進李氏、欲廢釋宗、既縱倖紫宸、蠅飛黃屋、與前僧衛元嵩、晉齒相副」。「謫詐」の語は、『韓非子』說疑「彼又使謫詐之士、外假爲諸侯之寵使、……使諸侯、淫說其主、微挾私而公議」。「罔上」の語は、『說苑』臣術「泰誓曰、附下而罔上者死、附上而罔下者刑、……此所以勸善而黜惡也」。

(24) 國忌 『唐律疏議』卷二六雜律に「諸國忌廢務日作樂者、杖一百、私忌減二等」、『大宋僧史略』卷中(T54・241c)に「唐文宗朝、中書崔蠶上疏云、國忌設齋、百官行香、事無經據、伏請停廢」などとあるが、いずれも先帝の忌日のことであり、この意味とはずれる。つぎの「國祥」の語の使用例も未見。

(25) 黃老 『史記』卷六三老子韓非列傳「申子之學、本於黃老而主刑名」。「論衡」自然「賢之純者、黃老是也、黃者、黃帝也、老者、老子也」。孔稚珪書(『弘明集』卷一一、T52・73a)「所以未變衣鉢、眷眷黃老者、實以門業有本、不忍一日頓棄、心世有源、不欲終朝悔遁」。

(26) 親受符錄 『魏書』卷一一四釋老志「眞君三年、(寇)謙之奏曰、今陛下以眞君御世、建靜輪天宮之法、開古以來、未之有也、應登受符書、以彰聖德、世祖從之、於是親至道壇受符錄」。

また『隋書』卷三五經籍志道經部「(魏)太武親備法駕、而受符籙焉、自是道業大行、每帝即位、必受符籙、以爲故事、……後周承魏、崇奉道法、每帝受籙、如魏之舊」。

(27) 衣冠 『論語』堯曰「君子正其衣冠、尊其瞻視、儼然人望而畏之、斯不亦威而不猛乎」。

(28) 前僧衛元嵩與寶胥齒相扇 『續高僧傳』卷二五衛元嵩傳(一) 50・657c)「釋衛元嵩、益州成都人、少出家、爲亡名法師弟子、……即上廢佛法事、自此還俗、周祖納其言、又與道士張賓、密加扇惑、帝信而不猜、便行屏削」。また注(23)の『續高僧傳』靜謐傳を見よ。余嘉錫氏に「衛元嵩事蹟考」(『余嘉錫論學雜著』上册、中華書局、一九六三)がある。「胥齒」の語は、『左傳』僖公五年「診所謂輔車相依、胥亡齒寒者、其虞虢之謂也」、陳琳「檄吳將校部曲文」(『文選』卷四四)「逆賊宋建、僭號河首、同惡相救、並爲胥齒」。「相扇」の語は、『三國志』卷一五魏志梁習傳「兵家擁衆、作爲寇害、更相扇動、往往梟峙」。

(29) 感動帝情 「感動」の語も「帝情」の語もともに使用例未見。

(30) 怠惰 『尚書』太甲中「無時豫怠」、孔傳「言當勉修其德、法視其祖而行之、無爲是逸豫怠惰」。『三國志』卷二四魏志高柔傳「柔上疏曰、……然今博士皆經明行修、一國清選、而使遷除限不過長、懼非所以崇顯儒術、帥勵怠惰也」。

(31) 貪逐財食 「貪財逐食」と同じ。「貪財」の語は、『莊子』盜跖篇「貪財而取慰、貪權而取竭、靜居則溺、體澤則馮、可謂疾矣」。「逐食」の語は、『梁書』卷三武帝紀下大同十年「詔曰、

……其有因饑逐食、離鄉去土、悉聽復業、蠲課五年」。「財食」の語は、『戰國策』趙策一「圍晉陽三年、城中巢居而處、懸釜而炊、財食將盡、士卒病羸」。

(32) 欽尙 『梁書』卷五一處士阮孝緒傳「天監初、御史中丞任昉尋其兄履之、欲造而不敢、望而歎曰、其室雖邇、其人甚遠、爲名流所欽尙如此」。

(33) 帝召百僧入内…… このあたり、類似の文章が注(23)に引いた『續高僧傳』卷二三靜謐傳のつづきにある。「帝精悟朗鑒内烈外溫、召僧入内、七霄禮懺、欲親觀僭犯、冀申殿黜、時既密知、各加懇到、帝亦七夕、同僧不眠、爲僧讚唄、並諸法事、經聲七轉、莫不清靡、事訖設會、公陳本意」。

(34) 行道 『高僧傳』卷一康僧會傳(T50・325b)「以吳赤烏十年、初達建鄴、營立茅茨、設像行道」。郗超「奉法要」(『弘明集』卷一三、T52・87a)「是以行道之人、必慎獨於心、防微慮始、以至理爲城池、常領本以禦末」。

(35) 密知 『宋書』卷六五申恬傳「恬到、密知賊來、仍伏兵要害、出其不意、悉皆禽殄」。

(36) 懇到 『後漢書』傳七一獨行諒輔傳「今郡太守改服責己、爲民祈福、精誠懇到、未有感徹」。『國清百錄』卷一「方等懺法」(T46・797a)「念是事已、歸依十二夢王、求乞瑞夢、若不感者、徒行無益、倍加懇到、餐啜無忘」。

(37) 寢處 『左傳』襄公二十一年「然三子者、譬於禽獸、臣食其肉、而寢處其皮矣」。曹植「辯道論」(『三國志』卷二九魏志方

技華佗傳注」余嘗試卻儉絕數百日、躬與之寢處、行步起居自若也」。

- (38) 規候得失 『宋書』卷七七柳元景傳「賊遣兵二千餘人覬候、

(龐)法起縱兵夾射之、賊騎退走。』詩經周南關雎序「國史明乎得失之迹、傷人倫之廢、哀刑政之苛、吟詠情性、以風其上、達於事變、而懷其舊俗者也。』漢書卷八宣帝紀元康四年「遣大中大夫彊等十二人循行天下、存問鰥寡、覽觀風俗、察吏治得失、舉茂材異倫之士」。

- (39) 讀誦 『漢書』卷五八兒寬傳「時行實作、帶經而鉏、休息輒讀誦、其精如此。』法華經法師品(T9・31a)「其有讀誦法華經者、當知是以佛莊嚴而自莊嚴、則爲如來肩所荷擔。』真誥卷一〇「協昌期」第11(D638, S34・27423)「凡研味至道及讀誦神經者、十言二十言中、輒當一一過抵臂咽液」。

- (40) 讀頌禮悔 『高僧傳』卷一三經師篇論(T50・415b)「然天竺方俗、凡是歌詠法言、皆稱爲頌、至於此土、詠經則稱爲轉讀、歌讚則號爲梵唄、昔諸天讚唄、皆以韻入絃索、五衆既與俗違、故宜以聲曲爲妙。』郁超「奉法要」(『弘明集』卷一三、T52・86a)「三自歸者、歸佛歸十二部經歸比丘僧、過去見在當來三世十方佛、三世十方經法、三世十方僧、每禮拜懺悔、皆當至心歸命」。

- (41) 懷厲 『高僧傳』卷一一慧紹傳(T50・404c)「至八歲、出家爲僧要弟子、精勤懷勵、苦行標節。』真誥卷一一「稽神樞」第1(D639, S34・27436)「疏示後生、益增厲」。

- (42) 微行 『史記』卷六秦始皇本紀三十一年「始皇爲微行咸陽、集解「張晏曰、若微賤之所爲、故曰微行也」。

- (43) 無何 『荀子』天論「星墜木鳴、國人皆恐、曰是何也、曰無何也、是天地之變、陰陽之化、物之罕至者也、怪之可也、而畏之非也。』漢書卷四四淮南王安傳「王視漢中尉顔色和、問斥雷被事耳、自度無何、不發」。

- (44) 天和四年…… 『歷代三寶記』卷一一(T49・101b)にこう。「二教論一卷、右論一卷、武帝世、既崇道法、欲齊三教、時俗紛然、異端競作、始以天和四年三月十五日、召集德僧名儒道士文武百官二千餘人於大殿上、帝昇御筵、身自論義、欲齊三教、至二十日、復集論義、四月十五日、如前集議……」。

- (45) 名儒 『後漢書』傳二七桓郁傳「孝昭皇帝八歲即位、大臣輔政、亦選名儒韋賢蔡義夏侯勝等、入授於前、平成聖德」。

- (46) 百官 『尚書』大禹謨「率百官、若帝之初」。
- (47) 正殿 『漢書』卷六八金日磾傳「數臨正殿、延見群臣、講習禮經」。

- (48) 量述三教 「量述」の語の使用例は未見だが、梁の武帝に「述三教詩」(『廣弘明集』卷三〇、T52・352c)があり、さきのようにうたう。「少時學周孔、弱冠窮六經、……中復觀道書、有名與無名、……晚年開釋卷、猶月映衆星」。

- (49) 無名 『老子』三十二章「道常無名」。

- (50) 天地之表 『老子』二十五章「有物混成、先天地生、……吾不知其名、字之曰道、強爲之名曰大」。皇甫謐「三都賦序」(『文

選』卷四五)「大者罩天地之表、細者入毫纖之內」。

- (51) 議者紛紜 『世說新語』方正「元皇帝既登阼、以鄭后之寵、欲舍明帝而立簡文、時議者咸謂、舍長立少、既於理非倫、且明帝以聰亮英斷、益宜爲儲副……」。陸機「文賦」(『文選』卷一七)「紛紜揮霍、形難爲狀」、李善注「紛紜、亂貌」。

- (52) 情見乖咎 『續高僧傳』卷二三道安傳(T50・628b)のこのあたりの事情を傳えた文章のなかにつぎのようにある。「帝昇御座、親量三教優劣廢立、衆議紛紜、各隨情見、較其大抵、無與相抗者、至其月二十日、又依前集、衆論乖咎、是非滋生、並莫簡帝心、索然而退」。「情見」の語は、窺基『成唯識論掌中樞要』卷上(T43・608c)に「況群聖製作、各馳譽於五天、雖文具傳於貝葉、而義不備於一本、情見各異、稟者無依」と見える。「乖咎」の語、『集古今佛道論衡』卷乙(T52・372a)に「ことばは本文があるが、そちらでは「情見乖角」となっており、また先引の『續高僧傳』道安傳の「乖咎」を三本は「乖各」に作る。「笑道論」九「日月周經」章に「何太乖各」とあり、元、明本は「乖角」。「乖角」の語の使用例は下記のごとし。『高僧傳』卷一安世高傳(T50・324a)「余訪尋衆錄、紀載高公、互有出沒、將以權迹隱顯、應廢多端、或由傳者紕繆、致成乖角」。庾信「示封中錄詩」二首之二「葛巾久乖角、菊徑簡經過」。
- (53) 是非 『孟子』公孫丑上「是非之心、智之端也」。『莊子』盜跖「搖臂鼓舌、擅生是非、以迷天下之主」。
- (54) 簡帝心 王儉「褚淵碑文」(『文選』卷五八)「續簡帝心、聲

敷物聽」、李善注「崔駰武賦曰、假皇天乎簡帝心」。

- (55) 後來 『史記』卷一二〇汲黯傳「見上、前言曰、陛下用群臣、如積薪耳、後來者居上」。吳質「答魏太子牋」(『文選』卷四〇)「後來君子、實可畏也」。
- (56) 僉議 沈約「授蕭重侯一作惠休左僕射詔」(『文苑英華』卷三八五)「內著嘉庸、外敷美政、入副朝端、僉議斯在、可守尙書左僕射、餘如故」。

- (57) 陳理 彥琮「福田論」首(『廣弘明集』卷二五、T52・280c)「隋煬帝大業三年、新下律令格式、令云、諸僧道士等、有所啓請者、並先須致敬、然後陳理、雖有此令、僧竟不行」。

- (58) 除削 『三國志』卷六三吳志吳範傳「(孫)權恚其愛道於己也、削除其名」。

- (59) 被俗 『管子』立政「憲之所及、俗之所被、如百體之從心、政之所期也」。

- (60) 極言 任昉「天監三年策秀才文」(『文選』卷三六)「悉意以陳、極言無隱」、李善注「漢書曰、哀帝使傳喜問李尋曰、問者水出地動、日月失度、星辰亂行、災異仍重、極言無有所諱」。

- (61) 面從 『尚書』益稷「予違汝弼、汝無面從、退有後言」。

- (62) 詳度 『三國志』卷六魏志袁紹傳注「漢晉春秋」「願將軍詳度事宜、錫以環珕」。『魏書』卷一一〇食貨志「詳度二三、深乖王法」。

- (63) 深淺 吳質「在元城與魏太子牋」(『文選』卷四〇)「初至承前、未知深淺」、李善注「深淺猶善惡也」。

(64) 眞偽 杜預「春秋左氏傳序」「仲尼因魯史策書成文、考其眞僞、而志其典禮、上以遵周公之遺制、下以明將來之法」。

(65) 鸞乃上笑道論三卷……「笑道論」卷首の「啓文」に、「臣輒率下士之見、爲笑道論三卷、合三十六條、三卷者、笑其三洞之名、三十六條者、笑其經有三十六部」とある。その注を參照。

(66) 傷蠹道法 『高僧傳』卷七慧嚴傳 (T50・367c)「傷蠹道俗者、本在無行僧尼」。「抱朴子」道意「又敕諸求治病者、雖不便愈、當告人言愈也、如此則必愈、若告人未愈者、則後終不愈也。道法正爾、不可不信」。謝鎮之「與顧道士書折夷夏論」(『弘明集』卷六、T52・42a)「佛法以有形爲空幻、故忘身以濟衆、道法以吾我真實、故服食以養生」。

(67) 本圖 曹植「贈白馬王彪」(『文選』卷二四)「本圖相與偕、中更不克俱」。「晉書」卷九八桓溫傳「溫上疏曰、……而朝議咸疑、聖詔彌固、事異本圖、豈敢執遂、至於入參朝政、非所敢聞」。

(68) 殿庭焚蕩 『世說新語』術解「荀勗善解音聲、……每至正會殿庭作樂、自調宮商、無不諧韻」。「後漢書」傳六九儒林傳序「後長安之亂、一時焚蕩、莫不泯盡焉」。

(69) 道安法師又上二教論云……道安「二教論」につぎのごとく見えるのを要約した。歸宗顯本第一「廣弘明集」卷八、T52・136c「……故救形之教、教稱爲外、濟神之典、典號爲内、……若通論内外、則該彼華夷、若局命此方、則可云儒釋、釋教爲

内、儒教爲外、備彰聖典、非爲誕謬、詳覽載籍、尋討源流、教唯有二、寧得有三、……故包論七典、統括九流、咸爲治國之謨、並是修身之術」。同 (T52・137a)「若派而別之、則應有九教、若總而合之、則同屬儒宗」。同 (T52・136c)「道家者流、蓋出於史官、清虛以自守、卑弱以自持、此君人者南面之術、合於堯之克讓、易之謙謙、是其所長也」。

(70) 練心 沈約「比丘尼僧敬法師碑」(『藝文類聚』卷七六)「立言道往、標情妙覺、置想依空、練心成學」。

(71) 三乘 「二教論」釋異道流第八 (T52・140a)「總論九道、則無非佛說、別明三乘、則儒道非流」。同依法除疑第十二 (T52・143b)「今當爲子撮言其致、三乘俱出生死、而幽駕大有淺深、九流咸明宇内、冲曠寧無總別」。

(72) 教形 注(69)の「二教論」以外の使用例未見。

(73) 九流 『漢書』卷一〇〇下敍傳「劉向司籍、九流以別」、顏師古注「應劭曰、儒道陰陽法名墨縱橫雜農、凡九家」。

(74) 儒流 『漢書』卷三〇藝文志「儒家者流、蓋出於司徒之官、助人君順陰陽明教化者也」。

(75) 易之謙謙 『周易』謙初六「謙。謙。君子、用涉大川、吉」、同象傳「謙。謙。君子、卑以自牧也」。

(76) 朝宰 『南齊書』卷四七謝朓傳「聞謗親賢、輕議朝宰、醜言異計、非可俱聞」。

(77) 建德三年……『周書』卷五武帝紀上建德三年「五月……丙子、初斷佛道二教、經像悉毀、罷沙門道士、並令還民、並禁諸

淫祀、禮典所不載者、盡除之。

(78) 還俗 『宋書』卷七一徐湛之傳「時有沙門釋惠休、善屬文、辭采綺豔、湛之與之甚厚、世祖命使還俗」。

(79) 三寶福財、散給臣下、寺觀塔廟、賜給王公 『廣弘明集』卷一〇の「周祖平齊召僧敍廢立抗拒事」(152・153)に「ぎのようにある。「帝已行虐三年、關隴佛法、誅除略盡、既克齊境、還淮毀之、爾時魏齊東川、佛法崇盛、見成寺廟、出四十千、並賜王公、充爲第宅、五衆釋門、減三百萬、皆復軍民、還歸編戶、融刮佛像、焚燒經教、三寶福財、簿錄入官、登即賞賜、分散蕩盡」。また、『續高僧傳』卷二三靜謐傳(152・626c)にも「つぎのようにある。「帝遂破前代關東西數百年來官私佛法、掃地並盡、融刮聖容、焚燒經典、禹貢八州見成寺廟、出四十千、並賜王公、充爲第宅、三方釋子、減三百萬、皆復軍民、還歸編戶、三寶福財、其貨無數、簿錄入官、登即賞費、分散蕩盡」。「福財」の語は他に未見。「寺觀塔廟」の語は、『洛陽伽藍記』序「至武定五年、歲在丁卯、余因行役、重覽洛陽、城郭崩毀、宮室傾覆、寺觀灰燼、廟塔丘墟」。

(80) 衛王…… 『周書』卷一三衛刺王直傳「建德三年、進爵爲王、初高祖以直第爲東宮、更使直自擇所居、直歷觀府署、無稱意者、至廢陟岵佛寺、欲居之、齊王憲謂直曰、弟兄女成長、理須寬博、此寺編小、詎是所宜、直曰、一身尚不自容、何論兒女、憲怪而疑之、直嘗從帝校獵而亂行、帝怒、對衆撻之、自是憤怨滋甚、及帝幸雲陽宮、直在京師、舉兵反、攻肅章門、司武尉遲運閉門

拒守、直不得入、語在運傳、直遂遁走、追至荊州、獲之、免爲庶人、囚於別宮、尋而更有異志、遂誅之、及其子賀……等十人、國除。卷四〇尉遲運傳でも、彼が攻めたのは「乾化門」ではなく「肅章門」。また虎牢は荊州ではない。なお、この叛亂が護法とは關係のないこと、塚本善隆「北周の廢佛」(『塚本善隆著作集』第二卷「北朝佛教史研究」、大東出版社、一九七四)、參照。この塚本論文は、「笑道論」のことをも含めて、北周武帝の廢佛を廣範圍に論じている。

(81) 捉獲 『北齊書』卷四一傳伏傳「周帝自鄴還至晉州、遣高阿那肱等百餘人臨汾召伏、伏出軍隔水相見、問至尊今在何處、阿那肱曰、已被捉獲、別路入關」。

笑道論

原文は長大だから、笑止な點を抜き書きする。(1)

臣の甄鸞、申し上げます。佛道二教を詳らかに検討し、その前後、優劣、同異を決定せよとの敕旨を頂戴しました。臣は非才をかえりみず、謹んで具體的に記録をととのえて申し上げます。(2)

臣がひそかに考えますには、佛教と道教は教えのあり方が異なり、(教主が)出沒して姿を隠したり現わしたりし、(3)變幻自在に導く方法もちがっております。奥深くて微妙精緻なところはとても明確にしきれませんが、ひとまず假りに對比してみますと、佛教は因縁を宗旨とし、道教は自然を根本義としております。(4)自然とは作爲なしに成就すること、因縁とは修行をつみ重ねて證悟することです。根

本を守るならば事象は靜寂で理法は普遍となりますが、宗旨に背けば意識は亂れて教えは偽りとなります。理法が普遍でありますと終始一貫しますが、教えが偽りですと勝手氣儘となります。

老子の五千言の文章を読んでみますと、言葉も教義もどちらも見事であって、まことに尊重するに値いし、自己を確立して國家を治め、民に君主となる道は豊かであります。それで道教にはお筆書きやまじないの方法があるのに對し、佛教では怪力や背哀の術を禁止し、かく兩者のちがいがはつきりしてまいりますと、世間の人びとにその邪正を疑わせることになりました。そんなものがどうして大道の自然、虛無靜寂で無爲であるというわけがあらうかと。そもそも、後世の人間が根本に背をむけて、やたらに小細工を加えたためではないでしょうか。

さらに道家の方術では、仙界に昇ることを神祕めかし、それによって人びとをだまし、目先の利益をかすめとっております。昔、徐福は（秦の始皇を）だまして夷州と丹州を分割させ、文成將軍と五利將軍は漢の世にあやしげなわざを行ない、張陵、張衡、張魯の三人は西方の梁州をかどわかし、孫恩は東方の越を騒がせました。これらの大惡黨は昔からいってん師でございます。そんなものに政治の手助けをさせますと、政治はきつと邪惡で偏りますし、そんなものに人民の指導にあたらせますと、人民はきつとかどわかされます。かれらの經典を調べてみますと、どの巻もどの巻もみなずれていて、その教理教義となると始めから終りまで問題になりません。昔、季孫行父の人柄は、自分の君主に禮義を盡くすものを見つけ

ると、孝行息子が父母に孝養を盡くすようにその人物を尊敬し、自分の君主に無禮なものを見つけると、鷹や鷲が雀を追い拂うようにその人物を憎みました。孔子もこういっております。「君子が主上につかえるにあたっては、出仕しては忠を盡くすことを考え、野にあれば君主の缺けた點を補うことを思う。主上の美點にはそのまま従い、主上の缺點を正し助ける。それで、主上と臣下とは互いに親しみあうことができる」。『春秋左氏傳』にはこういう言葉があります。「君主がよいと考えたことにも間違ひのあることがある。臣下は君主のよい點をのぼし、君主の間違ひを除くものだ」。

臣はとりたてていうほどの人間ではございませんのに、敕旨を頂戴し御下問にあずかりましたからには、どうして本當のことを答えないでおられましょう。あの道德經二卷は儒者仲間の宗旨とすべきものです。間違ひと考えられるものは兩極端を共に切りすてることでございます。どうか御檢討の上、刪定なさって下さい。

老子五千文を読みますとこうあります。「上士は道のことを耳にすると努力してそれを實踐する。中士は道のことを耳にすると半信半疑である。下士は道のことを耳にするとあたまたか笑い飛ばす。かれらに笑い飛ばされるくらいでなければ、本當の道とはいえない」。臣はさしずめ下士の見解にならって、笑道論三卷、合計三十六條をつくりました。三卷なのはかれらの三洞という名稱をあざ笑ってのこと、三十六條なのはかれらの經典が三十六部あることをあざ笑ってのことでございます。恐る恐る呈上いたします。魂も消えいらんばかりでございます。謹んで申し上げます。

大周の天和五年（五七〇）二月十五日、前の司隸大夫、毋極縣の開國伯、臣甄鸞申し上げます。

道士合炁三十五

諸子道書三十六

一、天地創造のこと

笑道論卷上

造立天地一

年號差舛二

元爲天人三

結土爲人四

五佛竝出五

五練生尸六

觀音侍老七

佛西法陰八

笑道論卷中

日徑不同九

崑崙飛浮十

法道立官十一

稱南无佛十二

鳥跡前文十三

張騫取經十四

日月普集十五

太上尊貴十六

五穀命鑿十七

老子作佛十八

敕使瞿曇十九

事邪求道二十

邪炁亂政二十一

誠木枯死二十二

笑道論卷下

北方禮始二十三

害親求道二十四

延生年符二十五

椿與劫齊二十六

隨劫生死二十七

服丹金色二十八

改佛爲道二十九

偷佛因果三十

道經未出言出三十一

五億重天三十二

出入威儀三十三

道士奉佛三十四

『太上道君造立天地初記』⁶⁰にいう。「老子は周の幽王の徳が衰えたので、西のかた關所を越えようと思い、⁶¹（關所において）尹喜と三年後に長安の市場の青羊肝で會おうと約束した。老子はやがて皇后のおなかをかりて生まれた。⁶²約束の期日になって、尹喜は青羊の肝を賣っているものを見かけた。それで訪ねていって面會した。老子は母親の懷からたちあがった。髪の毛も鬢の毛もまっ白、⁶⁴身のためは一丈六尺、天冠を頭にのせ、黄金の杖を握っている。尹喜をひきつれて胡人の教化に出かけ、首陽山に隠れると、紫雲がおおった。胡王は化け物かとあやしみ、⁷¹釜ゆでにしたが涼しい顔。老君は目をむいて怒り、胡王の七人の子供と國民の一部をたたき殺して、みんな死んでしまうと、王はやっと屈伏した。そして國民に、教えを授かり、頭をまるめ妻をめとらず、⁷⁸二百五十戒を授かり、自分の形像をつくって香をたいて禮拜するように命令した。老子はかくて姿を變え、⁷⁹左の目は太陽に、右の目は月に、頭は崑崙山に、髪の毛は星宿に、骨は龍に、肉は獸に、⁸⁰腸は蛇に、腹は海に、指は五岳に、毛は草木に、心藏は華蓋の星に、そして二つの腎臟は結ばれて眞實かなめの父母となった」。

臣鸞は笑っている。『漢書』⁸³にいう。「長安はがんならぬ咸陽とよばれた。漢の高祖は天下を平定すると、雒陽に都を置こうと考えたが、婁敬が諫めたため、そこで嘆息して、朕はこの地で長く安らぐ

ことであろう、といった。こうして（長安と）名づけられたのである。周の幽王のときには（長安という名は）まだない。老子が長安という名をあらかじめ知って尹喜と（その地で會おうと）約束するなんていうことはあるはずがない。また『三天主法混沌經』をみてみると、「混沌のはじめ、清んだ氣は天となり、濁った氣は地となり、そこで七曜や萬物の形象があらわれた」とあって、その由來は久しいのである。胡人を教化した後に老子がはじめて太陽や月や山や川などに姿を變えたなんていうことがあるだろうか。もしそうだとするならば、つまり幽王以前には天地はまだ萬物を生じなかったということになるが、なぜ道教經典には三皇・五帝・三王のことがみえてるのであるか。『造立天地初記』のいうようだとするならば、天地は幽王からはじまることになるのである。

また『造天地記（造立天地初記）』にいう。「崑崙山の高さは四千八百里。その上方に玉京山と大羅山があり、それぞれ高さは四千八百里。三山を合計すると、高さは一萬四千四百里」。また『廣説品』にいう。「天と地は萬萬五千里へだたっている」。計算してみると、紫微宮は五億層に重なった天の上にあつて、つまり崑崙山より數百萬里も高いところにあるわけである。しかるに老君は心臓を華蓋の星とし、肝臓を青帝宮とし、脾臓を紫微宮とし、頭を崑崙山とした。いったい老君にはいかなる罪があつて地上にさか立ちし、頭が下にあり、肝（脾？）臓が上にあるのであろうか。顛倒しているためにその見解もさかしまなのであろうか。長安が關所を越えた年に存在するとかえたり、幽王を天地開闢の年にあてると、こんなことで

他人を教化しようとしても、とても承服はできぬ。

二、年號の誤謬ということ

『道德經序』にいう。「老子は上皇元年丁卯の歲、この世に降つて周の帝師となり、无極元年癸丑の歲、周を去り關所を越えた」。笑つていう。ずっといにしへの帝王は、（在位の）年を設けるだけで年號などなかった。漢の武帝に至つて始めて建元の年號を設けた。その後の王者が踏襲し、かくて今日に至つた。上皇などとはでたらめで、笑止千萬である。

さらに『文始傳』にいう。「老子は三皇このかた代々國師となつた。『化胡經』にまたいう。「殷の湯王のときに錫壽子となり、周のはじめには郭叔子であつた」。國師となつたからには當然典籍に伝えられるはずだが、どうして敘述されずに、ただ伊尹、傅説、呂望、康邵といった人たちの名がならぶだけなのであろうか。しかも、一般に伝えられている説では老子を柱下の史と記載するだけだが、道家の方では周の帝師と記載している。（帝師も）世俗の官であるのに、どうして史傳がふれないのであろうか。

また、上皇元年の歲は丁卯に當たるが、姬氏の王朝（周王朝）一代、七百餘年、上皇という年號など聞いたことがない。史傳について調べてみると、すべて老子は景王のときに關所を越えたといっている。魯の哀公十六年に孔丘が死んだ。周の敬王のときである。敬王は即ち景王の子であり、景王は即ち幽王のち十代あまりである。つまり、孔子と老子は同時代ということになる。ところが『化胡

經』には、なんと「幽王のときに關所を越えた」とある。⁽¹²⁶⁾（老子が）またひき返してきたとは聞かぬから、どうして孔子と會うことができたのであろうか。

『化胡經』にはまた「周の柱史となつて七百年」とある。⁽¹²⁷⁾ 周のはじめから幽王までを数えてみても、たかだか三百年あまりしかない。作りごとなどしようにもできない。とすると、上皇などという年號は道教一門のまやかしの年號なのだ。かくて『靈寶經』にいう。⁽¹²⁸⁾「わしは上皇元年より半劫のあいだ人びとを濟度してきた。そのころ、人間の壽命は一萬八千歳であつた」。いかにして半劫も以前の年號を遙か昔からかすめとり、それを引っぱつてきて近い時代に用立てられるというのか。何とも全く笑止なことだ。⁽¹²⁹⁾ そもそも上皇や无極など、どれも無見識である。穿鑿好きの作り手がかれらの方術を神祕めかそうとし、それで年號でもって時日をふやし、信ずる人間がついて來るように望んだのである。⁽¹³⁰⁾

さらにまた「代々國師となつた」とあるが、葛洪の『神仙傳』の敘述に詳しく説明してすでに疑問視している。⁽¹³¹⁾ 考えてみると、（老子が）聖人として世にあらわれたからには、君主の補佐をするのが先決である。ところが夏の桀王は暴虐で人民に塗炭の苦しみを與え、⁽¹³²⁾ 成湯や武丁はかつたように賢者を慕つた。⁽¹³³⁾ 老子はどうして賢君を補佐せず、虐政に模範を示さず、自己の修養と性命の涵養につとめて自分を後生大事に守るばかりだったのであろうか。百歳になろうとして死の近いことを自覺し、こっそり旅に出て西のかた關所を越え、⁽¹³⁴⁾ 尹喜ひとりに『道德經』を説き、ひたすら讀誦させるだけ

で、他の人には廣めさせようとしなかった。その肉體は關中で亡び、お墓は現存する。⁽¹³⁵⁾ 秦佚は弔問し、三度哀號して退出したとか。前々から傳わる經典を研究すれば、後世の人間の虚妄の論議ばかりで、口ではあがめたてまつるといいながら、反對にかれらの道を辱しめることになっている。⁽¹³⁶⁾

三、元（氣）が天人になること⁽¹³⁷⁾

『太上三元品』にいう。⁽¹³⁸⁾「上元の一品の天宮。元氣がはじめて凝固し、ついで（日・月・星辰の）三光がぱつと輝き、青と黄（と白）の氣が上元の三宮を設けた。その第一宮は玄都元陽七寶紫微宮と名づけられ、そこでは根元的な青い最初の陽氣が上眞自然玉宮の靈寶上皇と諸天の帝王と上聖大神を統括する。その宮殿はいずれも五億五萬五千五百五十五億萬層の青い陽の氣でできている。そこにいる神仙や官僚や人びとも、それぞれ五億五萬……萬層をなしており、いずれも自然の根元的な青い氣を凝結させて人となつたのである。それら九つの宮殿の層數や官僚や人びとの數は、いずれも紫微宮と同じである」。⁽¹³⁹⁾

臣は笑つていう。⁽¹⁴⁰⁾『三天正法經』にいう。⁽¹⁴¹⁾「天の光はまだ輝かず、鬱屈堆積した氣はまだ澄まず、七千劫あまりののち、幽玄な光がはじめて分かれ出、九つの氣が存在した。その一つの氣は（他の氣から）九萬九千九百九十里へだたっていた。清い純粹な氣は上に昇つて澄み、濁つた氣は下に降り、九天眞王と元始天王が九つの氣のなかから生まれ、氣が結ばれてその形をつくつた。かくして九眞の皇

帝たちがあらわれた——（九眞とは）いずれも九天の清い純粹な氣が凝結してつくりあげた九つの殿宇の位置のことである——。三元夫人たちは氣から生まれ、洞房宮におり、玉童と玉女がそれぞれ三千人ずつ侍っていた。天を父とし、氣を母として、三元之君から生まれた。また『靈寶罪根品』を調べてみると、つぎのようにいう。

「太上道君は元始天尊に禮拜し、十善などの法について質問した。そこで天尊は神仙たちを召集して、それぞれ因縁について説明させた。（神仙たちによれば）ガンジス河の砂の數ほどのものが道を體得してすでに如來となり、まだ如來になつていないものもガンジス河の砂の數ほどいる。また『元始傳』には、「天堂が地獄と相對し、善い人間が天堂に昇り、悪い人間が地獄に入る」といっている。

もしこの説の通りだとすると理窟が通らない。何故ならば、元始天王や太上道君など諸天の神人たちはいずれも自然の根元的な純粹な氣が凝結して化生したのであって、もともと修行持戒してそうなのではない。かれらはもともと修行持戒によってそうなのではないのに、わたしたちだけには善法を行なわせてそうならせようとするなんて、おかしいではないか。

また『度人本行經』を調べてみると、つぎのようにいっている。「太上道君はいわれた。わしは無量劫にわたつて無數の人間を度脱させた。元始天尊は、わしが度脱させた因縁の功績としてわしに太上の號を賜わった」。このことを煎じつめてみると疑問が生ずる。たとえば『有无生成品』には、「空が萬物の母であり、道が萬物の父である」とある。つまり、先に道があつてそれから衆生が生まれ

たわけである。そうだとすると、この道という父は衆生が作ったものではない。道がそのようなものであるからには、衆生がどうして善法を修持してそれになることができるであろうか。

また、道が萬物を生ずるのであって、萬物が生じたはじめ、それがつまり始原である。「我」が生じたばかりの始原、まだ何らの汚染も薰習もうけていないとき、どうして六道とか四生とか、苦とか樂とかの區別が存在しうるであろうか。やはりおかしい。また「衆生の神識は本來固有のもので、道が生みだしたものではない」とある。道には萬物を生ずる力があるというからには、神識は物ではないということになるのであろうか。やはりおかしい。

四、土をかためて人間をつくること

『三天正法經』にいう。「九つの氣が分かれ、九眞天王や三元夫人・三元之君・太上道君などがそこで形をあらわした。皇帝のときになつてはじめて人民をつくりだした。土をかためて人間の像を曠野につくり、三年たつものを言うことができるようになり、それぞれの地方に置かれた。だから僇人と秦人、東夷と西羌のちがいが生まれ、五情がそれぞれの持ち前にびたりとかない、五法が自然に生じ、上眞の氣をうけて人間となることができた」。

臣は笑つていう。『三元品』に「善と惡との業の報いは、みな一身に由來する」とある。また『元始傳』には、「邪淫と盗みと不孝をなすものは、死ぬと地獄に入り、五苦八難をうけ、後に六畜や邊夷の地に生まれかわる」とある。この點を煎じつめると、くいちが

いはとても甚だしい⁽²⁰⁸⁾。そのうえ、皇帝が土をかためて人間の像を作った日から三年たつと、上眞の氣が入りこんでものを言うことができる⁽²⁰⁹⁾。とのことである。つまり、上清の氣は太上道君と根源を同一にするわけで、始原を論ずればまだ善惡の區別がなかったのに、どうして土の像の中に入ると、ただちに八難におちいつたり蠻夷になつたりするのであろうか。この土で像をつくる際、その始原にはやはり因縁がないのに、どうしてつくりあげられたあげくには中土（に生まれる人間）と邊土（に生まれる人間）⁽²¹⁰⁾の區別ができるのであるうか。また、上眞の氣は馬鹿なのか利口なのか。もし馬鹿なのだとすると、土の中に入ってものをよく言えるはずはないし、もし利口なのだとすると、五苦八難を識別できるはずである。どうして善樂を願わずに、がつがつと苦難をうけるのであろうか。これらの諸條から推察すれば、笑止千萬である。

五、五人の佛がそろって出現したことを明らかにすること⁽²¹⁷⁾

『文始傳』にいう⁽²¹⁸⁾。「老子は上皇元年にこの世に降って周の帝師となり、無極元年に青牛のひく薄板車に乗って關所を越え、尹喜のために老子五千文を説いたうえ、⁽²¹⁹⁾こういった。わしは天地の間を旅しようとするのだ⁽²²⁰⁾。おまえはまだ道を得ていないから、ついて來るわけにはゆかぬ。五千文を一萬遍誦えるがよい。そうすれば、耳はきつと現實の奥にある音を聴き、⁽²²¹⁾目はきつと現實の奥にあるものが見えるようになり、⁽²²²⁾身體は空中を飛ぶことができ、六通四達の神通⁽²²³⁾」

力を得るであろう。そのときに成都において會おう。尹喜は老子の言葉通りにやって神通力を身につけた。成都を訪ねて老子に會うと（一緒に）⁽²²⁴⁾。罽賓國の檀特山にやって來た、云々。王は火で焚いたり水に沈めたりしたが、老子は蓮華の座に坐ったままあいかわらず經文を誦えている。王はあわれみを乞い過ちを反省した。老子は尹喜を先生だとして推薦し、王に語るには、わが先生は佛と號し、佛は無上道につかえておられる。王はかれから教化を授かり、その國の男女たちは髪を剃り、妻をめとることをやめた。このように、無上道（即ち老子）が佛のおごそかで神祕な力をうけ、尹喜にゆだねて罽賓國の佛とならせ、明光儒童と號した⁽²²⁵⁾。

臣は笑っている。『廣說品』にいう。「始老國の王は天尊が法を説くのを聞き、妻子ともども須陀洹果を得た。清和國の王はそのことを聞きつけると、臣下たちともに天尊のもとにやってきて、みな白晝に昇天した。王は梵天たちのかしらとなり、玄中法師と號した。その妻も法を聞いておなじく天に昇り、妙梵天王となった。（妙梵天王は）のちに罽賓國に生まれると、憤陀力王と號し、人びとを殺害し非道をおこなった。玄中法師はこれを教化し救わねばならぬと考へ、李氏の胎内に身をやどすこと八十二年、左の腋の下を剖いて出生し、出生するとすでに白髪であった。それから三か月ののち、白い鹿に乗って尹喜とともに西方に旅し、檀特山に隠れ住んだ。三年ののち、憤陀力王は狩獵に出かけてかれらを見つけると、すぐさま火に焚いたり水に沈めたりした。老子はそれでも死なない。王は屈伏し、髪を剃り衣服を改めて、釋を姓とし、法と名のり、沙門と號⁽²²⁶⁾」

した。佛果を成就して釋迦牟尼佛となり、漢の時代になって（釋迦の説く）法が東方の秦（中國）に傳わった。また『文始傳』には、「老子は胡人たちの教化のために、尹喜を先生として推薦して胡人を教化した」とある。『消水經』には、「尹喜は老子を先生として推薦した」とある。『文始傳』には、「わが先生は佛と號し、佛は無上道につかえておられる」とあり、また一方では、「無上道が佛のおごそかで神祕な力をうけ、尹喜にゆだねて佛とならせた」ともある。こうしたさまざまなあり方を煎じつめると、師弟の關係が混亂している。名分の教えはいったいどうなっているのか。

それに『化胡經』と『消水經』では、どちらも老子は罽賓國を教化し、みずから佛となったとある。『廣說品』では、憤陀力王は老子の妻であつて、道を得て釋迦牟尼佛と號し、秦漢の時代に流傳してきたのが（この釋迦牟尼佛の教え）である、とされる。『玄妙篇』にはこうある。「老子は關所を通ると、天竺の維衛國に至り、王妃の清妙夫人の口に入った。久しく年を経たあとの四月八日に、左の腋の下を剖いて出生し、手を舉げていった。天上、天下のすべてにおいて、われこそが尊い。三界はなべて苦に満ち、なんの樂しむべきものがあるう」。

考えてみると、罽賓というひとつの國になんと五人の佛がそろつて出現したことになるのである。その一は尹喜で、儒童と號したものの。その二は老子で、罽賓國で教化を行なったものの。その三は老子の妻の憤陀力王で、釋迦と號したものの。その四は老子で、維衛國で佛となり、これも釋迦と號した。その五は白淨王の太子の悉

達で、佛となり、これまた釋迦と號した。

『文始傳』を見てみると、⁽²⁶²⁾「五百年に一人の賢人が、一千年に一人の聖人があらわれる」とある。ところで、五人の佛がそろつて出現したというのは、ごちゃごちゃしすぎているとは思わないか。⁽²⁶⁴⁾もし聖人はその分身をあらわして萬民を教化できるというのであれば、その經の説き方もきつとさまざまであつたにちがいない。⁽²⁶⁵⁾どうして老子の化現はさまざまでありながら、その經はただ（『道德經』上下）二篇だけで變化がないのであろうか。儒童や尹喜や憤陀力王が佛となつて説いた經については、現在なんの傳聞もなく、ただ白淨王の太子の説いたものだけである。こうしたことを煎じつめれば、老子や尹喜が佛となつたという説は、うそでたためであることが白日のもとにさらされよう。⁽²⁶⁷⁾

それに、老子が説いた經典の奧義は、人びとがそれを聞くことは許されておらず、（五人の佛が）前後してつきつきに交代するといふことについてはなるほど奥深い意味がこめられているにしても、老子が佛になることができたのだとすれば、（老子と佛とは）同一人物にはかならない。道士たちが佛を尊奉することを知らぬのは、⁽²⁷¹⁾考えちがいが甚だしい。たとえば父が僧侶であり、息子が道士であるとして、（父が）僧侶であるからといって父親だと認めないことがあるだろうか。

六、五度靈魂を鍊磨して屍を生き返らせること⁽²⁷⁴⁾

『五練經』にいう。⁽²⁷⁵⁾「死者に對して色絹を用意する。天子なら一

足、公主なら一丈、庶民なら五尺。また、極上の黄金五兩で（二兩ごとに）一尾の龍をつくる。庶民の場合は鐵を用いる。五色の石板五枚を用意してそこに玉文を書きつけ、一晩じゅう屋外に出しておき、（それから）三尺の深さに埋める。『女青文』にいう。（こうすると）九代前までの祖先の靈魂がただちに常闇の世界を抜け出して、光明なる天上の世界に入り、食事を支給され、三十二年たつともとの肉體にもどって生き返る」。

臣は笑っている。『三元品（戒經）』にこうある。「天・地・水の三官には九府・九宮・百二十の部局があり、人間の罪福や功業を調査官が記録して少しの誤りもなく、善人には壽命を増し、惡人からは算（三日の壽命）を奪う」。善行を修めることによらず、ただ五尺の絹を使うだけで、九代前までの祖先の靈魂を光明の天上世界に入らせ、三十二年たつともとの肉體にもどらせることができるなんていうわけがない。でたらの説であることは、ここに明らかであろう。考えてみると、『五練』の文が天と地が分かれる以前に出現し、現在に至るまでもまだ有效なものならば、三十二年のうちに（死者が）墓に穴をあけて出てくるはずだ。だが、見聞した限りでは、伏羲よりこのかた、道士の屍や九代前の祖先が地下から出てきたためしを聞かないのは、どうしてであろうか。そのでたらめぶりはこれまた笑止なことである。今日、郊外の野原にある古墓には穴のあいたものもある。これが道士の父祖が生き返った場所ではないのかなどとは、はたまたおかしいことである。

七、觀世音菩薩が道像に侍ること

道士の中には老君の像を造るものがあり、二菩薩がそれに侍っている。ひとつは、金剛藏³⁰⁵といい、いまひとつは觀世音という。また、道士が黃布の帔を着用したさまは、あるいは帔を着用したようにも見えるが、身體全體にすっぽり掛けるのは、佛教の僧侶の袈沙法服³⁰⁹の外見を盗用したものである。黄色の帔を着用するのは、いにしえの賢人の着衣であるが、横被を前に加えるのと二本の帶を着けていたのを、現在ではすべて取り除いているのは、僧侶の服裝をまねたのである。

臣は笑っている。『諸天内音八字文』を見てみると、「梵形落空、九重推前」とあり、天真皇人の解説には、「梵形とは元始天尊の龍漢の世における稱號である。赤明の年になると觀音と號した」とある。

また、『蜀記』を見るとこうある。³¹⁵「張陵は瘡を山のやしるに避けるとき、鬼神を呪縛する術を身につけ、みずから符書をでっちあげて人びとをたぶらかした。（その後）大蛇に吞まれて死んだが、弟子達はそのことを恥ぢ、白晝に昇天したといふらした。陵の子の張衡は係師となり、衡の子の張魯は嗣師となって、父祖の妖術で天下を惑わし混亂させた」。³²¹また、『（後）漢書』にいう。「劉焉は張魯を督義司馬とし、かくて（魯は）漢中太守蘇固を殺すと漢中を手中にし、鬼道をもって民を教化した」。時あたかも「黃衣のものが王者となるであろう」という噂が流れ、張魯はかくてその部下に命じ

て、あらためて黄色の上着・頭巾・帔を着用させ、漢にとって代る⁽³²⁶⁾しとした。それ以来、今日に至るまで、絶えることなく黄色の衣服を着用しているのである。服裝を沙門に似せたなどは、まことに哀れむべき言い草だ。

そのうえ、自己を確立する根本は忠と孝とが第一である。子供の像に父親が侍るのでは、天地の秩序は成り立たない。観音はこのうえなく位の高い菩薩であり、老子はおよびもつかぬ大賢であるのに、父祖を子孫の傍らに立ったまま侍らせるのは不孝である。しかも、張魯のごとき反逆者の衣服をそのまま使っているのは不忠である。かく不忠不孝をかかこんでいるからには、うけ継ぐだけの値うちはない。

八、佛は西に生まれて陰であること⁽³³⁴⁾

『老子序』にいう。⁽³³⁵⁾「陰陽の道が萬物を化成する。道は東に生まれ、木徳で、陽である。佛は西に生まれ、金徳で、陰である。道は父で佛は母、道は天で佛は地、道は生で佛は死、道は因で佛は縁であり、あるいは陰となりあるいは陽となり、不離一體である。⁽³³⁶⁾佛とは道が生みだしたものであって、善を守ることが最上の立場とし、道とは自然であって、何かから生みだされるものではない。⁽³³⁷⁾佛教の法會で大坐するのは、地が方形であることにのっとっている。道教の法會で小坐するのは、天が圓形であることにのっとっている。僧侶が兵士にならないのは、つまり陰の氣で女性であることの象徴である。それゆえ兵役を課さないのである。道士が兵士となることは

わかるであろう。僧侶が天子や王侯に會見するとき禮拜を行なわ⁽³⁴⁸⁾ないのは、女性が官廷の奥深くにいて政治に關與しないことを象徴している。道士が天子や太守縣令に會見するとき禮拜を行なうのは、政治に關與し臣僚であるからである。道教の法會で酒を飲むことは、過ちはない。⁽³⁴⁹⁾佛教の法會で飲まないのは、女性が酒を飲むと縁の七つの條項に抵觸するからである。道教の法會で齋戒しないのは、生を管理し、生には食物が必要だからである。佛教の法會で齋戒するのは、死を管理し、死ねば食事をしないからであり、また女性⁽³⁵⁰⁾は食事を節約するからである。僧侶がたった一人だけで寝るのは、女性は一を守るからである。道士が集團で宿泊するのは、もとより規制がないからである」。

臣は笑っている。『文始傳』には、「道は東に生まれ、木徳で、男である。佛は西に生まれ、金徳で、女である」とある。いま五行にもとづいて推論してみると、金は木を刻むことができるので、木にとって金は官・鬼であり、金にとって木は妻・財である。このことを煎じつめれば、佛は道にとって官・鬼であり、道は佛にとって妻・財である。

また、「道は佛を生みだした」というが、理窟からいうとそんなことはない。⁽³⁵¹⁾陰陽五行では、金を生みだす木などあるうか。だから道は佛を生みださないことがわかるのである。

僧侶が大坐するのは、道をすべ治める役目だからであり、道士が小坐するのは、官に頭をおさえつけられているからである。

僧侶が兵役と租調を負擔しないのは、本來王族であるから免除さ

れるのである。道士は賤しい庶民であり、兵役と租調を負担するのは當たり前である。道教經典にもそのようにあり、もし兵役と租調を免除されれば、すぐに道の教えに違ってしまう。

また『靈寶大誡』に、「道士は酒を飲まない。富貴をおかさない」とある。どのようなわけで、ことさら大誡に違反するのであろうか。後世のくだくだしい言いわけは、まったく見當はずれである。

また、「道士は齋戒を死の作法と考えているから、齋戒はしない」というが、それならばどうして一日中腹一杯たべて肉體を養わずに、穀物を絶ち氣を服して長生を求める術をさかに行なうのであろうか。そんなためしはついぞ見たことがなく、結局は影を捕らえるような議論になってしまうのだ。

また、「僧侶はたった一人だけで寝、道士は集團で宿泊する」というが、このことを根據とすれば、合氣や黃書もあやしむには足りないのではなからうか。

九、太陽と月の圓周と直径のこと

『文始傳』にいう。⁽³⁸³⁾「天は地から四十萬九千里離れている。太陽と月の直径はそれぞれ三千里で、周圍は六千里である。天地の子午（南北）はそれぞれ九千萬里へだたっており、卯酉（東西）も四隅（西南・西北・東北・東南）も同様である。⁽³⁸⁵⁾『轉形濟苦經』には、崑崙山の高さは一萬五千里」とある。⁽³⁸⁶⁾

臣は笑っている。『濟苦經』によると、「天と地は萬萬五千里へだたっている」とあり、さきの『文始傳』とまったく異なっている。

『文始傳』には、「太陽と月の周圍は六千里、直径は三千里」とある。算法にもとづけば、⁽³⁸⁸⁾周圍は九千里となるはずであり、どうしてたったの六千里だけなんてことがあるだろうか。また、天は圓く地は四角というのが道家のいつもの口ぐせである。いま四隅が四方（東・西・南・北）と等距離であるから、天と地はどちらも圓いのである。『化胡（經）』に、「佛教の教えによる天の上限はたかだか三十三天であって、道家の八十一天のまさっているにはおよばない」という。⁽³⁸⁹⁾また、「崑崙山は九層からなっており、各層の間は九千里へだたっている。山には四つの面があつて、それぞれの面にひとつの天がある。だから四九三十六天となり、第一層に帝釋天が住んでいる」という。ところで計算してみると、崑崙山は高さ一萬五千里で、しかも九層からなっており、各層の高さが九千里ならば、高さは八萬一千里となるはずである。それなのに一萬五千里というのは、何とひどくいちがっていることであらうか。何とも笑止である。

十、崑崙山が浮かびあがること

『文始傳』にいう。⁽³⁸⁸⁾「萬萬億萬萬歲に一度大洪水がおこり、崑崙山が浮かびあがる。そのとき、飛仙が天王や善良な民を迎えとって山上に置く。さらにまた萬萬億歲に大火災がおこり、そのとき聖人が飛來して天王や民を迎え、山上に置く」。⁽⁴⁰⁰⁾

臣は笑っている。『濟苦經』にいう。⁽⁴⁰¹⁾「天地が劫火に焼かれて、すっからかんに跡かたもなくなってしまう。清い氣が天となり、濁った氣が地となり、そこで巨靈と胡亥に山川と日月を以前と同じよう

に造りださせる⁽⁴⁰⁷⁾。崑崙山が浮かびあがるのならば、あるいは民を迎えて山上に置くこともできるであろうが、もし天地がすっかりか
んになってしまふのならば、山も火によって焼かれてしまい、山だ
けがそびえたつ道理はない。どのようにして王や民を迎えとって山
上に置くのであろうか。

また『度人妙經』に、「五億層の天の上の大羅天に玉京山が存在
し、災厄のおよばない所である」とある。考えてみると、太上道君
に慈悲の心があるのならば、なぜかれらを迎えて玉京山に住まわせ
ないのであろうか。もし死のうとしているのを目にしながら迎えな
いのならば、慈悲の心がないことになる。もし迎えることができな
いのならば、それは詐欺というものである。また、『度人本行經』
にいう。「道はいった。わしは劫とともに生死をくり返す」。とす
るならば、太上道君は大羅天の上の災厄のおよばない所に住みなが
ら、それでもなお劫とともに生死をくり返すと語ったことになる。
その他の飛仙はどのようにして天王や善良な民を迎えとって山上に
置き、死からのがれさせるのであろうか。なんともひどく馬鹿馬鹿
しく、これまた笑止なことである。

十一、道にのっとって官を設けること⁽⁴¹⁷⁾

『五符經』にいう⁽⁴¹⁸⁾。「中黃道君がいわれた。天が萬物を生じ、人
間が最高の存在である。人間の身體は天地を包含し、何ごとのつ
とらないものはない。天子を立て、三公・九卿・二十七大夫・八十
一元士・九州・百二十郡・千二百縣を置く。膽は天子なる大道君、

脾臓は皇后、心臓は太尉、左の腎臓は司徒、右の腎臓は司空であり、
八神と膽を九卿に任じ、珠樓神十二と胃神十二と三焦神三を合して
二十七大夫とし、四肢神を八十一元士とし、これらを合計した百二
十が郡の數にのっとるのである。また肺臓を尙書府、肝臓を蘭臺府
とする」。

臣は笑っている。道教經典の州や縣の名を調べてみると、その文
章は近代にあらわれたもののようである。いにしえにおいては縣が
大きくて郡が小さいことは、『春秋』や『周書』洛誥に見えるが、
ところがあべこべに郡が縣よりも大きいとしている。とすると、つ
まり『春秋』以前の道教經典ではないのではあるまいか。いんちき
でたらずで蒙昧なこと、お粗末で笑止である。

十二、南無佛となえること⁽⁴³⁵⁾

『化胡經』にいう。「老子は胡王を教化しようとしたが、その教
えを受けようとはしない⁽⁴³⁷⁾。老子は、王がもし信じないのなら、わし
は南のかた天竺に入り諸國を教化しよう、その道は大いに興隆し、
ここから南には佛より尊いものは無くなるであろう、といった。胡
王はそれでもなお信じ受けいれようとせず⁽⁴³⁸⁾、もし南のかた天竺を教
化したならば、わしはきつとおまえに稽首して、南無佛となえよ
う、といった⁽⁴³⁹⁾。またつぎのようにいう。「沙漠に加夷國がいつも掠
奪を行なっている要塞があった。胡王はそのことに頭を悩まし、男
性をつかわして要塞を守らせ、たえず憂えたので、それで男性を憂
婆塞と呼ぶのである。女性はまだ加夷國に掠奪されることを恐れ、

かつ夫が加夷國に苦しめられることを憂えた。そこで憂婆夷と呼ぶのである」。

臣は笑っている。胡の言葉で南無というのは、ここ中國では歸命⁽⁴⁴⁶⁾といい、また救我ともいう。胡の言葉で憂婆塞⁽⁴⁴⁷⁾というのは、ここ中國では善信男⁽⁴⁴⁷⁾といい、憂婆夷⁽⁴⁴⁷⁾というのは、善信女⁽⁴⁴⁷⁾という。もし老子の言葉のように、佛が南にあらわれたからそれで南無佛⁽⁴⁴⁷⁾というのなら、もし西方にあらわれたのなら西無佛といえるのであろうか。

もし男性が要塞を守るから憂塞と名づけることができ、女性が夫を憂え、加夷國を恐れるから憂夷と名づけることができるというのなら、いったい(憂婆塞・憂婆夷の)婆⁽⁴⁴⁸⁾とは、その祖母を憂うとでもいうことになるのであろうか。このように文字づらによる訓詁は、ぶざまにしてみじめであって、まったく笑止である。

十三、鳥跡以前の文字のこと

『洞神三皇經』にいう。⁽⁴⁵²⁾「西域仙人はいわれた。皇文とはそもそも三皇以前の鳥跡という始原の文字記號である」。⁽⁴⁵³⁾またいう。⁽⁴⁵⁴⁾「三皇とは、三洞の尊神であり、大有天の祖氣である」。⁽⁴⁵⁵⁾天皇は氣をつかさどり、地皇は神をつかさどり、人皇は生をつかさどる。三者が合して根源の德を形成し、⁽⁴⁵⁷⁾萬物が變化生成する。⁽⁴⁵⁸⁾

臣は笑っている。『南極真人問事品』に、『靈寶經』の眞文三十六卷は玉京山の玄臺の玉室に納められている。⁽⁴⁶¹⁾眞文の大字はその中に満ち、⁽⁴⁶²⁾天地が沈没し、⁽⁴⁶³⁾幾萬回となく生成と破壊をくり返しても、眞文だけはまぎれもない」とある。この眞文とはつまり三洞の文字

である。三皇が三洞の尊神であるのなら、(三皇は)決して三洞のあとには位置しない。そのときまだ鳥獸は存在しなかった。どうして三皇以前の鳥跡という始原の文字であるといえようか。もし伏羲たちを三皇とするなら、『淮南子』に「皇(黃)帝は倉頡に鳥の足跡を観察して文字を作らせた」というのを考えてみると、これはただ皇帝のときのことである。どうして三皇以前で鳥文の始原ということができようか。

十四、張騫が經典を取得したこと

『化胡經』にいう。⁽⁴⁶⁸⁾「迦葉菩薩がいった。如來の入滅後五百年して、わたしは東方に旅をして道を韓平子に授け、白晝に昇天した。さらに二百年して道を張陵に授け、さらに二百年して道を建平子に授け、さらに二百年して午室に授けた。そののち、漢の末には世の中が悪くなる一方で、わたしの道を奉じなくなった。漢の明帝の永平七年甲子の歲に至って、⁽⁴⁷¹⁾歲星(木星)が晝間にあらわれ、西方が夜中に明るくなり、⁽⁴⁷²⁾明帝は夢の中で神人を見た。身のたけは一丈六尺、うなじには太陽の光がある。⁽⁴⁷³⁾翌朝、群臣にたずねたところ、西方の胡王の太子が道を成就して佛と稱している、と傳毅が答えた。明帝はさっそく張騫らを派遣し、⁽⁴⁷⁵⁾黃河の源流をきわめ、西域三十六國を経て舍衛國に至らせたが、佛はすでに涅槃に入っていたので、⁽⁴⁷⁸⁾經典六十萬五千言を書寫し、永平十八年になって歸國した」。

臣は笑っている。『(後)漢書』に、「張陵は後漢の順帝のときの人である。蜀に遊學し、鶴鳴山に入り、蛇に吞まれた」とある。⁽⁴⁸⁰⁾か

ぞえてみると、順帝はそもそも明帝の七代の孫であるから、明帝より百餘年前に生存している道理はない。また、明帝は張騫を派遣して黄河の源流を尋ねさせたというが、これもまたつくりごとである。⁽⁴⁸¹⁾『漢書』を調べてみると、張騫は前漢の武帝のために黄河の源流を尋ねている。⁽⁴⁸²⁾どうして後漢の明帝が再度派遣して尋ねさせたのであろうか。張騫はなんという長壽の仙人なのであろうか。何代にもわたって使者の役目をおおせつかるとは、なんと御苦勞なことか。⁽⁴⁸³⁾またしても、そのでたらめな引用よりは笑止なことである。⁽⁴⁸⁴⁾

十五、日月がいっせいに集まること⁽⁴⁸⁷⁾

『諸天内音』の「第三宗飄天八字文」に、⁽⁴⁸⁸⁾「澤落覺菩臺、緣大羅干」とあり、天真皇人の解釋にいう。「澤とは天中の山の名であつて、多くの龍がひそみ隠れるところ。落覺とは道君の内名、⁽⁴⁸⁹⁾菩臺とは真人の隠號である。玉臺は澤山の南にあり、三萬の日月がその左右を照らしている。羅漢とは月夫人（の内名）である。⁽⁴⁹⁰⁾大劫の交替期に、⁽⁴⁹¹⁾諸天の日月は玉臺の下に集まる。大千世界がばらばらになると、⁽⁴⁹²⁾天下は改まり、大千世界はすっからかんになる。⁽⁴⁹³⁾

臣は笑っている。『濟苦經』にいう。「天地がすっからかんになくなくなってしまったあとで、そこで巨靈と胡亥に山川を造りださせ、玄中に日月を造りださせる。崑崙山の南三十兆里に、さらにまた崑崙山がある。このようにつぎつぎに千の崑崙山があり、これを小千世界と名づける。さらにまた千の小千世界があり、中千世界と名づける。さらにまた千の中千世界があり、一大千世界と名づける」。か

ぞえてみると、大千世界の中には百億の日月がある。また經典に、「大劫の交替期に天地は改まり、日月星辰は存在するものがなくなる」とある。もし（日月が）いっせいに集まるのなら、百億の日月が一緒にやってくるはずである。どうしてただ三萬だけがやってくるのであろうか。⁽⁴⁹⁴⁾もしその他の日月が集まってこないとするのなら、災厄がおよばないからなのであろうか。それとも、それぞれの世界に（日月が）かけているからなのであろうか。もし本當にかけているのなら、地上の凡人ですら日月の光に浴しているにもかかわらず、天上はたいへんめでたいところなのに、⁽⁴⁹⁵⁾どうしてそこだけが光に浴さないものであろうか。また、日月の下、⁽⁴⁹⁶⁾そもそも欲界のもとにある人間世界は、大羅の上界、災厄のおよばないところとは名づけられない。いま、集まってこないというそんな道理があるものか。この經典を作ったものは、ただ大千世界という名前を聞いただけで日月の數を見失い、それでこんなことになったのであろう。⁽⁴⁹⁷⁾

十六、太上が尊貴であること⁽⁵⁰⁵⁾

『文始傳』にいう。⁽⁵⁰⁶⁾「老子は尹喜とともに天上に遊び、九重の白い門の中に入った。天帝は老子を見ると拜禮した。老子は尹喜に命じて天帝に對して拜禮させた。老子はいった。太上道君は尊貴であり、日をきめて引見される。⁽⁵⁰⁸⁾太上は玉京山の七寶宮におられ、（そこは）⁽⁵⁰⁹⁾諸天の上に抜きんで、さびさびとして小暗く、清らかで奥深い。⁽⁵¹⁰⁾

臣は笑っている。『神仙傳』にいう。⁽⁵¹¹⁾「吳郡の沈義は白晝に登仙し

た。⁽⁵¹⁴⁾ 四百年後、家にもどるとこういった。天に昇ったはじめ、天帝にお目にかかりたいと思ったが、尊貴でお目にかかれないうで、まず太上にお會いした。⁽⁵¹⁵⁾ (太上は) 正殿に坐し、男女數百人が侍っていた。⁽⁵¹⁶⁾ このように様子は明らかであり、つまり太上は天帝より位が低いことがわかる。太上は尊貴であつてその治所は衆天の上にあるなどというのは、でたらめである。いま『九天生神章』によれば、⁽⁵¹⁷⁾ 太上は玄都宮に住んでおり、玉清宮は玄都宮の上にある。宮殿を重ねてさらに玉清宮の上に置くのであれば、玄都宮を二層高い位置におくことになるであらう。ところが老子が、太上の治所は衆天の上にあるといっているのは、こんなひどいあやまりはない。

十七、五穀は生命をえぐる鑿であること⁽⁵¹⁸⁾

『化胡經』にいう。⁽⁵¹⁹⁾ 「三皇は道を修め、人びとはみな不死であつた。上古のとき、天は甘露を生じ、地は醴泉を生じ、(人びとは) これらを飲み食らうて長生きした。⁽⁵²⁰⁾ 中古以來、天は五氣を生じ、地は五味を出し、(人びとは) これらを食らうて壽命を延ばした。⁽⁵²¹⁾ 下の時代、世の中はあじけなく、天は風雨を生じ、地は百獸を養ひ、人びとはそれらを捕らえて食らうようになった。わしはこのような時勢に心を傷め、それで百穀をあじわつた上、億兆の民に食べさせ⁽⁵²²⁾ た。そこで三皇はそれぞれ五斗の穀物を奉納して誓いのしるしとし、⁽⁵²³⁾ 世々子孫が絶えることなく、五穀が中國に生じること求めた。⁽⁵²⁴⁾ 臣は笑つていう。『五符經』にいう。⁽⁵²⁵⁾ 「三人の仙王が皇(黃)帝に告げた。(いにしえの) 人びとが長壽であつたのは、五穀を食べべな

かつたからだ。⁽⁵²⁶⁾ 『大有經』に、⁽⁵²⁷⁾ 五穀は生命をえぐる鑿であり、臭い五穀で生命はちぢまる。⁽⁵²⁸⁾ この食糧が腹に入ると、長壽は望めない。⁽⁵²⁹⁾ 汝が不死を欲するならば、腸の中に(穀物の) かすがないようにせよ、とある。⁽⁵³⁰⁾ 『五府符經』にまたいう。⁽⁵³¹⁾ 「黃精は三つの陽の氣が太清宮に昇つてできたものである。これを食べると、甘くておいしく、また長生きできる。⁽⁵³²⁾ 老子はなぜこの黃精をあじわつてみないで五穀をあじわい、人の腸を腐らせるようなことをしたのか、理解に苦しむ。また、三皇はいずれも神人である。⁽⁵³³⁾ なぜ子孫が長生の國の王者となるようにさせずに、五斗の穀物で子孫が中國の王者になることを請い、生命をえぐり腸を腐らせるそのような短命を求めたのであらうか。これまた笑止なことである。⁽⁵³⁴⁾

十八、老子が佛となつたこと

『玄妙内篇』にいう。⁽⁵³⁵⁾ 「老子は關所を通じて維衛國へと赴き、清妙夫人の口に入つた。そののち左の腋の下を剖いて生まれ、七歩あゆんで、天上、天下の全てにおいてわれこそが尊い、といった。ここにさても佛教がおこつたのである。⁽⁵³⁶⁾ 臣は笑つていう。『化胡經』にいう。⁽⁵³⁷⁾ 「老子は尉賓國を教化し、あらゆるものは佛教につかえた。⁽⁵³⁸⁾ 老子はいつた。これから百年ののち、兜率天にあらためて本當の佛があらわれ、舍衛國白淨王の宮殿に人間として生まれかわるであらう。⁽⁵³⁹⁾ わしもそのとき、尹喜をつかわし下界にくだらせ、佛に従わせ、阿難と名のらせ、十二部經を編ませよう。⁽⁵⁴⁰⁾ 老子が(尉賓國を) たち去つてから百年ののち、舍衛國王に

そのとおり太子が生まれた。(太子は)六年の苦行を積み、悟りをひらいて佛と名のり、⁽⁵⁵⁷⁾字は釋迦文といった。さらに四十九年がたち、涅槃に入ろうとするとき、老子は再びこの世にあらわれ、迦葉と名のり、沙羅雙樹において、⁽⁵⁵⁸⁾みなものに代って如來にお尋ねした。⁽⁵⁵⁹⁾三十六の質問が終ると、佛はただちに涅槃に入られた。迦葉菩薩は佛の屍を荼毗に付し、舍利をとりあつめ、⁽⁵⁶⁰⁾國ごとに分って塔を作らせた。阿育王はさらにまた八萬四千塔を作った。⁽⁵⁶¹⁾もしこの事實から推しはかるならば、老子はもともと佛になどなっていない。もし佛になったのだとするならば、老子がみずからの手で老子の屍を荼毗に付し、塔を建てたということになるのであろうか。これがまず笑止な點である。

また老子について、諸經典はおおむね佛になったとか、國師になったとかいっている。⁽⁵⁶²⁾天下の國師と佛は是非とも伯陽でなければならぬ、というわけなのであろうか。人びとを救い世間を教化するにはどうしても李耳でなければならぬ、というわけなのであろうか。⁽⁵⁶³⁾かりに佛ではそうなることができず、どうしても道の體得者でなければならぬのだとすれば、⁽⁵⁶⁴⁾始原の氣が存在して以來、ただ一人の老子だけであつて、その他の人間には大道を悟って國師になることは許されていないのであろうか。もしそうだとするならば、老子は自分を鼻にかけ、⁽⁵⁶⁵⁾自分だけがたいしたものだと考えていることになる。ところが、⁽⁵⁶⁶⁾佛教經典ではすべての人間がつぎからつぎへとみな成佛できると説いている。道教經典にはそのような記載はなく、⁽⁵⁶⁷⁾たった一人の老君だけである。どうして佛の教えはかくも寛大であり、道

教の經典はかくも偏狹なのであろうか。

そのうえ、⁽⁵⁷⁰⁾あいもかわらぬでたらめを述べたて、終始一貫して根據のないことばかりである。⁽⁵⁷¹⁾『蜀記』には張陵は蛇に吞まれたとあるのに、白晝に昇天したなどと解説を加えているし、『漢書』には劉安は首を斬られたとあるのに、⁽⁵⁷²⁾なんと長生不死であつたなどといっている。⁽⁵⁷³⁾老子が佛になったと道家がでっちあげているのも、なにも不思議に思うほどのことはないのだ。

さらに『造天地經』には、⁽⁵⁷⁴⁾「西方で胡王を教化すると、老子は姿を變えていなくなった。左の目は太陽となり、右の目は月となつた」とある。ところが『玄妙經』にあたってみると、⁽⁵⁷⁵⁾「老子は太陽の精に乗って清妙夫人の口に入った」とある。⁽⁵⁷⁶⁾してみると、老子は片方の目の精に乗って口に入ったことになる。考えてみると、大道は奥深く神祕であつて、どこにだつて存在しないことはないのに、ひとつの精によりついて胎内に入らなければならないのである。かもしどうしても精によりつかなければならぬのなら、精はあたりに宿るもの、もしあたりに乗って入ったのなら、⁽⁵⁷⁷⁾兩目がそろつてやつて来るはずである。ところがなんと片目に乗って入り、⁽⁵⁷⁸⁾そのために偏見という大道をひらいたのであろうか。これもまた笑止なことである。

十九、瞿曇にいいつけて使いとならせたこと⁽⁵⁸⁵⁾

『老子化胡歌』にいう。⁽⁵⁸⁶⁾「わしが舍衛國にいたとき、瞿曇みずからにかたくなりました。⁽⁵⁸⁷⁾おまえは摩訶薩とあいつれ、經典をもたら

して東方の秦國（中國）へとやっておいで。⁽⁵⁹⁰⁾ 中國のうちをへめぐり、⁽⁵⁹¹⁾ 東海のほとりまでも赴け。世尊の教えをあまねくひろめ、⁽⁵⁹²⁾ 無知な衆生を教え導け。⁽⁵⁹³⁾ おまえにおごそかで神祕な教えを託そう、教化が千年に満ちるまで。⁽⁵⁹⁴⁾ 年が満ちたならばもどるがよい、ゆめ東方の秦國に執着してはならぬぞ。⁽⁵⁹⁵⁾ 天帝の怒りをかい、太上に地を蹴って憤らせることのないように」。

臣は笑っている。そもそも瞿曇というのは釋迦にはかならない。⁽⁶⁰⁰⁾ 『化胡經』にいう。⁽⁶⁰¹⁾ 「周の莊王の本初三年、⁽⁶⁰²⁾ 歳星が丙辰に宿る歳、白淨王の太子は正しい悟りをひらくと、佛釋迦となつた。老子は佛がこの世を去ろうとするのを見て、人びとがほっとして氣を抜くのではないかとあやぶみ、再び多羅の村に降臨して迦葉と名のつた。そして佛のそばにかくにつかえ、⁽⁶⁰⁴⁾ 屍を茶毗に付して骨を拾い、塔を立てあまねく分つた」。⁽⁶⁰⁵⁾ もしこの記述のとおりならば、釋迦が生まれてもいないのに、あらかじめ瞿曇を東方へつかわすことなどできはしない。すでに生まれて佛となつていたのならば、その途中で迦葉のいいつけを授かつて千年におよぶ使者の役目にあたることなどできはしない。菩薩が佛に親しくつかえ、⁽⁶⁰⁶⁾ その一方で佛にいいつけて使者とならせるなんてことがあるだろうか。

それに、周の莊王の一代はたったの十五年にすぎない。元年は乙酉の歳だから、丙辰など斷じてないのである。⁽⁶¹²⁾ 本初などという年號は、こんなひどい誤りはない。まったく耳をおおいたくならせるし、太上に地を蹴って憤らせることにもなるのではあるまいか。

二十、酒とほし肉で邪神につかえ道を求めること⁽⁶¹⁴⁾

『度人妙經』にいう。⁽⁶¹⁵⁾ 「三界の魔王にはそれぞれ讃歌がある。それを百遍誦えると自分の名前が南宮に救いとられ、⁽⁶¹⁶⁾ 千遍では魔王が迎えにくることうけあい、⁽⁶¹⁷⁾ 一萬遍では大空に飛昇し、⁽⁶¹⁸⁾ 三界を抜け出して仙公の位にのぼる」。⁽⁶¹⁹⁾ また『玄中精經』にいう。⁽⁶²⁰⁾ 「道士が誠や符籙を授けられる際には、五岳の神位を配置し、酒とほし肉を設けて再拜する」。⁽⁶²¹⁾

臣は笑っている。『觀身大誡』に、「道を學ぶものは鬼神をまつてはならぬ。また（鬼神に）向かつて禮拜してはならぬ」とある。⁽⁶²²⁾ 欲界の魔王であるからには、まだもろもろの煩惱を抜け出してはおらぬ。どうして百遍誦えあげたからといって、南宮に救いとられることができるか。

また、三張の教法をしてみると、⁽⁶²³⁾ 春分と秋分には社をまつり竈をまつり、⁽⁶²⁴⁾ 冬至と夏至には世俗と同様のまつりを行なうとある。（祭祀に用いる）兵符や社契のなかには、將軍とか吏兵とかのことがのっているが、⁽⁶²⁵⁾ 惡を戒め善を勧めるような文章はまったく見當たらな

い。これらにいう「神社」とは、鬼神についていうのであろうか、それとも道についていうのであろうか。もし鬼神についていうのであれば、道士は禮拜しないはずであるし、もし道についていうのであれば、酒やほし肉を設けたりしないはずである。魔王の言葉⁽⁶²⁶⁾を口に誦え、⁽⁶²⁷⁾ このような儀禮祭祀をみずから行ない、三界を出離しようと求めるなんてことなどあるだろうか。まことに哀れむべきことだ。

二十一、佛教は邪道で政治を亂すこと⁽⁶³⁶⁾

『化胡經』にいう。⁽⁶³⁷⁾「佛は胡の地域にあらわれた。西方は金の氣にあたり、剛情で禮をかく。⁽⁶³⁸⁾中國の人間はその作法をならい、佛塔を建立し、至るところでひたすらあがめ、⁽⁶⁴¹⁾根本に背をむけて末端を追いつめていく。⁽⁶⁴²⁾佛の言葉はまわりくどくてとりとめもなく、⁽⁶⁴³⁾たぐいまれなる教えというにはふさわしくない。經典を飾り形像を刻んで、⁽⁶⁴⁴⁾王や臣をたぶらかし、天下が洪水やひでりにみまわれ、戦争で互いに攻めあうことになってしまった。⁽⁶⁴⁵⁾（佛教が東傳して）十年もたたぬうちに、災害や異變があまねく發生し、⁽⁶⁴⁶⁾五星は軌道からはずれ、山が崩れ河が涸れ、王者の教化が公正をかくことになったのは、すべて佛教が亂したからである。帝王君主は宗廟につかえず、庶民は祖先をまつらず、⁽⁶⁴⁷⁾そのために神々の道氣がもはや秩序を失ってしまったのである」。

臣は笑っている。『智慧罪根品』にいう。⁽⁶⁵⁶⁾「元始天尊が申された。わしは上皇元年より半劫のあいだ人びとを濟度し、その壽命を一萬八千歳にのばしてやった。わしが去つてのち、人びとの心はほろほろにすさみ、⁽⁶⁵⁷⁾いかがわしい邪神のまつりを行なうようになった。殺生を行なって祈りをささげ、⁽⁶⁵⁸⁾お互いに殺し合つて若死にを身にまねき、定められた壽命を失ってしまった」。⁽⁶⁵⁹⁾このことから推しはかると、いかがわしい邪神のまつりを行なうと多くの神々は歡喜し、氣が道とひとつになって幸福と利益が得られるはずである。どうして壽命が短くなり、⁽⁶⁶⁰⁾定められた壽命を失うなどということがあろう

か。

また、漢の明帝以前には佛法はまだ行なわれず、⁽⁶⁶⁸⁾道氣はさかんであったとか。どうして戦亂がしばしばおこり、⁽⁶⁶⁹⁾洪水やひでりがあいつぎ、⁽⁶⁷⁰⁾血の雨が降ったり山が崩れたり、飢饉災害がしきりにみまひ、⁽⁶⁷¹⁾そのうえ桀王や紂王があらわれて人びとを火あぶりの刑に處したりしたのであらうか。⁽⁶⁷²⁾明帝以後、佛教が行なわれてから五百年あまりになるが、災異や虐政がそれ以前よりもひどいということがあつたろうか。今日からいしえのことを檢證してみるならば、⁽⁶⁷³⁾誰をいったいあざむけるだらうか。⁽⁶⁷⁴⁾事實は書物にはっきりとあらわれており、⁽⁶⁷⁵⁾おおい隠すことはできない。

驚はおろかもものではあるが、⁽⁶⁷⁶⁾いささか佛道二教について検討した。道教の教法は遠慮ぶかく、⁽⁶⁷⁷⁾わざと偽りを行なうことによって佛の眞實なることを明らかにし、⁽⁶⁷⁸⁾佛教の教法は純粹で正しく、⁽⁶⁷⁹⁾理法に心がけて萬物の本來をとげさせるのである。もしこのようなひろい道の立場にたつてのことでないならば、⁽⁶⁸⁰⁾笑止千萬なことである。

二十二、樹木が戒を聞いて枯死すること⁽⁶⁸⁷⁾

『老子百八十戒重律』にいう。⁽⁶⁸⁸⁾「わが戒はたいそうものものしく、樹木に向かつてこれを説けば枯れ、⁽⁶⁸⁹⁾畜生に向かつてこれを説けば死んでしまふ」。⁽⁶⁹⁰⁾また『靈寶經』にいう。「玄素の道は、⁽⁶⁹¹⁾いにしえの人間が實踐すれば生命をのばして長生きするが、⁽⁶⁹²⁾今の人間が實踐すれば壽命を短くして生命をそこなう」。⁽⁶⁹³⁾また、道士は三五將軍のまじないの法を授かり、⁽⁶⁹⁴⁾怨み憎むものがあれば、⁽⁶⁹⁵⁾發狂して生命をおと

す。⁽⁶⁹⁶⁾さらに『度國王品』には、⁽⁶⁹⁷⁾「東方の開明招眞神、身には黒頭巾をひっかぶり、黒の入れ墨。⁽⁶⁹⁸⁾足の大きさは百歩、頭は天を支え、大の好物は邪魔、口には山がすっぽり入る。朝に五百を食らい、晩には三千を食らう。十人また十人、五人また五人、衣服もまるごと呑みこんでしまふ」とある。⁽⁷⁰²⁾

臣は笑っている。『三元大誠』には、⁽⁷⁰³⁾「天尊は十誠や十善などの法を説き、はかり知れない人間が道を體得した」とあり、誠めていうには、⁽⁷⁰⁴⁾「惡心をいだいてはならぬ。誠めを聞き誹謗の心をおこすと罪にかかる」。ところでいま樹木には感情がないから、誹謗するという罪を犯すおそれはない。⁽⁷⁰⁵⁾どうしてこれを誠めて枯らす必要があるだろうか。もし必ず枯死するのだとすれば、これはとりもなおさず意識があるということだ。もし意識があるのなら、法を聞いてきつと悟るはずである。しかしながら、そんな道理はない。どうしてこんなことをいうのであろうか。今の人間が實踐すれば生命をそこなうことを諸君は御存知である。災いの毒はすでにまわっているのに、大道は寛容にも見て見ぬふりをし、⁽⁷⁰⁶⁾まがごとが後世におよびながらもそれを逮捕しない、⁽⁷⁰⁷⁾ということになったのであろうか。

またそもそも、三張の術の鬼神をおどす畏鬼科にいう。⁽⁷⁰⁸⁾「左の手には太極章、右の手には昆吾の劍。⁽⁷⁰⁹⁾太陽を指させば空中に停止し、鬼神をはたと見すれば千里の血の海。また黃神越章をこしらえて鬼神を殺し、朱章で人間を殺す」。あるいはまた塗炭齋を行なうものは、黄土を顔に塗りたくり、⁽⁷¹⁰⁾驢馬のように泥中をころげまわり、頭をぶらさげて柱にくくりつけ、腫れあがるほどぶんなぐる。晉の

義熙年間から、道士の王公期がぶんなぐるやり方はとりやめたが、⁽⁷¹¹⁾陸脩靜はそれでもなお黄土を顔に塗りたくり、うしろ手に縛りあげて頭をぶらさげた。こうしたいかがわしい祀りは、みんなもそれを見てともに笑うだろう。⁽⁷¹²⁾

また、漢の婕妤は皇帝から呪詛の疑いをかけられると、こう辯明した。⁽⁷¹³⁾「もし鬼神に意識があるのなら、道理にはずれた呪詛を受けるはずはありません。もし意識がないのなら、呪詛しても何のたしにもなりません。だから、そんなことはしておりません」。この事實から推しはかってみると、常人のあたまですら充分に承知できることである。ましてや、鬼神は靈的存在、聰明で嚴正でありながら、⁽⁷¹⁴⁾おろかなまじないを受けるなどとはついぞありはしないのである。いまその文章を見てみると、言葉も道理もなんらとりえはなく、世間のまじない師の解奏の曲と變りがない。大道がこのように寛容で非難しないとは思ひもよらぬことだ。アルコルに目がなく、⁽⁷¹⁵⁾年がら年中酒びたりの状態というものはあるまいか。道理でもって眞實をつきつめるならば、⁽⁷¹⁶⁾どうしてそんなことがありえようか。

二十三、起床後の禮拜は北方を最初とすること⁽⁷¹⁷⁾

『十誠十四持身經』には、⁽⁷¹⁸⁾「北方に一度禮拜する。北方を最初とし、(ついで)東に向かい、ぐるりと十方をめぐり、太上の神のお姿を頭に思えがく」とある。⁽⁷¹⁹⁾

臣は笑っている。『文始傳』に、「老子は尹喜とともに天上に遊んだ。尹喜は太上にお目にかかるうとした。老子はいった。太上は大

羅天の玉京山におられ、限りなく奥深い。⁽⁷⁴⁷⁾ここから遙かにその御殿の門に禮拜するがよい。⁽⁷⁴⁸⁾かくて、お目にかからずに引きあげた。

ここから推しはかってみると、玄都玉京山は太上の住まうところであり、いま上方にある。どうして上方を第一とせず、みだりに北方に禮拜するのであるか。ところで、道は東に生まれて陽である。⁽⁷⁵⁰⁾

どうして東方を最初としないのであろうか。佛は西に生まれて陰である。⁽⁷⁵²⁾北もまた陰である。先の條では輕蔑しておきながら、今度はまた尊重してまっさきに禮拜するというのか。

また『罪根品』に、「太上道君は同陽館の中で稽首して元始天尊に禮拜し、十善などについての法を尋ねた」とある。この誠めは、してみると天尊が説いたものである。どうして天尊に禮拜せず、太上を頭に思えがくのであろうか。根本をないがしろにして末端を追求めるとは、いったい誰を咎めればよいのであろうか。

二十四、親をあやめて道を求めること⁽⁷⁵¹⁾

『老子消水經』にいう。⁽⁷⁵⁸⁾「老子は尹喜に語った。もし道を學ぼうと望むのならば、まず五つの情欲を捨てよ。一に父母、二に妻子、三に肉欲、⁽⁷⁶¹⁾四に財寶、⁽⁷⁶²⁾五に官爵。⁽⁷⁶³⁾もしこれらを除いたならば、わしと西に旅をしよう。尹喜はいちずに思いつめ、⁽⁷⁶⁴⁾それで七人の首を斬って持って來た。老子は笑っていった。わしはおまえの心を試したただけだ。眞にうけてはならぬ。殺したのは肉親ではなく、鳥獸にすぎぬ。⁽⁷⁶⁵⁾（尹喜が）うつむいて見てみると、七つの首は七寶であり、⁽⁷⁶⁶⁾七つの死體は七羽の鳥であった。尹喜はいぶかり、家にもどってみ

ると、七人の肉親はすべて健在であった。⁽⁷⁶⁸⁾また『造立天地記』に、「老子は胡國を教化したが、胡王は屈伏しない。老子は胡王の七人の王子と國民の一部を打ち殺した」とある。⁽⁷⁶⁹⁾

臣は笑っている。『三元誠』に、「道を學ぶものは惡心をいだいたり、父母に不孝をはたいたり、妻子を愛さなかつたりしてはならぬ」とある。考えてみると、尹喜が殺した父母がもし幻であるとわかつていたのならば、どうして疑いをいだいて家にもどって確かめてみるなどあろう。もし本心からやったのなら、誠によると、惡心をいだいたことですでに重罪を犯している。ましてや兩親の首を斬るとは、とんでもないことだ。また、胡王が屈伏しないからといって、その七人の子を殺すというのもひどいことだ。さらに國民の一部を殺すとはなんと無慈悲のすぎたことが。もしそれを後世の手柄にしようとするのならば、道を求めるものすべてに兩親と妻子を殺させることになるであらう。また、王ひとりが屈伏しないからといって國のなかばの人間をめった殺しにしてよいはずがなからう。にっちもさっちも抜きさしならず、笑止でけしからぬことである。⁽⁷⁷⁰⁾

二十五、延命符のこと⁽⁷⁸¹⁾

『三元品』にいう。⁽⁷⁸²⁾「紫微宮に延命符があり、それを八方に書きつけると、八氣が呼應してたちまち人間になる。符を破って焼けば、人間は煙とともに氣と化してしまふ。その文は四萬劫に一度あらわれる。」⁽⁷⁸³⁾

臣は笑っている。『文始傳』にいう。⁽⁷⁸⁵⁾「萬億萬億年に一度大洪水が

おこり、崑崙山が浮かびあがる。仙人が飛來して天王と善良な民を迎え、山上に置く。それから進んで萬萬年たつと、天地は混沌として卵の黃身のようになる。⁽⁷⁸⁶⁾これを一劫と名づける。⁽⁷⁸⁷⁾そもそも大洪水の日にも、(地上ならぬ)天上の人は死ぬことがないのだから、それを山上に迎えるはずがない。⁽⁷⁸⁸⁾

また『濟苦經』に、「天地がすっからかんになったのち、きれいさっぱり跡かたもなくなってしまう」とある。考えてみると、一劫のときには人も物も存在せず、(人間をつくりだす)延命符は四萬劫にしてはじめてあらわれるとか。四萬劫もの間、まったく天上の人がいないということがあろうか。ひっそりと小暗く、なんとほてしもないことか。⁽⁷⁹¹⁾

また、萬萬とはただ一億のこと、億億とはただ一兆のこと。⁽⁷⁹³⁾ただ一億兆年というところを萬億萬億というのは、おそらく、新米の學者が經典をでっちあげるにあたつて數の大小を知らなかったからであらう。

二十六、椿は劫とひとしいこと⁽⁷⁹⁵⁾

『洞玄東方青帝頌』にいう。⁽⁷⁹⁷⁾「天子の位にはいつづけるわけにはゆかず、天地にも危機がおとずれる。⁽⁷⁹⁸⁾大劫は一本の椿とともに終り、災厄はときのめぐりに乗じてやってくる。⁽⁸⁰⁰⁾」

臣は笑つていう。大洪水がおしよせると、崑崙山は浮かびあがる。そののち大火災がおこり、金も鐵も溶けて大地には草もなくなってしまう。⁽⁸⁰²⁾それから萬萬億年たつて、天地は卵の黃身のようになる。

これらをひっくりくるめて一劫と名づけるとか。ところで、椿というのは世俗の木であり、世俗の火で焼いても灰になる。劫火にあたればただちに跡かたもなくなってしまうであらう。それなのに大劫が椿とひとしいとは、まったくなんたるでたらめであらうか。やはり笑止なことである。

二十七、劫とともに生死をくり返すこと⁽⁸⁰⁵⁾

たとえば『度命妙經』にいう。⁽⁸⁰⁶⁾「大劫の一サイクルが終るとき、天は崩れ地は沈み、欲界はきれいさっぱりなくなってしまう。⁽⁸⁰⁸⁾太平道經や佛教の法華經と大小品の般若經は、上下の十八天をあまねくめぐって色界の内に存在する。⁽⁸¹¹⁾大劫の交替期に至れば、その文はほろんでしまう。玉清上道の三洞神經や眞文玉字は元始のときにあらわれ、二十八天、無色界の上、大羅玉京山玄臺の災厄のおよばないところに存在する。⁽⁸¹⁶⁾だから、自然の文はときのめぐりとともに生じ、ともにほろぶ。これをよく守ることができるならば、七代の祖先は天に生まれ、轉輪聖王として代々絶えることがない。⁽⁸¹⁹⁾」

臣は笑つていう。『度人本行經』にいう。⁽⁸²⁰⁾「道はいった。元始の光がさしそめてよりこのかた、赤明元年、九千餘億劫を経るまで、ガンス河の砂の數ほどの衆生を濟度した。そののち上皇元年に至るまで、人々を濟度することははかり知れなかった。⁽⁸²³⁾わしは劫とともに生死をくり返して世々絶えることなく、常に靈寶とともにあらわれる。久しい時間がたつて劫が終り、九氣がときのめぐりを改めると、洪氏のおなかをかり、三千年あまりののち、赤明の運が開くと⁽⁸³¹⁾

き、甲子の歲に扶力蓋天に誕生し、再び靈寶とともにあらわれて人びとを濟度した。元始天尊は、わしのこのような因縁によって、わしに太上の號を賜わり、玄都玉京山に住まわされた⁽⁸³⁴⁾。このことから推しはかってみると、眞文は玉京の災厄のおよばないところに存在するわけである。それなのに、自然の文はときのめぐりとともに生じともにほろぶという。ともに生じともにほろぶことが、どうして災厄でないのだろうか。また、「わしは靈寶と同時に出沒する⁽⁸³⁵⁾」といい、また「わしは劫とともに生死をくり返す⁽⁸³⁶⁾」という。考えてみると、靈寶はときのめぐりとともにほろび、太上もそれに随ってほろぶのであって、長生不死などというのは、これはでたらめではないか。さらに、玉京は多くの天の上の災厄のおよばないところに存在するというのも、道理として疑わしい。一切の形や色のあるものは、實在するものはないのであって、玉京とか玉臺とか、それらは色界であり、色界は恒常不變ではない⁽⁸³⁹⁾。玉京がどうして實在するのであろうか。また、赤明甲子などという年號は、天の川に實體がある⁽⁸⁴⁰⁾とらえるのとまったく同じことである。

二十八、丹藥を服用して黃金色となること⁽⁸⁴¹⁾

『神仙金液經』にいう⁽⁸⁴²⁾。「金液と還丹は太上が服用して神となつたところのものである。いま水銀を焼くと再び丹砂にもどる⁽⁸⁴⁵⁾。これを服用すれば仙人となり、白晝に昇天する⁽⁸⁴⁶⁾。仙人になろうとしても、もしこの方法を體得しなければ、いたずらにみずからを苦しめるだけである⁽⁸⁴⁷⁾。丹砂を焼けば水銀となり、水銀を焼けば丹砂となる⁽⁸⁴⁸⁾。だから還丹といふのである。昔、韓終はこれを服用

し、その顔は黃金色となった⁽⁸⁴⁹⁾。また佛の身體が黃金色をしているのは、おそらく道法のもたらした靈驗なのであろう。身體の内外を黃金のように剛堅にするから、佛のことを金剛身とよぶのである⁽⁸⁵⁰⁾。

臣は笑つていう。『文始傳』に「太上老子と太一元君⁽⁸⁵⁴⁾とあるがこの二人の聖人は同一人物のはずである。『金液經』に「太一」とあるのは、ただ中黃丈夫と太一君のみであつて、この二人は仙人の主である。かれらは金液を飲み、天に昇つて大仙人となり、陰陽を調和させたのだという⁽⁸⁵⁵⁾。考えてみると、韓終はまだ金液を飲んでいないときにはただの人間にすぎなかった。金液を飲んで天に昇つたからには、つまり老君にはかならない。ところで、老君は太上なる萬眞の主であつて、できないことはなにもない。それなのに、金液を飲んだうえで陰陽を調和させる必要があるだろうか。また、太一の大神になれるものはどれほどいるのだろうか⁽⁸⁶¹⁾。陰陽を調和させるものはいったい何人いるのだろうか⁽⁸⁶²⁾。もし服用したものは誰でもできるというのなら、何と多いことか。また、丹砂と水銀はどこにでもあるから、火で焼いて丹藥をつくるのは難しい作業ではない。なぜ道士はそれを服用して白晝に昇天し、天仙の主とならずに、つらい思いをして叩齒を行ない、むなしく一生を送るのであろうか。まことに哀れなことだ。もし服用しないのならば、それは丹藥にまどわされていることをはつきりと知っているからである。もとより影を捕らえるような話にすぎない⁽⁸⁶⁹⁾。

また、佛の身體が黃金色をしているのは丹藥によってそうなのであるというが、そうだとするとつまり行因によらずにひとつの

丹藥だけでそうなったわけである。邪見も甚だしく、悲しいかな、
というものだ。

二十九、佛教經典を剽竊改竄して 道教經典にしたたこと

たとえば『妙眞偈』にいう。⁽⁸⁷³⁾「たとい聲聞たちの、その数はガン
ジス河の砂ほどのものが、精根つきるまで一緒にかぞえてみて、
道智をはかり知ることはできぬ」。

臣は笑っている。これはほかでもない、『法華經』の「佛智」を
「道智」に改めたにすぎない。⁽⁸⁷⁷⁾そのほかもすべて同類で、こういった
文章はひとつにとどまらない。⁽⁸⁷⁹⁾昔、あるものが道士の顧歡に問うた
ところ、顧歡は答えた。⁽⁸⁸⁰⁾「靈寶妙經」は天文の大字であり、自然から
あらわれたのであって、もともと『法華經』だったわけではなかつ
たが、あるうことか、鳩摩羅什がでたためにも僧肇とともにわが道
教經典を改竄して『法華經』をつくったのである」。⁽⁸⁸⁵⁾『靈寶經』が『法
華經』によって剽竊されたとは、中國をあざむくことはできようが、
『法華經』が『靈寶經』とちがうことは西域でも事情はことならない
のであって、今日の翻譯者が譯出する經典も『法華經』の經文と
たがわない。⁽⁸⁸³⁾このことを煎じつめてみると、『靈寶經』が『法華經』
を剽竊改竄したのは事實であることがわかる。かつ、佛教經典
は博大でしかも簡潔、言葉と意味は廣く奥深く、千卷百部でも重
複した文章がないのは、老子の説く經典が特別のよい智慧もなく、
佛教經典のまねをして部たてを増しているのとは同じではない。ま

た、『道德經』五千言はまったく佛に説きおよんでいないし、佛の
全八部の藏經も道教のことはとりあげていない。それ以外の後世に
つくられた經典がいずれも佛教經典を剽竊したものであることは、
のちほど明らかになるであろうから、ここではこれ以上は述べない。
そんなわけで、いにしえよりの賢人達者は佛教經典を口に誦え、現
在まで流傳して代々絶えることがないのである。道教經典のほう
が絶対にすぐれているのなら、どうして口に誦え護持しないのであ
うか。國中をひとあたり見渡してみても、道教經典を口に誦えてい
るものなど誰がいるだろうか。かようなわけで、規範とすべきもの
でないことがわかる。

三十、佛教經典の因果を剽竊したこと

『度王品』にいう。⁽⁹¹¹⁾「天尊が純陀王につけた。悟りを得た聖者た
ちからガンジス河の砂ほどの如來たちまで、すべて凡夫から修行を
積み重ねてその地位を得たものである。十の階級の仙人は無数であ
り、一度世に生まれて第一の仙人の位に達したのもいれば、また
功德をつみ重ねてのぼったものもいる。功德が高ければ一擧にして
達し、功德が低ければ十の段階をふんでのぼる。つまり十の階級が
あるのであり、歡喜地から法雲地まで至ってすぐれたみめかたちは
完全にそなわるのだ。そこで王たちは説教を聞いて、すぐさま四果
を得た。また『度身品』にいう。⁽⁹²⁴⁾「尼乾子は天尊のもとで法を聞き、
須陀洹果を得た。また『文始傳』にいう。⁽⁹²⁷⁾「老子は闕賓國で指をは
じくと、もろもろの天王、羅漢、五神通をそなえた飛天たちがそ

ってやってきた。そこで尹喜を先生とし、悟りを得た菩薩は老子のためにほめうたを作った。⁽⁹³⁰⁾

臣は笑っている。佛教と道教は教えのあり方も異なり、變幻自在に導く方法もちがっている。道教は自然を宗旨とし、佛教は因縁を根本義とする。自然とは作爲なしに成就すること、因縁とは修行をつみ重ねて證悟することである。そこで小乗佛教では四果の段階を設け、大乘佛教では十等級の位があり、凡夫から悟りの境地に入るまで、經典や論書がちゃんとそなわっている。ところで、道家のならべたての四果や十仙は、名前こそ佛教と同じだが、それに至る修行や因縁については、その説を見たことがない。ところで道家の修行では、氣を吸って天に昇ったり、水を飲んで道を證悟したり、法を聞いて空を飛んだり、草を食べて尸解したりするものがある。修行が異なっているからには、證悟された結果も當然異なるはずである。だが、(道家は)天は五層をなしているとか、あるいは三千大千とか、あるいは八十一天とか、あるいは六十大梵とか、あるいは三十六天とか、あるいは五億五萬餘天とか、あるいは九眞天王、九炁天君、四方炁君、三元三天、九宮天曹、玉清大有、玄都紫微、三皇太極とか説いている。およそこのようなたぐいは、もとづくところがあるはずであり、根據もなしにならべたて、わざわざ異をたてるなんてことはありはしないであろう。どうかいつてほしいものか。この天は縦に重なっているのか、それとも横にひろがっているのか、からっぱなのか、それとも詰まっているのか、どんな丹藥や草を服用したらこの天に生まれることができるのか。もしはつきりわから

ないのであれば、つまり根據もなしに述べているにすぎないことになり、いよいよもって笑止なことだ。⁽⁹³¹⁾

三十一、道教經典がまだ出現していないのに出現したということ⁽⁹³²⁾

玄都觀の道士がたてまつった經典目録を見てみると、宋人の陸修靜が撰したものを使っている。その目録に、「上清經は百八十六卷、うち百十七卷はすでに世に行なわれている。始清經以下の四十部六十九卷はまだ世に行なわれていない」といつているが、現在の經典目録を調べてみると、どれも「現存⁽⁹³³⁾」といっている。それから、「洞玄經十五卷はまだ天宮に隠されている」とあるが、今その目録を調べてみると、どれも「現存⁽⁹³⁴⁾」と注記している。

臣は笑っている。陸修靜は宋の明帝のときの人である。太始七年に敕命によって經典目録をたてまつった。そこに「天宮に隠されている」といつているが、以來百年あまり、天上の人が降ってきたとも聞かないし、道士が昇天したのも見たことがない。この經典はどういう次第でここに来てきたのであろう。昔、文成將軍少翁は帛書を牛にくわせ、(牛を殺して書を得た武帝に)西王母のお告げであるとうそをついた。ところで、『黃庭經』や『元陽經』は「道」という文字を「佛」という文字と取りかえたものである。張陵は『靈寶經』をつくりあげ、吳の赤烏の時代にはじめて世にあらわれた。『上清經』は葛玄にはじまり、宋・齊のころにようやくひろまった。鮑靜(靚)は『三皇經』をでっちあげ、事が露見して誅殺さ

れた。⁽⁹⁷⁸⁾ 文成將軍は帛書を牛にくわせ、漢の世に殺される始末となつた。今日の學者はまたそのやり口を繼ごうとしている。またしても悲しむべきことではないか。⁽⁹⁸⁰⁾

〔後〕漢書』にいう。⁽⁹⁸⁰⁾「張魯の祖父の張陵は、桓帝のときに符書をでっちあげ、それで民衆をまどわした。その道を授かるものは五斗の米を供出したので、世間では米賊といった。陵は息子の衡に伝え、衡は息子の魯に伝え、三師とよび、三人の妻を三夫人といった。みな白晝に昇天したという。まず最初、道を授かったものを鬼卒と名づけ、やがて祭酒とよんだ。⁽⁹⁸³⁾ あやしげで下品なこと甚だしく、こじつけ解釋のまかり通ること、みなこのたぐいなのである。⁽⁹⁸⁵⁾

三十二、五億層の天のこと

『文始傳』にいう。⁽⁹⁸⁶⁾「天は五億五萬五千五百五十五の層をなしている。大地も同様で厚さは一萬里。四隅には金の柱と金の軸の周圍三千六百里のものが立ち、神風が支えている。四つの海が地下の水脈をなし、天と地、山と川、天の川は氣をかよわせあい、風も雲もすべて山から湧き出している。⁽⁹⁹⁴⁾

臣は笑っている。『三天正法經』にいう。⁽⁹⁹⁵⁾「天の光がまだ輝かず、七千劫あまりがたつと、幽玄な光がはじめて分かれ出、九つの氣が存在することになった。九眞天王と元始天王は自然の血筋をひき、九天のよび名を與えられた。上中下の三眞はそれぞれの眞ごとに一元をなし、その一元には三個の天が存在した。上元宮とは太上大道君の治所にはかならない。計算してみると、ひとつの天は互いに九

萬九千九百九十里はなれている。⁽⁹⁹⁷⁾ だとすると、九天間の距離は七十九萬九千九百二十里。一里は三百步、一步は六尺だから、十四億三千九百八十五萬六千尺である。これを五億層の天の數で割ると、天と天との間の距離は二尺である。いったい一萬里も厚さのある大地が、そのうえに二尺の天を載せているなんてことがあるだろうか。『文始傳』には、⁽⁹⁹⁸⁾「老子が四天王やみなものをまねいたとき、すべて身長は一丈六尺、低いものでも一丈二尺であった」とある。考えてみると、人は背が高く天が低いとなれば、人々はいったいどのようなにしてもぐりこんだのであろうか。いつも横になったまま起きあがらなかったとは、びっくり仰天、開いた口もふさがらない。⁽⁹⁹⁹⁾

三十三、道士が家に出入りするにあたっての

作法のこと

『玄中經』にいう。⁽¹⁰⁰⁰⁾「道士が手に持つ簡（しゃく）は金玉製で幅は一寸、長さは五寸五分のものをうい、これを手に持って象徴とする。中古の王はこれを手に持って師君に挨拶したが、下古の時代になると金玉が見つからなくなったので、あれこれの木で作った長さ九寸のものを手に持つこととなり、これを手簡と呼んでいる。それを手に持って高慢を去り、道士自身の誠めとする。もし王宮や村落民家に出かける場合には、建物のもと十歩のところまで頭巾と帔を着け、象徴とする手簡を手に持って入る。横を向いたり後を向いたりきよろきよろしてはならない。建物のそとに出れば、頭巾と帔はずし、簡素な服装に着かえてたち去る。自分を目立たせようとして、

道教の教法をそこなつてはならない。在家へ出かけるときには、威儀⁽¹¹⁸⁾を正し、簡を手持って坐り、在家のものを不審がらせてはならない。道士が百里も離れたところへ遠出する際には、杖をつき、頭巾をかぶり、帔を着け、香爐、銅の罐、鉢盂など出家者の道具を持って出かける。威儀が完全にそなわっていると十種の功德を得ることができ⁽¹¹⁹⁾る。

臣は笑つていう。『自然經』⁽¹²²⁾にいう。「道士の頭巾、褐、帔についてのきまり。褐の長さは三丈六尺、つまり三百六十寸で、一年三十六旬のつとる。一年は三百六十日だからである。ひとつの身ごろにはふたつの角があり、角にはそれぞれ六枚の縫い合わせがある。また、兩袖で、兩袖のそれぞれにも六枚の縫い合わせ、合計二十四の縫い合わせは二十四氣にのつとる。二本の帯は陰陽にのつとる。頭巾のふたつの角は天地にのつとる。云々。冠は蓮華型の頭巾にのつとる⁽¹²³⁾。『自然經』に規則があるのに、どうしてそれに従わないのであろうか。こともあろうに、張魯の黃巾の服裝をきまりとしてい⁽¹²⁴⁾るのは、規律違反の無見識というものである。」

三十四、道士が佛を奉じていること⁽¹²⁵⁾

『化胡經』⁽¹³⁰⁾にいう。「願わくは優曇花を手を持ち、願わくは栴檀香をたいて、千佛身を供養し、ぬかついて定光佛に禮拜したい⁽¹³¹⁾。またい⁽¹³²⁾う。「佛のお生まれはなぜかくも遅かったのか。入寂はなぜかくも早かったのか。釋迦牟尼にお會いできず、心底くやまれてならぬ⁽¹³³⁾」。やうに『智慧觀身』大誠(經)』にいう。「道を學ぶものは、

大流景官にもうでて佛に禮拜することを心にかけるべきである⁽¹³⁹⁾」。

臣は笑つていう。『敷齋經』⁽¹⁴⁰⁾にいう。「天尊は右玄真人に申しつけた。釋迦牟尼は輪迴轉生の教えで世の中を教化するが、天老右玄真人なるおまえには、昇仙の道とか不死の偉大なる方法で教化させよう⁽¹⁴¹⁾。また『老子序』⁽¹⁴²⁾には、「道は生を管理し、佛は死を管理する。

道はけがれを忌み、佛は忌まない。道は陽に屬して生なるものであるからけがれを忌むが、佛の場合は逆である⁽¹⁴³⁾」とある。この記述によれば、道の清と佛の濁とは本來的に分かれており、佛の死と道の生とははっきり區別されている⁽¹⁴⁴⁾。それなのにどうして清潔でさっぱりしたすぐれた道を心につけないで、生死を前提とするけがらわしい佛を願つたりするのであろうか。昔、殷の宰相が孔子に聖人について尋ねたところ⁽¹⁴⁵⁾、孔子は、三皇、五帝、三王それに自分自身、いづれも聖人ではない、西方の人のなかに聖人がいる、と答えた。かくして、孔子が佛を聖人と考え、道を聖人と認めてはいなかったことがわかるのである。『化胡經』⁽¹⁴⁶⁾には「天下のすぐれた術のなかで佛の術が一番である⁽¹⁴⁷⁾」といい、『昇玄經』⁽¹⁴⁸⁾には「わしの先生は姿を變えて天竺へ旅立たれた⁽¹⁴⁹⁾」とあり、『符子』⁽¹⁵⁰⁾には「老氏の先生は名前を釋迦文という⁽¹⁵¹⁾」とある。このことは『道齋經』⁽¹⁵²⁾にも、「仙者を梵天と稱する、佛を隱文と稱する⁽¹⁵³⁾」という。外國で經を讀むのは往々にして多く梵天であるから、道士が心をひかれて梵とは佛のことにはかならない。つまり、ずっと以前から佛に學んでいるのである。だから梵などと稱しているのだ。加えて『靈寶經』⁽¹⁵⁴⁾は、三十二天の大梵天隱語について、天それぞれの八字を一萬回誦えればた

だちに飛行することができ、七代前の祖先はそろって南宮に昇る、⁽¹⁶⁰⁾という。このこともまた道士が佛に學んでいる證據である。しかるに、道士は梵に學ぶことだけは知っているが、梵がどんな佛であるかは理解していない。やみくもの信仰でも、きつと福がおとずれるはずである。笑っていいものかどうか。

三十五、道士の合炁の法のこと⁽¹⁶¹⁾

『真人内朝律』⁽¹⁶²⁾にいう。「真人がいわれた。すべての男女は、月のついたちと十五日がやってくると、あらかじめ三日の齋を行ない、⁽¹⁶³⁾私室に入り、師のもとに出かける。功德をたてて、陰陽ならび進み、⁽¹⁶⁴⁾晝夜の六時にわたって……」⁽¹⁶⁵⁾このような猥雑な言葉は耳にするわけにはゆかぬ。また『道律』⁽¹⁶⁶⁾にいう。「行炁の術には順序がある。すきかたてに醜い女性を遠ざけてきれいな女性を近づけたり、わりこんだり、順序をとばしたりしてはならない。また『玄子』⁽¹⁶⁷⁾にいう。「けぎらいしなければ世俗からの仙去がかなう。嫉妬しなければ世俗から仙去することができ。陰と陽が合すれば龍に乗って去る、云々」⁽¹⁶⁸⁾。

臣は笑っている。臣は二十歳のとき、道術にあこがれ、道觀で學んだ。まず黃書合炁の術、三五七九男女交接の道を教えられた。⁽¹⁶⁹⁾（男女が向きあつて）四つの目とふたつの舌が正對し、道の實踐の⁽¹⁷⁰⁾かなめは丹田にある。實踐するものは、厄をはらい、壽命をのばす⁽¹⁷¹⁾のだとか。夫に妻を取りかえさせ、ただ肉欲のみを第一とする。父や兄が前に立っていても羞恥心もなく、みずから中炁眞術と稱して

いる。今日の道士は常にこの方法を行なっているが、こんなことで道を求めるとは、なんともよくわからない點がある。⁽¹⁷²⁾

三十六、諸子を道教の書物とすること⁽¹⁷³⁾

『玄都經目』⁽¹⁷⁴⁾にいう。「道教經典・傳記・符圖・論書、六千三百六十三卷。うち二千四十卷にはテキストがあり、紙四萬五十四枚を用いている。その千百餘卷は經傳・符圖であり、八百八十四卷は諸子の論である。その四千三百二十三卷は陸修靜の目録に卷數がついているけれども、題目とテキストはともにまだ見つからない。」⁽¹⁷⁵⁾臣鸞は笑っている。道士がたてまつった經典目録のうち、陸修靜の目録には、經書・藥方・符圖ただ千二百二十八卷が存在するだけで、もともと雜書・諸子の名はない。ところが、道士が現在二千餘卷をならべているのは、つまり『漢書』藝文志の書目を取り、八百八十四卷を道教の經論としたのである。このような現狀にもとづくならば、當然疑問がわいてこよう。何となれば、たとえば『韓非子』、『孟子』、『淮南子』などには、みな道教についての言葉があるとしてゐるからである。また、八老の黃白の方、⁽¹⁷⁶⁾陶朱の變化の術、⁽¹⁷⁷⁾翻天倒地の符、辟兵煞鬼の法、⁽¹⁷⁸⁾および藥方やまじないなどを道書とみなすことができ、引っぱってくるのできるのなら、『連山』、『歸藏』、『易林』、『太玄』、『黃帝金匱』、『太公六韜』⁽¹⁷⁹⁾などかどういうわけで道書の中に入らないのであろうか。陸修靜の目録にはもとものと諸子はない。ところがいまだどっさりのは、何を根據にしたのであろうか。それに、昨年（天和四年）の七月に道士がた

てまつた經典目錄には、ただ諸子三百五十卷に注記して道教經典としていただけなのに、現在では八百餘卷といっている。どうして時代の前後によってくいちがっているのであらうか。また、ひけめのある人間はひとすらひとに知られることを恐れ、自分に美點があるものはひとに見てもらえないことを氣にもむものである。⁽¹¹⁾だから道士はみずから「道戒を授からないものは、道教經典を讀むことはならぬ⁽¹²⁾」と書いていのである。このような現狀に即すれば、ひとに自分の恥を知られることを恐れているのであらう。もし諸子を道書とするのならば、世間に存在する諸子はことごとく採用すべきであつて、取り残しがあつてはならない。かつ、道士は先例をもちだして、「わが老子道德經はもと諸子であつたが、現在では經として尊ばれている。そういうためしになぜらえることに何の悪いところがあるのか」と。もしそうのなら、『老子』、『黃子』は諸子の流派であることがわかる。いかにして儒家者流の七經と張りあえようか。班固は六經を先に置き、道德經二篇を後に置き、道を中上賢のたぐいに位置づけている。⁽¹²⁰⁾これはまぎれもない記録である。

また、陶朱とは范蠡のことである。⁽¹²²⁾越王句踐につかえたうえ、君臣ともども呉の石室に囚われ、糞をなめ、小便を飲み、とてもひどいありさまであつた。ところが、いまその術をありがたがるとは、おろかしいことではないか。また范蠡の子が齊で殺戮されたとき、どうして父の術を行ない姿を變えていのちびろいしなかったのであらうか。

また、『造天地經』に「老子は幽王の皇后のおなかをかりた」⁽¹²⁷⁾と

あれば、つまり幽王の子である。「みずから柱下の史官となつた」とあれば、つまり幽王の臣である。『化胡經』には、「老子は漢にあつて東方朔となつた」とある。もし本當にそうのなら、幽王は犬戎によって殺されたが、君であり父である幽王を愛して靈妙な符を與え、不死にならせなくてもよかつたのであらうか。また、漢の武帝は兵力を使い果たして中國を疲弊させ、天下の戸口は半分以下にまで減つてしまつた。⁽¹³⁵⁾老子が東方朔だと稱するのなら、辟兵辟穀の符や人にまじないをかけ鬼神を呪縛する方法を與えて漢の國を守護せずに、よくも平氣でおれたものである。こんな流弊を目にしなから、救済する氣持ちがないとは、まやかしのでたらめというものではあるまいか。

また、道教經典を一括して収める目錄には、六千餘卷が存在するということだが、現存するテキストを厳しく検討してみると、二千四十卷あるだけであり、そのほかは根據もなしに「未出」と記している。⁽¹⁴⁵⁾執筆がまだ完了せず、經典のテキストが未完成ということになつたのではあるまいか。その他、とりとめがなくごたごたしていることは、これ以上詳しく述べるまでもない。

注

- (1) 抄取可笑 『抱朴子』遐覽「其變化之術、大者唯有墨子五行記、本有五卷、昔劉君安未仙去時、鈔取其要、以爲一卷」。『世說新語』容止「周伯仁道桓茂倫、嶽崎歷落可笑人」。『顏氏家訓』勉學「名儒碩學、此例甚多、若有知吾鍾之不調、一何可笑」。

(2) 先後淺深同異 吳質「左元城與魏太子牋」(『文選』卷四〇)

「古今一揆、先後不質」。『論衡』案書「才有淺深、無有古今、文有僞眞、無有故新」。『禮記』曲禮上「夫禮者、所以定親疏、決嫌疑、別同異、明是非也」。

(3) 不揆疎短 『南齊書』卷五十二文學王遂之傳「不揆庸微、謹冒啓上、凡五十卷、謂之齊職儀」。同卷四八孔稚珪傳「臣以疎短、謬司大理」。

(4) 具錄以聞 『宋書』卷三武帝紀下永初元年「主者具條以聞」。
「具錄」の語は、顔之推「誠殺訓」(『廣弘明集』卷二六、T52・234a)「見好殺之人、臨死報驗、子孫殃禍、其數甚多、不能具錄耳、且示數條於末」。ただし、それがもとづく『顏氏家訓』歸心篇では「悉錄」に作る。

(5) 教迹 『肇論』「答劉遺民書」(塚本善隆編『肇論研究』、法藏館、一九五五、五二頁)「群情不同、故教迹有異耳、考之玄籍、本之聖意、豈復眞僞殊心、空有異照耶」。范縝「答曹錄事難神滅論」(『弘明集』卷九、T52・59b)「宗廟郊社、皆聖人之教迹、舜倫之道、不可得而廢耳」。

(6) 出沒隱顯 謝朓「和王著作八公山詩」(『文選』卷三〇)「出沒眺樓雉、遠近送春目」。『國清百錄』卷三(T46・811b~c)「非夫顯晦出沒、其孰能於此歟」。蕭子良「淨住子」迴向佛道門第三十(『廣弘明集』卷二七、T52・320c)「隱顯化衆生、獨處樂善寂」。なお「出沒」の語は、本論二十七「隨劫生死」章に引用された『度人本行經』にも「我與靈寶、同時出沒」と用いら

れている。

(7) 變通 『周易』繫辭上傳「是故闔戶謂之坤、闢戶謂之乾、一闔一闢謂之變、往來不窮謂之通」。又「聖人立象以盡意、設卦以盡情僞、繫辭焉以盡其言、變而通之以盡利、鼓之舞之以盡神」。同下傳「易窮則變、變則通、通則久」。

(8) 幽微妙密 宗炳「明佛論」(『弘明集』卷二、T52・12c)「但馳神越世者、衆而顯、結誠幽微者、寡而隱、故潛感之實、不揚於物耳」。徐緄「答莊嚴寺法雲法師與公王朝貴書」(同上卷一〇、T52・61c)「竊惟希夷之本難尋、妙密之源莫覩、自非上聖、無以談其宗、非夫至睿、焉能道其極」。梁元帝「內典碑銘集序」(『廣弘明集』卷二〇、T52・244c)「般若淵玄、眞如妙密」。

(9) 詳度 「周滅佛法集道俗議事」の注(62)を見よ。

(10) 一往 『宋書』卷五六史臣論「桓玄知其始而不覽其終、孔琳之視其末而不統其本、豈慮有開塞、將一往之談可然乎」。『摩訶止觀』第七上(T46・87c)「一往然、二往不然」。

(11) 佛者以因緣爲宗、道以自然爲義 本論三十「倣佛經因果」章においても、「佛之與道、教迹不同、變通有異、道以自然爲宗、佛以因緣爲義」と述べられているが、僧敏の「戎華論」(『弘明集』卷七、T52・47c)に「老以自然而化、佛以緣合而生」とあるなど、因緣と自然をそれぞれ佛教と道教の根本義とする考えはこの當時に多いこと、中嶋隆藏『六朝思想の研究』(平樂寺書店、一九八五)附篇第二節「六朝後半より隋唐初期に至る道家の自然説」に詳説されている。また、福永光司「自然と因

果——老莊道教と中國佛教——」(世界の名著4『老子莊子』折込附録、中央公論社、一九七八)、『通極論』譯注」(『東方學報』四九冊、五一冊)の解題およびその注(552、(571)をも参照のこと。

- (12) 無爲而成 『老子』三十七章「道常無爲而無不爲」、王弼注「順自然也、萬物無不由爲以治以成之也。」「禮記」中庸「如此者、不見而章、不動而變、無爲而成」。

- (13) 積行乃證 「積行」の語は、たとえば『詩經』召南鵲巢序に「國君積行累功、以致爵位」と見えるが、『法華經』提婆達多品(T9・35b)に「くぎのようにあるのを参照すべきである。」「智積菩薩言、我見釋迦如來、於無量劫、難行苦行、積功累德、求菩提道、未曾止息、……然後乃得成菩提道。」「證」は證悟の意。『大乘義證』卷一(T44・483b)に「亡情契實、名之爲證」。

- (14) 守本則事靜而理均 『莊子』天道「極物之眞、能守其本、故外天地遺萬物、其神未嘗有所困也。」「事」は個別的な事象、「理」は普遍的な眞理、理法。

- (15) 違宗 支遁「大小品對比要抄序」(『出三藏記集』卷八、T55・56b)「希邈常流、徒尚名賓、而竭其才思、玄格聖言、趣悅群情、而乖本違宗、豈相望乎大品也哉」。

- (16) 理均則始終若一 『荀子』禮論「終始如一、是君子之道、禮義之文也」。

- (17) 教僞則無所不爲 『莊子』知北遊に「夫知者不言、言者不知、故聖人行不言之教、道不可致、德不可至、仁可爲也、義可虧也、

禮相僞也、故曰、失道而後德、失德而後仁、失仁而後義、失義而後禮、禮者道之華而亂之首也、故曰、爲道者日損、損之又損之、以至於無爲、無爲而無不爲也」とあるのを参照。「故曰：……」は、『老子』三十八章および四十八章からの引用。

- (18) 老子五千文 『史記』卷六三老子列傳「見周之衰、乃遂去至闕、關令尹喜曰、子將隱矣、彊爲我著書、於是老子乃著書上下篇、言道徳之意五千餘言而去、莫知其所終。」「抱朴子」釋滯「五千文雖出老子、然皆泛論較略耳」。

- (19) 辭義 皇甫謐「三都賦序」(『文選』卷四五)「遺文炳然、辭義可觀。」「文心雕龍」附會「夫才量學文、宜正體製、必以情志爲神明、事義爲骨髓、辭采爲肌膚、宮商爲聲氣」。

- (20) 立身治國君民之道富焉 明僧紹「正二教論」(『弘明集』卷六、T52・38b)にも、「老子之教、蓋修身治國、絕棄貴尚」という。たとえば『老子』五十七章に、「以正治國、以奇用兵、以無事取天下、……故聖人云、我無爲而民自化、我好靜而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自樸」とある。「立身」の語は、『孝經』開宗明義章「立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。また「君民」の語は、『左傳』襄公二十五年「君民者豈以陵民、社稷是主、臣君者豈爲其口實、社稷是養」。

- (21) 符書厭詛之方 『後漢書』紀七桓帝紀延熹九年「沛國戴異得黃金印、無文字、遂與廣陵人龍尚等共祭井、作符書、稱太上皇、伏誅。」「抱朴子」登涉「遁甲中經曰、欲求道、以天內日天內時、効鬼魅、施符書、以天禽日天禽時。」「顏氏家訓」治家「吾家巫

願禱請、絶於言議、符書章醮、亦無祈焉」。本論七「觀音侍道」章に引用する『蜀記』にも、「張陵避瘴丘社中、得呪鬼之術、自造符書、以誑百姓」とある。「厭詛」と熟した語の使用例は未見。下記を参照。『後漢書』傳五五清河孝王慶傳「後於掖庭門邀遮得貴人書、云病思生菟、令家求之、因誣言欲作蠱道呪詛、以菟爲厭勝之術」、『宋書』卷七九盧江王禧傳「公在江州、得一漢女、云知吉凶、能行厭呪、大設供養、朝夕拜伏、衣裝嚴整、敬事如神、令其祝詛孝武、并及崇憲」。

(22) 怪力背哀之術 『論語』述而「子不語怪力亂神」、王肅注「怪、怪異也、力、謂若冪蠱舟鳥獲舉千鈞之屬也」。「背哀」についてはまったく手がかりがない。何かの誤りではあるまいか。

(23) 邪正 『漢書』卷三六劉向傳「今賢不肖渾殽、白黑不分、邪正雜糅、忠讒並進」。

(24) 大道 『老子』十八章「大道廢、有仁義、智慧出、有大偽」。同三十四章「大道汎兮其可左右」。

(25) 虛寂 朱昭之「難顧道士夷夏論」(『弘明集』卷七、T52・43)「夫聖道虛寂、故能圓應無方、以其無方之應、故應無不適」。昭明太子「令旨解法身義」(『廣弘明集』卷一一、T52・250b)「法身虛寂、遠離有無之境、獨脫因果之外、不可以智知、不可以識識」。

(26) 後人背本 班固「答賓戲」(『文選』卷四五)「用納乎聖德、烈炳乎後人」。『左傳』哀公七年「景伯曰、吳將亡矣、棄天而背本、不與必棄疾於我」。

(27) 妄生穿鑿 『漢書』卷七十二王吉傳「今俗吏所以牧民者、非有禮義科指可世世通行者也、獨設刑法以守之、其欲治者、不知所繇、以意穿鑿、各取一切、權譎自在、故一變之後不可復修也」。『後漢書』傳三四徐防傳「今不依章句、妄生穿鑿、以違師爲非義、意說爲得理、輕侮道術、寢以成俗」。

(28) 方術 『後漢書』傳七二方術傳序「漢自武帝頗好方術、天下懷協道藝之士、莫不負策抵掌、順風而屈焉」。その前段に、さまざまの「方術」が具體的に列擧されている。

(29) 昇仙 『抱朴子』金丹「長生之道、不在祭祀事鬼神也、不在道引與屈伸也、昇仙之要在神丹也、知之不易、爲之實難也、子能作之、可長存也」。

(30) 誑惑 『後漢書』傳六一皇甫嵩傳「……(張)角因遣弟子八人使於四方、以善道教化、天下轉相誑惑、十餘年間、衆徒數十萬、連結郡國」。

(31) 儉潤目下 「儉潤」の語は未見。「目下」の語の使用例は多いが、たとえば『三國志』卷一四魏志程昱傳に、「大臣恥與分勢、含忍而不言、小人畏其鋒芒、鬱結而無告、至使尹模公于目下肆其奸惡、罪惡之著、行路皆知、纖惡之過、積年不聞」。

(32) 徐福欺妄、分國於夷丹 『史記』卷六秦始皇本紀「齊人徐市等上書言、海中有三神山、名曰蓬萊方丈瀛洲、僊人居之、請得齋戒與童男女求之、於是遣徐市發童男女數千人、入海求僊人」。徐市は徐福と同じ。同じことが同卷一一八淮南王傳の伍被の言葉にはつぎのように見える。「……又使徐福入海求神異物、還

爲僞辭曰、臣見海中大神、言曰、汝西皇之使邪、臣答曰、然、汝何求、曰、願請延年益壽藥、神曰、汝秦王之禮薄、得觀而不得取、即從臣東南至蓬萊山、見芝成宮闕、有使者、銅色而龍形、光上照天、於是臣再拜問曰、宜何資以獻、海神曰、以令名男子、若振女、與百工之事、即得之矣、秦皇帝大說、遣振男女三千人、資之五穀種種百工而行、徐福得平原廣澤、止王不來。また『後漢書』傳七五東夷傳にいう。「又有夷洲及澶洲、傳言秦始皇遣方士徐福將童男女數千人入海、求蓬萊神仙不得、徐福畏誅不敢還、遂止此洲、世世相承、有數萬家、人民時至會稽市」。「夷丹」はこの夷洲と澶洲を指すのである。「欺妄」の語は、『宋書』卷七四臧質傳「作牧漢南、公盜府蓄、矯易文簿、專行欺妄」、曹思文「難范中書神滅論」(『弘明集』卷九、T52・58b)「既其欺天矣、又其欺人也、斯是人之教、教以欺妄也、設欺妄以立教者、復何達孝子之心、厲嫌薄之意哉」。「分國」の語は、『周禮』夏官量人「掌建國之法、以分國爲九州」。

(33) 文成五利、妖僞於漢世 漢の武帝時代の文成將軍少翁と五利將軍樂大のこと。『史記』卷二八封禪書「齊人少翁、以鬼神方見上、上有所幸王夫人、夫人卒、少翁以方蓋夜致王夫人及寵鬼之貌云、天子自惟中望見焉、於是乃拜少翁爲文成將軍、賞賜甚多、以客禮禮之……」。同「樂大、膠東宮人、故嘗與文成將軍同師、已而爲膠東王尙方、……康后聞文成已死、而欲自媚於上、乃遣樂大、因樂成侯求見言方、天子既誅文成、後悔其蚤死、措其方不盡、及見樂大、大說、……於是上使驗小方鬬菜、其自相

觸擊、是時上方憂河決、而黃金不就、乃拜大爲五利將軍」。妖僞」の語は、『續漢書』百官志五注應劭「漢官」「張角懷挾妖、僞遐邇搖蕩、八州并發、煙炎絳天、牧守梟裂、流血成川」。

(34) 三張詭惑於西梁 『魏書』卷一一四釋老志「太上老君謂(惑)謙之曰、……汝宣吾新科、清整道教、除去三張僞法租米錢稅及男女合氣之術」。本論七「觀音侍道」章にあるように、天師張道陵(張陵)、係師張衡、嗣師張魯の三代を「三張」とよぶ。「詭惑」の語は、潘岳「西征賦」(『文選』卷一〇)「履犬戎之侵地、疾幽后之詭惑」。「西梁」は『尚書』禹貢に「華陽黑水、惟梁州」とあり、揚雄「益州箴」(『藝文類聚』卷六〇)に「巖巖岷山、古曰梁州、華陽西極、黑水南流」というところの梁州のこと。

(35) 孫恩搔擾於東越 孫恩の傳は『晉書』卷一〇〇に備わる。「搔擾」の語は、『漢書』敘傳「十餘年間、外內騷擾、遠近俱發、假號雲合、咸稱劉氏、不謀而同辭」。「東越」の語は、江淹「詣建平王上書」(『文選』卷三九)「子陵閉關於東越、仲蔚杜門於西秦」。

(36) 巨蠹 『後漢書』傳二三虞延傳「爾人之巨蠹、久依城社、不畏熏燒」。「南齊書」卷三四虞玩之傳「皆政之巨蠹、教之深疵」。

(37) 匡政 『漢書』卷二七五行志中之下「如靈王覺寤、匡其失政、懼以承戒、則災禍除矣」。「後漢書」傳六九上儒林戴憑傳「帝謂憑曰、侍中當匡補國政、勿有隱情」。

(38) 邪僻 『韓非子』解老「人有福則富貴至、富貴至則衣食美、

衣食美則驕心生、驕心生則行邪僻。而動棄理、行邪僻則身死天、動棄理則無成功。『史記』卷一一八淮南衡山列傳論贊「不務遠蕃臣職、以承輔天子、而專挾邪僻之計、謀爲畔逆」。

- (39) 導民 『禮記』月令「以教道民、必躬親之」、釋文「道音導」。
『論衡』語增「外出戒慎之教、內飲酒盡千鍾、導民率下、何以致化」。

- (40) 書典 『後漢書』傳四九張衡傳「陽嘉元年、復造候風地動儀、……驗之以事、合契若神、自書典所記、未之有也」。

- (41) 卷卷 『抱朴子』遐覽「鄭君」語余曰、雜道書卷卷有佳事、但當校其精粗而擇所施行、不事盡誦誦以妨日月而勞意思耳」。

- (42) 理義 『孟子』告子上「故理義之悅我心、猶芻豢之悅我口」。
『管子』形勢解「明主之動靜得理義、號令順民心、誅殺當其罪、賞賜當其功、故雖不用犧牲珪璧禱於鬼神、鬼神助之、天地與之、舉事而有福」。

- (43) 首尾无取 『漢書』卷三〇藝文志「形法者、……然形與氣相首尾、亦有有其形而無其氣、有其氣而無其形、此精微之獨異也」。
『南齊書』卷三五武陵昭王暉傳「……但康樂放蕩、作體不辨有首尾」。任昉「爲范尚書讓吏部封侯第一表」(『文選』卷三八)「臣素門凡流、輪翮無取、進謝中庸、退慙狂狷」。

- (44) 昔行父之爲人也…… 『左傳』文公十八年「莒紀公生大子僕、又生季佗、愛季佗而黜僕、且多行無禮於國、僕因國人以弑紀公、以其寶玉來奔、納諸宣公、宣公命與之邑、曰、今日必授、季文子使司寇出諸竟、曰、今日必違、公問其故、季文子使太史克對、

曰、先大夫臧文仲教行父事君之禮、行父奉以周旋、弗敢失墜、曰、見有禮於其君者、事之如孝子之養父母也、見無禮於其君者、誅之如鷹鷂之逐鳥雀也……」。

- (45) 宣尼云…… 「故上下能相親也」まで、そのまま『孝經』事君章の言葉。「進思盡忠」の注に「進見於君、則思盡忠節」、「退思補過」の注に「君有過失、則思補益」、「將順其美」の注に「將、行也、君有美善、則順而行之」、「匡救其惡」の注に「匡、正也、救、止也、君有過惡、則正而止之」、とある。「宣尼」は孔子のこと。「漢書」卷一二平帝紀元始元年「追諡孔子曰褒成宣尼公」。

- (46) 春秋傳曰…… 『左傳』昭公二十年「君所謂可而有否焉、臣獻其否、以成其可、君所謂否而有可焉、臣獻其可、以去其否」。
(47) 臣亦何人 『孟子』滕文公上「顏淵曰、舜何人也、予何人也、有爲者亦若是」。

- (48) 奉敕降問 任昉「奉答敕示七夕詩啓」(『文選』卷三九)「臣防啓、奉敕、并賜示七夕五韻」。「降問」と熟した使用例未見。下記を参照。袁曜「釋奠詩」(『初學記』卷一四禮部釋奠)「卑躬下問、降禮師臣」。

- (49) 敢不實答 『南齊書』卷三七劉俊傳「進不遠怨前代、退不孤負聖明、敢不以實仰答」。

- (50) 儒林之宗 『太子瑞應本起經』卷上(13・43b)「及其變化、隨時而現、或爲聖帝、或作儒林之宗、國師道士、在所現化、不可稱記」。
『史記』卷一三〇太史公自序「自孔子卒、京師莫崇庠

序、唯建元元狩之間、文辭繁如也、作儒林列傳第六十一」。

(51) 紕繆 『禮記』大傳「聖人南面而聽天下、所且先者五、民不與焉、……五者一物紕繆、民莫得其死」、鄭玄注「紕繆猶錯也」。

(52) 兩端 『論語』子罕「子曰、吾有知乎哉、無知也、有鄙夫問於我、空空如也、我叩其兩端而竭焉」。「禮記」中庸「子曰、舜其大知也與、舜好問而好察迥言、隱惡而揚善、執其兩端、用其中於民、其斯以爲舜乎」、鄭玄注「兩端、過與不及也」。

(53) 刪定 『漢書』卷二「刑法志」「豈宜惟思所以清原本本之論、刪定律令、纂二百章、以應大辟」。

(54) 秦五千文曰……不笑不名爲道 『老子』四十一章の言葉。ただし最後の一句は、「不笑不足以爲道」。

(55) 輒率下士之見 『魏書』卷四「源賀傳」「使大有之經不通、開生之路致壅、進違古典、退乖今律、輒率愚見、以爲宜停」。

(56) 三洞、三十六部 『道門經法相承次序』卷上 (D762, S41. 3324) 「原夫道家由肇、起自無先、垂跡應感、生乎妙一、從乎妙一、分爲三元、又從三元、變成三氣、又從三氣、變生三才、三才既立、萬物斯備、其三元者、第一混洞太无元、第二赤混太无元、第三冥寂玄通元、從混洞太无元化生天寶君、從赤混太无元化生靈寶君、從冥寂玄通元化生神寶君、大洞迹別、出爲化主、治在三清境、其三清境者、玉清上清太清是也、亦名三天、其三天者、清微天禹餘天大赤天是也、天寶君治在玉清境、即清微天也、其氣青始、靈寶君治在上清境、即禹餘天也、其氣白元、神寶君治在太清境、即大赤天也、其氣黃玄、故九天生神章經云、此三

號年殊號異、本同一也、此三君各爲教主、即是三洞之尊神也、其三洞者、謂洞真洞玄洞神是也、天寶君說十二部經、爲洞真教主、靈寶君說十二部經、爲洞玄教主、神寶君說十二部經、爲洞神教主、三洞合成三十六部尊經、第一洞真爲大乘、第二洞玄爲中乘、第三洞神爲小乘、從三洞總成七部者、洞真洞玄洞神太玄太平太清爲輔經、太玄輔洞真、太平輔洞玄、太清輔洞神、三輔合成三十六部、正一盟威通貫、總成七部、故曰三洞尊文、七部玄教、又從七部汎開三十六部、其三十六部者、第一本文、第二神符、第三玉訣、第四靈圖、第五譜錄、第六誠律、第七威儀、第八方法、第九衆述、第十傳記、第十一讚誦、第十二表奏、三洞各有十二部、三洞合成三十六部」。

(57) 戰汗上呈 『神仙傳』張道陵傳「陵謂諸弟子曰、有人能得此桃實、當告以道要、于時伏而窺之者二百餘人、股戰流汗、無敢久臨視之者」。「宋書」卷五五傳隆傳「不敢廢默、謹率管穴所見五十二事上呈」。

(58) 心魂失守 江淹「雜體詩」三十首左記室 (『文選』卷三) 「百年信在苒、何用苦心魂」。「周易」繫辭下傳「失其守者、其辭屈」、正義「居不值時、失其所守之志、故其辭屈、不能申也」。「南齊書」卷二「豫章文獻王傳」「俛仰祗寵、心魂如失」。「真誥」卷一〇「協昌期」第二 (D638, S34. 27496) 「六尸亂則藏血擾潰飛越、三魂失守、神彫氣逝、積以致死」。

(59) 造立 『宋書』卷五七蔡興宗傳「先是大明世、奢侈無度、多所造立、賦調煩嚴、徵役過苦」。「魏書」卷一一四釋老志「任城

王澄奏曰、……故世宗仰修先志、爰發明旨、城內不造。立浮圖僧尼寺舍、亦欲絕其希覬。

(60) 太上道君造立天地初記 この書物の性格と内容に關しては、

楠山春樹『老子傳説の研究』（創文社、一九七九）後篇第五章「青羊肆説話の検討」、参照。

(61) 老子以周幽王德衰、欲西度關 『史記』卷六三老子列傳「見

周之衰、乃遂去至關」。『列仙傳』老子傳「後周德衰、乃乘青牛車去、入大秦、過西關」。『神仙傳』老子傳「或云、老子欲西度關」。なお周幽王時出關説に關しては、楠山前掲書後篇第三章「老君傳とその年代」、ことにその三七八頁を見よ。また老子が越えた關所の比定について、『混元聖紀』卷三（DS51, S30・23750）にこぎのような議論がある。「出塞記云、西度函谷、李尤函關銘云、尹喜邀老君、留作二篇而藏之、玄靜云、西出隴關、崔浩云、喜爲散關長、秦圖經載散關傍有尹喜城、亦疑周康王時喜嘗爲散關長、蓋以史傳但言度關、不言所度之處、故後賢各以意言、亦猶巢許飲犢之處、非止一處、夷齊首陽之山、不知所定也」。

(62) 青羊肝 『抱朴子』對俗「案玉策記及昌字經、不但此二物

（龜鶴）之壽也、云千歲松樹、四邊枝起、上杪不長、望而視之、有如偃蓋、其中有物、或如青牛、或如青羊、或如青犬、或如青人、皆壽千歲」。『搜神記』（二十卷本）卷一二「淮南萬畢曰、千歲羊肝、化爲地宰、蟾蜍得菰、卒時爲鵠」。

(63) 乃生皇后腹中 本論三十六「諸子爲道書」章にもいう。「又

造天地經、老子託幽王皇后腹、即幽王之子也」。

(64) 頭髮皓首 『魏書』卷一九中任城王澄傳「高祖曰、朕昨夜夢

一老公、頭髮皓白、正理冠服、拜立路左……」。李陵「答蘇武書」（『文選』卷四一）「丁年奉使、皓首而歸」、李善注「漢書曰、武留匈奴凡十九歲、始以強壯出、及還、鬢髮並白」。老子が生まれながらにして白髪であつたこと、本論五「明五佛並興」章にも「化生李氏之胎、八十二年、剖左腋、生而白首」といふほか、『神仙傳』卷一「老子……生而白首、故謂之老子」、薛道衡「老子碑」（『文苑英華』卷八四八）「含靈在孕、七十餘年、生而白首、因以老子爲號」、杜光庭『道德眞經廣聖義』卷二（D440, S24・18864）「序訣云、……夫託神李母、剖左腋而生、生即皓然、號曰老子」、等。

(65) 身長丈六 牟子「理惑論」（『弘明集』卷一、T52・1c）「太子

有三十二相八十種好、身長丈六、體皆金色」。『後漢紀』卷一〇永明十三年「佛身長一丈六尺」。『佛説十二遊經』（T4・146c）「調達身長丈五四寸、佛身長丈六尺、難陀身長丈五四寸、阿難身長丈五寸三寸」。

(66) 天冠 『三洞珠囊』卷八「相好品」（D782, S42・33876）「老

子七十二相八十一好者、老子有九變、……第三變身長八尺八寸、通天冠、服五綵之衣」。『太清中黃眞經』卷下（D568, S31・24496）「九炁眞仙衣錦衣、綃縠雲裳蟬帶垂、天冠搖響韻參差、九文花履錦星奇」。後文は「雲笈七籤」卷一三にも引用されている。また、『三禮圖』（『太平御覽』卷六八五服章部通天冠）

『通天冠。一曰高山冠、上之所服。』

- (67) 金杖 『龜山玄籙』卷上 (D1047, S56・45747) 「冬三月、

三天玉童則化形爲老翁、頭建三角黃巾、衣黃錦之裘、手把九節金杖、坐五色雲上、光明洞耀玉清之中、思之還反眞形。』『搜神記』(二十卷本)卷一「魯少千者、山陽人也、漢文帝嘗微服懷金過之、欲問其道、少千挂金杖、執象牙扇、出應門。」

- (68) 化胡 『高僧傳』卷一帛遠傳 (T50・327b)「昔(法)祖平

素之日、與(王)浮每爭邪正、浮屢屈、既腹不自忍、乃作老子化胡經、以誣謗佛法。劉勰「滅惑論」(『弘明集』卷八、T52・50c)「三破論曰、……胡人無二、剛強無禮、不異禽獸、不信虛無、老子入關、故作形像之教化之。」

- (69) 隱首陽山 『史記』卷六一伯夷列傳「武王已平殷亂、天下宗

周、而伯夷叔齊恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之。」

- (70) 紫雲 『道德真經廣聖義』卷三 (D440, S24・18876)「仙公

序曰、尹喜宿命合道、預占見紫雲西邁、知有聖人當度。』『太上洞玄靈寶救苦妙經』(D181, S10・7917)「空中何灼灼、名曰泥丸仙、紫雲覆黃老、是名三寶君。」

- (71) 疑妖 『搜神記』(二十卷本)卷一八「使曰、張司空有一年

少來調、多才巧辭、疑是妖魅、使我取華表照之。法琳「辯正論」卷五「佛道先後篇」(T52・522b)「化胡經云、闕賓國王疑老子妖魅、以火焚之、安然不死、王知神人、舉國悔過。」

- (72) 鑊煮 『三國志』卷六魏志董卓傳「卓豫施帳幔飲、誘降北地

反者數百人、於坐中先斷其舌、或斬手足、或鑿眼、或鑊煮之。」

『搜神記』(二十卷本)卷一一「客曰、此乃勇士頭也、當於湯鑊煮之、王如其言、煮頭三日三夕、不爛。』『太上洞玄靈寶往生

救苦妙經』(D181, S10・7911)「天尊告曰、善男子善女人等、我嘗歷觀諸天、及遊於地獄之中、見有受罪衆生、項負大枷、臂掛雙杻、……鑊湯煎煮、銅柱逼身。」

- (73) 老君大瞋、考煞胡王七子及國人一分 本論二十四「害親求

道」章にもつぎのようにある。「又造立天地記云、老子化胡、胡王不伏、老子打煞胡王七子國人一分。」「考煞」の語は、『三國志』卷六魏志劉表傳「(韓)嵩還、深陳太祖威德、說表遣子入質、表疑嵩反爲太祖說、大怒、欲殺嵩、考殺隨高行者、知嵩無他意、乃止。」「一分」の語は、『史記』卷七四騶衍列傳「以爲儒者所謂中國者、於天下乃八十一分居其一分耳。」「高僧傳」卷一四唱導篇論 (T50・418a)「其有一分可稱、故編高僧之末。」

- (74) 受化 丘遲「與陳伯之書」(『文選』卷四三)「夜郎滇池、解辦請職、朝鮮昌海、蹶角受化。』また次注に引く『三洞珠囊』を見よ。

- (75) 髡頭不妻 『三洞珠囊』卷九「老子化西胡品」(D782, S42・

33894)「鬼谷先生撰文始先生无上真人關令內傳云、……王曰、今以舉國男女、一世不娶妻、髡鬻鬚髮、以爲盟誓。同(S42・33896)「老子化胡經云、……王曰、我國中大小男女、終身不娶妻、當侍師至死、求免我罪、於是召三十六國胡子、向老子前、皆當(?)髡頭剃鬚、自毀形容、橫裙衣、露右臂、與天爲信、

引地爲誓、叉手合掌、不敢移易、老子見胡受化、乃與作六十四萬言經无上正眞之道。劉勰『滅惑論』(『弘明集』卷八、T52・50c)「三破論云、……老子云、化其始不欲傷其形、故髡其頭、名爲浮屠、況屠割也。同「又云、胡人龜璣、欲斷其惡種、故令男不娶妻、女不嫁夫、一國伏法、自然滅盡」。

- (76) 二百五十戒 前注『三洞珠囊』引用の『關令內傳』(S42・3389a)には、「老子曰、……若王居國學道、但奉五戒十善、自足致福、去却不詳、……老子復爲造九萬品經戒、今日就誦之」とある。なお牟子『理惑論』(『弘明集』卷一、T52・2a)に、「沙門持二百五十戒、日日齋」。

- (77) 作吾形 三本、宮本に従って「作我形像」と改める。「形像」の語は、注(68)の劉勰『滅惑論』に見える。

- (78) 香火禮拜 『眞誥』卷八「甄命授」第四(D638, S34・27396)「(劉)遵勸心香火、有情向藥」。『周氏冥通記』卷一(D152, S9・6793)「至日晡後、便起云、時至矣、即束帶燒香、往師經堂中、遍禮道衆、徑出還所住解」、朱注「住解住屋、唯有三間、住東一間、西二間亦安兩高坐、並有香火也」。『眞誥』卷一〇「翼眞檢」第二(D640, S34・27510)「耆老傳云、掾乃在北洞北石壇上、燒香禮拜、因伏而不起」。『高僧傳』卷三法顯傳(T50・337c~338a)「顯獨留山中、燒香禮拜、翹感舊跡、如覩聖儀」。

- (79) 老子還變形…… 本論十八「老子作佛」章にも、「又造天地經云、西化胡王、老子變形而去、左目爲日、右目爲月」とある。

類いの發想は下記を參照。『釋史』卷一「五運歷年記、……首生盤古、垂死化身、氣成風雲、聲爲雷霆、左眼爲日、右眼爲月、四肢五體爲四極五嶽、血液爲江河、筋脈爲地理、肌肉爲田土、髮髭爲星辰、皮毛爲草木、齒骨爲金石、精髓爲珠玉、汗流爲雨澤、身之諸蟲、因風所感、化爲黎甦」。任昉『述異記』卷上

「昔盤古氏之死也、頭爲四岳、目爲日月、脂膏爲江海、毛髮爲草木、秦漢間俗說、盤古頭爲東岳、腹爲中岳、左臂爲南岳、右臂爲北岳、足爲西岳、先儒說、盤古泣爲江河、氣爲風、聲爲雷、目瞳爲電、古說、盤古氏喜爲晴、怒爲陰、吳楚間說、盤古氏夫妻、陰陽之始也」。『太上老君內觀經』(D342, S19・14794)「老君曰、諦觀此身、從虛無中來、因緣運會、積精聚炁、乘華降神、和合受生、法天像地、含陰吐陽、分錯五行、以應四時、眼爲日月、髮爲星辰、眉爲華蓋、頭爲崑崙、布列宮闕、安置精神」。なお、アンリ・マスプロ、川勝義雄譯『道教』(平凡社東洋文庫、一九七八)、一六六―一七頁、參照。

- (80) 頭爲崑崙 『雲笈七籤』卷一一「三洞經教部」に引く『太上黃庭外景經』務成子註につきのようにある。「子欲不死修崑崙」、註「頭爲崑崙、道治其中……」。同「崑崙之上不迷誤」、註「崑崙、頭也、上與天通、稟受元氣不迷誤」。「崑崙」の語は、禰衡「鸚鵡賦」(『文選』卷一三)「想崑崙之高嶽、思鄧林之扶疏」。
- (81) 華蓋 張衡『西京賦』(『文選』卷二)「華蓋承辰、天畢前驅」、薛綜注「華蓋星覆北斗、王者法而作之」、李善注「劉歆遂初賦曰、奉華蓋於帝側」。『黃庭內景玉經註』卷上「肺部章」第九

(D190, S11・8273)「肺部之宮似華蓋」註「金宮也、肺在五臟之上、西垂爲字也」。同「心神章」第八(8275)「肺神皓華字虛成」註「肺爲心之華蓋……」。

(82) 兩腎合爲眞要父母 『雲笈七籤』卷一二「三洞經教部」に引く『太上黃庭外景經』務成子註に、「五藏之主腎最精」、註「腎之爲氣清且香、右爲王母、左爲王公、左青龍、右白虎、與天通」。『無上祕要』卷五「人品」(D768, S41・3337)「天尊言曰、炁炁相續、種種生緣、善惡禍福、各有命根、非天非地、亦又非人、正由心也、心則神也、形非我有、我所以得生者、從虛无自然中來、因緣寄胎、受化而生、我受胎父母、亦非我始生父母也、眞父母不在、此父母貴重、尊高无上、今所生父母、是我寄備因緣、稟受育養之恩、故以禮報、而稱爲父母焉、故我受形、亦非我形也、寄之爲屋宅、因之爲營室、以舍我也、附之以爲形、示之以有无、故得道者、无復有形也、及我无身、我有何患、我所以有患者、爲我有身、有身則百惡生、无身則入自然、立行合道、則身神一也、身神並一、則爲眞身、歸於始生父母而成道也、右出洞玄諸天內音經」。「眞要」の語は、『太平經』卷三七(王明『太平經合校』、中華書局、一九六〇、五五頁)「其後世學人之師、皆多絕匿其眞要道之文、以浮華傳學、違失天道之要意」、同卷九七(四三〇頁)「夫天以要眞道生物、乃下及六畜禽獸、夫四時五行、乃天地之眞要道也、天地之神寶也、天地之藏氣也」、『眞誥』卷六「甄命授」第二(D638, S34・27380)「又頃者末學互相擾競、多用混成及黃書赤界之法、此誠有生和合二

象匹對之眞要也」。

(83) 漢書云……『漢書』卷三四盧綰傳「封爲長安侯、長安、故咸陽也」。同卷一高帝紀下「五年、……戊卒婁敬求見、說上曰、陛下取天下與周異、而都雒陽、不便、不如入關據秦之固、上以問張良、良因勸上、是日、車駕西都長安、拜婁敬爲奉春君、賜姓劉氏」。また同卷四三婁敬傳。ただし、「朕當長安於此」という高祖の言葉はそこに見あたらない。『三輔黃圖』序に「漢高祖有天下、始都長安、實曰西京、欲其子孫長安都於此也」とあり、また班固「西都賦」(『文選』卷一)「漢之西都、在於雍州、寔曰長安」の六臣註に、「濟曰、漢稱長安、言可長安子孫也」とあるのを参照。

(84) 預知 『三洞珠囊』卷九「老子化西胡品」(D782, S42・3389)「老子化胡經云、……關令尹喜、好道術內學、仰知天文、下知地理、預知道當西行、夙夜觀象」。

(85) 三天正法混沌經云……『太上三天正法經』(D876, S47・38029)に「つぎのようにある。」「九天眞王與元始天王、俱生始炁之先、天光未朗、鬱積未澄、溟滓無涯、混沌太虛、浩汗流冥、七千餘劫、玄景始分、九炁存焉、一炁相去九萬九千九百九十歲、清炁高澄、濁混下布、九天眞王元始天王、稟自然之胤、置於九天之號、九炁玄凝、成於九天圖也、日月星辰、於是而明、便有九眞之帝」。

(86) 清氣爲天、濁氣爲地 『淮南子』天文訓「天墜未形、馮馮翼翼、洞洞瀾瀾、故曰太始、太始生虛霩、虛霩生宇宙、宇宙生元

氣、元氣有涯垠、清陽者薄靡而爲天、重濁者凝滯而爲地。

- (87) 七曜萬像之形 范寧「穀梁傳序」「七曜爲之盈縮」、疏「日月五星皆照天下、故謂之七曜」。孫綽「遊天台山賦」(『文選』卷一一)「渾萬象以冥觀、兀同體於自然」、李善注「孝經鉤命決曰、地以舒形、萬象咸載」。

- (88) 其來久矣 沈約「齊故安陸昭王碑文」(『文選』卷五九)「失義犬羊、其來久矣」。

- (89) 天地未生萬物 『周易』咸象傳「天地感而萬物化生」。同序卦傳「有天地然後萬物生焉、盈天地之間者唯萬物」。

- (90) 云何道經有三皇五帝三王乎 たとは『太上老君開天經』(D1059, S57・46402) にあるような一文がある。「老君曰、秘化之初、吾體虛無、經歷無窮、千變萬化、先下爲師、三皇已前、爲神化之本、吾後化三皇五帝爲師、并及三王、皆勸令修善」。これは『雲笈七籤』卷二「混元洞開闢劫運部」にも引かれている。なお「道經」の語は、顧歡「夷夏論」(『南齊書』卷五四高逸傳)「佛經繁而顯、道經簡而幽、幽則妙門難見、顯則正路易遵、……案道經之作、著自西周、佛經之來、始乎東漢」(『眞誥』卷六「甄命授」第二(D638, S34・27382))「人之爲道、讀道經行道事者、譬若食蜜、遍口皆甜、六腑皆美、而有餘味、能行如此者得道矣」、『隋書』卷三五經籍志「道經者、云有元始天尊、生於太元之先、稟自然之氣、冲虛凝遠、莫知其極、所以說天地淪壞、劫數終盡、略與佛經同」。

- (91) 崑崙山高四千八百里 道宣の『釋迦方志』卷上「統攝篇」

(T51・919c) に、「道經造立天地記云、崑崙山高四千八百里」の引用がある。

- (92) 上有玉京山大羅山 『無上祕要』卷四「靈山品」(D768, S41・33372)「靈寶玄都玉京山處於上天之中心、右出洞玄玉訣經」。「道門經法相承次序」卷上(D768, S41・33125)「最上一天、名曰大羅天、在玄都玉京山上、紫微金闕、七寶鸞樹、麒麟師子、化生其中」。「雲笈七籤」卷二「天地部」三界寶錄「大洞隱注經云、崑崙山上接九氣、以爲璇璣之輪、在太空之中、中斗既在崑崙山上、即大羅天闕亦在玉京山上也」。また本論十「崑崙飛浮」章に、「度人妙經云、五億重天之上、大羅之天、有玉京山、災所不及」。

- (93) 廣說品云…… 「廣說品」は本論五「明五佛並興」章にも引用されているが、いかなる書物か未詳。天地間の距離に關して、本論九「日月周匝」章では「文始傳云、天去地四十萬九千里」、また「依濟苦經云、天地相去萬萬五千里」とある。その距離數はもとより諸説あつて一定せず、たとえば「洞玄靈寶本相運度劫期經」(D165, S9・7283)には「天地相去一億五萬里」(これは「詩含神霧」の數字による)、『太上洞玄靈寶天關經』(D618, S33・26586)には「天地相去四萬八千里」とあることについて。

- (94) 紫微宮在五億重天之上 「紫微宮」に關しては注(92)に引用の『道門經法相承次序』を参照のほか、『靈寶无量度人上品妙經』卷一(D1, S1・7)「道言、此一章……上天所寶、祕於

玄都紫微上宮。また『度人妙經四注』卷二(D38.S3.1667)「上品妙首、十迴度人」の嚴東の注につきのよういう。「東曰、上品者、元炁始凝、結青黃白三炁、置上元三宮、其第一宮名玄都元陽七寶紫微宮、始陽之炁、總主上真自然玉虛高皇上帝諸天帝王上聖大神、其宮皆五億五萬五千五百五十五萬重青陽之炁、其中官寮亦有五億五萬五千五百五十五萬衆、皆結自然青陽之炁而爲人也」。この嚴東の説は本論三「元爲天人」章に引用の「太上三元品」と一致する。なお「五億重天」に關しては、本論三十二「五億重天」章に詳しい。

- (95) 肝爲青帝宮、脾爲紫微宮 『黃庭內景玉經註』卷中「常念章」第二十二(D190.S11.8288)「六府修治勿令故」の註にはつぎのようであつて、この對應と一致しない。「案洞神經云、六府者、謂肺爲玉堂宮尙書府、心爲絳宮元陽府、肝爲清冷宮蘭臺府、膽爲紫微宮無極府、腎爲幽昌宮大和府、脾爲中黃宮太素府」。なお「青帝宮」の語は、『雲笈七籤』卷二二「三洞經教部」推誦黃庭內景經法に「……師得此信、速錄上學弟子郡縣鄉里姓名年紀生月日時於九尺青繪之上、正中於山岳絕巖之側、北向奏名青帝宮」。また「青帝」と「肝」との對應は、『太平經』卷一一三(王明『太平經合校』五八七頁)「是故樂而得大角上角之音者、青帝大喜、則仁道德出、凡物樂生、青帝出遊、肝氣爲其無病」。

- (96) 倒豎 『搜神記』(二十卷本)卷六「正殿側有槐樹、皆六七圍、自拔倒豎、根上枝下」。『阿毘曇毘婆沙論』卷三六(T28.267c)

「衆生應生地獄者、行時頭下足上、如偈説、墮於地獄者、其身皆倒懸、誹謗於賢聖、及諸淨行故」。

- (97) 顛倒 仲長統「昌言」法誠(『後漢書』傳三九)「顛倒賢愚、貿易選舉」。『注維摩詰經』卷六(T38.386b)「又問虛妄分別孰爲本、答曰、顛倒想爲本。什曰、有無見反於法相、名爲顛倒、先見有無、然後分別好惡、然則有無見是惑累之本、妄想之初、故偏受倒名也」。

- (98) 見亦倒乎 「倒見」は佛語。僧叡「中論序」(『出三藏記集』卷一一、D55.76c)「夫滯惑生於倒見、三界以之而淪溺、偏悟起於厭智、耿介以之而致乖」。

- (99) 開闢 揚雄「劇秦美新」(『文選』卷四八)「開闢以來、未之聞也」。潘岳「西征賦」(『文選』卷一〇)「異哉秦始皇之爲君也、傾天下以厚葬、自開闢而未聞」。李善注「尚書考靈耀曰、天地開闢」。

- (100) 化物 孫綽「喻道論」(『弘明集』卷三、T52.16b)「夫佛也者、體道者也、道也者、導物者也、應感順通、無爲而無不爲者也、無爲故虛寂自然、無不爲故神化萬物」。蕭子良「與中丞孔稚珪釋疑惑」(同卷一一、T52.73a)「君若以德越往賢、聖逾前修、智超群類、位極人貴者、自可逍遙世表、以道化物、高尚其懷、無求自足」。

- (101) 年號差舛 『宋書』卷九三隱逸陶潛傳「自以曾祖晉世宰輔、恥復屈身後代、自高祖王業漸隆、不復肯仕、所著文章、皆題其年月、義熙以前、則書晉氏年號、自永初以來、唯云甲子而已」。

『漢書』卷六武帝紀「建元元年」、顏師古注「自古帝王、未有年號、始起於此」。蔡邕「上漢書十志疏」(『蔡中郎集』外傳)「先治律曆、以籌算爲本、天文爲驗、請太師舊注、考校連年、往往頗有差舛」。『晉書』卷三四杜預傳「預以時曆差舛、不應響應、奏上二元乾度曆、行於世」。

(102) 道德經序云……『道德經序訣』とよばれるもの。大淵忍爾

『道教史の研究』(岡山大學共濟會書籍部、一九六四)第三篇「道教經典史の研究」第三章「老子道德經序訣の成立」に提供された諸本校合のテキストにいう。「太極左仙公葛玄曰、老子以上皇元年正月十二日丙午太歲丁卯、下爲周師、到无極元年太歲癸丑五月壬午、去周、西度關、關令尹喜、宿命合道、豫占見紫雲西邁、知有道人當度、仍齋潔燒香、想見道眞、以其年十二月廿五日、老子度關也」。本論五「明五佛並興」章にも同じくつぎのようにある。「文始傳云、老子以上皇元年、下爲周師、无極元年、乘青牛薄板車、度關、爲尹喜說五千文……」。なお「无極」なる年號は、『老子』二十八章「知其白、守其黑、爲天下式、爲天下式、常德不忒、復歸於無極」にもとづく。

(103) 周師 『漢書』卷三〇藝文志「鬻子二十二篇、名熊、爲周師、自文王以下問焉、周封爲楚祖」。

(104) 古先帝王 『尚書』康誥「別求聞由古先哲王、用康保民」、孔傳「又當別求所聞父兄、用古先智王之道、用其安者以安民」。『莊子』天道「夫帝王之德、以天地爲宗」。

(105) 立年 この話の使用例未見。

(106) 至漢武帝、創起建元 『史記』卷一二孝武本紀「其後三年、

有司言、元宜以天瑞名、不宜以一二數、一元曰建元、二元以長星曰元光、三元以郊得一角獸曰元狩云」。また注(101)参照。

「創起」の語は、柳顧言「天台國清寺智者禪師碑文」(『國清百錄』卷四、T 46・818b)「爰捨淨財、隨申功德、郵傳相望、創起塔廟」。

(107) 後王 『尚書』召誥「天既遐終大邦殷之命、茲殷多先哲王在

天、越厥後王後民、茲服厥命」。『漢書』卷五六董仲舒傳「夫五百年之間、守文之君、當塗之士、欲則先王之法以戴翼其世者甚衆、然猶不能反、日以仆滅、至後王而後止」。

(108) 孟浪 『莊子』齊物論「瞿鴿子問乎長梧子曰、吾聞諸夫子、

聖人不從事於務、不就利、不違害、不喜求、不緣道、無謂有謂有謂無謂、而遊乎塵垢之外、夫子以爲孟浪之言、而我以爲妙道之行也、吾子以爲奚若」、釋文「向云、孟浪、音漫瀾、無所趨舍之謂、李云、猶較略也、崔云、不精要之貌」。左思「吳都賦」(『文選』卷五)「若吾子之所傳、孟浪之遺言、略舉其梗概、而未得其要妙也」、劉逵注「孟浪猶莫略也、不委細之意」。

(109) 文始傳云……『文始傳』が「三洞珠囊」卷九「老子化西胡

咄」(D 782, S 42・33891)に「鬼谷先生撰文始先生无上真人關令內傳」として引かれる書物であること、福井康順「文始內傳考」(『東方學會創立十五周年記念「東方學論集」、一九六二)、参照。ただしこれにあたる文章は『三洞珠囊』には引用されていないが、つとに後漢延熹八年(一六五)の邊韶「老子銘」(『隸

釋』卷三)に「……由是世之好道者、觸類而長之、以老子離合於混沌之氣、與三光爲終始、……道成身化、蟬蛻渡世、自羲農以來、□爲聖者作師」と見え、また『道德經序訣』(前掲大淵忍爾書三四六頁)にも「是教八方諸天、普弘大道、開闢以前、復下爲國師、代代不休」と見える。

(110) 代代爲國師 庚信「周大將軍司馬裔神道碑」(『庚子山集』卷

一三)「地形樓起、松心蓋圓、茫茫丘隴、代代英賢」。『漢書』卷九九中王莽傳「少阿義和京兆尹紅休侯劉歆爲國師嘉新公」。『梁書』卷四一王承傳「俄轉國子祭酒、承祖儉及父陳嘗爲此職、三世爲國師、前代未之有也、當世以爲榮」。また注(50)の「太子瑞應本起經」、參照。

(111) 化胡又云……『三洞珠囊』卷九「老子爲帝師品」(D782、

S42・3390)に引用の『化胡經』に老子が歷代にわたって化現したことを列記し、そのなかに「湯王時、出爲帝師、號曰錫則子、作道元經、……武王時、出爲帝師、號曰郭叔子、復稱續成子、爲柱下史」と見える。楠山春樹『老子傳説の研究』後篇第二章「歷代化現説考」、參照。

(112) 典籍 『左傳』昭公十五年「且昔而高祖孫伯鸞司晉之典籍、以爲大政、故曰籍氏」。

(113) 伊尹 殷の湯王以下、外丙・仲壬・太甲・沃丁の五代に仕えた宰相。『尚書』湯誓序「伊尹相湯伐桀、升自陟、遂與桀戰于鳴條之野、作湯誓」、同伊訓序「成湯既沒、太甲元年、伊尹作伊訓肆命徂后」、同太甲序「太甲既立、不明、伊尹放諸桐、三年、

復歸于亳、思庸、伊尹作太甲三篇」、同咸有一德序「伊尹作咸有一德」、同逸沃丁序「沃丁既葬伊尹于亳、咎單遂訓伊尹事、作沃丁」。また『史記』卷三殷本紀參照。

(114) 傳説 殷の二十二代武丁高宗の宰相。『尚書』說命序「高宗夢得説、使百工營求諸野、得諸傅巖、作說命三篇」。また『史記』卷三殷本紀參照。

(115) 呂望 周の文王・武王に仕えた太公望呂尚のこと。『呂氏春秋』尊師「神農師悉諸、……文王武王師呂望。周公旦、……越王句踐師范蠡大夫種、此十聖人六賢者、未有不尊師者也」。また『史記』卷三三齊太公世家參照。

(116) 康邵 周の召公奭のこと。文王の子。周公旦とともに成王・康王を輔佐した。康は諡。潘昂「册魏公九錫文」(『文選』卷三五)に「其在周成、管蔡不靖、懲難念功、乃使邵康公錫齊太公履……」とあるのも同じ。『尚書』召誥序「成王在豐、欲宅洛邑、使召公先相宅、作召誥」、同洛誥序「召公既相宅、周公往營成周、使來告卜、作洛誥」、同君奭序「召公爲保、周公爲師、相成王爲左右、召公不説、周公作君奭」、同顧命序「成王將崩、命召公畢公、率諸侯相康王、作顧命」。また『史記』卷四周年紀參照。

(117) 傳説 『漢書』卷三〇藝文志「迄孝武世、書缺簡脫、禮壞樂崩、聖上喟然而稱曰、朕甚閔焉、於是建藏書之策、置寫書之官、下及諸子傳説、皆充祕府」。『晉書』卷一九禮志上「(摯)虞表所宜損增曰、……喪服本文省略、必待注解、事義迺彰、其傳説差

詳、世稱子夏所作、……臣以爲今宜參采禮記、略取傳說、補其未備、一其殊義。

- (118) 老子爲柱下史 『禮記』曾子問「曾子問曰、古者師行、必以遷廟主行乎……」正義「案史記云、老聃、陳國苦縣賴鄉曲仁里人也、爲周柱下史、或爲守藏史」。ただし現行の『史記』にはこの文章はなく、卷六三老子列傳では「周守藏室之史」。また『北堂書鈔』卷六二設官部侍御史「漢官儀、周曰柱下史、老聃爲之、秦改爲御史」。

- (119) 道家 『史記』卷一三〇太史公自序「道家使人精神專一、動合無形、瞻足萬物、其爲術也、因陰陽之大順、采儒墨之善、撮兵法之要、與時遷移、應物變化、立俗施事、無所不宜」。皇甫謐『高士傳』老子傳「作道德經五千餘言、爲道家之宗」。

- (120) 俗官 『老子化胡經』「老子西昇化胡經序說第一」(T54・126b~c)「康王之時、歲在甲子、亦同俗官、晦迹藏名、爲柱下史、師輔王者」。

- (121) 史傳 『宋書』卷六九劉湛傳「博涉史傳、諳前世舊典」。

- (122) 姬王一代、七百餘年 『左傳』宣公三年「成王定鼎于郊、鄆、卜世三十、卜年七百、天所命也」。『易林』卷一四豐之隨「開廓緒業、王迹所起、姬德七百、報以八子」。

- (123) 老子以景王時度關 老子が關所を越えたのを景王の時のこととする根據は未詳。『混元聖紀』卷三(D551, S30・23750)には「以昭王二十三年癸丑、……將西度函關」とし、「上天之無極元年也」と注している。

- (124) 魯哀十六年、孔丘卒 『史記』卷四七孔子世家「孔子年七十三、以魯哀公十六年四月己丑卒」。魯哀公十六年は周敬王四十四年。

- (125) 景王卽幽王之後一十餘世 幽王は周の十一代、景王は二十四代の王。

- (126) 化胡經乃云…… 『三洞珠囊』卷九「老子化西胡品」(D782, S42・33894)「老子化胡經云、吾以幽王時、出爲師、教化道法、觀其虛實、爲柱下史、姓李、名耳、字伯陽、知幽王不可復師、欲去之、此衰亂之俗不可久、周幽王將亡其國、乃假服乘青牛薄板車去之、於是幽王果爲犬戎所殺、遂西詣闕賓王、至函谷關、關令尹喜、好道術內學、仰知天文、下知地理、預知道當西行、夙夜觀象、是時太歲在癸丑十二月二十五日臘除、道過來、西度關、關令尹喜先敕門吏、今日當有老公乘青牛薄板車來度關、告之勿令去、如其言、老子乘青牛薄板車度關、關吏留之、不聽度……」。

- (127) 化胡又云…… 『三洞珠囊』卷九「老子爲帝師品」(D782, S42・33890)「化胡經云、……武王時、出爲帝師、號爲郭叔子、復稱續成子、爲柱下史、幽王時、出爲帝師、號曰天老、復稱老子、爲柱下史、作長生經」。またS二二九五『老子變化經』(大淵忍爾『敦煌道經 圖錄編』、福武書店、一九七九、六八七頁)に、「周父皇時、號曰先王國柱下史、……元康五年、老子化入婦女腹中、七十二年乃生、託母姓李、名聃、字伯陽、爲柱下史七百年……」とある。吉岡義豐『道教と佛教第一』(國書刊行

會、一九五九) 第一編「研究篇」I「老子變化思想の展開」第二章「敦煌本老子變化經について」、参照。

(128) 妄作 『老子』十六章「復命曰常、知常曰明、不知常、妄作

凶。劉琨「答盧諶詩一首并書」(『文選』卷二五)「……然後知聃周之爲虛誕、嗣宗之爲妄作也。」「眞誥」卷六「甄命授」第二(D 638, S 34・27381)「我見諸如此等、少有獲益、徒有求生之妄作、常歎息於生生矣」。

(129) 上皇之年 『莊子』天運「天有六極五常、帝王順之則治、逆

之則凶、九洛之事、治成德備、監照下土、天下戴之、此謂上皇」。

『三洞珠囊』卷八「諸天年號日月品」(D 782, S 42・3384)

「文始內傳云、老子以上皇元年歲在丁卯正月十二日丙午、下爲周師、又云、老子以无極元年歲在癸丑十二月二十八日中、授道德經上下二篇也、又云、以周无極元年歲在癸丑冬十二月二十五日、老子之度關也、今按二教要錄云、上皇元年乃是人皇君之年號也、在周前一十七君、年代極懸也、或可周家象此以稱、或可象天上年號也、會似地皇君稱赤鳥元年、吳孫權亦稱赤鳥元年也、似元皇君號開皇元年、隋家亦象號開皇元年、是也、靈書(寶?)經云、至上皇元年、諸天男女、形故純樸、心漸殆壞、恐至凋零、正教不全、是故我身國國之造、成就諸心也、據此、即是諸天年號、又非人皇君之年號、看似人皇君象此以立年號也、按九天生神經、上皇乃是劫名、在開皇劫前、赤明劫後也」。

(130) 道門詭號 北齊文宣帝「廢李老道法詔」(『廣弘明集』卷四、

T 32・112c)「昔金陵道士陸修靜者、道門之望、在宋齊兩代、

祖述三張、弘衍二葛。『後漢書』傳八吳蓋陳臧傳論「中興之業、誠艱難也、然敵無秦項之彊、人資附漢之思、雖懷靈紆紱、跨陵州縣、殊名詭號、千隊爲群、尙未足以爲比功上烈也。」「宋書」卷九七夷蠻傳論「……又重峻參差、氏衆非一、殊名詭號、種別類殊」。

(131) 靈寶法…… 『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』卷上(D

202, S 11・8819) に「き」のよゝにある。「至開皇元年、靈寶眞文、開通三象、天地復正、五文煥明、我於始青天中、號元始天尊、流演法教、化度諸天、始開之際、人民純朴、結繩而行、混沌用心、合於自然、皆得長壽三萬六千年、至上皇元年、心漸頽壞、恐至凋落、正法不全、故國國周行、宣授天文、咸令入法、成就諸心、半劫之中、命漸凋落、壽得一萬八千餘年」。

(132) 度人 『舊雜譬喻經』卷上(T 4・510c)「志妙摩訶薩、三界

中希有、畢爲度人師、得備將不久。『維摩經』方便品(T 14・539a)「欲度人故、以善方便居毘耶離。」「靈寶无量度人上品妙經」卷一(D 1, S 1・3)「斯經尊妙、獨步玉京、度人无量、爲萬道之宗」。

(133) 人壽 『左傳』襄公八年「周詩有之曰、俟河之清、人壽幾何」。

(134) 超取 この語の使用例未見。

(135) 將來近世用 『顏氏家訓』勉學「有一蜀豎、就視笑云、是豆逼耳、相顧愕然、不知所謂、命取將來、乃小豆也。」「史記」卷六一伯夷列傳「若至近世、操行不軌、專犯忌諱、而終身逸樂富厚、累世不絕」。

(136) 一何可笑 注(1)の『顏氏家訓』勉學篇を見よ。

(137) 無識 『漢書』卷二七五行志下之上「貌言視聽、以心爲主、四者皆失、則區霧無識、故其咎霧也」。『魏書』卷四世祖紀下太平眞君五年「詔曰、愚民無識、信惑妖邪、私養師巫、挾藏讖記陰陽圖緯方伎之書」。本論三十三「道士出入儀式」章にも「違律而無識也」とある。

(138) 穿鑿作者 「穿鑿」の語は、注(27)を見よ。「作者」の語は、『禮記』樂記「作者之謂聖、述者之謂明」、曹植「與楊德祖書」(『文選』卷四二)「劉季緒才能逮於作者、而好詆訶文章、倚摭利病」。

(139) 欲神其術 類似的表現は『魏書』卷四八高允傳に、「是史官欲神其事、不復推之於理」。

(140) 信者 『抱朴子』微旨「念有志於將來、愍信者之無文、垂以方法、炳然著明」。

(141) 葛洪神仙序中、具說已怪 『神仙傳』(『太平廣記』卷一老子的條の引文による)に、老子が代代にわたって化現したという説を紹介し、そのあとにつぎのようについて。「皆見於群書、不出神仙正經、未可據也、葛稚川(葛洪)云、洪以爲老子若是天之精神、當無世不出、俯尊就卑、委逸就勞、背清澄而入臭濁、棄天官而受人爵也、夫有天地則有道術、道術之士、何時暫乏、是以伏羲以來、至于三代、顯名道術、世世有之、何必常是一老子也、皆由晚學之徒、好奇尚異、苟欲推崇老子、故有此說、其實論之、老子蓋得道之尤精者、非異類也」。「具說」の語は、

『周書』卷四七藝術姚僧垣傳「時武陵王所生葛修華、宿患積時、方術莫效、梁武帝乃令僧垣視之、還具說其狀、并記增損時候」、『眞誥』卷一六「闡幽微」第二(D 640, S 34・27476)「說冥中事亦多矣、今粗書其蠱者耳、不復一二具說」。

(142) 匡救 『尚書』太甲中「既往背師保之訓、不克于厥初、尙賴匡救之德、圖惟厥終」、孔傳「言己已往之前、不能修德於其初、今庶幾賴教訓之德、謀終於善」。また注(45)の『孝經』事君章。

(143) 夏桀陵虐、塗炭生民 『尚書』仲虺之誥「有夏昏德、民墜塗炭」、孔傳「夏桀昏亂、不恤下民、民之危險、若陷泥墜火、無救之者」。同泰誓中「有夏桀、弗克若天、流毒下國、天乃佑命成湯、降黜夏命」。『史記』卷二夏本紀「夏桀不務德、而武傷百姓」、「陵虐」の語は、『左傳』襄公十八年「(中行)獻子以朱絲繫玉二穀而禱曰、齊環怙恃其險、負其衆庶、棄好背盟、陵虐神主」、「生民」の語は、『詩經』大雅生民「厥初生民、時維姜嫄」、「孝經」喪親章「生事愛敬、死事哀感、生民之本盡矣、死生之義備矣、孝子之事親終矣」。

(144) 成湯武丁、思賢若渴 成湯は殷の湯王。『史記』卷三殷本紀「主癸卒、子天乙立、是爲成湯」、集解「張晏曰、禹湯皆字也、……諡法曰、除虐去殘曰湯」。武丁は殷の高宗。同「帝武丁崩、子帝祖庚立、祖己嘉武丁之以祥雉爲德、立其廟爲高宗」。「思賢若渴」の語は、『三國志』卷三五蜀志諸葛亮傳「將軍既帝室之胄、信義著於四海、總攬英雄、思賢如渴」。その意味するところ

ろは、成湯が伊尹を、武丁が傳説をそれぞれ登用したことを。

『史記』卷三殷本紀「伊尹名阿衡、阿衡欲奸湯而無由、乃爲有莘氏媵臣、負鼎俎、以滋味說湯、致于王道、或曰、伊尹處士、湯使人聘迎之、五反然後肯往從湯」。同「帝武丁卽位、思復興殷而未得其佐、三年不言、政事決定於冢宰、以觀國風、武丁夜夢得聖人、名曰說、以夢所見視群臣百吏、皆非也、於是適使百工營求之野、得說於傳險中、是時說爲胥靡、築於傳險、見於武丁、武丁曰、是也、得而與之語、果聖人、舉以爲相、殷國大治、故遂以傳險姓之、號曰傳説」。

(145) 賢君 『戰國策』秦策二「陳軫謂秦王曰、義渠君者、蠻夷之賢君、王不如賂之以撫其心」。

(146) 虐政 『孟子』公孫丑上「民之憔悴於虐政、未有甚於此時者也」。『史記』卷三殷本紀「夏桀爲虐政、淫荒、而諸侯昆吾氏爲亂」。

(147) 修身養性 『禮記』中庸「故爲政在人、取人以身、修身以道、修道以仁」。『莊子』天道「以此事上、以此畜下、以此治物、以此修身、知謀不用、必歸其天、此之謂太平、治之至也」。『淮南子』俶眞訓「靜漠恬澹、所以養性也、和愉虛無、所以養德也」。『後漢書』紀一下光武帝紀「陛下有禹湯之明、而失黃老養性之福」。『劉子新論』妄瑕「楊朱全身養性、去脛之一毛以利天下、則不爲也」。

(148) 自守 揚雄「解嘲」(『文選』卷四五)「哀帝時、丁傅董賢用事、諸附離之者、起家至二千石、時雄方草創太玄、有以自守、泊

如也」。『後漢書』傳三九王充傳「年漸七十、志力衰耗、乃造養性書十六篇、裁節嗜欲、頤神自守」。

(149) 期頤 『禮記』曲禮上「百年曰期、頤」。鄭玄注「期、猶要也、頤、養也、不知衣服食味、孝子要盡養道而已」。

(150) 死至 蕭子良「淨住子」修理六根門第四(『廣弘明集』卷二七、T.52・308a)「放恣六情、不知死至」。

(151) 潛行西度 『戰國策』秦策一「於是潛行而出、反智伯之約、得兩國之衆、以攻智伯之國、禽其身、以成襄子之功」。何遜「夕望江橋詩」(『夕鳥已西度、殘霞亦半消』。また本論「造立天地」章に、「欲西度關」。

(152) 授人 『抱朴子』勸求「先師不敢以輕行授人、須人求之至勤者、猶當揀選至精者乃教之」。

(153) 身死關中、墳隴見在 『水經注』卷一九渭水「渭水又東北逕黃山宮南、就水注之、水出南山就谷、北逕大陵西。世謂之老子陵、昔李耳爲周柱下史、以世衰入戎、于此有家、事非經證、然莊周著書云、老聃死、秦失弔之、三號而出、是非不死之言、人稟五行之精氣、陰陽有終變、亦無不化之理、以是推之、或復如傳、古人許以傳疑、故兩存耳」。道安「二教論」仙異涅槃第五(『廣弘明集』卷八、T.52・139a)「故莊周稱老子曰、古者謂之遁天之形、始以爲其人、今則非人也、尙非遁天之仙、故有秦佚之弔、死扶風、葬槐里」。法琳「辯正論」卷五「佛道先後篇」(T.52・522c)「關中記云、老子葬於槐里、今古扶風始平之南有槐里鄉」。「墳隴」の語は、陸機「門有車馬客行」(『文選』卷二八)「墳

壠日月多、松栢鬱_レ茂_レ」。「見在」の語は、劉歆「移書讓太常博士」(『文選』卷四三)「尚書初出於屋壁、朽折散絕、今其書見在」。

- (154) 秦佚弔之、三號而出 『莊子』養生主「老聃死、秦失弔之、三號而出」。

- (155) 傳經 『高僧傳』卷三僧伽跋摩傳(T50・342)「跋摩遊化為志、不滯一方、既傳經事訖、辭還本國、衆咸祈止、莫之能留」。

- (156) 妄論 嵇康「答釋難宅無吉凶攝生論」論曰、智之所知、未若所不知者衆、此較通世之常滯、然智所不知、不可妄論也。

- (157) 尊崇 『春秋』經文僖公五年「公及齊侯宋公陳侯衛侯鄭伯許男曹伯、會王世子于首止、秋八月、諸侯盟于首止」、杜預注「間無異事、復稱諸侯者、王世子不盟故也、王之世子、尊與王同、齊桓行霸、翼戴天子、尊崇王室、故殊貴世子」。

- (158) 翻成尋道 『宋書』卷九三隱逸傳史臣論「故知松山桂渚、非止素玩、碧澗清潭、翻成麗矚」。『太平經』卷一一七(王明『太平經合校』六五五・六頁)「……故此四人者、皆共汗辱天道、同(六六〇頁)「小人甚愚也、甚淹汗辱天道」。

- (159) 元爲天人 諸本は目次とともに「氣爲天人」。「天人」の語は、『莊子』天下「不離於宗、謂之天人、不離於精、謂之神人、不離於眞、謂之至人」、『三國志』卷二一魏志王粲傳注『魏略』「太祖遣(邯鄲)淳詣(曹)植、……及暮、淳歸、對其所知數植之材、謂之天人」、『眞誥』卷一〇「協昌期」第二(D638, S

34・27423)「慎不可以其日忿爭喜怒、及行威刑、皆天人大忌、爲重罪也」。

- (160) 太上三元品云…… 『太上洞玄靈寶三元品戒功德輕重經』

(D202, S11・8799) につきのようにある。「天尊曰、上元一品天官、元氣始凝、三光開明、結青黃白之氣、置上元三宮、其第一宮名太玄都元陽七寶紫微宮、則青元始陽之氣、總主上眞自然玉虛高皇上帝諸天帝王上聖大神、其宮皆五億五萬五千五百五十五億五萬重、亦有五億五萬五千五百五十五億五萬重青陽之氣、其中神仙官僚、亦有五億五萬五千五百五十五億五萬重、亦有五億五萬五千五百五十五億五萬衆、皆結自然青元之氣而爲人也」。また、『太上太玄女青三元品誡拔罪妙經』卷上(D28, S2・1252) にもつぎのようにある。「爾時、上元一品九炁天宮紫微帝君、即延生之符、始陽之炁、結成至眞、處玄都元陽七寶紫微上宮、碧霞之殿、五雲之座、紫金之床、凭碧琳之几、秉青玉之珪、左右神仙、列班侍衛、其上元之宮、縱廣五千萬里、並皆青玄之氣、結成其宮、總主上眞自然玉虛高皇上帝諸天帝主上眞眞仙及國主大臣皇后皇妃諸王太子百官眷屬天下人民一切貴賤罪福之由、其中神仙官僚、皆稟自然之氣而爲體也」。

- (161) 元炁始凝 『春秋繁露』王道「王正則元氣和順、風雨時、景星見、黃龍下」。揚雄「解嘲」(『文選』卷四五)「大者含元氣、細者入無間」、李善注「春秋命曆序曰、元氣正則天地八卦孳」。『眞誥』卷五「甄命授」第一(D637, S34・27370)「道者混然、是生元炁、元炁成、然後有太極、太極則天地之父母、道之奧

也。『元炁……凝』という表現は、『淮南子』天文訓「天墜未形、鴻鴻翼翼、洞洞瀾瀾、故曰太始、太始生虛霏、虛霏生宇宙、宇宙生元氣、元氣有涯垠、清陽者薄靡而爲天、重濁者凝滯而爲地」。

- (162) 三光開明 『淮南子』原道訓「橫四維而含陰陽、紘宇宙而章三光」、注「三光、日月星」。同地形訓「東方曰東極之山、曰開明之門」、注「明者陽也、日之所出也、故曰開明之門」。嵇康「答難養生論」「貞香難歇、和氣充盈、澡雪五臟、疏徹開明」。『道門經法相承次序』卷上(D 762, S 41・33131)「無量經曰、元始祖劫、化生諸天、開明三景、是爲天根。」

- (163) 青黃之炁 青黃白の三氣のこと。『道門經法相承次序』卷上(D 762, S 41・33124)「其三氣者、玄元始三炁是也、始氣青、在清微天、元氣白、在禹餘天、玄氣黃、在大赤天、故云玄元始三氣也」。

- (164) 玄都元陽七寶紫微宮 『無上祕要』卷二四「三寶品」(D 770, S 41・33156)「靈寶君者則洞玄之尊神、靈寶丈人則靈寶君之祖炁、丈人是赤混太元上玉虛之炁、九萬九千九百九十九萬炁、後至龍漢開圖、化生靈寶君、經一劫至赤明元年、出書度人、時號上清玄都玉京七寶紫微宮、……右出洞玄九天經」。同文は『洞玄靈寶自然九天生神章經』(D 165, S 9・7280)に見え。 (165) 官僚 『國語』魯語下「今吾子之教官僚、曰陷而後恭、道將何爲」。『三國志』卷五二吳志步騭傳「至於今日、官僚多闕、雖有大臣、復不信任、如此天地焉得無變」。『眞誥』卷五「甄命

授」第一(D 837, S 34・27377)「君曰、閭野者、閭風之府是也、崑崙上有九府、是爲九宮、太極爲太宮也、諸仙人俱是九宮之官僚耳」。

- (166) 人衆 『史記』卷一一二主父偃列傳「暴兵露師十有餘年、死者不可勝數、終不能踰河而北、是豈人衆不足、兵革不備哉、其勢不可也」。『三國志』卷八魏志張燕傳「燕剽捷速過人、故軍中號曰飛燕、其後人衆寢廣、……爲(袁)紹所敗、人衆稍散」。

- (167) 九宮 紫微宮のほか、上元一品の「太玄都元黃太極左宮」、
「太玄都洞白太極右宮」、中元二品の「洞空清靈宮」、一名明晨
武城宮、「南洞陽宮、一名宗天宮」、「北鄭宮、一名陰天宮」、下
元三品の「陽谷洞源宮、一名青華方諸宮」、「清冷宮、一名南水
會宮」、「北鄭都宮、一名羅鄭宮」。『太上洞玄靈寶三元品戒功德
輕重經』にそれら諸宮それぞれについての記述があるのを参照。

- (168) 三天正法經云……『三天正法經』は本論四「結土爲人」章、
三十二「五億重天」章にも引かれているが、『太上三天正法經』
(D 876, S 47・38049)の冒頭に「さきのようにある。」「九天真王
與元始天王、俱生始炁之先、天光未朗、鬱積未澄、溟滓無涯、
混沌太虛、浩汗流冥、七千餘劫、玄景始分、九炁存焉、一炁相
去九萬九千九百九十歲、青童君曰、時未有歲月、九炁既存、一炁相
去九萬九千九百九十里、一里爲一歲也。清炁
高澄、濁混下布、九天真王元始天王、稟自然之胤、置於九天之
號、九天真王、元始天王、始皆生於
天之境也、皆輪運周於九炁之中、氣結而成形焉。九炁玄凝、成於九天圖也、日月星辰、
於是而明、皆輪運周於九炁之中、氣結而成形焉。便有九眞之帝、青童君曰、九眞者、九天之
天之境也。次中三眞、生於禹餘

之天、其餘之天是元炁之澄也、下有三天、生於第三大赤天、大赤天是玄炁之澄也、三號既

明、三元夫人、從炁而生、以天爲父、以炁爲母、故號太素三元

君、此各以炁自然之孕子也、生於三元君、皆女子之號、青童君曰、白

素元君者則右白元君之母、黃素元君者則黃老中央君之母、各置官第、便上有紫素元君者則左无英君之母也、虛結空胎、憑炁而生也

清營衛之官、金晨玉童三千人、西華玉女三千人、三道興隆、舉號爲太上大道君、太上大道君者乃衆真之帝、位高炁清、故號爲太上、皆炁風承眞、積

級受號、非始天有一太上者也、得受太上之號、便爲萬神之主也、置於瓊宮玉殿、處於太上大道之君也、總統九天、次位八方、

八方置八帝、故上三天有二十四帝玉皇之君也、八帝者、皆受自然之後學之、この冒頭部分は『雲笈七籤』卷二「天地部」にも引用されている。なお、H・マスベロ、川勝義雄譯『道教』一一

二頁、尾崎正治「『太上三天正法經』成立考」(『東方宗教』四三號)、参照。

(169) 天光 『左傳』莊公二十二年「有山之材、而照之以天光」。江淹「詣建平王上書」(『文選』卷三九)「天光沈陰、左右無色」。

(170) 蔚積 『後漢書』傳二〇下朗顗傳「今宮人侍御、動以千計、或生而幽隔、人道不通、鬱積之氣、上感皇天、故遣熒惑入軒轅」。

(171) 玄景 陸機「應嘉賦」(『藝文類聚』卷三六人部隱逸)「抱玄景以獨寐、含芳風而寤語」。『雲笈七籤』卷一〇一「元始天王紀」

「元始天王稟天自然之胤、結形未沌之霞、記體虛生之胎、生乎空洞之際、時玄景未分、天光冥遠、浩漫太虛、積七千餘劫、天

朗氣清」。

(172) 九炁 『道教義樞』卷七「混元義」(D 763, S 41・33193)

「太真科云、三天最上、號曰大羅、是道境極地、妙氣本一、唯此大羅、生玄元始三炁、化爲三清天也、……從此三炁、各生三炁、合爲九炁」。

(173) 青炁高澄 注(168)に引いた『太上三天正法經』によって、『青炁』を「清炁」と改める。『洞玄靈寶自然九天生神章經』

(D 165, S 9・7280)「炁清高澄、積陽成天、炁結凝滓、積滯成地」。

(174) 濁混下降 『列子』天瑞「清輕者上爲天、濁重者下爲地」。

「下降」の語は、『禮記』樂記「地氣上齊、天氣下降、陰陽相摩、天地相蕩」。

(175) 凝成 『抱朴子』黃白「……立凝成黃金矣、光明美色、可中釘也」。

(176) 靈寶罪根品云……『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』卷上(D 202, S 11・8818)につきにある。『太上道君、時

於南丹洞陽上館柏陵舍、稽首禮問元始天尊、……不審智慧宿命罪根靈寶祕重、可得暫盼篇目不平、如蒙哀憐、重賜戒言、則以

幽夜披太陽之光、長劫苦魂、得蒙拔度、更生福堂、道濟無外、惠宜普隆、……於是天尊命召十方飛天神人、開九幽玉匱長夜之函

出生死罪錄、惡對種根、十方飛天、各說因緣、以告太上大道君焉……」。

「十善等法」については、その先につきのようにあるのを参照。『天尊言曰、夫欲安身治國、使門戶清貴、天神祐護、地祇敬愛、當修善功、勤心齋戒、廣施法門、先人後身、有惠於

萬物、功普於一切、功滿三千、白日昇天、修善有餘、天降雲車、

弘道無已、自致不死、斯本行之上戒、可不遵奉之乎、一者、當卹死護生、救度厄難、命得其壽、不有天傷、二者、救疾治病、載度困篤、身得安全、不有痛劇、三者、施惠窮困、拯度危厄、割己濟物、無有吝惜、四者、奉侍師寶、營靖建舍、廣作功德、無有怠倦、五者、書經校定、晨夕禮誦、供養香燈、心無替慢、六者、修齋念道、恭心遵法、內外清虛、不生穢惡、七者、退身護義、不爭功名、抱素守朴、行應自然、八者、宣化愚俗、諫諍解惡、咸令一心、宗奉大法、九者、邊道立井、植種果林、教化童蒙、勸人作善、十者、施爲可法、動靜可觀、教制可軌、行常使然、此十善因緣、上戒之律、十天神王所奉、能行之者、飛天齊功……」。また同書卷下 (S. 11・882a) に、「東極世界飛天神人曰、東方無極世界恆沙衆生、已得道過去、及未得道、見在福中、善男子善女人、修奉智慧上品十戒、功滿福報、致得乘空、白日飛行、駕景策龍、上登玉清、遊行東極九炁天中、未得道者、生世富貴、位爲人尊、年命長遠、並無天傷……」とあり、つづいて東南世界、南方世界、西南世界、西方世界、西北世界、北方世界、東北世界、下方世界、上方世界の飛天神人がそれぞれ同様のことを述べる。

- (17) 恆沙得道 『法華經』序品 (T. 9・3a) 「我見彼土、恆沙菩薩種種因緣、而求佛道」。同 (T. 9・2b) 「爾時佛放眉間白毫相光……并見彼諸比丘比丘尼優婆塞優婆夷諸修行得道者」。『宋書』卷六七謝靈運傳「太守孟顗事佛精懇、而爲靈運所輕、嘗謂顗曰、得道應須慧業文人、生天當在靈運前、成佛必在靈運後」。『抱朴

子』對俗「得道之士、呼吸之述既備、服食之要又該」。

- (178) 元始傳云…… 未詳。諸本は「文始傳」に作る。次の四「結土爲人」章にも「元始傳」の引用があるが、そこも諸本は「文始傳」。

- (179) 天堂對地獄 郗超「奉法要」(『弘明集』卷一三、T. 52・86c) 「全五戒則人相備、具十善則生天堂、……反十善者、謂之十惡、十惡畢犯、則入地獄」。

- (180) 修戒、持戒 蕭子良「淨住子」勸請僧進門第二十八 (『廣弘明集』卷二七、T. 52・319c) 「勸請衆生、修行戒善、具諸德本、……十方四惡趣、我今悉勸請、修持諸戒行、獲得於人身」。同剋責身心門第六 (309a) 「在家之人、歸崇三寶、持戒修善、奉行禮義、是則爲內、乖此爲外」。

- (181) 善法 『涅槃經』(北本) 卷八「如來性品」(T. 12・411b) 「善男子、明與無明、亦復如是、若與煩惱諸結俱者、名爲無明、若與一切善法俱者、名之爲明」。

- (182) 度人本行經云…… 本論二十七「隨劫生死」章にはより長文の引用がある。『辯正論』卷八「出道偽謬篇」靈寶太上隨劫生死謬 (T. 52・533a~b) には「靈寶真文度人本行經」として引用している。そのどちらにも「之勳」の二字はない。また、P. 302 v. 『太上洞玄靈寶真文度人本行妙經』(大淵忍爾『敦煌道經圖錄編』五四~五頁)、『雲笈七籤』卷一〇「太上道君紀」の「洞玄本行經」を参照。それらには「之勳」の二字がある。

- (183) 有无生成品云…… 未詳。

(184) 萬物母、萬物父 『尙書』泰誓上「惟天地萬物父母、惟人萬物之靈。」「老子」一章「道可道非常道、名可名非常名、無名天地之始、有名萬物之母。」「莊子」達生「天地者萬物之父母也、合則成體、散則成始」。

(185) 修善 注(180)を見よ。

(186) 道生萬物 『老子』四十二章「道生一、一生二、二生三、三生萬物。」

(187) 生物 『禮記』樂記「氣衰則生物不遂、世亂則禮慝而樂淫。」「荀子」禮論「天能生物、不能辨物也、地能載人、不能治人也」。

(188) 染習 謝敷「安般守意經序」(『出三藏記集』卷六、T55・44)「敷染習沈冥、積罪歷劫、生與佛乖、弗親神化」。

(189) 六道四生苦樂之別 『法華經』序品(T9・2c)「從阿鼻獄上至有頂、諸世界中、六道衆生、生死所趣、善惡業緣、受報好醜、於此悉見。」「同隨喜功德品」(46c)「若四百萬億阿僧祇世界六趣四生衆生、卵生胎生濕生化生、若有形無形、有想無想、非有想非無想……」「六趣」は「六道」と同じ。蕭子良「淨住子」一志努力門第二十四(『廣弘明』卷二下、T52・317c)「從初辨德、極於無礙、善惡二途、凡聖苦樂、明了審諦、斯言備矣」。

(190) 神識 『高僧傳』卷一安世高傳(T50・335b)「賊遂殺之、觀者填陌、莫不駭其奇異、既而神識還爲安息王太子、即今時世高身是也」。慧思「立誓願文」(T46・786c)「慧思自惟、有此神識、無始已來、不種無漏善根、是故恆爲愛見所牽、無明覆」

蔽。」「北齊書」卷一四長樂太守靈山傳「專事酣酒、神識恍惚、遂以卒」。

(191) 本來 『注維摩詰經』卷四(T38・370b)「什曰、本來意爲說法故、亦爲譏財施故」。

(192) 結土爲人 『風俗通』(『太平御覽』卷七八皇王部女媧氏)「俗說天地開闢、未有人民、女媧搏黃土作人、劇務力不暇供、乃引繩於絙泥中、舉以爲人、故富貴者黃土人也、貧賤凡庸者絙人也。」「結土」の語は、曹植「七忿」(『初學記』卷七冰)に「素冰象玉、敍可磨蕩、結土成龍、遭雨則傷」。道教經典では、同様の話がP二四七四『太上洞玄靈寶昇玄內教經』卷八(大淵忍爾『敦煌道經 圖錄編』二六四頁)にも見える。

(193) 三天正法經云…… 注(168)に引いた『太上三天正法經』、ならびにそのつづきにつぎのようにあるのを参照。ただし「皇帝」は「黃帝」となっている。「三道興隆、舉號爲太上帝君、太上大道君者乃衆真之帝、位高居清、故號爲太上、皆衆真承眞、積級受號、非始天有一太上者也、得受太上之號、便爲萬神之主也、玉殿、處於太上帝之君也、總統九天、次位八方、八方置八帝、故上三天有二十四帝玉皇之君也、八帝者、皆受自然之風、得爲帝號、亦非後學之任也、於是各引所承、造上皇之章、以爲寶經、祕於玉清之宮、以度後學得眞之人、逮至黃帝、置立生民、後生之人、起於黃帝也、黃帝結土爲象、放於廣野、三百年中、五色變化、能言能語、各在方、故有倫象五夷變差之類也、五姓合德、亦法自然、承上眞之派、而得爲人也、能有生死之期、壽命之會、若有骨灰係眞、便爲不死、得補上仙、有不純之行、死、歸土也。

(194) 逮至皇帝、始立生民 張衡「東京賦」(『文選』卷三)「逮至顯宗、六合殷昌」、薛綜注「逮、及也」。『生民』の語は、注

(143) を見よ。

(195) 曠野 『詩經』小雅何艸不黃「匪兕匪虎、率彼曠野」、毛傳「曠、空也」。阮籍「詠懷詩」(『文選』卷二二)「綠水揚洪波、曠野莽茫茫」。

(196) 能言 『禮記』曲禮上「鸚鵡能言、不離飛鳥、猩猩能言、不離禽獸」。『論語』鄉黨「孔子於鄉黨、恂恂如也、似不能言者」。『神仙傳』老子傳「或云、老子之母、適至李樹下而生老子、生而能言、指李樹曰、以此爲我姓」。

(197) 各在一方 蘇武詩(『文選』卷二九)「良友遠離別、各在天一方」。魏文帝「與朝歌令吳質書」(『文選』卷四二)「今果分別、各在一方」。

(198) 信秦夷羌 『宋書』卷五四沈慶之傳「時殿中員外將軍裴景仁助戍彭城、本信人、多悉戎荒事、慶之撰奏記十卷、敘苻氏僭僞本末」。慧琳『一切經音義』卷六五(T 54・740b)「信吳、仕衡反、晉陽秋曰、吳人爲中國人爲信人、俗又總謂江淮間雜楚爲信」。未詳作者「正誣論」(『弘明集』卷一、T 52・7b)「重華生於東夷、文命出乎西羌、聖哲所興、豈有常地」。宗炳「答何衡陽難釋白黑論」(同卷三、20b)「東夷、西羌、或可聖賢」。なお『無上祕要』卷五〇「塗炭齋品」(D 774, S 42・33632)に、東九夷胡老君、南八蠻越老君、西六戎氐老君、北五狄羌老君、中央三秦信老君の名が見えるのを参照。

(199) 五情合德 『列子』黃帝「黃帝即位十有五年、喜天下戴己、養正命、娛耳目、供鼻口、焦然肌色好黝、昏然五情爽惑」。曹

植「上賁躬應詔詩表」(『文選』卷二〇)「形影相弔、五情愧被、李善注「文子曰、昔者中黃子曰、色有五章、人有五情」」。『三國志』卷二八魏志鍾會傳注「王弼別傳」「何晏以爲聖人無喜怒哀樂、其論甚精、鍾會等述之、弼與不同、以爲聖人茂於人者神明也、同於人者五情也……」。『周易』乾文言傳「夫大人者與天地合其德、與日月合其明、與四時合其序、與鬼神合其吉凶」。『真誥』卷一六「闡幽微」第二(D 640, S 34・27475)「是以名書上清丹錄、玄殖有道之氣、與靈合德、託體高輝、故來相從」。

(200) 五法自然 「五法」の語は、『大戴禮記』盛德「天子三公合以執六官、均五政、齊五法」、注「五法謂仁義禮智信」。ただし注(193)に示した『道藏』本が「亦法自然」に作るのに従うべきかも知れない。『老子』二十五章に、「道法自然」。

(201) 上眞 『真誥』卷一「運題象」第一(D 637, S 34・27343)「有淫慾之心、勿以行上眞之道也」。『上清太上八素眞經』(D 194, S 11・8464)「夫上眞之道有七、……右上眞之道、總而行之、爲上清眞人」。

(202) 三元品…… 『太上洞玄靈寶三元品戒功德輕重經』(D 202, S 11・8815)にこのようにある。「經傳或云、先身行惡、殃流子孫、或云、己身罪重、上誤先亡、或云、善惡各有緣對、生死罪福、各有命根、如此報應善惡緣對、則各歸一身、不應復有延誤之言」。同(8816)「如此善惡、身各有對、豈可咎於先亡及後子孫乎、龍漢之前、逮至赤明、舊文生死、各由一身、亦不上

延、亦不下流、罪福止一、各以身當。」

- (203) 業對 『高僧傳』卷二曇無讖傳(T 50・336)「讖乃流涕告衆曰、讖業對將至、衆聖不能救矣、以本有心誓、義不容停」。

- (204) 元始傳云……未詳。諸本は「文始傳」に作る。

- (205) 姪盜不孝 『魏書』卷一一四釋老志「又有五戒、去殺盜淫妄言飲酒、大意與仁義禮智信同、名爲異耳、云奉持之則生天人勝處、虧犯則墜鬼畜諸苦」。「孝經」五刑章「五刑之屬三千、而罪莫大於不孝」。

- (206) 五苦八難 『觀無量壽經』(T 12・341c)「若佛滅後、諸衆生等、濁惡不善、五苦所逼」。「太上洞玄靈寶三元品戒功德輕重經」(D 202, S 11・8815)「又見死者形魂、憂惱流曳三途五苦之中」。「維摩經」佛國品(T 14・538b)「菩薩成佛時、國土無有三惡八難」。「八難」の具體的内容は、『增一阿含經』卷三六「八難品」(T 2・747a～b)にのぎのように説明されている。「爾時世尊告諸比丘、凡夫之人、不聞不知說法時節、比丘、當知有八不聞時節人、不得修行、云何爲八、若如來出現世時、廣演法教、得至涅槃、如來之所行、然此衆生、在地獄中、不聞不睹、是謂初一難也、若復如來出現世時、廣演法教、然此衆生、在畜生中、不聞不睹、是謂第二之難、復次如來出現世時、廣說法教、然此衆生、在餓鬼中、不聞不睹、是謂此第三之難也、復次如來出現世時、廣演法教、然此衆生、在長壽天上、不聞不睹、是謂第四之難也、復次如來出現世時、廣演法教、然此衆生、在邊地生、誹謗賢聖、造諸邪業、是謂第五之難、復次如來出現世時、

廣演法教、得至涅槃、然此衆生、生於中國、又且六情不完具、

亦復不別善惡之法、是謂第六之難也、若復如來出現世時、廣演法教、得至涅槃、然此衆生、在於中國、雖復六情完具、無所缺漏、然彼衆生、心識邪見、無人無施、亦無受者、亦無善惡之報、無今世後世、亦無父母、世無沙門婆羅門等成就得阿羅漢者、自身作證而自遊樂、是謂第七之難也、復次如來不出現世、亦復不說法使至涅槃者、又此衆生、生在中國、六情完具、堪任受法、聰明高才、聞法則解、修行正見、便有物有施有受者、有善惡之報、有今世後世、世有沙門婆羅門等修正見取證得阿羅漢者、是謂第八之難、非梵行所修行」。なお、五苦八難の觀念は道教の地獄にもとりいれられている。たとえば『太上玄一真人說三途五苦勸戒經』(D 202, S 11・8797)に、「道言、吾開八門、以遙觀衆生、見有百姓子男女人、學與不學、不顧宿命所行元惡、翻天倒地、無所不作、罪滿結竟、死魂充謫三途五苦八難之中、考掠楚撻、痛毒無極」。

- (207) 六畜邊夷 『左傳』昭公二十五年「爲六畜五牲三犧以奉五味」、杜預注「馬牛羊雞犬豕也」。「出曜經」卷八(T 4・653b)「若生邊地夷狄之中、無佛法衆、不聞三法之音語」。また前注に引いた『增一阿含經』の第二難と第五難を見よ。

- (208) 乖違太甚 『後漢書』傳七一獨行范式傳「(張劭)對曰、巨卿(范式)信士、必不乖違」。陶淵明「於王撫軍座送客詩」「洲渚四緬邈、風水互乖違」。「詩經」大雅雲漢「旱既太甚、蘊隆蟲蟲」。

- (209) 蠻夷 『尙書』舜典「蠻夷猾夏、寇賊姦宄」。
- (210) 无因 『三論玄義』(T 45・1b)「問云何名爲無因有果、答復有外道、窮推萬物、無所由藉、故謂無因……」。『眞誥』卷一一「稽神樞」第一注 (D 639, S 34・27433)「縱時有至誠一兩人、復患此誼穢、終不能得專心自達、如此抽引乞恩、無因得果矣」。
- (211) 造作 楊脩「答臨淄侯牋」(『文選』卷四〇)「又嘗親見執事、握牘持筆、有所造作、若成誦在心」。
- (212) 中邊 『太子瑞應本起經』卷上 (T 3・473b)「迦維羅衛者、三千日月萬二千天地之中央也、佛之威神、至尊至重、不可生邊地、地爲傾邪、故處其中、周化十方」。「辯正論」卷六「十喻篇」(T 52・525b)「案法苑傳高僧傳永初記等云、宋何承天與智嚴慧觀法師、共爭邊中、……何乃悟焉、中邊始定」。
- (213) 爲癡爲喏 「爲……爲……」の表現は、本論二十「以酒脯事邪求道」章にも「此之神社、爲神爲道」と見えるのを参照。
- (214) 善樂 『禮記』中庸「詩曰、嘉樂君子、憲憲令德」、正義「嘉善也、憲憲、興盛之貌、詩人言善樂君子、此成王憲憲然有令善之德」。
- (215) 苦難 顏延之「秋胡詩」(『文選』卷一一)「有懷誰能已、聊用申苦難」。
- (216) 諸條 『南齊書』卷四九王奐傳「尋敕使下、奐輒拒詔、所謗諸條、悉出奐意」。『眞誥』卷一〇「協昌期」第二注 (D 638, S 34・27425)「復有此諸條、亦未見眞書」。
- (217) 五佛並興 目次では「五佛並出」。「並興」の語は、『尙書』費誓序「魯侯伯禽宅曲阜、徐夷並興、東郊不開、作費誓」。『禮記』月令「孟春……行秋令、則其民大疫、姦風暴雨總至、藜莠蓬蒿並興」。
- (218) 文始傳云…… 『三洞珠囊』卷八「諸天年號日月品」(D 782, S 29・33884)にきぎのようにある。「文始内傳云、老子以上皇元年歲在丁卯正月十二日丙午、下爲周師、又云、老子以无極元年歲在癸丑十二月二十八日日中、授道德經上下二篇也、又云、以周无極元年歲在癸丑冬十二月二十五日、老子之度關也」。なお注(102)、参照。
- (219) 青牛薄板車 『三洞珠囊』卷九「老子化西胡品」(D 782, S 42・33891)「鬼谷先生撰文始先生无上眞人關令内傳云、……關令尹喜敕門吏曰、若有老公從東來乘青牛薄板車者、勿聽過關、在後果見老公如是求度關……」。また『混元聖紀』卷三(D 551, S 30・23750)に「老君復欲開西域、乃以昭王二十三年癸丑^{之無}極元年也、五月壬午、駕青牛之車、薄板爲隆穹、徐甲爲御、將西度函關」とあり、これによれば、薄板車はカマボコ形の板屋根の車。青牛に道士たちが乗ること、たとえば『神仙傳』「封君達、隴西人、服鍊水銀、年百歲、如三十許、騎青牛、故號青牛道士」。『三國志』卷一一魏志管寧傳注「魏略」に登場する「青牛先生」も、青牛に乗っていたことにちなむ呼稱であろう。
- (220) 吾遊天地之間 『三洞珠囊』卷九「老子化西胡品」(D 782, S 42・33892, 33895)に引く「關令内傳」と「老子化胡經」では、それぞれつぎのような表現になっている。「老子辭別欲行、

喜曰、願從大人遠遊、觀化天地間、可乎、老子曰、我行无常處、或上天、或入地、或登山、或入海、或在戎狄蠻貊、非人之鄉、鬼神之邦、嶮難之中、觀化十方、出入無間、坐在立亡、子以始受道、諸穢未盡、焉得隨吾遠行耶……」。「喜曰、思道德之美、願從西行、老子曰、吾遊越天地之表、散氣於八嶠、或至小國、或上昇天、下入淵、隨世教化、无所不至、子安能隨我去不」。

(221) 得道 注(177)を見よ。

(222) 洞聽 『論衡』知實「使聖人達視遠見、洞聽潛聞、與天地談、與鬼神言、知天上地下之事、乃可謂神而先知、與人卓異」。

(223) 洞視 『抱朴子』論仙「非洞視者、安能覲其形、非徹聽者、安能聞其聲哉」。『太上黃庭內景玉經』「常念章」第二十二(D) 167, S 9・7381「常念三房相通達、洞視得見無内外」。

(224) 飛行 『列仙傳』僊俗傳「形體生毛長數寸、兩目更方、能飛行逐走馬」。『抱朴子』遐覽「其變化之術、大者唯有墨子五行記、……其法用藥用符、乃能令人飛行上下、隱淪無方」。『四十二章經』(T 17・722a)「阿羅漢者、能飛行變化、住壽命、動天地」。牟子「理惑論」(『弘明集』卷一、T 52・4c~5a)「有通人傳毅曰、臣聞天竺有得道者、號曰佛、飛行虛空、身有日光、殆將其神也」。宗炳「明佛論」(同卷二、T 52・12b)「得吾道者、上爲皇、下爲王、即亦隨化升降、爲飛行皇帝轉輪聖王之類也」。

(225) 六通四達 孫綽「喻道論」(『弘明集』卷三、T 52・17c)「端坐六年、道成號佛、三達六通、正覺無上」。「六通」は六神通のことであつて、『維摩經』菩薩品(T 14・542c)に「神通是道

場、成就六通故」とあり、その内容は『華嚴經(六十華嚴)』

卷四〇「離世間品」(T 9・655a)に「六通自在是菩薩道、天眼、悉見一切世界有色衆生、死此生彼、天耳、悉聞一切諸佛所說經法、皆能受持、廣爲一切衆生解說、出生無礙、知他心智、悉知一切衆生心念、宿命智通、悉知過去一切阿僧祇劫、長養善根、身通自在、隨其所應、現大神變、漏盡智通、知見實際、生菩薩道、不斷絕故」。いわゆる「八十華嚴」卷五七「離世間品」(T 10・300b)では、これら天眼通、天耳通、他心通、宿命通、漏盡通に神足通を加えて、「神足通、隨所應化一切衆生、種種爲現、令樂法故」。「四達」の語は、『老子』十章「天門開闢、能爲雌乎、明白四達、能無知乎」、『莊子』刻意「精神四達並流、无所不極、上際於天、下蟠於地、化育萬物、不可爲象」、嵇康「答難養生論」「若比之於內視反聽、愛氣稟精、明白四達、而無執無爲、遺世坐忘、以寶性全眞、吾所不能同也」。

(226) 檀特山 佛典ではスダナ太子が菩薩行を修したとされる山。『太子須大拏經』(T 3・420c)「檀特山去葉波國六千餘里、去國遠遼……」。『大唐西域記』卷二「昔蘇達拏太子擯在彈多落迦山、……嶺上有窣堵波、無憂王所建、蘇達拏太子於此棲隱」。なお『三洞珠囊』卷九に引く『文始先生關令內傳』では、「後入闕賓國闕嶠之山、精舍中行、老子化胡經」では「至闕賓國、乃入山中、巖居穴處、共修道法三年」といい、ともに檀特山の名は見えない。

(227) 王以水火烧沈……

『三洞珠囊』卷九に引く『文始先生關令

内傳』にいう。「王……忽生惡念曰、吾恐此老公是鬼魅、非實人道士、可速收縛、積薪市中燒殺之、以示百姓、……火起衝天、國人因見老子、亦放身光滿天下、老子與喜及諸真人、在炭煙之中、坐蓮華之上、執道德經詠之、……王又令沈老公深淵、後隨

王入淵、入淵不溺、國人見老子放光、神龍負之、龍光亦照淵、方誦經、並不能爲害、……王曰、燒之不死、沈之不溺、吾末如

之何、王顧謂群臣曰、恐彼老子將天師聖人乎、今欲事之、何如、群臣曰、善、恐老公徒噉、將亡國也、願王卑詞謝之、王曰、正

爾、自詣却說前事、謝罪云云、老公曰、前我語王、恐王不能供之云云、而反燒我師徒、何逆天无道耶、上天不許王之橫殺无辜

此乃天見我无罪、故得度險難也、天將滅王國、不久當至也、王大謝罪、願舉國事師、不敢中怠、老子曰、王前有惡心、今雖叩

頭千下、猶未可保信、恐後有悔、當何以爲誓耶、王曰、今以舉國男女、一世不娶妻、髡鬚鬚髮、以爲盟誓、約不中悔、中悔當

死爲證、何如、老子曰、善、爾時推尹喜爲師、令王及國人事之、王當以國事付太子伊梨、我當修道、捨家國、求度世、老子曰、

善、既欲棄國學道、吾留王之師、號爲佛、佛事无上正眞之道、道有大道、若王居國學道、但奉五戒十善、自足致福、去却不祥

常生人道、尊榮富貴、亦可因此得度世、何必捨家也、王及群臣、一時稽首師前、男女同日奉道焉。

(228) 水火烧沈

『眞誥』卷四「運題象」第四(D 637, S 34・273

66)「水沈湯雲之尸、火烧徐昂之骸」。

(229) 坐蓮花中

『智度論』卷八(T 25・115c)「問曰、諸床可坐、

何必蓮華、答曰、床爲世界白衣坐法、又以蓮華軟淨、欲現神力、能坐其上、令花不壞故、又以莊嚴妙法座故、又以諸華皆小、無如此華香淨大者……」。

(230) 誦經

『抱朴子』審舉「古人欲達勤誦經、今世圖官免治生」。

「後漢書」傳七二下方術公沙穆傳「居建山、依林阻爲室、獨宿無侶、時暴風震雷、有聲於外呼穆者三、穆不與語、有頃、呼者自牖而入、音狀甚怪、穆誦經自若、終亦無它妖異」。

(231) 求哀悔過

『抱朴子』勤求「欲以積勞自效、服苦求哀、庶有

異聞、而虛引歲月、空委二親之供養、捐妻子而不卹」。「孟子」萬章上「太甲顛覆湯之典刑、伊尹放之於桐、三年、太甲悔過、自怨自艾、韋孟「諷諫詩」(『文選』卷一九)「瞻惟我王、時靡

不練、與國救顛、執違悔過」。陳琳「檄吳將校部曲文」(同卷四四)「張魯通竄、走入巴中、懷恩悔過、委質還降」。

(232) 无上道

『太子瑞應本起經』卷下(T 3・478b)「所作已成、

智慧已了、明星出時、廓然大悟、得無上正眞之道、爲最正覺」。慧思「立誓願文」(T 46・783a)「今故入山、懺悔修禪、學五通

仙、求無上道」。「法苑珠林」卷四九「忠孝篇」睽子部(T 53・656c)「如睽子經云、過去世時、迦夷國中有一長者、無有兒子、

夫妻喪目、心願入山求無上道、修清淨志、信樂空閑」。つぎの無上道と考えあわせて、老子とその教を、佛の十號の一つで

ある「無上士」をもつて「無上道」とよんだものか。

(233) 男女髡髮、不娶於妻

注(75)を見よ。

(234) 承佛威神 『維摩經』佛國品(T14・538c)「爾時舍利弗、

承佛威神作是念……」。「威神」の語は、揚雄「甘泉賦」(「文選」卷七)「配帝居之縣圖合、象泰壹之威神」、『法華經』觀世音菩薩普門品(T9・56c~57a)「觀世音菩薩摩訶薩、威神之力、巍巍如是」。また本論十九「救釋曇遣使」章にも、「老子化胡歌曰、……與子威神法、化道滿千年」。

(235) 明光儒童 道安「二教論」服法非老第九(『廣弘明集』卷八、T52・140a)に「清淨法行經」云、佛遣三弟子振丹教化、儒童菩薩、彼稱孔子、光淨菩薩、彼稱顏淵、摩訶迦葉、彼稱老子」とあるのを参照。ほぼ同文は法琳「破邪論」卷上(T52・478c)にも引用され、同「辯正論」卷六「内九箴篇」注(T52・530a)には、「空寂所問經」云、迦葉爲老子、儒童爲孔子、光淨爲顏回」とある。「明光」の語は、阮籍「詠懷詩」其七十三「朝起瀛洲野、日夕宿明光」。

(236) 廣說品云…… 「廣說品」の名は本論一「造立天地」章にも見えるが、何からの引用かは未詳。

(237) 始老國王聞天尊說法…… 『混元聖紀』卷11(D551, S30・23732)にこのようにある。「老君又化身、號靜老天尊、行教五方、遂於東華山九合玄臺說法、以授東極始老國王、其王妃王子大臣五千餘人、同修其道、俱得地仙、乃建習仙宮習靈七正二館、令學仙者居之、二百年中、國內白日昇天者三千餘人、其王昇爲妙梵天王、按青童内文云、始老國在東海之外也、一名清和國、妙梵天王後以逸樂過度、謫下人間、爲酈賓國王、老子化之

爲佛者是也」。

(238) 須陀洹果 小乗で聲聞が得る四果中の初果。『四十二章經』(T17・722a~b)「佛言、辭親出家爲道、名曰沙門、常行二百五十戒、爲四眞道行、進志清淨、成阿羅漢、阿羅漢者、能飛行變化、住壽命、動天地、次爲阿那含、阿那含者、壽終魂靈上十九天、於彼得阿羅漢、次爲斯陀含、斯陀含者、一上一還、即得阿羅漢、次爲須陀洹、須陀洹者、七死七生、便得阿羅漢」。

(239) 白日昇天 『抱朴子』金丹「作此太清丹、小爲難合於九鼎、然是白日昇天上之法也」。同至理「河南密縣有卜成者、學道經久、乃與家人辭去、其始步稍高、遂入雲中不復見、此所謂舉形輕飛、白日昇天、仙之上者也」。『三洞珠囊』卷九「時節品」(D782, S42・33897)「太一帝君洞眞玄云、白日登晨者、日之正中爲白日也、雞之始鳴登晨也、明眞經云、人之得仙、白日登晨、即此義矣、皆取生氣時、司命解化方云、白日去、謂之上尸解也、夜半去、謂之下尸解也、向曉向暮而去者、謂之地下主者也」。

(240) 梵天 本來は佛教の用語。色界の初禪天。道教では三十六天のなかの種民天がまた四梵天ともよばれる。『雲笈七籤』卷三「道教本始部」道教三洞宗元「自玄都玉京已下、合有三十六天、二十八天是三界内、八天是三界外、其三界内者、欲界色界無色界、從下六天爲欲界、次十八天爲色界、次四天爲無色界、三界合二十八天、……其次三界上四天、名爲種民天、亦名聖弟子天、亦名四梵天、此天人斷生死、三災之所不能及、其次即至三境、

……最上一天、名曰大羅、在玄都玉京之上、……三界二十八天、其次四天、其次三境、最上大羅、合三十六天、總是三尊所統。

(241) 玄中法師 『神仙傳』老子傳「或云、上三皇時爲玄中法師、

下三皇時爲金闕帝君」。『混元聖紀』卷一(D 551, S 30・2370)

「徐整三五歷紀云、元炁肇始有神人、號天皇、時老君降世、號通玄天師、一號玄中大法師」。同卷一(23733)「老君在天皇時、號玄中大法師、亦曰通玄天師、出洞真經一十二部、以無極大道、下教人間」。

(242) 憤陀力王 憤陀力は分荼利迦(白蓮華)と同じか。

(243) 殺害无道 『後漢書』傳六二董卓傳「(韓)遂等稍爭權利、

更相殺害、其諸部曲、並各分乖」。『尚書』武成「今商王受無道、暴殄天物、害虐烝民」。『左傳』僖公十九年「秋、衛人伐邢、以報菟園之役、於是衛大旱、卜有事於山川、不吉、寧莊子曰、昔周饑、克殷而年豐、今邢方無道、諸侯無伯、天其或者欲使衛討邢乎」。

(244) 化度 『法苑珠林』卷七八「十惡篇」瞋恚部(T 53・869a)

「百緣經云、……尋自觀察、知在世間、受水牛身、蒙佛化度、得來生天」。李焘「難佛不見形事書」(『弘明集』卷一一、T 52・706)「今如來軌業、彌貫三世、慈悲普潤、不得以見在爲限、群迷求解、不可以滅盡致窮、是以化度不止於篇籍、佛事備列於累萬」。

(245) 化生李氏之胎八十二年、剖左腋、生而白首 『神仙傳』老子

傳「或云、母懷之七十二年乃生、生時剖母左腋而出、生而白首、

故謂之老子、或云、其母無夫、老子是母家之姓、或云、老子之母、適至李樹下而生老子、生而能言、指李樹曰、以此爲我姓。

S 二二九五『老子變化經』(大淵忍爾『敦煌道經 圖錄編』六

八七頁)「元康五年、老子化入婦女腹中、七十二年乃生、託母

姓李、名聃、字伯陽」。ちなみに『混元聖紀』卷一(D 551, S 30・23743)に「八十二年」は「七十二年」

ないし「八十二年」の誤りかと思われる。「仙傳所載、皆云在

胎八十一年、唯內傳云、上帝之師元君、感日精入口、因娠、經

七十二年、剖左腋而生、二說雖或不同、然亦有由、虞宣出塞記

云、老子復命胞中七十二年、舉候九年、則亦八十一年也。「化

生」の語は、『淮南子』俶眞訓「夫化生者不死、而化物者不

化」、康僧會「安般守意經序」(『出三藏記集』卷六、T 53・439)

「……明默種于此、化生乎彼、非凡所親、謂之陰也」。佛が右

腋から生まれたのにたいして老子が左腋から生まれたことにつ

いては、法琳『辯正論』卷六の「十喻篇」(T 52・525a)に議論

がある。なお「生而白首」については、注(64)を参照。

(246) 乘白鹿 『無上祕要』卷二三「正一炁治品」(D 770, S 41・

33455)「玉局治、上應鬼宿、昔永壽元年正月七日、太上老君乘

白鹿、張天師乘白鶴、來此坐局脚玉牀、即名玉局治、在成都南

門左、……右出正一炁治圖」。なお仙人が白鹿に乗ること、た

とえば『水經注』卷一九渭水に「神仙傳曰、中山衛叔卿嘗乘雲

車、駕白鹿、見漢武帝……」と見え、漢代の畫像石にも鹿のひ

く雲車の例は多い。

(247) 剃髮改衣 『過去現在因果經』卷一(T 3・634a~b)「爾時

太子、便以利劍、自剃鬚髮。即發願言、今落鬚髮、願與一切、斷除煩惱及以習障、……爾時太子、剃鬚髮已、自見其身所著之

衣、猶是七寶、即心念言、過去諸佛出家之法、所著衣服、不當如此、……即脫寶衣、而與獵者、自被袈裟、依過去諸佛所服之

法。『陳書』卷二六徐孝克傳「孝克又剃髮爲沙門、改名法整、兼乞食以充給焉。』『出三藏記集』卷一四求那跋陀羅傳(T 5・

105b)「乃捨家潛遁、遠求師匠、即落髮改服、專志學業」。

(248) 沙門 『後漢紀』卷一〇永平十三年「西域天竺有佛道焉、…

其教以修善慈心爲主、不殺生、專務清淨、其精者號爲沙門、沙門者、漢言息心、蓋息意去欲、而歸於無爲也」。

(249) 成果 『注維摩詰經』卷六(T 38・385c)「生日、夫以等入

生死者、必欲濟生死也、苟以濟而入、終成如來果矣」。

(250) 東秦 本論十九「敕瞿曇遣使」章の「老子化胡歌」にも「我在舍衛時、約敕瞿曇身、汝共摩訶薩、資經來東秦……」とうた

われている。

(251) 消水經云…… 未詳。『消水經』は、本論二十四「害親求道」

章に『老子消水經』として見える。

(252) 衆途 慧遠「三報論」(『弘明集』卷五、T 52・34c)「如令合

内外之道、以求弘教之情、則知理會之必同、不惑衆塗而駭其異。僧叡「十二門論序」(『出三藏記集』卷一、T 55・77c)

「若一理之不盡、則衆異紛然、有惑趣之乖、一源之不窮、則衆塗扶疎、有殊致之迹」。

(253) 師弟 『國清百錄』卷三「皇太子敬靈龜文」(T 46・813b)

「所謂自利利他、人我兼利、師及弟子、智斷具足」。

(254) 名教 袁宏「三國名臣序贊」(『文選』卷四七)「然而先賢玉

擢於前、來哲懷挾於後、豈非天懷發中、而名教束物者乎。』世說新語「德行」王平子胡毋彥國諸人、皆以任放爲達、或有裸體

者、樂廣笑曰、名教中自有樂地、何爲乃爾」。

(255) 化胡消水經皆言…… 『三洞珠囊』卷九「老子化西胡品」

(D 782, S 42・3395)に引く「老子化胡經」につきのようにある。「至罽賓國、乃入山中、巖居穴處、共修道法三年」。

(256) 玄妙篇云…… 顧歡「夷夏論」(『南齊書』卷五四高逸傳)

「道經云、老子入關、之天竺維衛國、國王夫人名曰淨妙、老子因其晝寢、乘日精入淨妙口中、後年四月八日夜半時、剖左腋而生、墮地即行七步、於是佛道興焉、此出玄妙內篇」。「夷夏論」

を引用して反駁する明僧紹の「正二教論」(『弘明集』卷六、T 52・35b)では、「淨妙」を「清妙」に作り、また「即行七步」

の後に「七歩」の句が挿入されている。「舉手指天曰、天上天下、唯我爲尊、三界皆苦、何可樂者」。

もとよりこれは、「太子瑞應本起經」卷上(T 3・473b~c)の「七歩」の文章からの借用である。

「……菩薩初下、化乘白象、冠日之精、因母晝寢、而示夢焉、

從右脇入、……到四月八日夜明星出時、化從右脇生、墮地即行七歩、舉右手、住而言、天上天下、唯我爲尊、三界皆苦、何可樂者」。

本論十八「老子作佛」章に引かれている「玄妙內篇」をも参照のこと。

(257) 老子入關 劉鯤「滅惑論」(『弘明集』卷八、T52・50c)「三破論曰、……胡人……不信虛無、老子入關、故作形像之教化之」。

(258) 維衛國 維衛は迦維羅衛の略。『太子瑞應本起經』卷上(3・473b)「期運之至、當下作佛、託生天竺迦維羅衛國、……迦維羅衛者、三千日月萬二千天地之中央也」。

(259) 剖左腋而生 『辯正論』卷六「十喻篇」(T52・525a)「外一異曰、太上老君託神玄妙玉女、剖左腋而生、釋迦牟尼寄胎摩耶夫人、開右脇而出」。

(260) 舉手 『列仙傳』王子喬傳「見桓良曰、告我家、七月七日待我於緱氏山巔、至時果乘白鶴駐山頭、望之不得到、舉手謝時人數日而去。潘尼「迎大駕詩」(『文選』卷二六)「道逢深識士、舉手對吾揖」。

(261) 白淨王子悉達 『太子瑞應本起經』卷上(T3・473b, 474a)「期運之至、當下作佛、託生天竺迦維羅衛國、父王名白淨、聰敏仁賢、夫人曰妙、節義溫良、……夫人即裹以白纓、乳母抱養、字名悉達」。「過去現在因果經」卷一(T3・626b)「爾時白淨王……即便白諸婆羅門言、當爲太子作何等名、諸婆羅門即共論議、而答王言、太子生時、一切寶藏、皆悉發出、所有諸瑞、莫非吉祥、以此義故、當名太子爲薩婆悉達」。

(262) 文始傳云…… 未詳。

(263) 五百年一賢、千年一聖 『孟子』公孫丑下「五百年必有王者興、其間必有名世者」。「尚書考靈曜」(『太平御覽』卷四〇一人

事部敍聖)「五百載、聖紀符」、注「五百、法天地之數也、王命長、故以爲五百載也、符、圖書也」。「拾遺記」卷三「錄曰、……孟子云、千年一聖、謂之連步」。ただし、現在の『孟子』にこの語はなく、『孟子外書』性善辨につきのようにある。「孟子曰、舜生於姚墟、禹生於石紐、湯生於蒲南、文王生於台疆、千年一聖、猶旦暮也」。

(264) 覺煩 『抱朴子』辭義「屬筆之家、亦各有病、其深者則患乎譬煩言冗、申誠廣喻、欲棄而惜、不覺成煩也」。

(265) 分身化物 牟子「理惑論」(『弘明集』卷一、T52・2a)「佛乃道德之元祖、神明之宗緒、佛之言覺也、恍惚變化、分身散體、或存或亡、能小能大」。「化物」の語は、注(100)を見よ。

(266) 說經亦必多方 『漢書』卷三〇藝文志「丘明恐弟子各安其意、以失其真、故論本事而作傳、明夫子不以空言說經也」。「莊子」駢拇「多方乎仁義而用之者、列於五藏哉、而非道德之正也」。宋玉「招魂」「魂兮歸來、何遠爲些、室家遂宗、食多方些」、王逸注「方、道也」。同「九辯」「心怵惕而震盪兮、何所憂之多方」。

(267) 虛妄可曝 曹植「辯道論」(『廣弘明集』卷五、T52・119a)「納虛妄之詞、信眩惑之說、隆禮以招弗臣、傾產以供虛求」。竺道爽「檄太山文」(『弘明集』卷一四、T52・92a)「既無響應、乃奄薨遐、驗此虛妄、焉足奉哉」。「辯正論」卷八「出道僞謬篇」改佛經爲道經謬(T52・544c)「改換正經、以爲邪典、其義可曝、衆共詳焉」。

(268) 老經祕說 『漢書』卷三〇藝文志諸子略道家に、「老子傳氏經

說三十七篇、述老子學」、「老子徐氏經說六篇、字少季、臨惟人、傳老子」等を著録してゐるのを参照。「祕說」の語は、『三國志』卷五七吳志虞翻傳注「虞翻別傳」「翻初立易注、奏上曰、……前人通講、多玩章句、雖有祕說、於經疏闊」。

- (269) 前後相番 『老子』二章「……故有無相生、難易相成、長短相較、高下相傾、音聲相和、前後相隨」。「相番」の語の使用例は未見だが、下記を参照。『宋書』卷七四臧質傳「虜乃肉薄登城、分番相代、墜而復升、莫有退者」。『梁書』卷一八昌義之傳にも同様の表現がある。

- (270) 遠意 『水經注』卷一河水「穆天子竹書及山海經、皆埋繆歲久、編章稀絕、書策落次、難以緝綴、後人假合、多差遠意」。

- (271) 道士、道人 僧順「答道士假稱張融三破論」(『弘明集』卷八、T52・53c)「釋曰、夫道之名、以理爲用、得其理也、則於道爲備、是故沙門號曰道人。陽平呼曰道士」。陶弘景「遺令」(『南史』卷七六隱逸傳)「道人道士、並在門中、道人左、道士右、百日內夜常燃燈、且常香火」。

- (272) 奉佛 『世說新語』排調「二郗奉道、二何奉佛」。

- (273) 如父爲道士豈以道人子爲道士 諸本に從つて「士豈以道」の四字を削り、「如父爲道人、子爲道士」と改める。

- (274) 五練生尸 『眞誥』卷九「協昌期」第一(D 638, S9-27408)「至於世間待水祝漱外舍之近術、皆莫比於此方也、若浴者益佳、但不用此水以沐耳、鍊尸之素漿、正宜以浴耳、眞奇祕也」。『元始无量度人上品妙經四注』卷二(D 38, S3・1684)「死魂受鍊、

仙化成人、生身受度、劫劫長存」。道安「二教論」服法非老第
九(『廣弘明集』卷八、T52・141a)「敬尋道家、厥品有三、一者老子無爲、二者神仙餌服、三者符錄禁厭、就其章式、大有精
麤、麤者厭人殺鬼、精者鍊屍延壽」。

- (275) 五練經云…… 『太上洞玄靈寶滅度五鍊生尸妙經』(D 181, S10・7884)に「ぎのようにある」。「東方九氣青天承元始符命、告下東方無極世界土府神鄉諸靈官、今有太上清信弟子某甲、滅度五仙、託尸太陰、今於某界、安宮立室、庇形后土、明承正法、安慰撫卹、青靈哺飴、九氣朝華、精光充盈、鍊飭形骸、骨芳肉香、億劫不灰、東嶽泰山、明開長夜九幽之府、出某甲魂神、沐浴冠帶、遷上南宮、供給衣食、長在光明、魔無干犯、一切神靈、侍衛安鎮、悉如元始盟眞舊典女青文、黑書此文於青石上、師拜黃繪章、畢、埋文於亡者尸形所在東鄉極墓界、臨埋時、師雲行禹步九步、至所在、東向讀大字及文、畢、叩齒二十四通、嘯氣九過、呪曰……、畢、便埋文土中也」。また「ぎのようにある」(T890)。「飛天神人曰、明眞科品、天子用信匹數、公王國主則用丈數、悉用紋繪上金、以法天象之、庶人則用尺數、鐵以准金、宣告諸天人民、咸使普聞、飛天神人曰、夫欲安鎮死人尸形、所在地官、安慰撫卹、使得速還、更生福世、興家致祿、世世不絕、當依明眞科、天子公主以上金五兩、以奉五帝、安鎮五方、庶人則用鐵五十斤、生死滅度、因緣之信、其福無量、宣告諸天人民、咸使普聞」。

- (276) 滅度 『法華經』序品(T9・5a)「佛此夜滅度、如薪盡火滅、

分布諸舍利、而起無量塔」。『洞玄靈寶長夜之府九幽玉匱明真科』(D 1052, S 57・46043, p 117310、大淵忍爾『敦煌道經圖錄編』四三頁)「明真科曰、生世鍊真、服御神丹、五石鎮生神室五宮、功德德俠、運未昇天、身受滅度、而骸骨芳盈、億劫不休、須臾返形、便更受生、還爲人中」。『真誥』卷三「運題象」第三(D 637, S 34・27357)「青童大君常吟詠曰、欲殖滅度、根當拔生死裁、沈吟墮九泉、但坐惜形骸」。

(277) 色繪 『禮記』喪服大記「飾棺、君龍帷、三池、振容……」鄭玄注「青質五色、畫之於綌繪、而垂之以爲振容、象水草之動搖、行則又魚上拂池」。『洞真太上八素真經服食日月皇華訣』(D 1028, S 55・44941)「凡受八素真經、……齋上金八兩、五色繪各三十尺、法衣一副、……闕此信、不得妄告八素名、輕泄高靈、九祖充責」。

(278) 公王 『獨斷』「天子冠通天冠、諸侯王冠遠遊冠、公侯冠進賢冠、公王三梁、卿大夫尙書二千石博士冠兩梁、千石六百石以下至小吏冠一梁」。『高僧傳』卷三求那跋摩傳(T 50・341a)「乃敕住祇洹寺、供給隆厚、公王英彥、莫不宗奉」。

(279) 上金五兩而作一龍 『明真科』(D 1052, S 57・46054)「飛天神人曰、長夜之府九幽玉匱明真科法、帝王國土、疾疹兵寇、危急厄難、當丹書靈寶真文五篇、於中庭五案置五方、一案請一篇真文、以上金五兩、一兩作一龍、五兩分作五龍、以鎮五篇文上、又以五色紋繪之信、以鎮五帝」。『上金』の語は、『抱朴子』黃白「以此白銀內其中、多少自在、可六七沸、注地上凝、則成

上色紫磨金也」。また注(277)の『八素真經服食日月皇華訣』を見よ。

(280) 玉文 『五鍊生尸妙經』(D 181, S 10・7883)「無極無頂無色大羅之天、自然玉文、總統中央黃元天君」。『真誥』卷一九「翼真檢」第一(D 640, S 34・27498)「得道之士、當修玉文」。

(281) 通夜 曹丕「與吳質書」『文選』卷四二「年行已長大、所懷萬端、時有所慮、至通夜不眠」。

(282) 女青文曰…… P 二八六五、大淵忍爾『敦煌道經圖錄編』七五頁の『太上靈寶洞玄滅度五鍊生尸妙經』につきのようにある。「女青舊典、以朱筆書此文於黃繪上、師於亡人所在、子時北向、燒五香火、施安五鎮、而奏上黃繪章、露文一宿、明日平旦、各埋文方面、以領神安形、行之者、女青文曰、九祖幽魂、皆即出長夜、身入光明、三官剖對、天堂記名、供其廚飯、卅二年、皆還其故形而更生也、未得還者、形骸故宅、則爲五帝侍衛地祇營護、安慰撫卹、无有搖動、不出百年、无不化生、而得還於人道也」。なお、「女青」とは女の死者、あるいは女道士をいう。

(283) 九祖幽魂 『洞真太上素靈大有妙經』(D 1026, S 55・44836)「愆盟負科、殃及九祖、考撻死魂、長閉地獄」。『元始无量度人上品妙經四注』卷一(D 38, S 3・1661)「至士齋金寶、效心盟天而傳、輕泄漏慢、殃及九祖、長役鬼官」。また注(277)の『八素真經服食日月皇華訣』を見よ。「幽魂」の語は、『度人妙經四注』卷一(1660)「道言、凡誦是經十過、諸天齊到、億曾萬祖、

幽魂苦爽、皆即受度、上昇朱宮、『洞玄靈寶自然九天生神章經』(D 165, S 9・7281)「凡夫聞之以長存、幽魂聞之以開度」。

- (284) 長夜 曹植「三良詩」(『文選』卷二二)「長夜何冥冥、一往不復還」、李善注「李陵詩曰、嚴父潛長夜、慈母去中堂」。『左傳』襄公十三年「若以大夫之靈、獲保首領以沒於地、唯是春秋電窅之事……」、杜預注「窅、厚也、窅、夜也、厚夜猶長夜、春秋謂祭祀、長夜謂葬埋也」。『明眞科』(D 1052, S 57・46049)「不審可有功德拔贖、開度死魂、令出長夜九幽之中、身入光明更生福門」。

- (285) 光明 『國語』周語上「至于武王、昭前之光明而加之以慈和、事神保民、莫弗欣喜」。また前注の『明眞科』を見よ。

- (286) 廚飯 『太上洞眞智慧上品大誡』(D 77, S 5・3497)「七祖魂神、上昇南宮、衣飯天廚、早得更生、還於人中」。

- (287) 還其故形而更生 『拾遺記』卷四「尸羅常坐日中、漸漸覺其形小、或化爲老叟、或爲嬰兒、倏忽而死、香氣盈室、時有清風來吹之、更生如向之形」。「故形」の語は、『眞誥』卷四「運題象」第四(D 637, S 34・27367)「納納長者、蔚蔚內明、撥于昔累、非復故形」、同卷一四「稽神樞」第四(D 639, S 34・27458)「廬江潛山中有學道者鄭景世張重華、……又服玄丹、久久不復飲食、而身體輕強、反易故形」、道宣『感通錄』(T 52・435a~b)「余曾見晉太常干寶撰搜神錄述、晉故中牟令蘇韶有才識、感冥中卒、乃晝見形於其家、諸親故知友聞之、並同集、飲噉言笑、不異於人、或有問者、中牟在生、多諸賦術、言出難尋、

諸敍詞曰、運精氣兮離故形、神渺渺兮爽玄冥……」。「更生」の語は、『莊子』達生「夫欲免爲形者、莫如棄世、棄世則无累、无累則正平、正平則與彼更生、更生則幾矣」、『抱朴子』辨問「范軼見斫而不入、鼈令流尸而更生」、『眞誥』卷四「運題象」第四(D 637, S 34・27370)「其用他藥得尸解、非是用靈丸之化者、皆不得反故鄉、三官執之也、有死而更生者……」。

- (288) 三元品中…… 『太上洞玄靈寶三元品戒功德輕重經』(D 202, S 11・8809)にきぎのようにある。「上元天官置三官三府三十六曹、中元地官置三官三府四十二曹、下元水官置三官三府四十二曹、天地水三官九府一百二十曹、三品相承生死罪福、功過深重、責役考對、年月日限、無有差錯、其學仙善功、行惡罪報、各隨所屬考官悉書之焉」。また(8817)、「故三官九府百二十曹、左右陰陽水火考官、司人得失、善功者列言左官、行惡者列言右官、各隨年月日數遠近以考促之、功德日數、輕重報應、如濤水之會、必至之期、萬無一失也」。また『無上祕要』卷九「衆聖會議品」(D 769, S 41・33400)および同卷二二「三界官府品」(D 770, S 41・33448)に『洞玄元始五老赤書玉篇經』からの引用としてきぎのようにあるのを参照。「元始靈寶西南天大聖衆至眞尊神无極大道天皇老人南極元眞君洞陽大靈、常以月二十四日、上會靈寶太玄都玉京朱宮、共集考校三官九府五嶽北鄧太山二十四獄罪刑簿目、鬼神天人責役輕重之事」。

- (289) 天地大水三宮 三本に従って「大」の一字を削る。また『三元品戒功德輕重經』に従って「官」を「官」と改める。「三官」

の名は、三張道教の教法を傳える『典略』、『三國志』卷八魏志張魯傳注)に見えている。「請禱之法、書病人姓名、說服罪之意、作三通、其一上之天、著山上、其一埋之地、其一沈之水、謂之三官手書」。

(290) 罪福功行 『維摩經』入不二法門品(T 14・530c)「師子菩薩曰、罪福爲二、若達罪性、則與福無異」。蕭子良『淨住子』

滌除三業門第三『廣弘明集』卷二十七(T 52・307c)「次懺意業、意爲身口之本、罪福之門」。『抱朴子』明本「止於人中、或有淺見毀之、有司加之罪福、或有親舊之往來、牽之以慶弔」。『後漢書』傳四四楊震傳「今(劉)瓌無佗功行、但以配阿母女、一時之間、既位侍中、又至封侯、不稽舊制、不合經義」。『注維摩詰經』卷四(T 38・367a)「什曰、功行未滿、則果不可得、未至而求得、是非時行也」。

(291) 考官 『真誥』卷十三「稽神樞」第三(D 639, S 34・2746)

「鬼官北斗君乃是道家七辰北斗之考官、此鬼一官又隸九星之精上屬北辰玉君」。

(292) 差錯 司馬相如「大人賦」(『漢書』卷五七下)「紛湛湛其差錯

兮、雜遝膠輻以方馳」、顏師古注「差錯、交互也」。『真誥』卷一八「握眞輔」第二(D 640, S 34・27489)「給事……四月半間、欲至東山、想無差錯矣」。

(293) 益壽、奪算 『史記』卷一二孝武本紀「少君言於上曰、祠竈

則致物、致物而丹沙可化爲黃金、黃金成、以爲飲食器則益壽」。『抱朴子』微旨「能盡不犯之、則必延年益壽、學道速成也」。

同「天地有司過之神、隨人所犯輕重、以奪其算、算減則人貧耗疾病、屢逢憂患、算盡則人死、諸應奪算者、有數百事、不可具論、……又月晦之夜、竈神亦上天、白人罪狀、大者奪紀、紀者三百日也、小者奪算、算者三日也」。

(294) 業行 慧遠『大乘大義章』卷下(木村英一編『慧遠研究』遺

文篇)、創文社、一九六〇、五六頁)「得無生忍已、捨結果身、得菩薩清淨業行之身」。『高僧傳』卷八僧遠傳(T 60・378b)「竟陵文宣王又書曰、……遠上即業行圓通、曠劫希有、弟子意不欲遺形影迹、維處衆僧墓中」。『道教義樞』卷一「位業義」(D 762, S 41・331c)「又業行義者、向道有二條、一願二行」。

(295) 不然 『搜神記』(二十卷本)卷一三「文帝以爲火性酷烈、

無含生之氣、著之典論、明其不然之事、絕智者之聽」。

(296) 五鍊之文、出天地未分之前 『五鍊生尸妙經』(D 181, S 10.

789b) に「ぎのようにある」。「天真皇人曰、夫開度拔贖宿對罪魂、安鎮尸形宮宅、其文出自龍漢之先、天尊今開大法、教化童子諸天大神、而披龍漢之玄奧、開演洞玄之祕文、拔出長夜之府、使九幽得荷太陽之光」。「龍漢」は現在ある天地が成立するよりはるか以前の年號。「天地未分之前」の語は、『周易』繫辭傳上「是故易有太極、是生兩儀」、正義「太極謂天地未分之前、元氣混而爲一、即是太初太一也」。

(297) 穿冢 『後漢書』傳九耿秉傳「……明年夏卒、時年五十餘、

賜以朱棺玉衣、將作大匠穿冢、假鼓吹、五營騎士三百餘人送葬」。『搜神記』(二十卷本)卷六「吳孫休永安四年、安吳民陳

焦、死七日復生、穿冢出。

- (298) 耳目 『禮記』仲尼燕居「若無禮、則手足無所錯、耳目無所加。繁欽「與魏文帝牋」『文選』卷四〇「能識以來、耳目所見、僉曰詭異、未之聞也」。

- (299) 義皇 揚雄「劇秦美新」『文選』卷四八「上罔顯於義皇、中莫盛於唐虞、邈靡著於成周、李善注「伏羲爲三皇、故曰義皇」。

- (300) 死 『上清大洞真經』卷四(D 17, S 1・800)「太洞玉經曰、……魂生太無中、魄亦五道會、世世解死尸、七祖無住滯」。
『真誥』卷四「運題象」第四(D 637, S 34・27369)「趙成子死後五六年、後人晚山行、見此死尸在石室中、肉朽骨在」。
『智度論』卷二二(T 25・225a)「衆僧大海水、結戒爲畔際、若有破戒者、終不在僧數、譬如大海水、不共死屍宿」。

- (301) 郊野古冢 班固「西都賦」『文選』卷一「竹林果園、芳草甘木、郊野之富、號爲近蜀」、李善注「爾雅曰、邑外曰郊、郊外曰野」。
『水經注』卷九沁水「今城之東南有古冢、時人謂之張禹墓」。
謝惠連「祭古冢文」『文選』卷六〇「東府掘城北塹、入丈餘、得古冢、上無封域、不用塹甃」。

- (302) 啓齒 『莊子』徐无鬼「……而吾君未嘗啓齒、今先生何以說吾君、使吾君說若此乎」。
郭璞「遊仙詩」『文選』卷二二「靈妃顧我笑、粲然啓玉齒」。

- (303) 觀音侍道 目次では「觀音侍老」。

- (304) 有道士造老像、二菩薩侍之 『續高僧傳』卷二二慧滿傳(一)

- 50・618b)「昔周趙王治蜀、有道士造老君像、而以菩薩俠侍」。
(305) 金剛藏、觀世音 『華嚴經』十地品(T 9・542b)「爾時金剛藏菩薩摩訶薩、承佛威神、入菩薩大智慧光明三昧」。
『法華經』觀世音菩薩普門品(T 9・56c)「世尊、觀世音菩薩、以何因緣、名觀世音……」。

- (306) 黃布帔 道安「二教論」服法非老第九『廣弘明集』卷八、T 52・140a)「(張)魯……於漢爲逆賊、戴黃巾、服黃布褐」。

- 『陸先生道門科略』(D 761, S 41・33121)「道家法服、……巾褐及帔、出自上道、禮拜著褐、誦經著帔、三洞之軌範、豈小道之所預、頃來纔受小治或籙生之法、竊濫帔褐、已自大謬、乃復帽褶對裙、帔褐著袴、此之亂雜、何可稱論、夫巾褐裙帔、製作長短、條縫多少、各有準式、故謂之法服」。
『釋名』釋衣服に、「帔、披也、披之肩背、不及下也」とある。

- (307) 帔 『廣韻』去聲四十禡「帔」に、「帔幘、通俗文曰、帛三幅曰帔、帔、衣襖也」とある。

- (308) 通身 『周書』卷一一晉蕩公護傳「盛洛著紫織成纈通身袍、黃綾裏」。

- (309) 佛僧袈裟法服 『行事鈔』二衣總別(T 40・105a)「增一二、如來所著衣、名曰袈裟、所食者、名爲法食」。
陶弘景「遺令」『南史』卷七六「通以大袈裟覆衾蒙首足」。
『法華經』序品(T 9・3a)「剃除鬚髮、而被法服」。
『顏氏家訓』歸心「一披法服、已墮僧數」。
「法服」の語のもとつくところは、『孝經』卿大夫章「非先王之法服不敢服」。

(310) 古賢 『後漢書』傳七二上方術謝夷吾傳「方之古賢、實有倫序、探之於今、超焉絕俗」。盧諶「贈劉琨詩」(『文選』卷二五)

「桓桓撫軍、古賢作冠」。

(311) 橫被加前兩帶 法琳『辯正論』卷六「十喻篇」の「外中表威儀異九」(T.52・529a)に「外論曰、老教容止威儀、拜伏揖讓、

玄巾黃褐、持笏曳履、法象表明、蓋華夏之古制也」とあり、その注につきのごとくいう。「注曰、道士元來本著儒服、不異俗人、至周武世、始有橫披、刺二十四縫、以應陰陽二十四氣、出自人情、亦無典據也」。同「内九箴篇」の「内棄耕分衛指四」

(531c)にも、「竊見樓觀黃巾、脫鹿皮而藉地、玄都鬼卒、捨橫帔而偶耕、既無絕粒之人、頗愧客作之倦」と見える。「十喻篇」の「内九喻」(536b)にまたつぎのごとくいう。「開士曰、昔丹陽余玖興撰明真論一十九篇、以駁道士、出其僞妄、詳彼論焉、言巾褐之服、正是古日儒墨之所服也、在昔五帝鹿巾、許由皮冠、並俗者之服耳、褐身長三丈六尺、有三百六十寸、言法一

歲三十六旬、或像一年三百六十日也、褐前有二帶、言法陰陽兩判、巾之兩角、又法二儀」。この「明真論」の議論は、本論三十三「道士出入儀式」章に引用されている『自然經』にもとづこう。すなわち、「自然經云、道士巾褐帔法、褐長三丈六尺、三百六十寸、法年三十六旬、年有三百六十日、一身兩角、角各有六條、兩袖、袖各六條、合二十四條、法二十四炁、二帶。法陰陽、中(巾?)兩角法兩儀、乃至冠法蓮花巾也」。

(312) 削除 「周滅佛法集道俗議事」の注(58)を見よ。

(313) 服像 道安「二教論」服法非老第九(『廣弘明集』卷八、T.62・140b)「古有專經之學、而無服象之殊、黃巾布衣、出自張魯」。

(314) 諸天内音八字文曰…… 『太上靈寶諸天内音自然玉字』卷三

(D.49, S.3・2188)「玄明恭華天中有自然之音八字、曰、梵形落空、九靈推前、……天真皇人曰、……梵形者、元始天尊也、開龍漢之劫、登赤明之運、號曰元始、上皇開運、號元始丈人、隨世化生、故以一神落空者、元始空中而出、既有天地日月三光、而知空中有真文也、靈者、九華真人治於南上宮中、主九幽之下宿對死魂、推前者、推算生死功德……」。また『元始无量度人上品妙經四注』卷四(D.39, S.3・1321)にも「梵形落空、九靈推前」とあり、その李少微注に、「少微曰、此八字、恭華天内音也、梵形者、元始天尊在龍漢時號也、至赤明世、號无名君、上皇開運、號元始丈人、梵炁化形、隨劫化生、以一神而見、不受胎生、故曰梵形、落空者、元始自空中而生、故曰落空……」。「天真皇人」の名は、『抱朴子』地真篇に「昔黃帝……到峨眉山、見天真皇人於玉堂、請問真一之道」と見え、また『隋書』卷三五經籍志道經部に「所度皆諸天仙上品、有太上老君太上丈人天眞皇人五方天帝及諸仙官、轉共承受、世人莫之豫也」。

(315) 蜀記云…… 道安「二教論」服法非老第九(『廣弘明集』卷八、T.62・140a)によれば「李膺蜀記」からの引用。「李膺蜀記曰、張陵避病瘡於丘社之中、得呪鬼之術書、爲是遂解使鬼法、後爲大蛇所喻、弟子妄述昇天」。「二教論」はまた「或妄稱真道」(140c)の注にも「蜀記」を引用している。「蜀記曰、張陵

入鶴鳴山、自稱天師、漢嘉平末、爲蟒蛇所噓、子衡奔出尋無所、畏負清議之譏、乃假設權方、以表靈化之迹、生糜鶴足、置石蜺頂、到光和元年、遣使告曰、正月七日、天師昇玄都、米民山嶽、遂因妄傳、販死利生、逆莫此之甚也。」「李膺蜀記」についての詳細は不明。『太平御覽』引書目の「李膺益州記」と同書か。もしそうだとすれば、『南史』卷五五に「(李)膺字公胤、有才辯、西昌侯藻爲益州、以爲主簿、使至都、武帝悅之、……乃以爲益州別駕、著益州記三卷、行於世」とあるように、梁の武帝時代の人物の作品である。

- (316) 呪鬼 『太上正一呪鬼經』(D 875, S 47・37991)「天師曰、吾上太山、謁見黃老君、教吾殺鬼、……呪鬼神自縛、呪鬼鬼自殺」。

- (317) 符書 注(21)を見よ。

- (318) 白日昇天 注(239)を見よ。

- (319) 陵子衡爲係師、衡子魯爲嗣師 玄光「辯惑論」(『弘明集』卷八、T 52・49a)「昔張子魯漢中解福、大集祭酒及諸鬼卒」、注「……又天師係師。嗣師及三女師、此是張魯自稱美也」。ただし、法琳『破邪論』卷下(T 52・486a~b)には「陵爲天師、衡爲嗣師、魯爲係師、自號三師也」とあつたことあわない。『眞誥』卷四「運題象」第四(D 637, S 34・27368)の注にも、「按張係師爲鎮南將軍、建安二十一年亡」とあり、張魯を係師としている。

- (320) 妖法 この語の使用例未見。

- (321) 惑亂 『左傳』昭公元年「趙孟曰、何謂蠱、對曰、淫溺惑亂之所生也。」「史記」卷六秦始皇本紀「今諸生不師今而學古、以非當世、惑亂黔首」。

- (322) 漢書云…… 『後漢書』傳六五劉焉傳「沛人張魯、母有姿色、兼挾鬼道、往來焉家、遂任魯以爲督義司馬、遂與別部司馬張脩將兵掩殺漢中太守蘇固、斷絕斜谷、殺使者、魯既得漢中、遂復殺張脩而并其衆。」「三國志」卷八魏志張魯傳もほぼ同文だが、さらに「魯遂據漢中、以鬼道教民、自號師君」とある。

- (323) 時傳黃衣當王 「周滅佛法集道俗議事」の注(13)を見よ。

- (324) 部衆 『三國志』卷三〇魏志烏丸傳注『英雄記』「烏桓單于都護部衆、左右單于受其節度」。

- (325) 巾帔 『魏書』卷一〇二西域波斯國傳「其俗丈夫剪髮、戴白皮帽、貫頭衫、兩廂近下開之、亦有巾帔、緣以織成。」「無上祕要」卷四三「修道冠服品」(D 773, S 42・33574)「洞玄太極隱注經、注曰、轉經坐小牀上、高五尺、廣長悉等、巾鹿皮巾、披鹿皮帔、不須著褐也」。

- (326) 代漢之徵 『三國志』卷四二蜀志周羣傳「時人有問、春秋讖曰、代漢者當塗高、此何謂也、(周)舒曰、當塗高者、魏也」。

- (327) 立身 注(20)を見よ。

- (328) 忠孝 『呂氏春秋』勸學「先王之教、莫榮於孝、莫顯於忠、忠孝、人君人親之所甚欲也」。班固「兩都賦序」(『文選』卷一)「或以抒下情而通諷諭、或以宣上德而盡忠孝」。

- (329) 天地不立 『孝經』三才章に「夫孝、天之經也、地之義也、

民之行也、天地之經、而民是則之」とあるのをふまえる。

(330) 極位大士 蔡邕「文烈侯楊公碑」「人臣之極位、兼而有之」。

陳琳「爲袁紹檄豫州」(『文選』卷四四)「故太尉楊彪、典歷二司、享國極位」。潘岳「西征賦」(同卷一〇)「疎飲餞於東都、畏極位之盛滿」。「大士」は菩薩のこと。『維摩經』菩薩行品(T14・533a)「佛語賢者舍利弗言、汝已見菩薩大士之所爲乎」。

(331) 老子不及大賢 道安「二教論」服法非老第九(『廣弘明集』

卷八、T52・140b)に「……且老子大賢、絕棄貴尚、又是朝臣、服色寧異」とある。「大賢」の語は、『孟子』離婁上「天下有道、小德役大德、小賢役大賢」。

(332) 立侍 『禮記』鄉飲酒義「鄉飲酒之禮、六十者坐、五十者立侍以聽政役、所以明尊長也」。「三國志」卷一八魏志典韋傳「還爲校尉、性忠至謹重、常晝立侍終日、夜宿帳左右、稀歸私寢」。

(333) 逆人 『抱朴子』行品「懷邪僞以儉榮、豫利己而忘生者、逆人也」。

(334) 佛生西陰 目次では「佛西法陰」。

(335) 老子序云…… 本論三十四「道士奉佛」章にも「老子序」を引いていう。「老子序」云、道主生、佛主死、道忌穢、佛不忌、道屬陽生忌穢、佛則反之」。

(336) 陰陽之道、化成萬物 『周易』繫辭下傳「天地絪縕、萬物化醇、男女構精、萬物化生」。「列子」天瑞「一者、形變之始也、清輕者上爲天、濁重者下爲地、沖和氣者爲人、故天地含精、萬物化生」。「陰陽之道」の語は、『春秋繁露』基義「陽兼於陰、

陰兼於陽、夫兼於妻、妻兼於夫、父兼於子、子兼於父、君兼於臣、臣兼於君、君臣父子夫婦之義、皆取諸陰陽之道」、また同循天之道「……是故陽之行、始於北方之中、而止於南方之中、陰之行、始於南方之中、而止於北方之中、陰陽之道不同」、また『老子想爾注』六章「陰陽之道、以若結精爲生」。「化成」の語は、『周易』恆象傳「聖人久於其道而天下化成」。

(337) 道生於東、爲木陽也、佛生於西、爲金陰也…… 中國の道が東に生まれ、天竺の佛が西に生まれるのは自明の前提であるとともに、『周易』説卦傳に「萬物出乎震、震東方也」とあるように、東方は萬物の生みだされるところ。そして道が木、陽、父、天、生、因に、佛がその對概念の金、陰、母、地、死、緣に關連づけられているのだが、それぞれつぎのような思考の枠組のなかに位置づけられよう。

道Ⅱ東・木・陽、佛Ⅱ西・金・陰。『春秋繁露』五行之義「……木、五行之始也、……是故木居東方而主春氣、……金居西方而主秋氣」。

道Ⅱ父・天、佛Ⅱ母・地。『周易』説卦傳「乾、天也、故稱乎父、坤、地也、故稱乎母」。『春秋繁露』天地之行「……是故天執其道爲萬物主、……是故地明其理爲萬物母」。

道Ⅱ生、佛Ⅱ死。『春秋繁露』五行之義「……是故木主生而金主殺」。同循天之道「生於木者、至金而死」。

道Ⅱ因、佛Ⅱ緣。『莊子』齊物論「已而不知其然、謂之道」、郭象注「夫達者之因是、豈知因爲善而因之哉、不知所以因而自

因耳、故謂之道也。「因」と「縁」のちがいにについては、『注維摩』卷二(138・346b)に、『維摩經』佛國品の「法不屬因、不在縁故」にたいする注として、「什曰、力强爲因、力弱爲縁肇曰、前後相生、因也、現相助成、縁也、諸法要因縁相假、然後成立」とあり、また道安「二教論」教旨通局第十一(『廣弘明集』卷八、153・142c)につぎのごとく説明されている。

「……故論曰、是縁不定、非受不定、受定者、言因不可變也、其猶種稻得稻、必不生麥、麥雖不生、不可陸種、地爲縁也、稻即因矣」。

(338) 一陰一陽 『周易』繫辭下傳「一陰一陽之謂道」。『孔子家語』本命解「一陽一陰、奇偶相配、然後道合化成、性命之端、形於此也」。

(339) 不相離 『列子』天瑞「太易者、未見氣也、太初者、氣之始也、太始者、形之始也、太素者、質之始也、氣形質具、而未相離、故曰渾淪」。

(340) 大乘守善 「大乘」の語、たとえば『法華經』方便品(19・8a)に「今正是其時、決定說大乘、我此九部法、隨順衆生說、入大乘爲本、以故說是經」などと佛典に頻出するが、そのような佛教の大乘の立場も守善の域にとどまるというのであろう。

ちなみに『三天主解經』卷下(D 876, S 47・386b)では、小乘を沙門に、大乘を道士にあてている。「夫沙門道人小乘學者、則靜坐而自數其氣、滿十更始、從年竟歲、不暫時忘之、佛法不使存思身神、故數氣爲務、以斷外想、道士大乘學者、則常思身

中眞神形象、衣服綵色、導引往來、如對神君、無暫時有輟、則外想不入、神眞來降、心無多事、小乘學者、則有百事相牽、或有憂愁萬慮、外念所纏、大乘小乘、其路不同、了不相似也」。

「守善」の語は、『漢書』卷三六劉向傳「詩云、我心匪石、不可轉也、言守善篤也」。

(341) 道者自然、无所從生 『老子』二十五章「人法地、地法天、天法道、道法自然」。『列子』天瑞「夫有形者、生於无形、則天地安從生」、張湛注「天地无所從生、而自然生」。

(342) 佛會大坐 『樂府詩集』卷二五「慕容垂歌辭」「慕容愁憤憤、燒香作佛會、願作牆裏燕、高飛出牆外」。『宋書』卷四二王弘傳「子錫」高自位遇、太尉江夏王義恭當朝、錫箕踞大坐、殆無推敬」。『十誦律』卷四〇(123・291a)「佛在舍衛國、爾時憍蘭

難陀比丘尼、中前著衣持鉢行乞食、食後以尼師檀著左肩上、入安陀林中、大坐一樹下」。同卷四一(300b)「先攝一脚、次攝一脚、攝已大坐、正觀諸法」。つまり、「大坐」とは結跏趺坐のこと。「方坐」ともいう。范泰「與王司徒諸人書論道人踞食」(『弘明集』卷一二、153・77c~78a)「樹王六年、以致正覺、始明

玄宗、自數高座、皆結加趺坐、不偏踞也、……方坐無時、而偏踞有時」。

(343) 地方 『呂氏春秋』園道「五曰、天道園、地道方、聖王法之、所以立上下」。『大戴禮』曾子天圓「單居離問於曾子曰、天員而地方者、誠有之乎」。

(344) 道會小坐 『老君音誦誡經』(D 562, S 30・24228)「老君曰、

世間有承先父祖事道、自作一法、家宅香火、……如此之人、爲請作道會、滿三約正誠。『鹽鐵論』散不足「今俗、因人之喪以求酒肉、幸與小坐而責辨、歌舞俳優、連笑伎戲」。『梁書』卷三武帝紀下「性方正、雖居小殿暗室、恆理衣冠、小坐押襖、盛夏暑月、未嘗褰袒」。

(345) 天圖 注(343)を見よ。

(346) 道人 ぎの「道士」とともに注(271)を見よ。

(347) 不加兵役 僧順「答道士假稱張融三破論」(『弘明集』卷八、T52・53a)「論云、出家者未見君子、是避役」。「兵役」の語は、『後漢書』紀六質帝紀「又兵役連年、死亡流離、或支骸不飲、或停棺莫收」。

(348) 作兵 『三國志』卷五二吳志顧雍傳注「吳書」(顧)徽應對婉順、因說江東大豐、山藪宿惡、皆慕化爲善、義出作兵」。

(349) 道人見天子王侯不拜 慧遠「沙門不敬王者論」求宗不順化第三(『弘明集』卷五、T52・30c)「斯沙門之所以抗禮萬乘、高尚其事、不爵王侯、而沾其惠者也」。また『弘明集』卷一二序(52・76c)に、「易之蠱爻、不事王侯、禮之儒行、不臣天子、在俗四民、尙有不屈、況棄俗從道、焉責臣禮」とあり、そのものとつくところは、『周易』蠱上九「不事王侯、高尚其事」、「禮記」儒行「儒有上不。臣天子、下不事諸侯……」。なお、彦棕『集沙門不應拜俗等事』(T52)を参照のこと。

(350) 深宮不干政 司馬相如「長門賦」(『文選』卷一六)「下蘭臺而周覽兮、步從容於深宮」。『北齊書』卷四八外戚李祖昇傳「(弟)

祖動性貪慢、兼妻崔氏驕豪干政、時論鄙之」。

(351) 守令 『漢書』卷三一陳勝傳「兵車六七百乘、騎千餘、卒數萬人、攻陳、陳守令皆不在、獨守丞與戰譙門中」、顏師古注「守郡守也、令、縣令也」。

(352) 臣僚 『後漢書』傳六八宦者列傳序「和帝即祚幼弱、而竇憲兄弟專總權威、内外臣僚、莫由親接、所與居者、唯閹宦而已」。

(353) 道會飲酒 一例を挙げれば、『老君音誦誡經』(D562, S30・24226)に、「老君曰、廚會之法、應下三漿、初小食中酒後飯、今世人多不能三下漿、但酒爲前、五升爲限」。

(354) 无過 『左傳』宣公二年「人誰無過、過而能改、善莫大焉」。

(355) 佛會不飲 不飲酒戒は五戒の一つ。

(356) 七出 『孔子家語』本命解「婦有七出。三不去。七出者、不順父母者、無子者、淫僻者、嫉妬者、惡疾者、多口舌者、竊盜者」。『大戴禮』本命篇では「七去」。ただしそれも内容はひとしく、「飲酒」は含まれていない。

(357) 主生 後段の「主死」の語とともに注(337)の『春秋繁露』五行之義篇を見よ。また『三天內解經』卷上(D876, S47・38063)にぎのようにある。「老子主生化、釋迦主死化、故老子剖左腋而生、主左、左爲陽氣、主青宮生錄、釋迦剖右腋而生、主右、右爲陰氣、主黑簿死錄」。

(358) 持齋 『法苑珠林』卷一八「敬法篇」感應緣(T53・417c)「晉周璿者、會稽剡人也、家世奉法、璿年十六、便菜食持齋、誦誦成具及須轉經、正月長齋竟、延僧設八關齋」。「齋」につい

ては郁超「奉法要」(『弘明集』卷一三、T52・86b) につきの
ようにある。「已行五戒、便修歲三月六齋、歲三齋者、正月一
日至十五日、五月一日至十五日、九月一日至十五日、月六齋者、
月八日十四日十五日二十三日二十九日三十日、凡齋日、皆當魚
肉不御、迎中而食、既中之後、甘香美味、一不得嘗」。なお、
道教經典にも「持齋」の語は用いられている。『齋戒錄』(D207、
S11・9000)「無上祕要云、昔有道士、持齋誦經、有一凡人、
爲質作治厨齋堂、道士見其用意、至日中持齋、因喚與同食、食
竟、爲其說法、語此質人、今隨吾持齋、功德甚大、可至明日中
時復食、勿壞爾齋、徒勞無益、能如此者、將可得免見世窮厄、
此人稽首、受戒而去」。

(359) 節食 『三國志』卷三〇魏志東夷高句麗傳「無良田、雖力佃
作、不足以實口腹、其俗節食、好治宮室、於所居之左右立大屋、
祭鬼神、又祀靈星社稷」。

(360) 獨坐 「獨坐」の語は、『後漢書』傳六八宦者單超傳に「其
後四侯轉橫、天下爲之語曰、左回天、具獨坐、徐臥虎、唐兩
墮」、阮籍「詠懷詩」十七首之十五(『文選』卷二三)に「獨坐
空堂上、誰可與歡者」などと用いられているが、後方の引用に
「獨臥」とあるのに従うべきであろう。三本も「獨臥」に作る。
「獨臥」の語は、『神仙傳』彭祖傳「彭祖曰、……古之至人、
恐下才之子、不識事宜、流遷不還、故絕其源、故有上士別牀、
中士異被、服藥百裹、不如獨臥」。

(361) 守一 『莊子』在有「我守其一、以處其和」。『後漢書』傳二

〇下裏楷傳「天神遣以好女、浮屠曰、此但革囊盛血、遂不眊之、
其守一如此、乃能成道」。ここでは、女性が二人の夫につかえ
ないことの含意であろう。班昭「女誡」(『後漢書』傳七四列女
傳)「專心第五、禮、夫有再娶之義、婦無二適之文、故曰夫者
天也」。

(362) 聚宿 『漢書』卷二六天文志「凡五星所聚宿、其國王天下」。

(363) 官鬼、妻財 蕭吉『五行大義』論相尅「五行雖爲君臣父子、
生王不同、逐忌相尅、尅者刑罰爲義、以其力强能制弱、故木尅
土、土尅水、水尅火、火尅金、金尅木、……勝者爲君爲夫爲官、
爲吏爲鬼、負者爲臣爲妻爲財……」。

(364) 理則不然 慧遠「沙門不敬王者論」形盡神不滅第五(『弘明
集』卷五、T52・31b)「求之實當、理則不然」。

(365) 官府 『周禮』天官大宰「大宰之職、掌建邦之六典、以佐王
治邦國、一曰治典、以經邦國、以治官府、以紀萬民」。『莊子』
德充符「勇士一人、雄入於九軍、將求名而能自要者、而猶若是、
而況官天地、府萬物、直寓六骸、象耳目、一知之所知、而心未
嘗死者乎」、成玄英疏「網維二儀曰官天地、苞藏宇宙曰府萬物」。

(366) 兵租 『隋書』卷二四食貨志「至河清三年定令、……率以十
八受田、輸租調、二十充兵」。

(367) 王種 『法苑珠林』卷八「千佛篇」七佛部(T53・334a)
「第一維衛佛、第二式棄佛、第三隨葉佛、此三佛同是刹利王種、
第四拘樓素佛、第五拘那含牟尼佛、第六迦葉佛、此三佛同是婆
羅門種、第七今我作釋迦文佛、是刹利王種」。

- (368) 庶賤 『梁書』卷三八賀琛傳「今畜妓之夫、無有等秩、雖復庶賤微人、皆盛姬姜、務在貪汚、爭飾羅綺」。
- (369) 道經若此 道士が兵役と租調を負擔すべきことを説く道教經典があるのかどうか、未詳。
- (370) 道教 『魏書』卷一一四釋老志「汝宣吾新科、清整道教、除去三張偽法租米錢稅及男女合氣之術」。「眞誥」卷一九「翼眞檢」第一(D 640, S 34・27502)「至義熙中、魯國孔默崇信道教、爲晉安太守」。
- (371) 靈寶大誡は…… 『上清洞眞智慧觀身大戒文』(D 1039, S 56・45411~45413)「道學不得飲酒、……道學不得貪樂榮祿、……道學不得自貴」。ほぼ同文は『無上祕要』卷四五「玉清下元戒品」(D 773, S 42・33586~33589)にもあり、また『道教義樞』卷二「十一部義」(D 762, S 41・33177)にこのようにいう。「戒律者、戒止也、法善也、止者止惡、心口爲誓、不作惡也、戒之爲義、又有詳略、詳者、太清道本无量法門百二十九條・老君及三元品戒百八十條・觀身大戒三百條・太一六十戒之例、是也、略者……」。
- (372) 干貴 『高僧傳』卷一一法相傳(T 50, 406c)「或時裸袒、干冒朝貴」。
- (373) 違犯 『說苑』君道「成湯之後、先王道缺、刑法違犯、桑穀俱生乎朝、七日而大拱」。「魏書」卷一四元思傳「又皇太子以下違犯憲制、皆得糾察、則令僕朝名宜付御史、又亦彰矣」。
- (374) 紘紘 『孫子』勢篇「紛紛紘紘、鬬亂而不可亂也、渾渾沌沌、形圓而不可敗也」。「南齊書」卷二二豫章文獻王傳「怨積聚黨、兇迷相類、止於一處、何足不除、脫復多所、便成紘紘」。
- (375) 指的 『南齊書』卷五二文學陸厥傳「……故愚謂前英已早識宮徵、但未屈曲指的、若今論所申」。
- (376) 飽食終日 『論語』陽貨「子曰、飽食終日、無所用心、難矣哉、不有博奕者乎、爲之猶賢乎已」。
- (377) 養此形骸 『莊子』刻意「吹呿呼吸、吐故納新、熊經鳥申、爲壽而已矣、此道引之士、養形之人、彭祖壽考者之所好也」。同達生「世之人以爲養形足以存生、而養形不足以存生、則世奚足爲哉」。「形骸」の語は、同德充符「今子與我遊於形骸之內、而子索我於形骸之外、不亦過乎」。
- (378) 絕粒服炁 『雲笈七籤』卷五八「諸家氣法」尹真人服元氣術「夫服元氣、先須澄其心、令無思無爲、恬澹而已、故知絕粒者乃長生之徑路、服氣者爲不死之妙門、深信不疑、力行無倦」。同卷六〇「諸家氣法」中山玉樞服氣經「夫求仙道、絕粒爲宗、絕粒之門、服氣爲本、服炁之理、齋戒爲先」。「北史」卷二七李先傳「先少子皎、……皎爲寇謙之弟子、遂服氣絕粒數十年、隱於恒山」。
- (379) 長生之術 『抱朴子』用刑「譬存玄胎息、呼吸吐納、含景內視、熊經鳥伸者、長生之術也」。明僧紹「正二教論」(『弘明集』卷六、T 52・38a)「今之道家所教、唯以長生爲宗、不死爲主……」。
- (380) 捕影之論 『淮南子』說林訓「象肉之味、不知於口、鬼神之

貌、不著於目、捕景之說、不形於心。『漢書』卷二五郊祀志下「谷永說上曰、……及言世有僊人、服食不終之藥、遙興輕舉、登遐倒景、……聽其言、洋洋滿耳、若將可遇、求之、盪盪如係風捕景、終不可得」。本論二十八「服丹成金色」章にも「故捕影之談耳」とある。

- (381) 合氣黃書 僧敏「戎華論折顧道士夷夏論」(『弘明集』卷七、T 52・47c)「符章合氣者、姦狡之窮也」。僧順「答道士假稱張融三破論」(同卷八、T 52・53c)「嘗聞子道又有合氣之事」。惠通「駁顧道士夷夏論」(同卷七、T 52・46c)「……今學道反之、陳黃書以爲真典、佩紫纓以爲妙術、士女無分、閨門混亂。玄光「辯惑論」(同卷八、T 52・48b)「夫滅情去欲、則道心明眞、群斯班姓、妄造黃書、呪癩無端、以伏輕詭」。劉勰「滅惑論」(同卷八、T 52・51b)「好色觸情、世所莫異、故黃書御女、誑稱地仙」。『眞誥』卷二「運題象」第二(D 637, S 34・27342)「紫微夫人授書曰、夫黃書赤界、雖長生之必要、實得生之下術也」。同卷五「甄命授」第一(27371)「君曰、道有黃書赤長生之要、……君曰、此皆道之經也、黃書世多有者、然亦是祕道之事矣」。

- (382) 日月周徑 目次では「日徑不同」。『周徑』の語は、『九章算術』卷一「今有圓田周三十步徑十步、問爲田幾何」注「臣(李)淳風等謹按術意、以周三徑一爲率」。『晉書』卷一「天文志上」「洛書甄曜度春秋考異郵皆云、周天一百七萬一千里、一度爲二千九百三十二里七十一步二尺七寸四分四百八十七分分之三百六

十二、陸續云、天東西南北徑三十五萬七千里、此言周三徑一也、考之徑一、不啻周三……」。

- (383) 文始傳云……『太平御覽』卷二天部天下に引く『關令內傳』にいう。「天地南午北子相去九千萬里、東卯西西亦九千萬里、四隅空相去九千萬里、天去地四十千萬里」。天地間の距離に關しては、注(93)参照。

- (384) 直度、周迴 『立世阿毘曇論』卷二「數量品」(T 32・181c)「鐵圍山水際、徑度十二億二千八百二十五由旬、鐵圍山水際、周迴四十六億八千四百七十五由旬」。「直度」は直徑のこと。張衡「西京賦」(『文選』卷二)「徑百常而莖擢」の薛綜注に、「徑度也」。「周迴」の語は、『眞誥』卷九「協昌期」第一(D 638, S 34・27412)にも、「小方諸亦方面各三百里、周迴一千二百里」。

- (385) 天地午子……『上清道寶經』卷二「地品」(D 1036, S 56・45286)「天地南午北子東卯西酉」。注「四隅空无、相去各九千萬萬里、地厚萬里、下得大空、四角下有自然金柱、復有三千六百金軸、柱方圓五千里、一一相連、神風爲剛、故能低昂前却、眞人內傳」。「四隅」の語は、『淮南子』原道訓「經營四隅、還反於樞」、注「隅猶方也」。また、『爾雅』釋宮「西南隅謂之奧、西北隅謂之屋漏、東北隅謂之宦、東南宮謂之交」、疏「釋曰、此別宮中四隅之異名也」。

- (386) 轉形濟苦經云……『釋迦方志』卷上「統攝篇」(T 51・949c)「道經造立天地記云、崑崙山高四千八百里(注(91)、參照)、

又轉形濟苦經云、高萬九千里、又云、此山飛浮。

- (387) 依濟苦經云……本論「造立天地」章に引用の「廣說品」と一致する。

- (388) 據法……「圓三徑」の圓周率で計算すれば、の意。「據法」の語は、『韓非子』内儲説上に「臨戰而使入絶頭割腹而無顧心者、賞在兵也、又況據法而進賢、其勸甚此矣」。

- (389) 天圓地方、道家恆述『無上祕要』卷六「劫運品」(D768, S41・33386)「天圓十二綱、地方十二紀、……右出洞真三天正法經」。「天圓」「地方」の語は注(343)、参照。「恆述」の語の使用例は未見。

- (390) 等量 曹植「姜薄命行」(『玉臺新詠集』卷九)「騰觚飛爵闌干、同量等色齊顏」。

- (391) 上限 この語の使用例未見。

- (392) 三十三天 六欲天(四天王天・三十三天・夜摩天・兜率陀天・化自樂天・他化自在天)の第二。「智度論」卷九(T25・123a)「問曰、何以名他化自在、答曰、此天奪他所化而自娛樂、故言他化自在、化自樂者、自化五塵而自娛樂故、言化自樂、兜率名知足天、夜摩名善分天、第二名三十三天、最下天是四天王諸天、須彌山高八萬四千由旬、上有三十三天城、須彌山邊有山、名由提陀羅、高四萬二千由旬、此山有四頭、頭各有城、四天王各居一城、夜摩等諸天七寶地、在虛空中、有風持之令住、乃至淨居、亦復如是」。三十三天それぞれの名稱は『正法念處經』卷二五(T17・143b~c)に見えろ。

- (393) 八十一天 本論三十「偸佛經因果」章に諸説をあげ、「或八十一天」とある。『洞玄靈寶本相運度劫期經』(D165, S9・7293)「崑崙山處於土中、凡有八十一重、亦名八十一天、崑崙四面、即名四天下、天王主之、上承帝一」。『上清道寶經』卷二「天品」(D1036, S56・46281)「天地大道之常」、注「天常一天、道常一道、氣變爲九、故曰九天、天八十一天」。

- (394) 又云……『釋迦方志』卷上「統攝篇」(T51・949c)「化胡經云、崑山高九重、相去各九千里、又云、高萬萬五千里」。また前注の『洞玄靈寶本相運度劫期經』参照。

- (395) 帝釋 『涅槃經』卷三三(T19・563c)「云何一義說無量名、猶如帝釋、亦名帝釋、亦名憍尸迦、……亦名寶頂、亦名寶幢、是一義說無量名」。「智度論」卷五六(T25・428a~b)「昔摩伽陀國中有婆羅門、名摩伽、姓憍尸迦、有福德大智慧、知友三十人、共修福德、命終、皆生須彌山頂第二天上、摩伽婆羅門爲天主、三十二人爲輔臣、以此三十三人故、名爲三十三天、喚其本姓故、言憍尸迦、或言天主、或言千眼等」。

- (396) 乖各 「周滅佛法集道俗議事」の注(52)、参照。

- (397) 崑崙飛浮 注(386)の『釋迦方志』卷上に引用の「轉形濟苦經」、参照。

- (398) 文始傳云……本論二十五「延生符」章にも引用されているが、文字に多少の異同がある。また『太平御覽』卷三八地部崑崙山に「真人關尹內傳曰」としてほぼ同文がある。「真人關尹內傳曰、萬億萬歲有一大水、崑崙飛浮、是時飛仙迎取天王及善

民、安之山上也」。

(399) 大水 『上清道寶經』卷二「天品」(D 1036, S 56・45281)

「災有三品」、注「一火、二水、三風、天下无常、豈有堅固、大變已後、四日五日出、時江河枯、大海竭、復六日出、萬物皆盡、譬如脂膏、……數千萬歲、天雨積水、上至第十一天、下面皆有大水」。

(400) 飛仙 『道教義樞』卷一「位業義」(D 762, S 41・33164)

「其九宮位者、下三宮、地仙小乘三品、中三宮、中乘天仙三品、上三宮、大乘飛仙三品」とあって、地仙・天仙・飛仙とランクづけられている。その具體的な使用例は、『魏書』卷一一四釋老志「上處玉京、爲神王之宗、下在紫微、爲飛仙之主」、『海內十洲記』「蓬邱、蓬萊山是也、……無風而洪波百丈、不可得往來、上有九老丈人九天眞王宮、蓋太上眞人所居、唯飛仙有能到其處耳」。

(401) 迎取天王及善民 無名氏「古詩爲焦仲卿妻作」(『玉臺新詠集』卷一)「不久當歸還、還必相迎取」。

「雲笈七籤」卷二二「天地部」九地三十六音「天則有三十六天王、以應三十六國、地則有三十六土皇、以應三十六天」、『無上祕要』卷六「劫運品」(D 768, S 41・33386)「小劫交則萬帝易位、九氣改度、日月縮運、陸地涌於九泉、水母決於五河、大鳥屯於龍門、五帝受會於玄都、當此之時、凶穢滅種、善民存焉、……右出洞眞三天正法經」。なおまたそれについて引かれている『洞玄玉訣經』のつぎの文章をも参照。「天地大劫之欲交、諸天至眞尊神妙行眞

人、不遊五嶽、遙觀天下至學之人、洪流彌天、皆以五龍迎之、登福地、令得與元始同沒共生也」。

(402) 大火 『後漢書』傳七二方術上樊英傳「嘗有暴風從西方起、

英謂學者曰、成都市火甚盛、因含水向西向漱之、乃令記其日時、客後有從蜀都來、云是日大火、有黑雲卒從東起、須臾大雨、火遂得滅、於是天下稱其術藝」。また注(399)の『上清道寶經』、参照。

(403) 濟苦經云…… 本論十五「日月普集」章にも「濟苦經云、乾

坤洞然之後、乃使巨靈胡亥造山川、玄中造日月……」とあり、二十五「延生符」章にも「又濟苦經、乾坤洞然之後、潰然空蕩」とある。また『洞玄靈寶本相運度劫期經』(D 165, S 9・7293)に類似的文章がある。「……劫燒乾坤、萬物灰揚、上無天色、下無地淵、上下諛謔、混然空蕩、濫風鴻鴻、赤炁彌張、方遣授記之賢、持爐鑪籥、排托施張、彫造乾坤、清炁上昇爲天、濁炁下降爲地、清布陽道、濁布陰道、步天量地、制作東西南北四維上下中央、方遣巨靈胡亥、建造山川五嶽四瀆、通之海源、授記賢主玄中、養以靈寶眞精、凝成日月星宿……」。

(404) 天地劫燒、洞然空蕩 『維摩經』佛道品(T 14・550a)「或

現劫盡燒、天地皆洞然」。「空蕩」の語は前注の『洞玄靈寶本相運度劫期經』に見える。

(405) 清炁爲天、濁炁爲地 注(86)を見よ。

(406) 巨靈胡亥 注(403)の『洞玄靈寶本相運度劫期經』にその名が見える。ただし、それによれば日月を造ったのは玄中。巨靈

は張衡『西京賦』（『文選』卷二）にも登場する。「綴以二華、巨靈、鼉、高掌遠趾、以流河曲、厥跡猶存」。その薛綜注に、「華、山名也、巨靈、河神也、巨、大也、古語云、此本一山、當河水過之而曲行、河之神以手擘開其上、足蹶離其下、中分爲二、以通河流、手足之跡、于今尚在、鼉、作力之貌也」。また李善注に、「遁甲開山圖曰、有巨靈胡者、徧得坤元之道、能造山川、出江河」。また『太上老君開天經』（D 1169, S 57・46401）の胡臣と胡靈も關連があろう。「……太素既沒、而有混沌、混沌之時、始有山川、老君下爲師、教示混沌、以治天下、七十二劫、混沌流行、成其山川、五嶽四瀆、高下尊卑、乃其始起也、混沌已來、始有識名、混沌號生二子、大者胡臣、小者胡靈、胡臣死爲山嶽神、胡靈死爲水神、因即名爲五嶽四瀆、山川高下……」。

(407) 造立 注(59)を見よ。

(408) 火焚 『國語』周語下「……是以人夷其宗廟、而火焚其彝器、子孫爲隸、下夷於民、而亦未觀夫前哲令德之則」。『劉子新論』言苑「……是以火焚而怨燧人、溺井而尤伯益」。

(409) 獨立 『周易』大過象傳「君子以獨立不懼、遯世无悶」。『後漢書』傳六九上儒林戴憑傳「時詔公卿大會、群臣皆就席、憑獨立、光武問其意、憑對曰、博士說經皆不如臣、而坐居臣上、是以不得就席」。

(410) 度人妙經云…… 現存の『度人妙經』には對應する文章を見いだし得ない。本論二十七「隨劫生死」章に、「如度命妙經云」

として、「其玉清上道三洞神經眞文玉字、出於元始、在二十八天无色界上、大羅玉京山玄臺、災所不及」と一部分重なる引用があり、それと對應する文章は下に引用する『太上諸天靈書度命妙經』（D 26, S 2・1205）に見いだされるから、『度命妙經』の誤りかと思われる。「其玉清上道三洞神經神眞虎文金書玉字靈寶眞經、並出元始、處於二十八天無色之上、大劫周時、其文並還無上大羅中玉京之山七寶玄臺、災所不及、大羅天是五億五萬五千五百五十五天之上天也」。なお注(92)と注(94)、参照。

(411) 太上慈愍 『元始无量度人上品妙經四注』卷一（D 38, S 3・1649）の開卷冒頭、「太上洞玄靈寶无量度人上品妙經」なる經題の注に、「（薛）幽棲曰、太者、至大之名、上者、尊崇之稱……」。つづいて「道言」の注に、「幽棲曰、即太上玉晨高聖大道君之言也」。「慈愍」の語は、『法華經』如來壽量品（T 9・43a～b）「若父在者、慈愍我等、能見救護」、『梁書』卷五四諸夷丹國傳「朝望國執、慈愍蒼生、八方六合、莫不歸服」。

(412) 看死不迎、是不慈也 慧義「答范伯倫書」（『弘明集』卷一二、T 52・78a）に「きのようにあるのを参照」。「戒防沙門不得身手觸近女人、凡持戒之徒、見所親漂溺深水、視其死亡、無敢救者、於是世人謂沙門無慈、此何道之有……」。「不慈」の語は、『莊子』盜跖「堯不慈、舜不孝、禹偏枯、湯放其主、武王伐紂、文王拘羑里」。

(413) 欺詐 『三國志』卷一六魏志倉慈傳「又常日西域雜胡欲來貢獻、而諸豪族多逆斷絕、既與實遷、欺詐侮易、多不得分明、胡

常怨望、慈皆勞之」。

(414) 度人本行經云…… 本論二十七「隨劫生死」章に、こより長文にわたる引用がある。

(415) 自餘 『魏書』卷六二李彪傳「至若尼父之別魯籍、丘明之辨孔志、可謂婉而成章、盡而不汚者矣、自餘乘志之比、其亦有趣焉」。

(416) 深大愚駭 『抱朴子』用刑「仁之爲政、非爲不美也、然黎庶巧僞、趨利忘義、若不齊之以威、糾之以刑、遠義義農之風、則亂不可振、其禍深大、以殺止殺、豈樂之哉」、『魏書』卷一五常山王遵傳「陪斤子昭、小字阿倪、尙書張彝引兼殿中郎、高祖將爲齊郡王簡舉哀、而昭乃作宮懸、高祖大怒、詔曰、阿倪愚駭、誰引爲郎」。

(417) 法道天置官 目次に「法道立官」とあるのに従う。

(418) 五符經云…… 『太上靈寶五符序』卷上(D 183, S10.7973)「中黃道君曰、天生萬物、人爲貴、人一身形、包含天地・日月・北斗・璇璣・玉衡・五嶽・四瀆・山川・河海・風伯・雨師・靈星・社稷・麒麟・鳳凰・龍虎・玄武・五穀・桑麻・六畜・牛馬・鳥獸・魚鼈・龜鼈・竹木・百草、無所不法也、亦立天子、置三公・九卿・二十七大夫・八十一元士、亦布九州・百二十郡・千二百縣・萬八千鄉・三萬六千亭・十八萬垓、亦有宮闕・家宅・門戶・井竈・釜甑、粳稷黍稷、諸神可飲食者、人而知之、即可長生也、人頭圓象天、足方法地、髮爲星辰、目爲日月、眉爲北斗、耳爲社稷、鼻爲丘山、口爲江河、齒爲玉石、四肢爲四

時、五臟法五行、亦爲五帝、亦爲五曹、上爲五星、下爲五嶽、內爲五王、外爲五德、升爲五雲、化爲五龍、五臟者、謂肺心肝脾腎也、六腑者、膽爲肝腑、胃爲脾腑、大腸爲肺腑、小腸爲心腑、膀胱爲腎腑、膽爲都鄉腑、膽爲天子大道君、脾爲皇后貴女、心爲太尉公、左腎爲司徒公、右腎爲司空公、八卦神八者、并膽太一爲九卿、十二環樓神十二人、脾中諫議大夫十二人、并三膽神三人、合二十七大夫、四肢神爲八十一元士、上元氣爲冠蓋使者、下元氣爲大鴻臚、上部九變、中部九孔、下部九名、法九州也、三公府、九卿府、二十七大夫府、八十一元士府、合爲百二十府、府內爲五曹、外爲五官、合爲十官、爲千二百縣、中神萬八千爲萬八千鄉、上神三萬六千爲三萬六千亭、亭有五垓、爲十八萬垓、又肺爲玉堂宮尙書府、心爲絳宮元陽府、肝爲青陽宮蘭臺府、膽爲紫微宮無極府、脾爲中宮太素府、腎爲幽昌宮太和府」。なお『上清太上開天龍蹻經』卷五(D 1037, S 56.46335)にも類似的記述がある。

(419) 中黃道君 『雲笈七籤』卷三「道教本始部」天尊老君名號歷劫經略「……故黃帝以道治世一百二十年、於鼎湖山、白日昇天、上登太極宮、號曰中黃真人」。同卷一〇〇「軒轅本紀」「黃帝捨帝王之尊、……南至青城山、禮謁中黃丈人」。

(420) 天生萬物 『老子』四十二章「道生一、一生二、二生三、三生萬物」、『鹽鐵論』刑德「天之生萬物、以奉人也、主愛人、以順天也」。

(421) 人爲貴 『孝經』聖治章「天地之性、人爲貴、人之行、莫大

於孝」。

- (422) 人身 『抱朴子』微旨「山川草木、井竈滄池、猶皆有精氣、及人身中」。

- (423) 苞含 夏侯湛「東方朔畫贊」(『文選』卷四七)「夫其明濟開豁、包含弘大、凌轡卿相、謝晒豪桀……」。

- (424) 三公……八十一元士 『禮記』王制「天子三公・九卿・二十七大夫・八十一元士」。

- (425) 九州……千二百縣 『周禮』地官大司徒「以天下土地之圖、周知九州之地域、廣輪之數」。百二十郡と千二百縣のもとづくところは未詳。

- (426) 太尉、司徒、司空 この三者を三公とするのは後漢の制。『通典』卷二〇職官典三公總敘「後漢惟有太傅一人、謂之上公、及有太尉司徒司空、而無師保、太尉公主天、司徒公主人、司空公主地」。なお、以上までの記述とはば一致する文章が『太上老君中經』卷下「第三十七神仙」(D 839, S 45・36425)にもある。「肺爲尙書、肝爲蘭臺、心爲太尉公、左腎爲司徒公、右腎爲司空公、脾爲皇后貴人夫人、膽爲天子大道君……」。

- (427) 八神及齊 『黃庭內景玉經註』卷中「治生章」第二十三 (D 190, S 11・8289)「兼行形中八景神」の梁丘子注に、「玉緯經云、五臟有八卦天神、宿衛太一、八使者主八節日、八卦合太一爲九宮、八卦外有十二樓、樓謂喉嚨也、臍中爲太一君、主人之命也、一名大極、一名太湖、一名崑崙、一名持軀、主身中萬二千神也」。「齊」は臍と同じ。

- (428) 珠樓神十二 前注に「八卦外有十二樓」というものであろう。同卷中「若得章」第十九 (8283) にも「若得三宮存玄丹、太一流珠安崑崙、重中樓閣十二環、自高自下皆真人」とあり、その注に「高下三田十二樓閣、皆有真神」。

- (429) 胃神十二 『太上老君中經』卷上「第二十神仙」(D 839, S 45・36417~36418)「胃爲太倉、三皇五帝之廚府也、房心爲天子之宮、諸神皆就太倉中飲食、故胃爲太倉、日月三道之所行也、又爲大海、中有神龜、神龜上有七星、北斗正在中央、其龜黃色、狀如黃金盤、左右日月照之、故臍下爲地中、中有五嶽四瀆、水泉交通、崑崙弱水、沈沈混混、玄冥之淵也、日月之行、故天晝日照於地下萬神、皆得其明、人亦法之、晝日下在臍中、照於丹田、臍中萬神、皆得其明也、夜日在胃中、上照於胃中萬神、行遊嬉戲、相與言語、故令人有夢也、天不掩人不備、故召其神、問善惡吉凶之事、令腎者自慎也、夜月在臍中、下照於萬神、晝月在胃中、上照胃中萬神、更相上下、無有休息、故胃中神十二人。諫議大夫、名曰黃裳子、黃騰子、中黃子、主傳相太子、玄光玉女主取金液神丹芝草玉液松脯、諸可飲食者立至矣」。

- (430) 三焦神三…… 『黃庭內景玉經註』卷上「心神章」第八 (D 190, S 11・8272~8273)「六府五臟神體精」の梁丘子注に、「資保一身、廢一不可、故曰神體精、心肝肺腎膽爲五臟、膽胃大腸小腸膀胱三焦爲六腑、所言腑者、猶府邑之府、取中受物之義、故曰腑也、臟者、各是一質、共藏於身、故謂之臟也、言三焦者多矣、而未的其眞、蓋心肝肺三臟之上、係管之中爲三焦、中

黃經云、肺首爲三焦、當指其所也。

なお以上までの記述とはば一致する文章が『太上老君中經』

卷上「第十四神仙」(D 839, S 45・36415)にもある。「臍者、人之命也、一名中極、……一名五城、……五城之外有八吏者、八卦神也、并太一爲九卿、八卦之外有十二樓者、十二太子十二大夫也、并三焦神、合爲二十七大夫、四支神爲八十一元士」。

(431) 尙書府、蘭臺府 『黃庭內景玉經註』卷中「常念章」第二十

二 (D 190, S 11・8388)、「六府修治勿令故」の梁丘子注に、

「按洞神經云、六府者、謂肺爲玉堂宮尙書府、心爲絳宮元陽府、肝爲清冷宮蘭臺府、膽爲紫微宮無極府、腎爲幽昌宮太和府、脾爲中黃宮太素府、異於常六府也」。また注(426)の『太上老君中經』、參照。本論「造立天地」章に、「老君以心爲華蓋、肝爲青帝宮、脾爲紫微宮、頭爲崑崙山」とあるのとは異なる。尙書府は政務執行機關、蘭臺府は御史臺のこと。『漢官解詁』(『太平御覽』卷二二五職官部御史中丞)「建武以來、省御史大夫官屬、入侍蘭臺、蘭臺有十五人、特置中丞一人以總之、此官得舉非法、其權次尙書」。

(432) 近代 皇甫謐「三都賦序」(『文選』卷四五)「其中高者、至

如相如上林、楊雄甘泉、班固兩都、張衡二京、馬融廣成、王生靈光、……皆近代辭賦之偉也」。

(433) 古縣大而郡小……『左傳』哀公二年「克敵者、上大夫受縣、

下大夫受郡」、杜預注「周書作雒篇、千里百縣、縣有四郡也」。従つて「周書洛誥」は「周書作雒」の誤りと思われる。なお、

このあたりと關連する記事が法琳『辯正論』卷六「氣爲道本篇」(T 52・536b)にある。「案周禮、自堯已前、未有郡縣、舜巡五岳、始見州名、尙書禹貢已來、方陳州號、春秋之時、縣大郡小、鄉屬於縣、漢高已來、以縣屬郡、典誥所明、九州禹跡、百郡秦并、是也、……並如笑道論中委出也」。

(434) 誣惛迷謬 『漢書』卷八二王商傳「執左道以亂政、誣罔諄大

臣節、故應是而日蝕」。『後漢書』傳一四馬援傳「海內不知其過、衆庶未聞其毀、卒遇三夫之言、橫被誣罔之讒」。『三國志』卷八魏志陶謙傳注「吳書」「雖悔往者之迷謬、思奉教於今日、然兵連衆結、鋒鏑布野、恐一朝解散、夕見係虜、是以阻兵屯據、欲止而不敢散也」。『宋書』卷六八彭城王義康傳「若有迷謬之愆、可責之罪、正可數之以善惡、導之以義方」。

(435) 稱南無佛 『法華經』方便品(T 9・36a)「若人散亂心、入於

塔廟中、一稱南無佛、皆已成佛道」。郗超「奉法要」(『弘明集』卷一三、T 52・86a)「外國音稱南無、漢曰歸命」。

(436) 老化胡王 『辯正論』卷五「佛道先後篇」(T 52・522b)「皇

甫謐云、老子出關、入天竺國、教胡王爲浮圖」。引用の「化胡經」は未詳。

(437) 不受其教 任昉「到大司馬記室牋」(『文選』卷四〇)「況昉

受教君子、將二十年」、李善注「魏文帝令曰、況吾託士人之末列、曾受教君子哉」。

(438) 其道大興 『周易』益象傳「益、損上益下、民說无疆、自上

下下、其道大光」。『抱朴子』審舉「若使海內畏妄舉之失、凡人

息憊倖之求、背競逐之末、歸學問之本、儒道將大興、而私貨必漸絕。

- (439) 不信受 『法華經』方便品(T 9・10b)「當來世惡人、聞佛說一乘、迷惑不信受、破法墮惡道」。

- (440) 稽首 『禮記』曲禮下「大夫士見於國君、君若勞之則還辟、再拜稽首、君若迎拜則還辟、不敢答拜」、『無量壽經』卷上(T 12・267a)「號曰法藏、高才勇哲、與世超異、詣世自在如來所、稽首佛足、右邊三匝、長跪合掌、以頌讚曰……」。

- (441) 流沙塞有加夷國 加夷國はカピラバストを意識した命名であろう。『翻譯名義集』卷三(T 54・1096c~1097a)に、「西域記云、劫比羅代罕堵、舊曰迦毘羅衛、訛也、或名迦維衛、或名迦夷、此云赤澤」とある。「流沙」の語は、『尚書』禹貢「導弱水至于合黎、餘波入于流沙」、顏氏家訓「勉學「夫老莊之書、蓋全真養性、不肯以物累己也、故藏名柱史、終蹈流沙、愚跡漆園、卒辭楚相」。

- (442) 劫盜 『南齊書』卷二六王敬則傳「郡舊多剽掠、有十數歲小兒於路取遺物、殺之以徇、自此道不拾遺、郡無劫盜」。

- (443) 守塞 『漢書』卷四九鼂錯傳「陛下幸憂邊境、遣將吏發卒以治塞、甚大惠也、然令遠方之卒守塞、一歲而更、不知胡人之能」。

- (444) 憂婆塞、憂婆夷 『法華經』序品(T 9・2b)「爾時會中比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷……及諸小王・轉輪聖王、是諸大眾、得未曾有、歡喜合掌、一心觀佛」、『魏書』卷一一四釋老志「俗

人之信憑道法者、男曰優婆塞、女曰優婆夷」。

- (445) 胡言 『魏書』卷一一四釋老志「諸服其道者、則剃落鬚髮、釋累辭家、結師資、遵律度、相與和居、治心修淨、行乞以自給、謂之沙門、或曰桑門、亦聲相近、總謂之僧、皆胡言也」。

- (446) 歸命、救我 『法華義疏』卷四(T 34・509b)「南無者、歸命也、救我也、歸命者、以命歸投十方諸佛也、諸佛獎勵說於三乘、則延眾生慧命、便是延釋迦命、是故釋迦以命歸投諸佛、諸佛勸說三乘、既是救濟眾生、即是救濟釋迦、故稱救我也」。

- (447) 善信男、善信女 玄應『一切經音義』卷二一「鄔波索迦、或言優波娑迦、近侍也、言優婆塞者、訛也、此云近善男、亦云近宿男、謂近三寶而住宿也、或言清信士善宿男者、義譯也、鄔波斯迦、或言優婆娑迦、此云近善女、言優婆夷者、訛也。ちなみに、『法苑珠林』卷五五「破邪篇」妄傳邪教(T 53・703b)に「つぎのことくあるのを参照。「如道經之内、本無優婆塞優婆夷檀越賢者達嚩之名、今諸道士、並皆偷用、未知此名爲是漢語、爲是梵音、若是漢語、何故諸史無文、若是梵音、未知此言翻表何義……」。

- (448) 婆者…… 『廣韻』卷二下平八戈「婆、老母稱也」。

- (449) 依字釋詁 『爾雅』に「釋詁」篇あり。その疏に、「釋、解也、詁、古也、古今異言、解之使人知也、釋言則釋詁之別、故爾雅敘篇云、釋詁釋言、通古今之字、古與今異言也。「依字」の語の使用例は未見。

- (450) 醜拙困辱 『高僧傳』卷一〇邵碩傳(T 50・392c)「居無常

所、恍惚如狂、爲人大口、眉目醜拙。『韓非子』詭使「今士大夫不羞汙泥醜辱而宦、女妹私義之門不待次而宦。『史記』卷七○張儀列傳「蘇秦……因而數讓之曰、以子之材能、乃自令困辱至此、吾寧不能言而富貴子、子不足收也」。

- (451) 鳥跡前文 崔瑗「草書體」(『初學記』卷二「文部文字」)「書體之興、始自頡皇、寫彼鳥跡、以定文章」。顏延之「皇太子釋奠會作詩」(『文選』卷二〇)「遍彼前文、規周矩值」。

- (452) 洞神三皇經稱……『洞神八帝妙精經』の「西城要訣三皇天文內大字」(D 342, S 19・14785)にほぼ同文がある。「仙人曰、皇文乃是三皇以前鳥跡之始大章者也……」。それと同じと思われものが『無上祕要』卷四九「三皇齋品」(D 774, S 42・3362)にも引かれているが、文章はすこし異なる。「謹按上宰西城真人王君曰、夫皇天文書者、乃是三皇之時所受上眞皇一雲象之大章者也……」。また『洞神三皇經』はたとえば『無上祕要』卷四三「修道冠服品」(D 773, S 42・33574)に引用されているが、『道教義樞』卷二「三洞義」(D 763, S 41・33169)に「このようにいうのを参照。『今檢三洞、經目不同、洞神則言洞神三皇、洞玄則言洞玄靈寶、洞眞雜題諸名、此則三皇是逐教緣爲題、以三皇是稟教之緣故也、靈寶是取教主爲題、以生神用靈寶目君故也、洞眞无通題、雜題諸名者、此亦示神无方不可定耳』」。
- (453) 西域仙人 前注の『洞神八帝妙精經』によれば、西域王君、すなわち王遠(王方平)のこと。

- (454) 又云……『無上祕要』卷六「帝王品」(D 768, S 41・33387)

「黃帝曰、三皇者則三洞之尊神、大有之祖氣也、天寶君者是大洞太元玉玄之首元、靈寶君者是大洞太素混成之始元、神寶君者是洞神皓靈太虛之妙氣、故三元凝變、號曰三洞、氣洞高虛、在於大羅之分、故大洞處於玉清之上、洞玄則在於上清之域、洞神總號則在於太極、大洞之氣則天皇是矣、洞玄之氣則地皇是矣、洞神之氣則人皇是矣、天皇主氣、地皇主神、人皇主生、三合成德、萬物化焉、……右出三皇經」。

- (455) 三洞之尊神、大有之祖炁 『洞玄靈寶自然九天生神章經』(D 165, S 9・7280)に「三寶大有金書」として、「天寶君者則大洞之尊神、天寶丈人則天寶君之祖炁也、……靈寶君者則洞玄之尊神、靈寶丈人則靈寶君之祖炁也、……神寶君者則洞神之尊神、神寶丈人則神寶君之祖炁也、……此三號雖年殊號異、本同一也、分爲玄元始三炁而治三寶、皆三炁之尊神……」。また注(56)の『道門經法相承次序』、参照。「大有」については『九天生神章經注』卷上(D 168, S 11・8188)の「三寶大有金書」の注に、「大有、天寶宮名、度人經云大有妙庭、言天宮豐盛、無以加也、此書嘗祕藏於是宮」。また『雲笈七籤』卷八「三洞經教部」釋太上大道君洞眞金玄八景玉籙に、「夫大有者九天之紫宮、小有者清虛三十六天之首洞」。もとづくところは『周易』の「大有」であろう。その象傳に、「火在天上、大有」。
- (456) 天皇、地皇、人皇 『春秋緯』(『藝文類聚』卷一「帝王部天皇氏」)「天皇地皇人皇、兄弟九人、分九州、長天下也」。
- (457) 三合成德 『穀梁傳』莊公三年「獨陰不生、獨陽不生、獨天

不生、三合然後生。『雲笈七籤』卷二「混元洞開闢劫運部」混沌「太始經云、……下三氣各相去九十九萬億九十九萬歲、三合成德、共成太上也、靈寶經曰、……三氣爲天地之尊、九氣爲萬物之根、故三合成德、天地之極也」。

(458) 萬物化生 注(336)を見よ。

(459) 南極真人問事品 未詳。南極真人の名は、『雲笈七籤』卷四「道教經法傳授部」上清經述に「……於是清虛真人王君、乃命侍女華散條李明允等、使披雲籙、開玉笈、出太上寶文八素隱書……高仙羽玄等經三十一卷、是王君昔於陽洛山遇南極真人西城王君所授者也」とあらわれ、『上清道類事相』卷二「仙房品」(D 765, S 41・3372)に引用する『上清變化七十四方經』に南極長生司命君や南極長生元君の名があらわれる。

(460) 靈寶真文三十六卷 陸修靜「太上洞玄靈寶授度儀表」(D 294, S 16・12744)「伏尋靈寶大法、下世度人、玄科舊目三十六卷、符圖則自然空生、讚說皆上眞注筆……」。『雲笈七籤』卷四「道教經法傳授部」靈寶經目序(陸修靜)「夫靈寶之文、始於龍漢、龍漢之前、莫之追記、延康長劫、混沌無期、道之隱淪、寶經不彰、赤明革運、靈文興焉、……上皇元年、元始下教、大法流行、衆聖演暢、修集雜要、以備十部三十六帙、引導後學、救度天人」。(461) 在玉京山玄臺玉室 本論二十七「隨劫生死」章につきのものにある。「如度命妙經云、……其玉清上道三洞神經眞文玉字、出於元始、在二十八天无色界上、大羅玉京山玄臺、災所不及、故自然之文、與運同生同滅」。また『無上祕要』卷二「仙都

宮室」(D 770, S 41・3372)に「如右のようである。『大羅天宮臺、七寶玄臺、右在大羅天中玉京山上、大劫周時、三洞神經、並在其中、災所不及、……右出洞玄經』。『玉室』の語は、郭璞「蜜蜂賦」(『藝文類聚』卷九七蜂)「繁布金房、疊構玉室」、『晉書』卷八〇許邁傳「遺(王)羲之書云、自山陰南至臨安、多有金堂玉室、仙人芝草、左元放之徒、漢末諸得道者皆在焉」。

(462) 眞文大字滿中 『眞誥』卷二〇「翼眞檢」第11(D 640, S 34・27506)「楊書靈寶五符一卷、本在句容葛籙間、泰始某年、葛以示陸先生、陸既敷述眞文赤書人鳥五符等教授、施行已廣」。庾信「道士步虛詞」十首之八「龍泥印玉策、大火煉眞文」。『雲笈七籤』卷三「道教本始部」靈寶略紀「在昔帝嚳時、太上遣三天眞皇、齋靈寶五篇眞文、以授帝嚳、奉受供養」。『抱朴子』登涉「又天文大字有北帝書、寫帛而帶之、亦辟風波蛟龍水蟲也」。『無上祕要』卷四三「讀經軌度品」(D 773, S 42・3377)「凡讀天皇地皇人皇大字、修行其道、皆向南再拜、叩齒十二通、咽氣十二過……」。『滿中』の語は、『晉書』卷二七五行志上「海西太和中、會稽山陰縣起倉、鑿地得兩大船、滿中錢、錢皆輪文大形」。

(463) 天地淪沒 『雲笈七籤』卷二「混元洞開闢劫運部」劫運「上清三天正法經云、……大劫交則天地翻覆、河海湧決、人淪山沒、金玉化消、六合冥一」。『漢書』卷二五郊祀志上「或曰、周顯王之四十二年、宋大丘社亡、而鼎淪沒於泗水彭城下」。(464) 萬成萬壞 『太平經鈔』甲部卷一(王明『太平經合校』一頁)

につぎのようにあるのを参照。「昔之天地與今天地、有始有終、同無異矣、初善後惡、中間興衰、一成一敗、陽九百六、六九乃周、周則大壞、天地混噩、人物糜潰」。「成壞」は佛教の四劫、すなわち成住壞空の觀念を借用したものである。『釋迦方志』卷下「時住篇」(T51・973b)「案索訶世界、一大劫中、千佛出世、尋夫劫波之號、不可以時數推之、假以方石芥城、准爲一期之候、中含四大中劫、謂成住壞空也」。

(465) 以伏羲爲三皇 孔安國「尚書序」「古者伏羲氏之王天下也、始畫八卦、造書契、以代結繩之政、由是文籍生焉、伏羲神農黃帝之書、謂之三墳、言大道也、少昊顓頊高辛唐虞之書、謂之五典、言常道也」、釋文「犧本又作羲、亦作戲、……一號包羲氏、三皇之最先」。

(466) 淮南子云……『淮南子』說山訓「見鯨木浮而知爲舟、見飛蓬轉而知爲車、見鳥迹而知著書、以類取之」、同修務訓「昔者蒼頡作書、容成造曆」、等。引用文と類似的表現は、『說文解字』敘「黃帝之史倉頡、見鳥獸蹏迒之迹、知分理之可相別異也、初造書契、百工以义、萬品以察」、「帝王世紀」(『太平御覽』卷二三五職官部太史令)「黃帝使蒼頡取象鳥跡、始作文字之篆」、「皇帝」と「黃帝」はしばしば混同されるが、たとえば「帝王世紀」(『瑤玉集』卷一四)に「皇帝、古者三皇、即軒轅黃帝也」。

(467) 張騫取經 いくつかのヴァリエーションがある後漢明帝の感夢求法傳説のなかで、「四十二章經序」(『出三藏記集』卷六、T55・42c)に、張騫が取經のための使者として遣わされたと

する。「昔漢孝明皇帝、夜夢見神人、身體有金色、項有日光、飛在殿前、意中欣然甚悅之、明日問群臣、此爲何神也、有通人傅毅曰、臣聞天竺有得道者、號曰佛、輕舉能飛、殆將其神也、於是上悟、即遣使者張騫・羽林中郎將秦景・博士弟子王遵等十二人、至大月支國、寫取佛經四十二章、在十四石函中、登起立塔寺」。

(468) 迦葉菩薩 本論十八「老子作佛」章に引用の『化胡經』にも迦葉菩薩が登場し、老子の化身とされているが、『化胡經』に對抗すべく佛教側が製作した僞經では老子を迦葉の化身としている。僧敏「戎華論折顧道士夷夏論」(『弘明集』卷七、T52・47b)「故經云、大士迦葉者、老子其人也」。道安「二教論」服法非老第九(『廣弘明集』卷八、T52・140a)「清淨法行經」云、佛遣三弟子、振旦教化、儒童菩薩、彼稱孔丘、光淨菩薩、彼稱顏淵、摩訶迦葉、彼稱老子」。法琳「破邪論」(同卷一一、T52・162b)「老子大權菩薩經」云、老子是迦葉菩薩、化遊震旦」。明槩「決對傳突廢佛法僧事」(同卷一一、T52・174c~175a)「須彌圖經」云、寶應聲菩薩化爲伏羲、吉祥菩薩化作女媧、儒童應作孔丘、迦葉化爲李老、妙德託身開士、能儒誕孕國師」。

(469) 韓平子、張陵、建平子、午室 法琳「辯正論」卷六の「十喻篇」(T52・525c)に「韓平子、張陵、建平子、午室」を参照。「開士曰、檢諸史正典、無三隱三顯出沒之文、唯臧競諸操等老義例云、爲孔說仁義禮樂之本、爲一時、被王之世、千室。以疾病致感老君、授百八十戒并太平經一百七十篇、爲二時、至漢安帝時、授張天師」。

正一明威之教、于時自稱周之柱史、爲太上所遣、爲三時也。

同様の記事は、P二三五三『老子道德經開題序訣義疏』（大淵忍爾『敦煌道經 圖錄編』四六三頁）にも見える。午室は、三本では「千室」、宮本では「千室」に作り、いずれが正しいのか定めがたいが、于吉の轉訛とも考えられる。韓平子、建平子については未詳。

- (470) 陵遲 『詩經』王風大車序「禮義陵遲、男女淫奔」。陳琳「爲袁紹檄豫州」(『文選』卷四四)「方今漢室陵遲、綱緯弛絶、聖朝無一介之輔、股肱無折衝之勢」。

- (471) 歲星晝現、西方夜明 『南齊書』卷一「三天文志下」(「永明元年」)七月壬午、歲星晝見。『夜明』の語は『左傳』莊公七年「夏、恆星不見、夜明也」にもとづくが、道安「二教論」教指通局第十一(『廣弘明集』卷八、T52・142a)に「於是慧光遐照、莊王因覩夜明、靈液方津、明帝以之神夢」とあるのを参照。なお、この前後、「至漢明永平七年甲子歲、星晝現西方、夜明、帝夢神人……」と句讀する説もあった。

- (472) 帝夢神人 注(467)を見よ。

- (473) 長一丈六尺、項有日光 『後漢記』卷一〇永明十三年「佛身長一丈六尺、黃金、項中佩日月光」。『洛陽伽藍記』卷四白馬寺「帝夢金神、長丈六、項背日月光明」。注(65)をも参照。

- (474) 成道號佛 『法華經』見寶塔品(T9・32c)「彼佛成道已、臨滅度時、於天人大衆中、告諸比丘、我滅度後、欲供養我全身者、應起一大塔」。孫綽「喻道論」(『弘明集』卷三、T52・17c)

「端坐六年、道成號佛、三達六通、正覺無上」。

- (475) 窮河源 『史記』卷一二三大宛列傳「……而漢使窮河源、河源出于賓、其山多玉石、采來」。

- (476) 三十六國 『漢書』卷九六西域傳上「西域以孝武時始通、本三十六國、其後稍分至五十餘、皆在匈奴之西、烏孫之南」。

- (477) 舍衛 玄應『一切經音義』卷三「舍衛國、十二遊經云無物不有國、或言舍婆提城、或言捨羅婆悉帝夜城、並訛也、正言室羅伐國、此譯云聞者城、法鏡經云聞物國、善見律云、舍衛者是人名、昔有人居住此地、往古有王見此地好、故乞立爲國、以此人名號舍衛國、一名多有國、諸國珍奇、皆歸此國也」。

- (478) 佛已涅槃 『涅槃經』卷一(T12・365c)「一時佛在拘尸那國力士生地阿利羅跋提河邊娑羅雙樹間、……二月十五日、臨涅槃時、以佛神力、出大音聲、其聲遍滿、乃至有頂」。

- (479) 寫經六十萬五千言 未詳作者「放光經記」(『出三藏記集』卷七、T35・47c)の記事と關連があるかも知れぬ。「惟昔大魏顯川朱士行、以甘露五年、出家學道、爲沙門、出塞西至于闐國、寫得正品梵書胡本九十卷六十萬餘言、以太康三年、遣弟子弗如檀、晉字法饒、送經胡本至洛陽」。ちなみに、『三洞珠囊』卷九「老子化西胡品」(D782, S42・33897)に引く「老子化胡經」には、老子は胡人のために「六十四萬言經无上正眞之道」を作ったとある。

- (480) 漢書云…… 『後漢書』傳六五劉焉傳「(張)魯字公旗、初祖父陵、順帝時客於蜀、學道鶴鳴山中、造作符書、以惑百姓……」。

蛇に吞まれたことは、注(315)の『蜀記』に見える。

(481) 妄作 注(128)を見よ。

(482) 案漢書……『漢書』卷六一張騫傳贊「自張騫使大夏之後、窮河源、惡睹所謂昆侖者乎」。ことわるまでもなく、張騫は漢の武帝の使者として西域に遠征した。

(483) 長仙 『周氏冥通記』卷一(D162, S9・6798)「卿朝夕燒香、乞長生神仙、今既果願、復何所言」。『續高僧傳』卷六曇鸞傳(T50・470a)「本草諸經、具明正治、長年神仙、往往聞出」。

(484) 代代受使 「代代」の語は、注(110)を見よ。「受使」の語は、『後漢書』傳一八上馮衍傳「(鮑)永既素重衍、爲且受使。得自置偏裨、乃以衍爲立漢將軍、領狼孟長、屯太原」。

(485) 苦哉 陸機「從軍行」(『文選』卷二八)「苦哉遠征人、飄飄窮四遐、……苦哉遠征人、拊心悲如何」。

(486) 妄引 『後漢書』傳二四梁統傳「丞相王嘉輕爲穿鑿、虧除先帝舊約成律」、李賢注「案嘉傳及刑法志、並無其事、統與嘉時代相接、所引故不妄矣、但班固略而不載也」。

(487) 普集 『北齊書』卷四六循吏蘇瓊傳「天保中、郡界大水、人災絕食者千餘家、瓊普集郡中有粟家、自從貸粟以給付饑者」。

(488) 諸天内音第三宗飄天八字文曰……『太上靈寶諸天内音自然玉字』卷三(D49, S3・2189)「曜明宗飄天中有自然之書八字文、曰、澤洛菩臺、緣羅大千、……天真皇人曰、其章以宗飄天中、合五方飛玄之炁、以和八字自然之音、曰无量洞章、宗飄天去皇笏天七千萬炁、澤者、天中山名、其山上衆龍所輞、山有黃

房之室、一名玉客之臺、洛覺者、眞晨道君之内名、治於黃房之中、混大劫而不終、經龍漢而更明、故幽中而悅焉、苦題者、飛天眞人之隱號、有無數之衆、飛於玉臺之上、玉臺處於澤山之陽、三萬日月、明其左右、羅映則日月天人之内名、治在日月之宮、上乘大羅之天、梵行之炁、運六度之關、以應天地之數、數之欲終、大劫交會、大劫既交、諸天日月會於玉臺也、大千世界之分、天地改易、大千同一而存焉。八字というからには、原文「澤落覺菩臺……」の「覺」を右文にあわせて衍字とみなすべきだが、天真皇人の解ではどちらも「落(洛)覺者」としているのは不審。「諸天内音八字文」はすでに本論七「觀音侍道」章にも引用されている。その注(314)、参照。

(489) 内名 『洞玄靈寶自然九天生神章經』(D165, S9・7281)

「九天生神章乃三洞飛玄之炁、三合成音、結成靈文、混合百神、隱韻内名、生炁結形、自然之章」。『雲笈七籤』卷四四「存思」鎮神養生内思飛仙上法「求仙之道、不知形神内名、又不知填死戶、長生豈可冀乎」。

(490) 隱號 この語の使用例未見。『周氏冥通記』卷三(D165, S9・6815)に、「汝名書玉簡、皆作周太玄、勿復稱子良、唯於世上名子良耳、勿以隱名示於俗人」とあるのを参照。

(491) 羅漢 注(488)の『太上靈寶諸天内音自然玉字』によれば「羅映」。

(492) 大劫既災 三本、宮本に從つて「大劫既交」と改める。『搜神記』(二十卷本)卷一三「漢武帝鑿昆明池、極深、悉是灰墨、

無復土、舉朝不解、以問東方朔、朔曰、臣愚不足以知之、可試問西域人、……至後漢明帝時、西域道人入來洛陽、時有憶方朔言者、乃試以武帝時灰墨問之、道人云、經云、天地大劫、將盡則劫燒、此劫燒之餘也、乃知朔言有旨。『無上祕要』卷六「劫運品」(D 763, S 41・3336)「……陰陽蝕劫、則天地改易、謂之大劫交、大劫交、天翻地覆、海涌河決、人淪山沒、金玉化消、六合冥一、右出洞真三天正法經」。

(493) 大千世界 『元始无量度人上品妙經四注』卷四(D 39, S 3・1732)にも「澤洛菩臺、緣羅大千」とあり、その李少微注は注

(488) の天真皇人解を引いた後にいう。「大千者、世界之數、

陸先生云、以千數至千、即千千爲小千、小千數至千爲中千、中千數至千爲大千、千中之大、故曰大千」。そのもとづくところは佛教の觀念。『智度論』卷七(T 25・1136)「以周利千世界爲一、一數至千、名二千中世界、以二千中世界爲一、一數至千、名三千大千世界、初千小、二千中、第三名大千、千千重數、故名大千、二過復千、故言三千」。

(494) 改易 注(492)を見よ。また『漢書』卷二八地理志上「先王之迹既遠、地名又數改易」、「南齊書」卷二五敬兒傳「昏明改易、自古有之、豈獨大宋中屯邪」。

(495) 洞然 注(404)を見よ。

(496) 濟苦經云…… 注(403)参照。そこに引用した『洞玄靈寶本相運度劫期經』(D 165, S 9・7293)の「くきに」つぎのようにある。「天地造化、萬物有形、周而復始、亦如十二月法、所以

地山之高、崑崙爲之最高、崑崙之南、三十萬兆里、復有崑崙之山、東西南北、亦有無量、不可稱計、一日月所正一崑崙、名爲四天下、更不及諸方、從崑崙至崑崙、滿千數之爲一、從崑崙至崑崙、滿千數之爲二、從崑崙至崑崙、滿千數之爲三、其數滿千、始名爲一、從小數一起、其數至千、始名一小千、從小千數至滿千、始名爲一、從小千至滿千、始名爲二、從小千至滿千、始名爲三、其三滿千、中千之數也、從中千數至滿千、始名爲一、從中千數至滿千、始名爲二、從中千數之至滿千、始名爲三、其三滿千、名爲大千、此三千世界、十仙所主、化見神智、具相威力、所能及也」。

(497) 乾坤 『周易』說卦傳「乾、天也、故稱乎父、坤、地也、故稱乎母」。

(498) 何爲但三千而至 三本、宮本に從つて「三千」を「三萬」と改める。

(499) 闕少 『晉書』卷九二文苑顧愷之傳「愷之每畫人成、或數年不點目精、人問其故、答曰、四體妍蚩、本無闕少於妙處、傳神寫照、正在阿堵中」。

(500) 凡人 『漢書』卷七一疏廣傳「顧自有舊田廬、令子孫勤力其中、足以共衣食、與凡人齊、今復增益之以爲贏餘、但教子孫怠墮耳」。

(501) 福勝 『成實論』卷一(T 32・239a)「親近深智者、是正論根本、因此正論故、能生福勝等」。

(502) 欲界 『道教義樞』卷七「三界義」(D 763, S 41・33191)

「按靈寶本元經、三十二天、以上之四天爲種民、二十八天、分爲三界、前六天爲欲界、次十八天爲色界、後有四天爲無色界也」。三界それぞれの具體的名稱は、『無上祕要』卷四「三界品」(D 768, S 41・33369)に引く『洞玄度人經』を見よ。欲界はそもそも佛教に起源する觀念であつて、欲界・色界・無色界が三界を構成する。たとえば『大乘義章』卷七(T 44・601a~b)に、「三界繫者、所謂欲色無色繫業、欲謂欲界、染愛塵境、名之爲欲、欲別上界、名爲欲界、……色謂色界、對下以名、應名無欲、以此界中、著內色形、從其所著、故名爲色、色別上下、稱曰色界、言無色者、謂無色界、從其所取、應名心界、以此界中、絕其色報、背下彰名、故云無色、無斯別下、名無色界」。

(503) 大羅上界、災所不及 本論十「崑崙飛浮」章に、『度人妙經』を引いて「五億重天之上、大羅之天、有玉京山、災所不及」とある。「大羅」については、注(92)を見よ。

(504) 將知…… 惠通「駁顧道士夷夏論」(『弘明集』卷七、T 52・46a)「……譬猶靈暉朝靄、稱物納照、時風夕灑、程形賦音、故形殊則音異、物異則照殊、日不爲異物而殊照、風不爲殊形而異音、將知其日一也、其風一也、稟之者不同耳」。

(505) 太上尊貴 『三洞珠囊』卷八「相好品」(D 782, S 42・33871)「太真科下曰、太上虛皇金闕玉帝、最尊最貴、无生无死、湛然常存、玉貌金容、妙相特絕也」。「尊貴」の語はまた、王筠「上太極殿表」(『藝文類聚』卷六二居處部殿)「憲北辰之居所、正南面之尊貴」。

(506) 文始傳釋…… 本論二十三「起禮北方爲始」章にも『文始傳』のつぎのような引用がある。「文始傳云、老子與尹喜遊天上、喜欲見太上、老曰、太上有大羅天玉京山、極幽遠、可遙禮闕、遂不見而還」。また『妙門由起』明天尊第二(D 760, S 41・33038)に「つぎのようにあるのを参照」。「樓觀本起云、尹喜遇老君、老君拜喜爲無上真人、號曰文始先生、方遠觀四海八紘之外、又上昇九天、謁太上玉晨大道君焉、道君令下化西城條支安息昆吾大秦闕賓天竺、周流八十一國、作浮屠之術、以化胡人」。

(507) 九重白門 『楚辭』九辯「豈不鬱陶而思君兮、君之門以九重」。同天問「圓則九重、執營度之」、王逸注「言天圓而九重、誰營度而知之乎」。「異苑」(『太平御覽』卷二天部天部下、現行本「異苑」卷七)「陶侃夢飛翔冲天、天門九重……」。『淮南子』地形訓「西南方曰編駒之山、曰白門」。

(508) 天帝 『漢書』卷九九王莽傳中「是時爭爲符命封侯、其不爲者相戲曰、獨無天帝除書乎」。「雲笈七籤」卷八「三洞經教部」釋三十九章經「九皇上眞司命君曰、九皇上眞者、玉虛之元君也、四司者、天帝之禁宮也」。

(509) 剋日引見 『晉書』卷三四羊祜傳「每與吳人交兵、剋日方戰、不爲掩襲之計」。「漢書」卷九三佞幸董賢傳「哀帝崩、太皇太后召大司馬賢、引見東廂、問以喪事調度」。

(510) 太上有玉京山七寶宮 『妙門由起』明天尊第二(D 760, S 41・33035)「太玄都玉京山絳云、太上曰、夫玄都玉京山有七寶城、城有七寶宮、宮有七寶玄臺、即太上無極虛皇大道君之所理」。

「玉京山」については、注(92)を参照。

(511) 寂寂冥冥 左思「詠史詩」八首之四(『文選』卷二二)「寂寂。寂。楊子宅、門無卿相與」李善注「說文曰、寂寂、無人聲也」。

「莊子」在有「至道之精、窈窕冥冥、至道之極、昏昏默默、無視無聽、抱神以靜」。郭璞「客傲」(『晉書』卷七二)「……故不恢心而形道、不外累而智喪、無巖穴而冥寂、無江湖而放浪」。

(512) 清遠 『周易』漸上九「鴻漸于陸、其羽可用爲儀、吉」、注

「進處高潔、不累於位、无物可以屈其心而亂其志、戔戔清遠、儀可貴也、故曰、其羽可用爲儀、吉」。

「眞誥」卷一「運題象」第一(D 637, S 34・2735)「何蕭蕭之清遠、眇眇之眞貴哉」。

(513) 神仙傳云…… 『雲笈七籤』卷一〇九の『神仙傳』(現行本

では卷八)にいう。「沈羲者、吳郡人也、學道於蜀中、但能消災除病、救濟百姓、不知服食藥物、功德感天、天神識之、羲與妻賈氏、共載詣子婦卓孔家、還道逢白鹿車一乘、青龍車一乘、白虎車一乘、從騎數十人、皆朱衣、仗矛帶劍、輝赫滿道、問羲曰、君是道士沈羲否、羲愕然不知何等、答曰、是也、何以問之、騎曰、羲有功於民、心不忘道、從生以來、履行無過、受命不長、壽將盡矣、黃老命遣仙官下來迎之、侍郎簿延、白鹿車是也、度世君司馬生、青龍車是也、送迎使者徐福、白虎車是也、須臾有三仙人、著羽衣持節、以白玉板青玉界丹玉字授羲、羲不能讀、遂載昇天、……後四百餘年、求還鄉里、推求得數十世孫名懷、懷喜曰、聞先人相傳有祖仙人、仙人今來、留數十日、說初上天時云、不見天帝、但見老君、老君東向坐、左右敕羲不得謝、但

嘿坐而已、宮殿鬱鬱、有如雲氣、五色玄黃、不可名字、侍從數百、多女少男……」。

(514) 白日登仙 『隋書』卷三五經籍志道經部「推其大旨、蓋亦歸於仁愛清靜、積而修習、漸致長生、自然神化、或白日登仙、與道合體」。注(239)の「白日昇天」を参照。

(515) 上天 『史記』卷二八封禪書「百姓仰望黃帝既上天、乃抱其弓與胡顏號」。

(516) 正殿 「周滅佛法集道俗議事」の注(47)を見よ。

(517) 據九天生神章…… 『洞玄靈寶自然九天生神章經』(D 165, S 9・7280)にはさきのようにある。「天寶君者則大洞之尊神、

天寶丈人則天寶君之祖炁也、丈人是混洞太無元高上玉虛之炁、九萬九千九百九十億萬炁後、至龍漢元年、化生天寶君出書、時號高上大有玉清宮、靈寶君者則洞玄之尊神、靈寶丈人則靈寶君之祖炁也、丈人是赤混太無元玄上紫虛之炁、九萬九千九百九十萬炁後、至龍漢開圖、化生靈寶君、經一劫至赤明元年、出書度人、時號上清玄都玉京七寶紫微宮、神寶君者則洞神之尊神、神寶丈人則神寶君之祖炁也、丈人是冥寂玄通元无上清虛之炁、九萬九千九百九十萬炁後、至赤明元年、化生神寶君、經二劫至上皇元年出書、時號三皇洞神太清太極宮」。かく、「今據九天生神章……」というけれども、『九天生神章』から導かれるのは「其玉清宮在玄都之上」という結論であって、その間に挿入された「太上住在玄都宮也」については注(510)を参照。

(518) 五穀爲剗命之鑒 目次では「五穀命鑒」。「五穀」の語は、

『周禮』天官疾醫「以五味五穀五藥養其病」。その鄭玄注に「五穀、麻黍稷麥豆也」とあるが、何々を五穀にかぞえるかは諸説あつて一定せぬ。「刳命」の語は、『漢武帝內傳』「此五事（暴・淫・奢・酷・賊）者、皆是截身之刀鋸、刳命之斧斤矣」。

(519) 化胡經云……『雲笈七籤』卷二「混元洞開闢劫運部」の

『太上老君開天經』に「つぎのようにあるのを参照。」「太初已下、太素已來、天生甘露、地生醴泉、人民食之、乃得長生、死不知葬埋、棄屍於遠野、名曰上古、太素既沒、而有混沌、……太連已前、混沌以來、名曰中古、爾時天生五炁、地生五味、人民食之、乃得延年、太連之後、而有伏羲、……伏羲已前、未有姓字、直有其名、爾時人民朴直、未有五穀、伏羲方教以張羅網捕禽獸而食之、皆衣毛茹血、腥臊臭穢、男女無別、不相嫉妬、冬則穴處、夏則巢居、伏羲沒後、而有女媧、女媧沒後、而有神農、神農之時、老君下爲師、號曰大成子、作太微經、教神農嘗百草得五穀、與人民播植、遂食之、以代禽獸之命也、……三皇修道、人皆不病」。

(520) 修道 『晏子春秋』內篇問上「明王修道、一民同俗」。『論

衡』道虛「夫修道求仙、與憂職勤事不同、心思道則忘事、憂事則害性」。

(521) 上古、中古、下古 『漢書』卷三〇藝文志「入更三聖、世歷三古」、注「孟康曰、易繫辭曰、易之興、其於中古乎、然則伏羲爲上古、文王爲中古、孔子爲下古」。

(522) 甘露、醴泉 『列子』湯問「景風翔、慶雲浮、甘露降、醴泉

涌」。『禮記』禮運「故天降膏露、地出醴泉、山出器車、河出馬圖」。『論衡』是應「儒者論太平瑞應、皆言氣物卓異、朱草醴泉翔風甘露、景星嘉禾蓬脯蓂莢屈軼之屬」。

(523) 食飲長生 『抱朴子』仙藥「五德芝、狀似樓殿、莖方、其葉

五色各具而不雜、上如偃蓋、中常有甘露、紫氣起數尺矣、……凡此草芝又有百二十種、皆陰乾服之、則令人與天地相畢、或得千歲二千歲。同微旨「夫太元之山、……玄芝萬株、絳樹特生、其實皆殊、金玉嵯峨、醴泉出隅、還年之士、挹其清流、子能修之、喬松可儔」。『食飲』の語は、『史記』卷九二淮陰侯列傳「常從人寄食、人多厭之者」。「長生」の語は、注(379)を見よ。

(524) 五炁、五味 『左傳』昭公元年「天有六氣、降生五味、發爲

五色、徵爲五聲、淫生六疾、六氣曰陰陽風雨晦明也」。『周禮』天官疾醫「以五味五穀五藥養其病、以五氣五聲五色眡其死生」。『史記』卷一五帝本紀「軒轅乃修德振兵、治五氣、藝五種……」、集解「王肅曰、五行之氣」。

(525) 延年 宋玉「高唐賦」(『文選』卷一九)「九竅通鬱、精神察滯、延年益壽千萬歲」。『論衡』道虛「夫服食藥物、輕身益氣、頗有其驗、若夫延年度世、世無其效」。

(526) 下古世薄 『陸先生道門科略』(D 761, S 41・33119)「太上老君以下古、委懟、淳澆樸散、三五失統、人鬼錯亂……」。『鹽鐵論』國疾「今政非改而教非易也、何世之彌薄而俗之滋衰也」。『南齊書』卷五五孝義傳序「通乎神明、理緣感召、情澆世薄、方表孝慈」。

(527) 百獸 『尙書』舜典「變曰、於予擊石拊石、百獸率舞」。

(528) 嘗百穀以食兆民 『淮南子』修務訓「古者民茹草飲水、采樹

木之實、食羸蠃之肉、時多疾病毒傷之害、於是神農乃始教民播種五穀、相土地宜燥濕肥瘠高下、嘗百草之滋味、水泉之甘苦、令民知所辟就、當此之時、一日而遇七十毒」。「百穀」の語は、

『尙書』舜典「帝曰、棄、黎民阻飢、汝后稷播時百穀」。「兆民」の語は、同呂刑「一人有慶、兆民賴之、其寧惟永」。

(529) 奉粟五斗爲信 『要修科儀戒律鈔』卷一〇「治屋」(D 205,

S 11・8339)「(太真科)又云、家家立靖、崇仰信米五斗、以立造化和五性之氣、家口命籍、係之於米、年年依會、十月一日、同集天師治、付天倉及五十里亭中、以防凶年飢民往來之乏、行來之人、不裝糧也」。

(530) 世世子孫不絕 『尙書』微子之命「世世享德、萬邦作式」。

楊雄「甘泉賦」(『文選』卷七)「子子孫孫、長無極兮」。

(531) 神州 『史記』卷七四孟子荀卿列傳「中國名曰赤縣神州、赤

縣神州內自有九州、禹之序九州是也、不得爲州數、中國外如赤縣神州者九、乃所謂九州也」。

(532) 五符經云…… 『太上靈寶五符序』卷下(D 183, S 10・8005

~8006)「三仙王又告帝曰、吾昔食此法得仙、先師令益口中中央醴泉、下呪曰、白石巖巖以次行、源泉涌洞以至漿、飲之長生、壽命益長、凡二十二言、汝可爲之、子能經目爲之、食真一不休、吞華池不息、內氣長閉不倦者、即得道而絕粒矣、不復移月而成也、夫玄古之人、所以壽考者、造有之間、不食穀也、大有晉曰、

五穀是創命之鑿、腐鼻五藏、致命促縮、此糧入口、無希久壽、汝欲不死、腸中無滓、汝欲長生、當令藏氣潔清、挹身華漿、與天相迎、玉水在口、天人同壽也」。教を受けた帝は黃帝。

(533) 仙王 『雲笈七籤』卷三「道教本始部」道教三洞宗元「……其次即至三境、境別有左右中三宮、宮別有仙王仙公仙卿仙伯仙大夫、別有一太上老君天師」。この仙王は太清仙王。前注に引いた文章の前段に、「侍者皆是衆仙玉女、坐賓三人、皆稱太清仙王」とある。

(534) 人所以壽考者、不食五穀故也 『三洞珠囊』卷三「服食品」(D 780, S 42・33820)「天文上經云、玄古之人、所以壽考者、造次之間、不食穀也」。「莊子」逍遙遊「藐姑射之山、有神人居焉、肌膚若冰雪、綽約若處子、不食五穀、吸風飲露、乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外」。「壽考」の語はまた、『莊子』刻意「吹陶呼吸、吐故納新、熊經鳥申、爲壽而已矣、此道引之士、養形之人、彭祖壽考者之所好也」。

(535) 大有經曰…… 『三洞珠囊』卷三「服食品」(D 780, S 42・33820)の引用ではこぎのようにある。「大有經曰、五穀是創命之鑿、腐鼻五藏、致命促縮、此糧入口、無希久壽、汝欲不死、腸中無滓也」。「笑道論」のテキストでは、「鑿」、「穀」、「縮」はいずれも入聲で押韻している。

(536) 命促縮 「怨詩行」(『樂府詩集』卷四一)「天德悠且長、人命一何促」。慧思「立誓願文」(T 46・788a)「是時世惡、五濁競興、人命短促、不滿百年」。「隋書」卷二二五行志上「周宣帝

與宮人夜中連臂踴躍而歌曰、自知身命促、把燭夜行遊。」「促縮」の語の使用例は未見。

(537) 久壽 嵇康「與山巨源絕交書」(『文選』卷四三)「又聞道士遺言、餌朮黃精、令人久壽、意甚信之」。

(538) 欲不死、腸中无屎 『抱朴子』雜應「道書雖言欲得長生、腸中當清、欲得不死、腸中無滓、又云、食草者善走而愚、食肉者多力而悍、食穀者智而不壽、食氣者神明不死、此乃行氣者一家之偏說耳、不可便孤用也」。『太平御覽』卷三七六人事部腸の引用では、「滓」を「屎」に作る。

(539) 五府經云…… 『太上靈寶五符序』卷中(D183, S10, *986)「黃精、太陽之精、入口使人長生、……唯黃精之爲草木、長生三陽之氣、上入太清之宮、鍊精玄妙、隨化淳和、光流九野、布六合之內、依雲藏山、隨氣而化、植根立莖、隨葉通精、結味甘香、……神仙服食、唯此爲昌」。

(540) 三陽之炁 『禮記』月令「孟春之月、……是月也、天氣下降、地氣上騰、天地和同、草木萌動」、正義「……至十一月、陽之一爻、始動地中、至十二月、陽漸升、陽尚微未能生物之極、正月、三陽既上、成爲乾卦、乾體在下、三陰爲坤、坤體在上、乾爲天、坤爲地、今天居地下、故云天氣下降、地在天上、故云地氣上騰」。孔阜「會稽記」(『藝文類聚』卷八山部太平山)「餘姚縣南百里有太平山、……三陽之炁、華卉代發」。

(541) 太清宮 『抱朴子』明本「夫得仙者或昇太清、或翔紫霄、或造玄洲、或棲板桐」。また注(517)、參照。

(542) 食之甘美、又長生 『抱朴子』仙藥「朮餌令人肥健、可以負重涉險、但不及黃精甘美易食」。「甘美」の語はまた、『漢武內傳』「母以四枚與帝、自食三桃、桃之甘美、口有盈味」。また、『博物志』(通行本)卷五「黃帝問天老曰、天地所生、豈有食之令人不死者乎、天老曰、太陽之草、名曰黃精、餌而食之、可以長生、太陰之草、名曰鉤吻、不可食、入口立死、人信鉤吻之殺人、不信黃精之益壽、不亦惑乎」。

(543) 腐人之腸 枚乘「七發」(『文選』卷三四)「甘脆肥膿、命曰腐腸之藥」。

(544) 三皇者皆神人 たとえば『雲笈七籤』卷三「道教本始部」天尊老君名號歷劫經略によると、伏羲、燧人、神農はいずれも白日昇天してそれぞれ天真景星真人、玉虛真人、靈寶虛皇真人となったという。「神人」の語は、注(534)の『莊子』逍遙遊篇に見える。

(545) 長生之國 『山海經』海外西經「軒轅之國、在此窮山之際、其不壽者八百歲」。同大荒南經「不死之國、阿姓、甘木是食」。

(546) 短壽 『注維摩詰經』卷七(T38・396a)「我等祖父、壽命極長、以今瞋恚無慈故、致此短壽」。

(547) 玄妙內篇云…… すでに本論五「明五佛並興」章に「玄妙篇云……」として引用されていた。その注(256)、參照。

(548) 化胡經云…… 未詳。『混元聖紀』卷五(D562, S30・23775, 23779)につきのようにあるのを參照。「老君將還中夏、乃與群胡辭決、胡衆攀戀不已、老君不違其善意、乃喻之曰、我暫歸天

上、簡定人鬼之錄、尋當下降、百年之外、當遣（當作遣）佛陀、生汝國土、施教後人、……老君自與群胡辭決、已逾百年、煩陀王昔胡王也、下生身毒國爲王子、是謂浮屠教主、實莊王九年癸巳四月七日夜半、從莫耶夫人右脇誕生」。

(549) 奉佛 『世說新語』排調「二郗奉道、二何奉佛」。

(550) 却後百年 注(548)、參照。「却後」の語は、『南齊書』卷三「荀伯玉傳」泰始七年、伯玉又夢太祖乘船在廣陵北渚、見上兩掖下有翅不舒、伯玉問何當舒、上曰、却後三年、「高僧傳」卷一一竺曇猷傳(T.50・396a)「聞空中聲曰、知君誠篤、今未得度、却後十年、自當來也」。

(551) 兜率天上 『太子瑞應本起經』卷上(T.3・473b)「菩薩於九十一劫、修道德、學佛意、通十地行、在一生補處、後生第四兜術天上、爲諸大師」。

(552) 眞佛 『無量壽經』卷下(T.12・272b~c)「其人臨終、無量壽佛、化現其身、光明相好、具如眞佛、與諸大衆、現其人前」。僧祐『弘明論』(『弘明集』卷一四、T.52・93a)「三疑、莫見眞佛、無益國治」。

(553) 託生舍衛白淨王宮 『太子瑞應本起經』卷上(T.3・473b)「期運之至、當下作佛、託生天竺迦維羅衛國、父王名白淨、聰叡仁賢、夫人曰妙、節義溫良」。

(554) 阿難 『修行本起經』卷上「現變品」(T.3・462b)「(錠光)佛告童子、汝却後百劫、當得作佛、名釋迦文能仁、……侍者名阿難」。

(555) 造十二部經 『摩訶摩耶經』卷下(T.12・1013b)「摩訶摩耶問阿難言、我子悉達、臨滅度時、有何教敕、阿難白言、世尊中夜爲諸比丘略說教誡、又以所說十二部經、付囑尊者摩訶迦葉、亦復敕我、令助宣布」。「付法藏因緣傳」卷一(T.50・300a)「時諸比丘問大迦葉、先集何法、迦葉答曰、先修多羅、又問使誰集修多羅、大迦葉言、阿難比丘多聞總持、有大智慧、……宜可使彼集修多羅」。「修多羅」は「經」のこと。

(556) 六年苦行 『過去現在因果經』卷三(T.3・639a)「身形消瘦、有若枯木、修於苦行、垂滿六年」。

(557) 成道號佛 注(474)を見よ。

(558) 四十九年、欲入涅槃 『佛般泥洹經』卷下(T.1・171b~c)「佛言、吾告使者云、得佛說經四十九歲、王國諸賢、皆自執行、王且還宮、吾今夜半當般泥洹」。

(559) 迦葉 迦葉が老子の化身であるということ、注(468)を見よ。このあたり、『辯正論』卷五「釋李師資篇」(T.52・524a)に引く「化胡經」に「きのごとくある」。「化胡經」云、老子知佛欲入涅槃、復迴在世、號曰迦葉、於娑羅林、爲衆發問。それは『涅槃經』卷三「壽命品」(T.12・379b~c)の「きのごた」をよまえる。「爾時衆中有一菩薩摩訶薩、本是多羅聚落人也、姓大迦葉、娑羅門種、年在幼稚、以佛神人、即從座起、偏袒右肩、遶百千匝、右膝著地、合掌向佛、而白佛言、世尊、我於今者欲少諮問、若佛聽者、乃敢發言、佛告迦葉、如來應正遍知、恣汝所問、當爲汝說、斷汝所疑、令汝歡喜」。

(560) 在雙樹間 『涅槃經』卷一「壽命品」(T12・365c)「如是我

聞、一時佛在拘尸那國力士生地阿利羅跋提河邊娑羅樹間。」

(561) 請啓 『宋書』卷七三顏延之傳「早欲啓請餘算、屏蔽醜老」。
三本、宮本は「啓請」に作る。

(562) 三十六問 『大般涅槃經疏』卷七(T38・76b~c)「即於佛
前是正問、舊說三種不同、一分偈、二問數、三因起、……二問
數不同者、梁武三十二問、河西三十四問、靈味亮治城素莊嚴曼
並用之、中寺安三十五問、開善三十六問、光宅三十七問。」

(563) 焚燒佛屍、取舍利 『佛所行讚』卷五(T4・53a~b)「時彼
大迦葉、先住王舍城、知佛欲涅槃、眷屬從彼來、淨心發妙願、
願見世尊身、以彼誠願故、火滅而不燃、迦葉眷屬至、悲歎俱瞻
顏、敬禮於雙足、然後火乃燃、內絕煩惱火、外火不能燒、雖燒
外皮肉、金剛眞骨存、香油悉燒盡、盛骨以金瓶、如法界不盡、
骨不盡亦然」。「焚燒」の語は、『抱朴子』知止「亦有深逃而陸
遭溝波、幽遁而水被焚燒」。「舍利」については、玄應『一切經
音義』卷六に「舍利、正言設利羅、譯云身骨、舍利有全身者、
有碎身者」。

(564) 分國造塔 『大般涅槃經』卷下(T1・207c)「……于時八王
既得舍利、踴躍頂戴、還於本國、各起兜婆」。「兜婆」は塔のこ
と。

(565) 阿育王又起八萬四千塔 『阿育王經』卷一「生因緣」(T50・
135a)「……乃至阿育王往耶舍大德阿羅漢處說言、我欲於一日
一念中、起八萬四千塔、一時俱成、……乃至阿育王起八萬四千

塔已、守護佛法」。

(566) 或作國師 本論二「年號差舛」章に、「文始傳云、老子從三
皇已來、代代爲國師」。その注(109)、参照。

(567) 伯陽 『列仙傳』「老子、姓李、名耳、字伯陽」。

(568) 度人化俗 「度人」の語は、注(132)を見よ。「化俗」の語は、
司馬相如「難蜀父老」(『文選』卷四四)「必若所云、則是蜀不
變服、而巴不化俗也」。

(569) 要須…… 『宋書』卷四八毛脩之傳「……但以方仗威靈、要

須。綜攝、乞解金紫寵私之榮、賜以鷹揚折衝之號」。『梁書』卷三
九羊侃傳「高祖曰、朝廷今者要須卿行、乃詔以爲大軍司馬」。

(570) 始炁 『洞玄靈寶自然九天生神章經』(D165・S9・7285)「須
延總三雲、玄元始炁分、落落大梵布、華景翠玉尊」。『雲笈七
籤』卷二「混元混沌開闢劫運部」空洞「上氣曰始、中氣曰元、
下氣曰玄、玄氣所生出乎空、元氣所生出乎洞、始氣所生出乎
無」。

(571) 自伐 『老子』二十二章「是以聖人、抱一爲天下式、不自見
故明、不自是故彰、不自伐故有功、不自矜故長、夫惟不爭、故
天下莫能與之爭」。

(572) 行行 「古詩十九首」(『文選』卷二九)之一「行行重行行、
與君生別離」。陸機「齊謳行」(『文選』卷二八)「行行將復去、
長存非所營」。三本は「修行」に作る。それならば、「すべての
人間が修行して」。

(573) 得佛果 「大梁皇帝立神明成佛義記」(『弘明集』卷九、T53

・54b)「經云、心爲正因、終成佛果。」「法華經」常不輕菩薩品 (T9・50c)「汝等皆行菩薩道、當得作佛」。

- (574) 妄言虛述 『淮南子』人間訓「或明禮義推道體而不行、或解構妄言而反當。」「魏書」卷八九酷吏羊祉傳「案社志性急酷、所在過威、布德罕聞、暴聲屢發、而禮官虛述、謚之爲景、非直失於一人、實毀朝則」。

- (575) 首尾无據 本論卷首の「啓文」に「首尾无取」とある。その注(43)を見よ。「無據」の語は、『抱朴子』仁明「吾以爲仁明之事、布於方策、直欲切理示大較、精神舉一隅耳、而子猶日用而不知、云明事之無據乎」、『南齊書』卷三一江謐傳「禮官違越經典、於禮無據」。

- (576) 蜀記…… 本論七「觀音侍道」章に引用されているのを参照。
- (577) 漢書、劉安伏鉞 『漢書』卷四四淮南王傳「皆曰、淮南王安大逆無道、謀反明白、當伏誅、……上使宗正以符節治王、未至、安自刑殺。」「伏鉞」の語は、班彪「王命論」(『文選』卷五二)「遇折足之凶、伏斧鉞之誅」。

- (578) 乃言長生不死 『論衡』道虛「儒書言、淮南王學道、招會天下有道之人、傾一國之尊、下道術之士、是以道術之士、並會淮南、奇方異術、莫不爭出、王遂得道、舉家升天」。また『風俗通』正失「淮南王安神仙」の條をも参照。「長生不死」の語は、『抱朴子』金丹「若服(金液)半兩、則長生不死」。

- (579) 造天地經云…… 本論一「造立天地」章に引く「太上道君造立天地初記」に、「老子遂變形、左目爲日、右目爲月」とある。

その注(79)、参照。

- (580) 玄妙經云…… 注(256)、参照。

- (581) 洞神 『晉書』卷五四陸雲傳「移書太常府、薦同郡張瞻曰、……探微集逸、思心洞神、論道屬書、篇章光觀」。

- (582) 何所不在 『莊子』知北遊「東郭子問於莊子曰、所謂道惡乎在、莊子曰、無所不在」。

- (583) 精依於首 『春秋元命苞』(『太平御覽』卷三七五人事部腦)「腦之爲言、在也、人精在腦」。麥谷邦夫「『黃庭內景經』試論」(『東洋文化』六二號)、参照。

- (584) 偏見 『莊子』齊物論「與物相刃相靡、其行盡如馳、而莫之能止、不亦悲乎」、郭象注「群品云云、逆順相交、各信其偏見、而恣其所行、莫能自反……」。

- (585) 敕瞿曇遣使者 目次では「敕使瞿曇」。瞿曇は Gautama の音寫。彦琮「通極論」(『廣弘明集』卷四、T52・114a)「氏曰瞿曇、種稱刹利、俗名悉達、道字能仁、乃白淨王之太子也」。

- (586) 老子化胡歌曰…… P二〇〇四(大淵忍爾「敦煌道經」圖錄編六七五頁)の「老子化胡經」玄歌第十に見える。文字の異同はそのつど指摘するが、「太上賜地隕」の後さらにつぎの句がつづく。「寺廟崩倒漸、龍王砥經文、八萬四千弟子、一時受大緣、輪轉五道頭、萬元一昇仙」。

- (587) 舍衛 注(47)を見よ。

- (588) 約敕 『後漢書』傳四三徐穉傳「漢末寇賊縱橫、皆敬(徐)胤禮行、轉相約敕、不犯其閭」。『眞誥』卷一九「翼眞檢」第一

(D 640, S 34・27504) 「馬朗忿恨、乃洋洞灌厨箭、約敕家人、不得復開」。

(589) 摩訶薩 摩訶薩埵の略。菩薩のこと。『智度論』卷五 (T25・94a) 「問曰、云何名摩訶薩埵、答曰、摩訶者大、薩埵名衆生、或名勇心、此人心能爲大事、不退不還、大勇心故、名爲摩訶薩埵」。

(590) 齋經來東秦 P二〇〇四では「齋經教東秦」。「齋經」の語は、『高僧傳』卷一竺曇摩羅刹傳 (T50・326c) 「……遂大齋梵經、還歸中夏」。「東秦」の語は、本論五「明五佛並興」章に「至漢世、法流東秦」と見える。

(591) 歷落神州界 『水經注』卷四河水「其水南流、歷鼓鍾上峽、……峰次青松、巖懸巖石、于中歷落有翠柏生焉」。「神州」の語は、注(531)を見よ。

(592) 廣宣世尊法 P二〇〇四では「廣宣至尊法」。「高僧傳」卷八玄暢傳 (T50・377a) 「弟子謂之曰、法師之欲弘道濟物、廣宣名教、今帝主虛已相延、皇儲蓄禮思敬、若道揚聖君、則四海歸德、今矯然高讓、將非聲聞耶」。「成實論」卷一「十號品」(T32・242a~c) 「復次經中說如來等十種功德、謂如來、應供、正遍知、明行足、善逝、世閒解、無上、調御、天人師、佛世尊、……於三世十方世界中尊、故名世尊」。

(593) 教授鹽俗人 『史記』卷六七仲尼弟子列傳「孔子既沒、子夏居西河教授」。「晉書」卷九二文苑趙至傳「今將殖橘柚於玄朔、蒂華藕於修陵、表龍章於裸壤、奏韶武於聲俗、固難以取貴矣」。

(594) 威神法 注(234)を見よ。

(595) 化道滿千年 『雜阿含經』卷二五 (T2・177b~178c) 「我今當以正法付囑人天、諸天世人共攝受法者、我之教法、則千歲不動、……過千歲後、我教法滅時、當有非法、出於世間、……時彼諸天龍神等、皆生不歡喜心、不復當護諸比丘」。「化道」の語は、桓溫「薦譙元彥表」(『文選』卷三八) 「夫旌德禮賢、化道之所先、崇表殊節、聖喆之上務」。

(596) 年滿時當還 P二〇〇四では「年終時當還」。

(597) 愼莫戀東秦 P二〇〇四では「愼莫戀中秦」。「愼莫……」の表現は、『阿育王傳』卷一 (T50・102a) 「龍白王言、唯願留此舍利、聽我供養、愼莫取去」。

(598) 无令天帝怒 P二〇〇四では「致令天氣怒」。「天帝」の語は、注(508)を見よ。

(599) 太上躡地願 P二〇〇四では「太上踏地願」。「躡地」の語は、『後漢書』傳七五東夷韓傳「常以五月田竟祭鬼神、晝夜酒會、群聚歌舞、舞輒數十人相隨、躡地爲節」。

(600) 化胡經云…… 未詳。

(601) 周莊本初三年…… 『辯正論』卷六「十喻篇」(T52・525b) につぎのようにあるのを参照。「外四異曰、老君、文王之日爲隆周之宗師、釋迦、莊王之時爲闕賓之教主」。

(602) 太歲 『周禮』春官「馮相氏掌十有二歲……」、鄭玄注「歲謂太歲」。

(603) 正覺 『法華經』化城喻品 (T9・24c) 「哀愍諸衆生、故現

於世間、超出成正覺、我等甚欣慶」。

- (604) 去世 『抱朴子』金丹「若未欲去世、且作地水仙之士者、但齋戒百日矣」。

- (605) 懈怠 司馬相如「上林賦」(『文選』卷八)「於是乎遊戲懣怠、置酒乎顛天之臺、張樂乎膠葛之寓」。

- (606) 多羅聚落 『涅槃經』卷三「壽命品」(T12・379b)「爾時衆中有一菩薩摩訶薩、本是多羅聚落人也、姓大迦葉、婆羅門種」。

- (607) 親近 鄒陽「獄中上書自明」(『文選』卷三九)「回面汙行、以事詔諛之人、而求親近於左右、則士有伏死堀穴巖藪之中耳」。

- (608) 焚尸取骨、起塔分布 本論十八「老子作佛」章に、「迦葉菩薩焚燒佛屍、取舍利、分國造塔」とあるのを参照。「分布」の語は、『阿育王傳』卷一(T50・101c)「爾時比丘知阿育王是大檀越、必能分布佛之舍利、饒益天人」。

- (609) 東土 『尚書』康誥「乃寡兄勗、肆汝小子封、在茲東土」。
『洛陽伽藍記』序「至於一乘二諦之原、三明六通之旨、西域備詳、東土靡記」。

- (610) 中間 繁欽「與魏文帝牋」(『文選』卷四〇)「自初呈試、中間二句」。

- (611) 親侍 『魏書』卷二下彭城王勰傳「自高祖不豫、總常居中、親侍醫藥、夙夜不離左右」。

- (612) 元年乙酉、全无丙辰 『史記』「十二諸侯年表」によれば、周莊王元年是乙酉の歲。從つて丙辰の歲は三十二年となる。

- (613) 掩耳 『左傳』昭公三十一年「荀躒掩耳而走」、杜預注「怪

公所言、示不忍聽」。蔡琰「悲憤詩」(『後漢書』傳七四列女傳)「兒呼母令號失聲、我掩耳令不忍聽」。

- (614) 以酒脯事邪求道 目次では「事邪求道」。『周禮』秋官司盟

「凡盟詛、各以其地域之衆庶、共其牲而致焉、既盟、則爲司盟共祈酒脯」。『抱朴子』登涉「有老君黃庭中胎四十九真祕符、入山林、以甲寅日、丹書白素、夜置案中、向北斗祭之、以酒脯各少少、自說姓名、再拜受取、內衣領中、辟山川百鬼萬精虎狼蟲毒也」。『隋書』卷三五經籍志道經部「夜中於星辰之下、陳設酒脯、耕餅幣物、歷祀天皇太一、祀五星列宿、爲書、如上章之儀以奏之、名之爲醮」。「事邪」の語は、梁武帝「捨事李老道法詔」(『廣弘明集』卷四、T52・113a)につぎのようにあるのを参照。「弟子經遲迷荒、耽事老子、歷葉相承、染此邪法」。「求道」の語は、『抱朴子』登涉「余師常告門人曰、夫人求道、如憂家之貧、如愁位之卑者、豈有不得耶」。玄光「辯惑論」(『弘明集』卷八、T52・48b)「又其方術、穢濁不清、乃扣齒爲天鼓、咽唾爲醴泉、馬屎爲靈籙、老鼠爲芝藥、資此求道、焉能得乎」。

(615) 度人妙經稱…… 『靈寶无量度人上品妙經』卷一(DJ1.1.1.1)「此三界之上、飛空之中、魔王歌音、音參洞章、誦之百遍、名度南宮、誦之千遍、魔王保迎、萬徧道備、飛昇太空、過度三界、位登仙公、有聞靈音、魔王敬形、敕制地祇、侍衛送迎、拔出地戶五苦八難、七祖昇遷、永離鬼官、魂度朱陵、受鍊更生、是謂无量、普度无窮、有祕上天文、諸天共所崇、泄慢墮地獄、禍及七祖翁」。

(616) 三界魔王、各有歌辭 前注に引用のすぐ上文に、「諸天之上、各有生門、中有空洞謠歌之章、魔王靈篇、辭參高眞」として、「第一欲界飛空之音」、「第二色界魔王之章」、「第三無色界魔王歌」を示している。「三界」は欲界、色界、無色界。注(502)、参照。「歌辭」の語は、石崇「思歸引序」(『文選』卷四五)「此曲有絃無歌、今爲作歌辭、以述余懷」。ちなみに、「樂府詩集」では郊廟歌辭、相和歌辭などあって、歌謠が歌辭と曲辭とに大別されている。

(617) 名度南宮 南宮に關しては、『眞誥』卷二「稽神樞」第二(D 639, S 34・27441)「今爰支從南宮受化得仙、今在洞中」、「無上祕要」卷四「奏簡文品」(D 772, S 42・33567)「普告九土皇靈、今日上告、萬仙定生、我願我仙、……魂昇南宮、受化仙庭、……右出元始靈寶告九地土皇滅罪言名求仙上法」、同卷五〇「塗炭齋品」(D 774, S 42・33634)「願以是功德、爲某家億曾萬祖父母先亡後死亡父母等、免脫憂苦、上昇天堂、分福南宮、歸身歸神歸命大道」。「朱宮」とか「朱火宮」というのも同じであらう。朱宮に關しては、『元始無量度人上品妙經註』卷上(D 40, S 3・1753)に、「道言、凡誦是經十過、諸天齊到、億曾萬祖、幽魂苦爽、皆即受度、上昇朱宮、格皆九年、受化更生、得爲貴人」の句に注している。「南方丹天世界有南昌上宮、宮有朱陵之府、府有流火之庭、乃鍊化度仙之所也、世人獲超昇者、經由此宮、受三火大鍊、煅鍊五濁穢形、以玉眸之光、鍊其氣質、次以黃華之水、灌蕩尸形、然後禦孕靈眞、隨其報化而遂

更生也」。朱火宮に關しては、『眞誥』卷一六「闡幽微」第二注(D 640, S 34・27472)「在世行陰功密德、好道信仙者、既有淺深輕重、故其受報亦不得皆同、有卽身地仙不死者、有託形尸解去者、有既終得入洞宮受學者、有先詣朱火宮煉形者、有先爲地下主者乃進品者、有先經鬼官乃遷化者、有身不得去、功及子孫令學道乃拔度者、諸如此例、高下數十品、不可以一槩求之」。

「名度」の語は、『眞誥』卷四「運題象」第四(D 637, S 34・27367)「於是卽得度名東宮、當爲仙之中者、然其身中、自宿有陰罪未了處、已日就補、復解謝太上、行當受書署者也」。

(618) 魔王保迎 『上清洞眞智慧觀身大戒文』(D 1039, S 56・454 11)「天尊常擁護、魔王爲保言、晃晃金剛軀、超越太上前」。

(619) 飛昇大空 『太上黃庭內景玉經』「紫清章」第二十九(D 167, S 9・7383)「化生萬物使我僊、飛昇十天駕玉輪」。「無上祕要」卷九四「昇太空品」(D 778, S 42・33761)「行之十八年、玉清太素三元君、當鍊以金眞、映以玉光、位爲玉皇、飛行太空、右出洞眞靈書紫文」。

(620) 仙公 『眞誥』卷五「甄命授」第一(D 637, S 34・27377)「仙官有上下、各有次秩、仙有左右府、而有左右公左右卿左右大夫左右御史也、明大洞爲仙卿、服金丹爲大夫、服衆芝爲御史、若得太極隱芝服之、便爲左右仙公及真人矣」。

(621) 玄中精經……『辯正論』卷二「三教治道篇」(T 52・497b)にも『玄中經』として引かれている。「見玄中經云、道士受戒及符錄、皆置五嶽位、設酒脯再拜」。『玄中經』は本論三十三

「道士出入儀式」章にも引用がある。

- (622) 受誠符錄 『無上祕要』卷四六「洞玄戒品」(D 773, S 42・33601)「天尊言、能受是十戒、修行如法、十方天官、無不衛護、……右出洞玄思微定志經」。『魏書』卷六顯祖紀天安元年「帝幸道壇、親受符籙」。『隋書』卷三五經籍志道經部「籙、皆素書、紀諸天曹官屬佐吏之名有多少、又有諸符、錯在其間、文章詭怪、世所不識」。

- (623) 五岳位 『無上祕要』卷三四「法信品」(D 772, S 42・33531)「又曰、法用上金五兩、以盟五嶽、爲寶經之信、……右出洞玄明真經」。同卷三九「授洞玄真文儀品」(D 772, S 42・33560)「金龍五枚、以爲五嶽之信、各官秤一兩、……右出明真經」。

- (624) 設酒脯再拜 注(614)の「抱朴子」登涉篇を参照。

- (625) 觀身大誡云…… 『上清洞真智慧觀身大戒文』(D 1039, S 56・45415)「道學不得祠祀神祇、道學不得教人祠祀神祇、道學不得向神鬼禮拜、道學不得教人向神鬼禮拜」。

- (626) 祠祀鬼神 『史記』卷六秦始皇本紀「議封禪望祭山川之事、乃遂上泰山、立石封祠祀」。『周禮』地官大司徒「……十有一曰索鬼神」、鄭玄注「索鬼神、求廢祀而修之」。

- (627) 諸有 『涅槃經』卷四「如來性品」(T 12・387b)「如佛言曰、離諸有者、乃名涅槃、是涅槃中、無有諸有」。

- (628) 案三張之法…… 『辯正論』卷一「三教治道篇」(T 52・497b)「……にもつぎのよういう。『又案三張之法、春秋二分、祭竈祠社、冬夏兩至、同俗祠祀先亡、及受治錄、兵符社契、皆言將

軍吏兵之事」。

- (629) 春秋二分、祭社祠竈 『三天內解經』卷十(D 876, S 47・38061)「老君……即拜張(道陵)爲太玄都正一平氣三天之師、付張正一明威之道、新出老君之制、……民人唯聽五臘吉日祠家親宗祖父母、二月八日祠祀竈」。『陸先生道門科略』(D 761, S 41・33119)にも、「民人五臘吉日祠先人、二月八日祭社竈、自此以外、不得有所祭」。その古い起源は、『禮記』月令「仲春之月、……擇元日、命民社」、鄭玄注「社、后土也、使民祀焉、神其農業也、祀社日用甲」。同「孟夏之月、……其祀竈、祭先肺」、鄭玄注「夏陽氣盛熱於外、祀之於竈、從熱類也、……竈在廟門外之東、祀竈之禮、先席於門之東、東面設主於竈陲……」。

- 『史記』卷二八封禪書「是時李少君亦以祠竈、穀道卻老方見上、上尊之」。『風俗通』祀典竈神「謹按明堂月令、孟冬之月、其祀竈也、五祀之神、王者所祭、古之神聖、有功德於民、非老婦也、漢記、南陽陰子方、積恩好施、喜祀竈、臘日晨炊、而竈神見、再拜受神、時有黃羊、因以祀之、其孫識、執金吾、封原鹿侯、興衛尉、銅陽侯、家凡二侯、牧守數十、其後子孫常以臘日祠竈以黃羊」。

- (630) 同俗 『禮記』王制「司徒……一道德以同俗」。『漢書』卷七十二吉傳「……是以百里不同風、千里不同俗、戶異政、人殊服」。

- (631) 兵符社契、軍將交兵 「交兵」の「交」、注(628)の『辯正論』ならびに三本、宮本ともに「吏」に作るのに従う。『史記』

卷一五帝本紀「於是軒轅乃習用干戈、以征不享、諸侯咸來賓從、而蚩尤最爲暴、莫能伐」、正義「龍魚河圖云……黃帝以仁義不能禁止蚩尤、乃仰天而歎、天遣玄女、下授黃帝兵信神符、制伏蚩尤、帝因使之主兵以制八方」。「抱朴子」遐覽「其次有諸符、……九天發兵符」。「老君音誦誡經」(D 562, S 30・24293)「……而後人道官諸祭酒、愚闇相傳、自署治錄符契、攻錯經法、濁亂清眞、言有三百六十契、令能使長生、鬼神萬端、惑亂百姓」。「要修科儀戒律鈔」卷九「坐起鈔」(D 205, S 11・8834)「……次百五十將軍籙、次七十五將軍籙、次十將軍籙、次童子、次仙官上靈官次更令、若受法同、以先受爲上、後受爲下、男女不得雜錯、若所佩籙將軍種數同日受者、當以奉道先後次」同卷一〇「治室」(8841)「太眞科曰、兒童受一將軍及署更令九種吏兵、此係名天曹、自得從入靖治、向省禮三拜、告急乞恩」。

(632) 戒勸 『詩經』秦風終南序「終南、戒襄公也、能取周地、始爲諸侯、受顯服、大夫美之、故作是詩以戒勸之」。

(633) 神社 『墨子』明鬼下「昔者齊莊君之臣、有所謂王里國中里微者、此二子者、訟三年而獄不斷、齊君由謙殺之、恐不辜、猶謙釋之、恐失有罪、乃使二人共一羊、盟齊之神社、二子許諾」。

(634) 魔言 『無上祕要』卷四八「靈寶齋宿啓儀品」(D 774, S 42・33616)「是其齋日、捻香啓願、應聲上徹、四天司邏、十部威神既下履行、觀聽法音、監映爾心、如戒行道、皆列功諸天、禍福立彰、道不負人、勤行諦受、勿使魔言、……右出金籙經」。

(635) 禮祭 『魏書』卷一八二禮志二「詔曰、……且禮祭之議、國

之至重、先代碩儒、論或不一」。

(636) 佛邪亂政 目次では「邪炁亂政」。「亂政」の語は、『抱朴子』酒誡「信陵之凶短、襄子之亂政、趙武之失衆、子反之誅戮……」。

(637) 化胡經……未詳。

(638) 胡域 李陵「答蘇武書」(『文選』卷四一)「出天漢之外、入強胡之域」。「三天內解經」卷上 (D 876, S 47・38060)「中國陽氣純正、使奉無爲大道、外胡國八十一域、陰氣強盛、使奉佛道、禁誡甚嚴、以抑陰氣」。

(639) 西方金炁、剛而无禮 『春秋繁露』五行之義「金居西方而主秋氣」。「白虎通」五行「金在西方、西方者陰始起、萬物禁止、金之爲言、禁也、……剛勝柔、故金勝木」劉勰「滅惑論」(『弘明集』卷八、T 52・506)「三破論曰、……胡人無二、剛強無禮、不異禽獸、不信虛無、老子入關、故作形像之教化之」。「剛而无禮」は、『尚書』舜典の「剛而无虐」のもじり。

(640) 神州之士、效其儀法 顧歡「夷夏論」(『南齊書』卷五四高逸傳)「つぎのようにあるのを参照。「今以中夏之性、效西戎之法、既不全同、又不全異、……捨華效夷、義將安取」。「神州」の語は、注(531)を見よ。「儀法」の語は、『史記』卷九九叔孫通傳「高帝悉去秦苛儀法爲簡易、群臣飲酒爭功、醉或妄呼、拔劍擊柱」。

(641) 起立浮圖 『洛陽伽藍記』卷五「……如來在世之時、與弟子游化此土、指城東曰、我入涅槃後二百年、有國王名迦尼色迦、在此處起浮圖」。「起立」の語は、『法華經』分別功德品(T 9・

〔50〕「阿逸多、若我滅後、聞是經典、有能受持、若自書、若教人書、則爲起立僧坊……」。

(642) 處處專尙 『後漢書』卷七桓帝紀建和三年「今京師廝舍、死者相枕、郡縣阡陌、處處有之」。「專尙」の語の使用例は未見。

(643) 背本趣末 『漢書』卷二四食貨志上「文帝卽位、躬修儉節、思安百姓、時民近戰國、皆背本趣末」。

(644) 辭言 『韓非子』八姦「爲人臣者、事公子側室以音聲子女、收大臣至廷吏以辭言、處約言事、言成則進爵益祿、以勸其心、使犯其主」。

(645) 迂蕩 この語の使用例は未見。

(646) 妙法 『法華經』方便品(T.9.7a)「佛告舍利弗、如是妙法、諸佛如來時乃說之、如優曇鉢華時一現耳」。

(647) 飾彫經像 江淹「雜體詩」劉文學感遇(『文選』卷三二)「丹采既已過、敢不自彫飾」。「梁書」卷三八賀琛傳「至於居處、不過一牀之地、雕飾之物、不入於宮、此亦人所共知」。「洛陽伽藍記」卷二崇眞寺「閻羅王曰、沙門之體、必須攝心守道、志在禪誦、不干世事、不作有爲、雖造作經像、正欲得他人財物」。

(648) 王臣 『周易』蹇六二「王臣蹇蹇、匪躬之故」。しかし、この場合は「王」と「臣」の意であろう。「廣弘明集」卷六七が「列代王臣滯惑解」と名づけられているのを参照。

(649) 水旱 『周禮』春官保章氏「以五雲之物、辨吉凶水旱、降豐荒之祲象」。「漢書」卷二四食貨志上「暵錯復說上曰、……故堯禹有九年之水、湯有七年之旱、而國亡捐瘠者、以畜積多而備先

具也」。

(650) 兵革相伐 『禮記』月令「季春之月、……行秋令、則天多沈陰、淫雨蚤降、兵革並起」。曹罔「六代論」(『文選』卷五二)「自此之後、轉相攻伐、吳并於越、晉分爲三、魯滅於楚、鄭兼於韓」。

(651) 災變普出 『白虎通』災變「天所以有災變何、所以謹告人君、覺悟其行、欲令悔過修德、深思慮也」。「普出」の語の使用例は未見。

(652) 五星失度、山河崩竭 『漢書』卷八五谷永傳「上天震怒、災異婁降、日月薄食、五星失行、山崩川潰……」。京房「對災異」(『太平御覽』卷五天部星)「人君不行仁恩、破胎傷孕、春殺無辜、則歲星失度」。「國語」周語上「夫國必依山川、山崩川竭、亡之徵也」。「穀梁傳」序「陰陽爲之愆度、七曜爲之盈縮、川岳爲之崩竭、鬼神爲之疵厲」。

(653) 王化不平 『詩經』大序「周南召南、正始之道、王化之基」。張衡「思玄賦」(『文選』卷一五)「天蓋高而爲澤令、誰云路之不平」。

(654) 帝王不事宗廟、庶人不享其先 『尚書』泰誓下「郊社不修、宗廟不享、作奇技淫巧、以悅婦人」。蔡邕「郭有道碑文」(『文選』卷五八)「其先出自有周」。

(655) 神祇道炁 『尚書』湯誥「爾萬方百姓、羅其凶害、弗忍荼毒、並告無辜于上下神祇」。「論語」述而「子疾病、子路請禱、子曰、有諸、子路對曰、有之、誅曰、禱爾于上下神祇、子曰、丘之禱

久矣。『老子想爾注』五章「天地之間、其猶橐籥乎」、「道氣在間、清微不見、含血之類、莫不欽仰」。同十六章「歸根曰靜」、「道氣歸根、愈當清淨矣」。『登真隱訣』卷下「入靜」(D163, S11・8321)「次南向、甲修身養性、還年却老、願從道德君乞、恩潤之氣、布施骨體、使道氣流行甲身」。

(656) 智慧罪根品云……『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』卷

上(D202, S11・8819)「(元始)天尊告曰、……始開之際、人民純朴、結繩而行、混沌用心、合於自然、皆得長壽三萬六千年、至上皇元年、心漸頹壞、恐至凋落、正法不全、故國國周行、宣授天文、咸令入法、成就諸心、半劫之中、命漸凋落、壽得一萬八千餘年、我過去後、天運轉促、人心破壞、更相謀逆、嫉害勝己、爭競功名、不信經法、疑貳天真、口是心非、自作一法、淫祀邪神、殺生祈禱、迷惑不專、更相殘害、自取天傷、命不以理、壽無定年、致有罪錄惡種、展轉五道八難之中、沈淪三徒、莫知命根、冥冥長夜、億劫無還、流曳塗炭、甚可哀傷」。この道經はすでに本論二「年號差舛」章にも引かれていた。注(131)参照。

(657) 延命 『漢書』卷三六劉向傳「上復興神僊方術之事、而淮南

有枕中鴻寶苑祕書、書言神僊使鬼物爲金之術、及鄒衍重道延命方」。

(658) 人心頹壞 『周易』咸象傳「聖人感人心、而天下和平」。『抱

朴子』知止「遠取諸物、則構高崇峻之無限、則頹壞性憂矣、近取諸身、則嘉膳旨酒之不節、則結疾傷性矣」。

(659) 淫祀邪神 『禮記』曲禮下「非其所祭而祭之、名曰淫祀、淫

祀無福」。『抱朴子』道意「淫祀妖邪、禮律所禁」。蕭子良「淨住子」戒法攝生門第二十「〔廣弘明集〕卷二七、T52・315 c～316a」「歸依生信、必能出有、若歸邪神、反增苦趣」。

(660) 殺生禱祈 『管子』海王「桓公問於管子曰、……吾欲藉於六

畜、管子對曰、此殺生也」。『上清洞真智慧觀身大戒文』(D1039, S56・45411)「道學不得殺生、譬蠕動之蟲」。『後漢書』傳二〇下郎顗傳「自冬涉春、訖無嘉澤、數有西風、反逆時節、朝廷勞心、廣爲禱祈、薦祭山川、暴龍移市」。殺生をして禱祈すればかえって壽命をちじめること、『三天內解經』卷下(D876, S47・38059)に、「群愚紛紜、莫知禍之所由、或烹殺六畜、禱請虛無、……求生反死、邪道使然、頭癢搔足、事不相由、祈請乖越、以致滅軀、天此年命、誠可痛哉」という。

(661) 殘害 『抱朴子』廣譬「……是以惠和暢於九區、則七耀得於玄

昊、殘害著於品物、則二氣謬於四八」。

(662) 天傷 『晉書』卷九五藝術幸靈傳「凡草木之夭傷於山林者、

必起理之、器物之傾覆於途路者、必舉正之」。

(663) 壽无定年 『抱朴子』塞難「生無定年、死無常分」。

(664) 萬神歡喜 『宋書』卷二七符瑞志上「軒轅接萬神於明庭、今

塞門谷口是也」。『抱朴子』地眞「昔黃帝東到青丘、過風山、見紫府先生、受三皇內文、以効召萬神」。梁簡文帝「馬寶頌」(『文苑英華』卷七七八)「三農盛、九穀滋、萬祇悅、八神怡」。蕭子良「淨住子」自慶畢故止新門第二十一「〔弘明集〕卷二七、

T 52・316b)「得捨如是之罪障、餐聽若斯之勝法、豈得不踊躍歡喜、嗟抃自慶者乎」。

- (665) 獲福利 仲昌統『昌言』理亂(『後漢書』傳三九)「……是使姦人擅無窮之福利、而善士挂不赦之罪辜」。『雜阿含經』卷五〇(T 2・365b)「智慧優婆塞、獲福利豐多、施叔迦羅衣、離諸煩惱故」。

- (666) 命促 注(536)を見よ。

- (667) 漢明以前、佛法未行 後漢の明帝の永平中にはじめて佛法が中國に傳來したこと、いわゆる永平求法傳說として傳わる。注(467)、參照。湯用彤『漢魏兩晉南北朝佛教史』第二章「永平求法傳說之考證」に關連資料が集められている。

- (668) 道炁隆盛 『老君變化無極經』(D 875, S 47・37997)「胡兒弭伏道氣隆、隨時轉運西漢中」。「隆盛」の語は、『漢書』卷四十七文三王傳贊「梁孝王雖以愛親故王膏腴之地、然會漢家隆盛、百姓殷富、故能殖其貨財、廣其宮室車服」。

- (669) 兵戈屢作 『公羊傳』襄公十二年「莒人伐我東鄙圍台」、何休注「……中國以弱、蠻荆以強、兵革亟作」。庾信「爲閭大將軍乞致仕表」(『庾子山集』卷七)「……況復水土之職、王梁以應讖受徵、兵戈之王、韓信以登壇獨拜」。

- (670) 相尋 『後漢書』傳七八西域傳論「又精靈起滅、因報相尋、若曉而昧者、故通人多惑焉」。

- (671) 雨血山崩 『墨子』非攻下「昔者有三苗大亂、天命殛之、日妖宵出、雨血三朝」。『漢書』卷二七五行志中之下「惠帝二年、

天雨。血於宜陽一頃所、劉向以爲赤眚也」。「山崩」の語は、注(652)を見よ。

- (672) 飢荒荐集 『詩經』大雅雲漢「天降喪亂、饑饉薦臻」。『國語』魯語上「天災流行、戾于弊邑、饑饉荐降、民羸幾卒」。「飢荒」の語は、『南齊書』卷二八劉善明傳「元嘉末、青州飢荒、人相食」。「荐集」の語の使用例は未見。

- (673) 桀紂炮烙生靈 『史記』卷三殷本紀「百姓怨望、而諸侯有畔者、於是紂乃重刑辟、有炮烙之法」、集解「列女傳曰、膏銅柱、下加之炭、令有罪者行焉、輒墮炭中、姐已笑、名曰炮烙之刑」。『淮南子』俶真訓「逮至夏桀、殷紂、燔生人、辜諫者、爲炮烙、鑄金柱」。『南齊書』卷四七王融傳「夫唯動植、且或有心、況在生靈、而能無感」。明僧紹「正教論」(『弘明集』卷六、T 52・386)「故夫學得所學、則可以資全生靈、而教導域中矣」。沈約「與徐勉書」(『梁書』卷一三沈約傳)「開年以來、病增慮切、當由生靈有限、勞役過差」。

- (674) 妖災虐政 『穀梁傳』序「……是以妖災因疊而作、民俗染化而遷」。「虐政」の語は、注(146)を見よ。

- (675) 以今驗古 『南齊書』卷五三良政劉懷慰傳「兗州刺史柳世隆與懷慰書曰、膠東淵化、潁川致美、以今方古、曾何足云」。任昉「百辟勸進今上牋」(『文選』卷四〇)「居今觀古、曾何足云」。

- (676) 誑欺 『抱朴子』勸求「諸虛名之道士、既善爲誑詐以欺學者、又多護短惡愚」。宗炳「答何(承天)書」(『弘明集』卷三、T 52・186)「何誑以不滅、欺以佛理」。『顏氏家訓』歸心「俗之謗

者、大抵有五、……其二以吉凶禍福、或未報應、爲欺。証也。

- (677) 竹帛 東方朔「答客難」(『文選』卷四五)「今子大夫修先王之術、慕聖人之義、諷誦詩書百家之言、不可勝記、著於竹帛、臂腐齒落、服膺而不可釋」。

- (678) 不可掩 枚乘「上書重諫吳王」(『文選』卷三九)「……此不可掩、亦已明矣」。

- (679) 庸疎 明濬「答博士柳宣」(『廣弘明集』卷一一)「T.52・262b」
「顧己庸疎、彌增悚慙、指述還答、餘無所申」。

- (680) 兩教 『南齊書』卷五四高逸傳論「詳尋兩教、理歸一極、但迹有左右、故教成先後」。
『北齊書』卷四五文苑樊遜傳「制詔……又問釋道兩教」。

- (681) 道法謙退 「道法」の語は、「周滅佛法集道俗議事」の注(66)を見よ。「謙退」の語は、『論語』先進「子曰、求也退、故進之、由也兼人、故退之」の集解「鄭玄曰、言冉有性謙退、子路務在勝尙人、各因其人之失而正之」、『史記』卷二四樂書「君子以謙退爲禮、以損減爲樂」。

- (682) 行僞以顯佛眞 『淮南子』傲眞訓「……是故神越者、其言華、德蕩者、其行僞」。顧歡「夷夏論」(『南齊書』卷五四高逸傳)「泥洹仙化、各是一術、佛號正眞、道稱正一」。

- (683) 佛法澄正 「佛法」の語は、「周滅佛法集道俗議事」の注(66)の謝鎮之「折夷夏論」を見よ。「澄正」の語は、『晉書』卷三九荀顗傳「顗承(陳)泰後、加之淑慎、綜核名實、風俗澄正」。

- (684) 存理而開物性 謝靈運「山居賦」(『宋書』卷六七)「夫道可重、故物爲輕、理宜存、故事斯忘」。
『風俗通』正失「夫虎豹在山、龍鼉在淵、物性之所託」。惠通「駁顧道士夷夏論」(『弘明集』卷七、T.52・46a)「至夫太古之初、物性猶純、無假禮教而能輯、不施刑罰而自治」。

- (685) 通道 梁武帝「寶亮法師涅槃疏序」(『藝文類聚』卷七七內典部寺碑)「所以如來乘本願以託生、現慈力以應化、離文字以設教、忘心相以通道」。

- (686) 笑殺 『南齊書』卷二八垣榮祖傳「(薛)安都曰、天命有在、今京都無百里地、莫論攻圍取勝、自可拍手笑殺」。

- (687) 樹木聞誠枯死 目次では「誠木枯死」。「枯死」の語は、「老子」七十六章「萬物草木之生也柔脆、其死也枯槁」をふまえる。
(688) 老子百八十戒重律云……『雲笈七籤』卷三九「說戒」に「老君說一百八十戒并敍」が引かれているが、この文句は見えない。

- (689) 大重 『漢書』卷六八霍光傳「察群臣唯光任大重、可屬社稷、上乃使黃門畫者畫周公負成王朝諸侯以賜光」。

- (690) 靈寶經云……未詳。

- (691) 玄素之道 『抱朴子』微旨「知玄素之術者、則曰唯房中之術可以度世矣、明吐納之道者、則曰唯行氣可以延年矣」。

- (692) 延年益壽 『抱朴子』道意「曩者有張角柳根王歆李申之徒、或稱千歲、假託小術、坐在立亡、變形易貌、誑眩黎庶、糾合群愚、進不以延年益壽爲務、退不以消災治病爲業」。

(693) 消年損命 『抱朴子』博喻「杖策去幽者、形如踞膝、夜以待旦者、勤憂損命。」同釋滯「……故幽閉怨曠、多病而不壽也、任情肆意、又損年命。」「真誥」卷一〇「協昌期」第二(D 638, S 34・27425)「沈義口訣、服神藥、勿向北方、大忌、亥子日不可唾、亡精失氣、減損年命、藥勢如土。」「消年」の語の使用例は未見。

(694) 三五將軍禁厭之法 玄嶷『甄正論』卷下(T 52・569a~b)「錄者其數甚多、不可備說、略而詳之、有千五百將軍。三五大將軍等錄、受此錄者、然可行符禁章醮之事。」道安「二教論」服法非老第九(『廣弘明集』卷八、T 52・141a)「敬尋道家、厭品有三、一者老子無爲、二者神仙餌服、三者符錄禁厭、就其章式、大有精靈、靈者厭人殺鬼、精者練屍延壽、更有青錄、受須金帛、王侯受之、則延年益祚、庶人受之、則輕健少疾。」

(695) 怨憎 嵇康「幽憤詩」(『文選』卷二二)「性不傷物、頻致怨憎。」

(696) 癡狂殞命 『難經』「五十九難曰、狂。癡之病、何以別之、然、狂之始發、少臥而不饑、自高賢也、自辨智也、自貴倨也、妄笑好歌樂、妄行不休、是也、癡疾始發、意不樂、直視僵仆、其脈三部陰陽俱盛、是也。」「後漢書」傳六寇榮傳「蓋忠臣殺身以解君怒、孝子殞命以寧親怨。」

(697) 度國王品…… 未詳。本論三十「儉佛經因果」章に「度王品」の引用がある。

(698) 東方開明招真神 『淮南子』地形訓「東方曰東極之山、曰開

明之門。」「山海經」海內西經「昆侖南淵深三百仞、開明獸身大類虎而九首、皆人面、東嚮立昆侖上。」「雲笈七籤」卷五三「雜祕要訣法」太上隱書八景飛經八法「乃微祝曰、……保固元宮、監總帝靈、招真制魔、我道威明。」「真誥」卷二「運題象」第二(D 637, S 34・27352)「含仁守慈、發拔幽憂、單心慈誘、栖神靈鏡者、許長史其人也、所恨在於應物速招真急耳。」同第四(27363)「靈人隱玄峯、真神輶雲來。」

(699) 身著黑幘有玄文 『宋書』卷一八禮志「今以單衣黑幘爲宴會服、拜陵亦如之。」「楚辭」九章懷沙「玄文處幽兮、矇眴謂之不章。」王逸注「玄、墨也。」

(700) 身廣百步頭柱天 三本、宮本に從つて「身」を「足」と改める。『抱朴子』登涉「若或見蛇、因向日、左取三炁閉之、以舌柱天、以手捻都關……」。

(701) 主食邪魔口容山 『真誥』卷六「甄命授」第二(D 638, S 34・27380)「旦頃以來、殺氣蔽天、惡煙弭景、邪魔橫起、百疾雜臻。」「雲笈七籤」卷六〇「諸家氣法」中山玉櫃服氣經「既食百穀、則邪魔生、三蟲聚」。ちなみに、東方に邪魔を食べる神がいるというのは、度朔山の神荼、鬱壘の傳説と關係がある。『論衡』亂龍「上古之人、有神荼鬱壘者、昆弟二人、性能執鬼、居東海度朔山上、立桃樹下、簡閱百鬼、鬼無道理、妄爲人禍、荼與鬱壘縛以蘆索、執以食虎。」「風俗通」祀典をも參照。

(702) 五十五合衣吞 三本、宮本に從つて「十五五合衣吞」と改める。『宋書』卷二二樂志「白鶴」「飛來雙白鶴、乃從西北來、

十。十五。羅列成行。『隋書』卷六四來護兒傳「諸賊甚憚之、爲作歌曰、長白山頭百戰場、十。十五。把長槍、不畏官軍十萬衆、只畏榮公第六郎」。

- (703) 三元大誠云…… 本論二十四「害親求道」章に「三元誠」の引用が、また三十四「道士奉佛」章に「大誠」の引用があり、それらに對應する文章は『上清洞眞智慧觀身大戒文』(D1039, S56)に見いだされる。『觀身大戒文』は下元戒品、中元戒品、上元戒品に分れ、この『三元大誠』もそれを指すのであらうが、びたりと對應する文章はない。

- (704) 天尊說十誠十善等法、无量人得道 本論三「元爲天人」章に「又案靈寶罪根品云、太上道君禮元始天尊、問十善等法、於是天尊命召神仙、各說因緣、恆沙得道」とある。その注(176)を参照。「無量」の語は、『論語』鄉黨「惟酒無量、不及亂」、『漢書』卷九四匈奴傳下「黃門郎揚雄上書諫曰、……且夫前世豈樂傾無量之費、役無罪之人、快心於狼望之北哉」。

- (705) 誠云…… 本論二十四「害親求道」章に、「三元誠云、道學不得懷挾惡心」とある。それは『上清洞眞智慧觀身大戒文』(D1039, S56・45411)の「道學不得口善心懷陰惡」に對應しよう。

- (706) 惡心 『抱朴子』微旨「隨事輕重、司命奪其算紀、算盡則死、但有惡心而無惡迹者、奪算」。

- (707) 生謗得罪 『宋書』卷五六謝瞻傳「(謝)晦聞疾奔往、瞻見之曰、汝爲國大臣、又總戎重、萬里遠出、必生疑謗、時果有訴

告晦反者。『詩經』小雅雨無正「云不可使、得罪于天子」。

- (708) 樹木无情 桓譚『新論』(『藝文類聚』卷八八木部檢)「劉子駿信方士虛言、爲神仙可學、余見其庭下有大榆樹、久老剝折、指謂曰、彼樹无情、然猶朽蠹、人雖欲愛養、何能使之不衰」。
- 「無情」の語は他にも、『世說新語』文學「(僧)意謂王(荀子)曰、聖人有情不、王曰、無、重問曰、聖人如柱邪、王曰、如籌算、雖無情、運之者有情」、『劉子新論』去情「魚不畏網而畏鵜、復讐者不怨鎡鋸而怨其人、網無心而鳥有情、劍無情而人有心也」。

- (709) 不慮獲罪起謗 李密「陳情事表」(『文選』卷三七)「人命危淺、朝不慮夕」。『左傳』哀公六年「初(楚)昭王有疾、卜曰、河爲祟、王弗祭、大夫請祭諸郊、王曰、三代命祀、祭不越望、江漢雒漳、楚之望也、禍福之至、不是過也、不穀雖不德、河非所獲罪也、遂弗祭」。『北齊書』卷四七酷吏畢義雲傳「齊文襄作相、以爲稱職、令普勾僞官、專以車輻考掠、所獲甚多、然大起怨謗」。

- (710) 有知 『說苑』辨物「子貢問孔子、死人有知無知也、孔子曰、吾欲言死者有知也、恐孝子順孫妨生以送死也、欲言無知、恐不孝子孫棄不葬也、賜欲知死人有知將無知也、死徐自知之、猶未晚也」。また後文の「案漢婕妤……」のくだりを參照のこと。

- (711) 聞法 『法華經』譬喻品(T9・13b)「若有衆生、內有智性、從佛世尊、聞法信受、慇懃精進、欲速出三界、自求涅槃、是名聲聞乘」。

(712) 災毒 范曄「宦者傳論」(「文選」卷五〇)「因復大考鉤黨、轉相誣染、凡稱善士、莫不羅被災毒」。

(713) 大道寬容 「大道」の語は、注(24)を見よ。「寬容」の語は、『漢書』卷七七劉輔傳「臣聞明王垂寬容之聽、崇諫爭之官、廣開忠直之路、不罪狂狷之言」。

(714) 檢而不檢 阮籍「通易論」「……是以失刑者嚴而不檢、喪德者高而不尊」。

(715) 殃延後代 『玄都律文』制度律(D 78, S 5・358)「不敬事師、冒慢神明、治國則亂、治家則亡、殃考延及後世也」。『周氏冥通記』卷二注(D 152, S 9・6806)「殺戮之咎、誠爲莫大、但身尙以蒙釋、方慮殃延苗裔、小爲難解」。揚雄「長楊賦」(「文選」卷九)「又恐後代迷於一時之事、常以此爲國家之大務」。

(716) 收錄 『北齊書』卷四七酷吏宋遊道傳「廣陽王爲葛榮所殺、元徽誣其降賊、收錄妻子、遊道爲訴得釋、與廣陽王子迎喪返葬」。

(717) 案三張之術…… 玄光「辯惑論」(「弘明集」卷八、T 52・48 C・40b)「畏鬼帶符非法之極第一、……其經辭致矯慢、鬼弊云、左佩太極章、右佩崑吳鐵、指日則停暉、擬鬼千里血、若受黃書赤章、言即是靈仙、……制民課輸欺巧之極第二、……又塗炭齊者、事起張魯、氐夷難化、故制斯法、乃驢輾泥中、黃鹵泥面、擣頭懸擗、埏埴使熟、此法指在邊陲、不施華夏、至義熙初、有王公其次、貪寶憚苦、竊省打拍、吳陸修靜甚知源僻、猶泥揆額懸糜而已、……輕作寒暑兇佞之極第六、……造黃神越章、用持

殺鬼、又制赤章、用持殺人……」。道安「二教論」服法非老第
九(「廣弘明集」卷八、T 52・140c)、法琳「辯正論」卷六「內
九箴篇」(T 52・533c)にも引用されている。

(718) 昆吾鐵 『列子』湯問「周穆王大征西戎、西戎獻鍔之劍、火浣之布、其劍長尺有咫、練鋼赤刃、用之切玉、如切泥焉」。

(719) 指日則停空 『淮南子』覽冥訓につぎのようにあるのを参照。
「魯陽公與韓擒難、戰酣日暮、援戈而撝之、日爲之反三舍」。

(720) 千里血 『越絕書』越絕外傳記寶劍「……於是楚王聞之、引
泰阿之劍、登城而麾之、三軍破敗、士卒迷惑、流血千里、猛獸
歐膽、江水折揚」。

(721) 黃神赤章 三本、宮本に従って「黃神越章」と改める。『抱
朴子』登涉「古之人入山者、皆佩黃神越章之印、其廣四寸、其
字一百二十、以封泥、著所住之四方各百步、則虎不敢近其內
也」。なお一九七二年、陝西省戶縣朱家堡の漢墓から出土した
陶罐に朱書があり、陽嘉二年(一三三)八月己巳朔六日甲戌の
日付を備え、末尾に「神藥厭填、封黃神越章之印、如律令」と
記されている。祿振西「陝西戶縣的兩座漢墓」(『考古與文物』
一九八〇年一期)、池田溫「中國歷代墓券略考」(『東洋文化研
究所紀要』八六冊)。また、吳榮會「鎮墓文中所見到的東漢道
巫關係」(『文物』一九八一年三期)、参照。

(722) 塗炭齋 H・マスpero、川勝義雄譯『道教』一七七頁以下、
参照。

(723) 黃土泥面 『史記』卷六〇三王世家褚先生補「春秋大傳曰、

天子之國有泰社、東方青、南方赤、西方白、北方黑、上方黃、故將封於東方者取青土、……封於上方者取黃土、各取其色物、裹以白茅、封以爲社。『易林』剝之鼎「泥面亂頭、忍恥少羞、日以削消、凶其自招」。

- (724) 驢輶 この語の使用例未見。三本、宮本は「驢輶」。「輶」はひき白。

- (725) 懸頭 『楚國先賢傳』(『太平御覽』卷六一一學部勤學)「孫敬好學、時欲寤寐、懸頭至屋梁以自課」。

- (726) 打拍 楊聯陞「道教之自搏與佛教之自撲」(『塚本博士頌壽記念佛教史學論集』、一九六一)、參照。

- (727) 陸修靜 陳國符『道藏源流攷』の「三洞四輔經之淵源及傳授」三八頁以下に關連の資料が集められている。

- (728) 反縛 『神仙傳』劉根傳「……見下有一老翁老姥、大繩反縛囚之、懸頭廳前、(張)府君熟視之、乃其亡父母也。僧敏「戎華論折顯道士夷夏論」(『弘明集』卷七、T52・47c)「反縛伏地者、地獄之貌也」。蕭子良「淨住子」迴向佛道門第三十(『廣弘明集』卷二八、T52・320c)「一切諸外道、種種勤苦行、五熱炙其身、投巖赴水火、反縛塗灰等、無量諸邪見」。

- (729) 淫祀 注(659)を見よ。

- (730) 衆淫同笑 三本が「衆望同笑」に作るのに従う。

- (731) 案漢婕妤…… 『漢書』卷九七下外戚班婕妤傳「鴻嘉三年、趙飛燕譖告許皇后班婕妤俠媚道、祝詛後宮、詈及主上、許皇后坐廢、考問班婕妤、婕妤對曰、妾聞死生有命、富貴在天、修正

尚未蒙福、爲邪欲以何望、使鬼神有知、不受不臣之慙、如其無知、慙之何益、故不爲也、上善其對、憐憫之、賜黃金百斤」。「婕妤」については、同傳序に「至武帝、制婕妤、嬙娥倭華充依、各有爵位」とあり、顏師古注に「婕、言接幸於上也、妤、美稱也」。

- (732) 無理 應貞「晉武帝華林園集詩」(『文選』卷二〇)「無理不經、無義不踐、行捨其華、言去其辯」。

- (733) 推測 『宋書』卷一三律曆志下「三精數微、五緯會始、自非深推測、窮識晷變、豈能刊古革今、轉正圭宿」。

- (734) 常人 司馬相如「難蜀父老」(『文選』卷四四)「蓋世必有非常之人、然後有非常之事、有非常之事、然後有非常之功、夫非常者、固常人之所異也」。宗炳「明佛論」(『弘明集』卷二、T52・10b)「寧可以常人之不見、而斷周公之必不見哉」。

- (735) 識達 潘岳「楊荊州誄」(『文選』卷五六)「仰追先考、執友之心、俯感知己、識達之深」。

- (736) 聰明正直 『左傳』莊公三十二年「國之將興、聽於民、將亡、聽於神、神聰明正直而壹者也、依人而行」。

- (737) 愚厭 この語の使用例未見。

- (738) 詞義无取 蕭子良「淨住子」敬重正法門第二十六(『廣弘明集』卷二七、T52・319a)「時運漸染、東翻漢朝、沿彼至今、年垂六百、雜錄正經七千餘卷、詞義明敏、談味無遺」。任昉「爲范尚書讓吏部封侯第一表」(『文選』卷三八)「臣素門凡流、輪翻無取」。注(19)の「辭義」をも參照。

(739) 俗巫解奏之曲 『南齊書』卷五四高逸顧歡傳「歡答曰、……若以翦落爲異、則胥靡翦落矣、若以立像爲異、則俗巫立像矣」。未詳作者「正誣論」(『弘明集』卷一、T52・83)「又誣云、有無靈下經、無靈下經、妖怪之書耳、非三墳五典訓誥之言也、通才達儒所未究覽也、三曾五祖之言、又似解奏之文、此殆不詰而虛妄自露矣」。

(740) 耽嗜糟汁 阮籍「獼猴賦」(『藝文類聚』卷九五獸部獼猴)「耽嗜慾而眈視、有長卿之研姿」。「陸先生道門科略」(D761, S41・33122)「恣貪欲之性、而耽酒嗜食」。梁武帝「斷酒肉文」(『廣弘明集』卷二六、T52・295a~b)「酒者何也、謂是臭氣水穀、失其正性、成此別氣、衆生以罪業因緣、故受此惡觸、此非正眞道法、亦非甘露上味、云何出家僧尼猶生耽嗜」。『列子』楊朱「朝之室也、聚酒千鍾、積麴成封、望門百步、糟漿之氣、逆於人鼻」。

(741) 酒淫終歲 『尚書』胤征序「羲和酒淫、廢時亂日、胤往征之、作胤征」。劉楨「贈從弟」三首之二(『文選』卷二二)「冰霜正慘愴、終歲常端正」。

(742) 推誠 『魏書』卷七高祖紀下「每言、凡爲人君、患於不均、不能推誠御物、苟能均誠、胡越之人亦可親如兄弟」。

(743) 起禮北方爲始 目次では「北方禮始」。『太上洞玄靈寶赤書玉訣妙經』卷上(D178, S10・7770)には、「道曰、子受靈寶大戒、當起北向、首體投地、禮於十方」とあるが、禮拜は東方から始めるのが普通のようなのである。たとえば、『三洞珠囊』卷

九「時節品」(D782, S42・33897)「昇玄第一經云、朝中日沒人定夜半雞鳴爲六時、禮敬十方天尊、禮從東方爲始也」、『佛說尸迦羅越六方禮經』(T1・250c)「早起嚴頭、洗浴着文衣、東向四拜、南向四拜、西向四拜、北向四拜、向天四拜、向地四拜」。

(744) 十誡十四持身經云……『洞玄靈寶天尊說十戒經』(D203, S11・8839)に「天尊言、善男子善女人、能發自然道意、來入法門、受我十戒十四持身之品、則爲大道清信弟子」とあるが、禮拜に關する記事はない。

(745) 想見太上眞形 『史記』卷八四屈原賈生列傳論「適長沙、觀屈原所自沈淵、未嘗不垂涕想見其爲人」。謝靈運「從斤竹澗越嶺溪行」(『文選』卷二二)「想見山阿人、薜蘿若在眼」。陸機「浮雲賦」(『藝文類聚』卷一天部雲)「有輕虛之艷象、無實體之眞形」。『雲笈七籤』卷七九「符圖」五嶽眞形神仙圖記「積精存神、常想眞形」。『道教義樞』序(D762, S41・33155)「禮拜供養、如對眞形」。

(746) 文始傳云……本論十六「太上尊貴」章の「文始傳稱……」の引用を参照。

(747) 大羅天玉京山 本論十「崑崙飛浮」章「度人妙經云、五億重天之上、大羅之天、有玉京山」。

(748) 幽遠 『莊子』山木「君曰、彼其道幽遠而無人、吾誰與爲鄰、吾無糧、吾無食、安得而至焉」。『後漢書』傳二七桓榮傳「夫五經廣大、聖言幽遠、非天下之至精、豈能與於此」。

(749) 遙禮 『洛陽伽藍記』卷四融覺寺「菩提」流支讀曇謨最大乘

義章、每彈指讚嘆、唱言微妙、即爲胡書寫之、傳之於西域、西域沙門常東向遙禮之、號曇謨最爲東方聖人。

(750) 玄都玉京、太上所住 注(510)を見よ。

(751) 道生東、陽也 本論八「佛生西陰」章の「老子序」に「道生於東、爲木陽也、佛生於西、爲金陰也」とある。その注(337)、参照。

(752) 佛生西、陰也 前注に同じ。

(753) 尊重 『抱朴子』刺驕「自尊重之道、乃在乎以貴下賤、卑以自牧」。

(754) 罪根品云…… 本論三「元爲天人章」に「又案靈寶罪根品云、太上道君禮元始天尊、問十善等法……」とある。その注(176)、参照。

(755) 稽首 注(440)を見よ。

(756) 捨本逐末 『老子』五十二章「天下有始、以爲天下母、既得其母、以知其子、既知其子、復守其母、沒身不殆」、王弼注「母、本也、子、末也、得本以知末、不舍本以逐末也」。

(757) 害親求道 『魏書』卷六五邢虬傳「時雁門人有害母者、八座奏輶之而猶其室、宥其二子、虬駁奏云、君親無將、將而必誅、今謀逆者戮及期親、害親者今不及子、既逆甚梟鏡、禽獸之不若而使禮祀不絕、遺育永傳、非所以勸忠孝之道、存三綱之義」。

「求道」の語は、注(614)を見よ。

(758) 老子消冰經云…… 『辯正論』卷六「十喻篇」(T52・526b～

「笑道論」譯注

○) につきのようにあるのを参照。「開士曰、汝化胡經言、喜欲從聘、聘曰、若有至心隨我去者、當斬汝父母妻子七人頭者、乃可去耳、喜乃至心、便自斬父母七人、將頭到聘前、便成七猪頭」。

(759) 學道 『抱朴子』微旨「凡學道當階淺以涉深、由難以及易、志誠堅果、無所不濟」。

(760) 五情 注(199)の「五情」とこのそれとはすこし内容が異なる。

(761) 情色 『法苑珠林』卷七五「十惡篇」邪婬部(T53・8509)「十誦律云、……習報頌曰、昏婬亂情色、受苦無表裏」。

(762) 財寶 徐陵「東陽雙林寺傳大士碑」「或立捨鬚髮、如聞善來、大傾財寶、同修淨福」。

(763) 官爵 『禮記』仲尼燕居「以之朝廷有禮、故官爵序也」。

(764) 精銳 王褒「四子講德論」(『文選』卷五一)「偃息匍匐乎詩書之門、遊觀乎道德之域、咸繫身修思、吐情素而披心腹、各悉精銳以貢忠誠……」。『後漢書』傳二七丁鴻傳「鴻年十三、從桓榮受歐陽尚書、三年而明章句、善論難、爲都講、遂篤志精銳、布衣荷擔、不遠千里」。

(765) 禽獸 『禮記』曲禮上「夫唯禽獸無禮、故父子聚麀、是故聖人作、爲禮以教人、使人以有禮、知自別於禽獸」。『晉書』卷四九阮籍傳「有司言有子殺母者、籍曰、噫、殺父乃可、至殺母乎、坐者怪其失言、帝曰、殺父、天下之極惡、而以爲可乎、籍曰、禽獸知母而不知父、殺父、禽獸之類也、殺母、禽獸之不若、衆

乃悅服」。

- (766) 七寶 『法華經』授記品 (T.9・21D) 「諸佛滅後、各起塔廟、高千由旬、縱廣正等、五百由旬、皆以金銀琉璃車渠馬瑙眞珠玫瑰、七寶合成」。『西京雜記』卷一「趙飛燕爲皇后、其女弟在昭陽殿、遺飛燕書曰、今日嘉辰、貴姊懋膺洪冊、謹上櫺三十五條、以陳踊躍之心、……七寶綦履、……同心七寶釵……」。

- (767) 反家 この語の使用例未見。『宋書』卷四二劉穆之傳の下記を參照。「時穆之聞京城有叫譟之聲、晨起出陌頭、屬與信會、穆之直視不言者久之、既而反室、壞布裳爲袴、往見高祖」。

- (768) 造立天地記云…… 本論一「造立天地」章の「太上道君造立天地初記」の引用を參照。

- (769) 打煞胡王七子國人一分 『搜神記』(二十卷本)「卷一八」……(田)琰隨後逐之、見犬將升婦牀、便打殺之。「一分」の語については、注(73)を見よ。

- (770) 三元誠云…… 『上清洞真智慧觀身大成文』(D 1039, S 56, 45411)「道學不得口善心懷陰惡、道學不得教人口善心懷陰惡、……道學不得教人離別家室、……道學不得勸人不幸父母兄弟」。

- (771) 懷挾惡心 『國語』晉語二「亡人之所懷挾、纓纓、以望君之塵垢者」。『戰國策』東周策「夫鼎者、非效醢壺醬貳耳、可懷挾提挈以至齊者」。「惡心」の語は、注(706)を見よ。

- (772) 懷疑 『三國志』卷四陳留王紀咸熙元年「僞將施績、賊之名臣、懷疑自猜、深見忌惡」。同卷六二吳志胡綜傳「向使曹氏不信子遠、懷疑猶豫、不決於心、則今天下袁氏有也」。

- (773) 實心 『韓非子』飾邪「……故曰、豎穀陽之進酒也、非以端惡子反也、實心以忠愛之、而適足以殺之而已矣」。同解老「中心懷而不諭、故疾趨卑拜而明之、實心愛而不知、故好言繁辭以信之」。

- (774) 懷惡已犯重罪 『詩經』唐風羔裘「羔裘豹祛、自我人居居、毛傳「居居、懷惡不相親比之貌」。『公羊傳』昭公十一年「懷惡而討、不義、君子不予也」。『周禮』秋官大司寇「凡萬民之有罪過、而未麗於灋、而害於州里者、桎梏而坐諸嘉石、役諸司空、重罪旬有三日坐、暮役、其次九日坐、九月役……」。

- (775) 二親 『韓詩外傳』卷一「枯魚銜索、幾何不蠹、二親之壽、忽如過隙」。『抱朴子』勸求「空委二親之供養、捐妻子而不卹」。『不仁』 『周易』繫辭下傳「小人不恥不仁、不畏不義、不見利不勸、不威不懲」。『論語』八佾「子曰、人而不仁、如禮何、人而不仁、如樂何」。『老子』五章「天地不仁、以萬物爲芻狗、聖人不仁、以百姓爲芻狗」。

- (777) 作法於後代 『左傳』昭公四年「渾罕曰、國氏其先亡乎、君子作法於涼、其敝猶貪、作法於貪、敝將若之何」。『淮南子』齊俗訓「聖人之法可觀也、其所以作法、不可原也」。『後代』の語は、注(715)を見よ。

- (778) 濫誅半國之人 徐陵「同汪詹事登宮城南樓」「叔譽恆詞屈、防年豈濫誅」。『史記』卷四四魏世家「公孫順……謂韓懿侯曰、魏幣與公中緩爭爲太子、君亦聞之乎、今魏幣得王錯、挾上黨、固半國也、因而除之、破魏必矣、不可失也」。『後漢書』傳五五

皇甫規傳「凡此五臣、支黨半國、其餘墨綬、下至小吏、所連及者、復有百餘」。

- (77) 進退二三 『詩經』大雅桑柔「人亦有言、進退維谷」。同衛風氓「士也罔極、二三其德」。『宋書』卷四二王弘傳「臣實空閭、階恩踰越、俯積素餐、仰玷盛化、公私二三、無一而可」。同卷四四謝晦傳「謂司馬庾登之曰、今當自下、欲屈卿以三千人守城、備禦劉粹、登之曰、下官親老在都、又素無旅、情計二三、不敢受此旨」。

- (78) 笑怪 この語の使用例未見。下記を参照。『北齊書』卷二八元孝友傳「設令人強志廣娶、則家道離索、身事迍邐、內外親知、共相嗤怪」。

- (78) 延生符 目次では「延生年符」。

- (782) 三三品云…… 『太上洞玄靈寶三三品戒功德輕重經』(D 202, S 11・8739)「天尊曰、上元一品天官、元氣始凝、三光開明、結青黃白之氣、置上元三宮、其第一宮、名太玄都元陽七寶紫微宮、則青元始陽之氣、總主上眞自然玉虛高皇上帝諸天帝王上聖大神、其宮皆五億五萬五千五百五十五億五萬重、亦有五億五萬五千五百五十五億五萬重青陽之氣、其中神仙官僚、亦有五億五萬五千五百五十五億五萬重、亦有五億五萬五千五百五十五億五萬衆、皆結自然青元之氣而爲人也、衣則青羽飛衣、紫微宮中有延生之符、書符安八方、則八方之氣、欽然而到、響應成人、毀符以火燬之、而人隨煙卽化、還爲氣也、自非金簡玉名得道之人、莫能施之、其文四萬劫一出、太陽火官主之、太玄上府行之」。

- (783) 紫微宮青延生符 三本、宮本に従って「青」を「有」と改める。

- (784) 八氣 『河圖括地象』(『太平御覽』卷三十六地部地)「天有五、行、地有五岳、天有七星、地有七表、天有四維、地有四瀆、天有八氣、地有八風、天有九道、地有九州」。『眞誥』卷三「運題象」第三(D 637, S 34・2734)「鳴絃玄霄顛、吟嘯運八氣、奚不酣靈液、眇目娛九裔」。『雲笈七籤』卷八「三洞經教部」釋三十九章經「青靈陽安元君曰、青靈者眞人之位號、八氣者雲色之相沓」。

- (785) 文始傳云…… 本論十「崑崙飛浮」章に前半部の引用があるのを参照。

- (786) 天地混沌、如鷄子黃 『三五曆紀』(『藝文類聚』卷一天部天)「天地混沌如雞子、盤古生其中」。『元始上眞衆仙記』(枕中書)(D 73, S 5・3313)「眞書曰、昔儀未分、溟滓鴻濛、未有成形、天地日月未具、狀如雞子、混沌玄黃、已有盤古眞人、天地之精、自號元始天王、遊乎其中」。

- (787) 一劫 『道行般若經』卷五(T 8・451b)「是輩人於是聞深般若波羅蜜信者、正使三千大千國土人、一切所當爲者皆信、皆信已來、行過一劫」。『隋書』卷三五經籍志佛經部「天地之外、四維上下、更有天地、亦無終極、然皆有成有敗、一成一敗、謂之一劫、自此天地已前、則有無量劫矣」。『無上祕要』卷六「劫運品」(D 768, S 41・3386)「一劫之周、天地又壞、復无光明、……右出洞玄靈書經」。

(788) 天人 注(159)を見よ。

(789) 濟苦經…… 本論十「崑崙飛浮」章および十五「日月普集」章に引用があるのを参照。

(790) 潰然空蕩 「潰然」の語の使用例は未見。「空蕩」の語は、注(404)を見よ。

(791) 人物 『史記』卷一二九貨殖列傳「……故太公望封於營丘、地潟鹵、人民寡、於是太公勸其女功、極技巧、通魚鹽、則人物歸之、繼至而輻湊。『後漢書』傳五五段熲傳「今先零雜種、累以反覆、攻沒縣邑、剽略人物、發冢露尸、禍及生死」。

(792) 幽幽冥冥 『韓詩外傳』卷五「夫關雎之人、仰則天、俯則地、幽幽冥冥、德之所藏、紛紛沸沸、道之所行」。『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』卷上(D 202, S 11・8819)「天尊告曰、……我過去後、天地破壞、無復光明、男女灰滅、淪於延康、幽幽冥冥、億劫之中、至赤明開光、天地復位、我又出世」。

(793) 萬萬止是一億、億億止是一兆 『詩經』小雅楚茨「我庾維億」、毛傳「萬萬曰億」。『禮記』內則「降德于衆兆民」、正義「依如算法、億之數有大小二法、其小數以十爲等、十萬爲億、十億爲兆也、其大數以萬爲等、萬至萬、是萬萬爲億、又從億而數至萬億曰兆、億億曰秭」。

(794) 新學造經 『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』卷上(D 202, S 11・8821)「十戒者、……九者不得背師恩義、欺詐新學」。『高僧傳』卷三求那毘地傳(T 50・345a~b)「初僧伽斯於天竺國、抄修多羅藏中要切譬喻、撰爲一部、凡有百事、教授新學」。

『文心雕龍』定勢「舊練之才、則執正以馭奇、新學之銳、則逐奇而失正」。『出三藏記集』卷五「新集安公注經及雜經志錄」第四(T 55・406)「郢州投陀道人妙光、戒歲七臘、矯以勝相、諸尼嫗人、僉稱聖道、彼州僧正、議欲驅擯、遂潛下都、住普弘寺、造作此經」。

(795) 椿與劫齊 『莊子』逍遙遊篇につきのようにあるのを参照。「朝菌不知晦朔、蟪蛄不知春秋、此小年也、楚之南有冥靈者、以五百歲爲春、五百歲爲秋、上古有大椿者、以八千歲爲春、八千歲爲秋。また『太上諸天靈書度命妙經』(D 26, S 2・1207)に、「北方五氣天中靈書度命玉章、北上宮中諸真人玉女恆所歌誦、以和五宮之氣、安神度命自然之玉章、……爲我造上宮、拔錄九夜門、度命朱陵關、長保億劫椿」。

(796) 洞玄東方青帝頌曰…… 未詳。

(797) 九五不常居 『周易』乾「九五、飛龍在天、利見大人」。『宋書』卷二武帝紀中「夫或躍在淵者、終饗九五之位、勳格天地者、必膺大寶之業」。『晉書』卷一「天文志上」紫宮垣十五星、……一曰紫微、大帝之坐也、天子之常居也、主命主度也」。

(798) 傾危 賈誼「過秦論」(『史記』卷六秦始皇本紀論)「借使秦王計上世之事、並殷周之迹、以制御其政、後雖有淫驕之主、而未有傾危之患也」。『顏氏家訓』止足「仕宦稱泰、不過處在中品、前望五十人、後顧五十人、足以免恥辱、無傾危也」。

(799) 大劫 注(492)を見よ。

(800) 百六乘運迴 『漢書』卷二「律曆志上」易九尼曰、初入元百

六、陽九、次三百七十四、陰九、次四百八十、陽九……」注

「孟康曰、易傳也、所謂陽九之厄、百六之會者也、初入元百六歲有厄者、則前元之餘氣也、若餘分爲閏也、易又有九六七八百六與三百七十四、六乘八之數也、六八四十八、合爲四百八十歲也」。同卷八五谷永傳「陛下承八世之功業、當陽數之標季、涉三七之節紀、遭无妄之卦運、直百六之災厄」。『太上靈寶天地運度自然妙經』(D 166, S 9. 735)「道言、靈寶自然運度、有大陽九六百六、小陽九六百六、三千三百年爲小陽九六百六、九千九百年爲大陽九六百六、天厄謂之陽九、地虧謂之百六」。沈約「捨身願疏」(『廣弘明集』卷二八、T 52. 333b~c)「君仰藉時來、久乘休運、玉粒晨炊、華燭夜炳、自此迄今、歷年三十」。『眞誥』卷四「運題象」第四(D 637, S 34. 27365)「八塗會無宗、乘運觀羣羅」。『魏書』卷一一四釋老志「初階聖者、有三種人、其根業各差、謂之三乘、聲聞乘緣覺乘大乘、取其可乘運以至道爲名」。

(801) 大水既漂…… 本論十「崑崙飛浮」章に、「文始傳云、萬萬億萬萬歲一大水、崑崙飛浮、……復萬萬億歲大火起」とある。

(802) 金鐵融、地无草 『莊子』逍遙遊「大旱、金石流、土山焦而不熱」。『太上諸天靈書度命妙經』(D 26, S 2. 1205)「大劫交周、天崩地淪、四海冥合、金玉化消」。『漢書』卷二七五行志上「蓋工冶鑄金鐵、金鐵冰滯涸堅、不成者衆、及爲變怪、是爲金不從革」。同卷二二禮樂志「郊祀歌十九章」天馬十「天馬徠、歷無草、徑千里、循東道」、顏師古注「言馬從西來、經行積幽

之地無草者、凡千里而至東道」。

(803) 天地如鷄子黃、總名一劫 本論二十五「延生符」章に、「天地混沌、如鷄子黃、名曰一劫」とある。

(804) 世火、劫火 『智度論』卷二七(T 25. 260c~261a)「若劫盡時、火燒三千大千世界、無復遺餘、火力大故、佛一切智火亦如是、燒諸煩惱、無復殘習、……問曰、諸阿羅漢辟支佛、同用無漏智、斷諸煩惱習、何以有盡不盡、答曰、先已說智慧力薄如世間火、諸佛力大如劫盡火」。『高僧傳』卷一竺法蘭傳(T 50. 323c)「世界終盡、劫火洞燒」。

(805) 隨劫生死 本章は法琳『辯正論』卷八「出道僞謬篇」靈寶太上隨劫生死謬(T 52. 233a~c)にとられてゐる。

「靈寶諸天靈書度命妙經稱、天尊言、大劫交周、天崩地淪、六天之中、欲界之內、雜法普滅、無有遺餘、太平道經、佛說法華大小品經、周遊上下十八天中、在色界之內、至大劫交周、天地改廢、其文乃沒、然玉清上道三洞神經眞文金書玉字靈寶眞經、並出元始、處於二十八天無色界之上、大劫周時、並還天上大羅天中玉京之山七寶玄臺、災所不及、大羅天是五億五萬五千五百五十五天之上天也、故自然之文、與運同生、與運同滅、能奉之者、七祖生天、轉輪聖王、世世不絕、靈寶眞文度人本行經云、十方大聖、自作是言、以何因緣、得是太上之任、道言、自稱元始開光以來、至赤明元年、經九千九百九億劫、度恆沙之衆、赤明以後、至上皇元年、度人無量、我隨劫生死、世世不絕、恆與靈寶同出、經七百億劫、會青帝劫終、九氣改運、於是託胎洪氏、

積三千七百年、至赤明開通、歲在甲子、誕於狀力蓋天、復與靈寶同出、度人無量、元始天尊以我因緣、賜我太上之號、在玄都玉京、以我信靈寶之故。

甄鸞笑云、此之真文、既在玉京山中、災所不及、而復說言自然之文、與運同生同滅、生滅之日、豈非災也、又云、我身常與靈寶同時出沒、又云、我隨劫生死、計靈寶運滅之日、太上理不獨存、而云長生不死之大法者、此言爲妄說耳、又云、玉京之山在衆山之上、災所不及者、理合可疑、何者、一切法悉皆無常、形色之類、無有存者、玉京之山、金臺玉闕、七寶所成、即爲色界所攝、既屬色界、云何常耶、又云、赤明之歲、歲在甲子、赤明之號、拒可信乎。

(806) 度命妙經云……『太上諸天靈書度命妙經』(D 26, S 2.

1205) 「天尊言、……斯經尊妙、度人無量、大劫交周、天崩地淪、四海冥合、金玉化消、萬道勢訖、而此經獨存、其法不絕、凡是諸雜法、導引養生法術、變化經方、及散雜俗、並係六天之中、欲界之內、遇小劫一會、其法並滅、無復遺餘、其是太清雜化符圖、太平道經、雜道法術、諸小品經、並周旋上下十八天中、在色界之內、至大劫之交、天地改度、其文仍沒、無復遺餘、其玉清上道三洞神經神眞虎文金書玉字靈寶眞經、並出元始、處於二十八天無色之上、大劫周時、其文並還無上大羅中玉京之山、七寶玄臺、災所不及、大羅天是五億五萬五千五百五十五天之上天也、故大洞眞經靈寶洞玄洞虛洞無自然之文、與運同滅、與運同生、包羅衆經、諸天之宗、志士長修、致得神仙、長生度世、

白日飛行、馳騁龍駕、洞入虛無、能奉之者、供養恭敬、七祖生天、轉輪聖王、世世不絕、與善因緣。

(807) 大劫交周、天崩地淪 『無上祕要』卷六「劫運品」(D 768,

S 41. 3335) 「十方飛天神人告太上道君曰、自周三界之中、歷行三十二天、累經大運交周、天地成敗、隨運生死、非復一反、至今赤明開圖、已經九千七百億萬劫、右出洞玄空洞靈章經」。

同(3336) 「小劫交則九氣改正、萬帝易位、民亡鬼滅、善存清治、六合寧一、九千九百周爲大劫終、……天運九千九百周爲陽蝕、地轉九千三百度爲陰勃、天蝕則氣窮於太陽、地勃則氣謀於太陰、故陽否則蝕、陰激則勃、陰陽蝕勃、則天地改易、謂之大劫交、大劫交、天翻地覆、海涌河決、人淪山沒、金玉化消、六合冥一、右出洞眞三天正法經」。

(808) 欲界滅无 「欲界」については、注(502)を見よ。「滅无」

の語は、慧遠「大智論抄序」(『出三藏記集』卷一〇、T 55. 75) 「生塗兆於無始之境、變化構於倚伏之場、咸生於未有而有、滅於既有而無」。

(809) 太平道經 『後漢書』傳二〇下襄楷傳「臣前上琅邪宮崇受千

吉神書、不合明聽」、李賢注「神書、即今道家太平經也、其經以甲乙丙丁戊己庚辛壬癸爲部、每部一十七卷也」。

(810) 佛法華大小品 『南齊書』卷四一張融傳「遺令……曰、……左手執孝經老子、右手執小品法華經」。また支遁に「大小品對比要抄序」(『出三藏記集』卷八、T 55. 55) あり。

(811) 周遊上下十八天中、在色界內 『管子』小匡「游士八千人、

……使出周游於四方、以號召收求天下之賢士。『晉書』卷一〇九慕容皝載記「初段遼之敗也、建威（慕容）翰奔于宇文歸、自以威名夙振、終不保全、乃陽狂恣酒、被髮歌呼、歸信而不禁、故得周遊自任、至於山川形便、攻戰要路、莫不練之。」「色界十八天」については、後文の「二十八天无色界上」とともに、注（502）を見よ。

- (812) 玉清上道 『真誥』卷一「運題象」第1(D 637, S 34・27340)「昔初學眞於龜臺、受玉章於高上、荷虎錄於紫皇、乘瓊鉞於天帝、受書於上眞之妃、以遊行玉清也」。同第1(27342)「色觀謂之黃赤、上道謂之隱書」。

- (813) 眞文玉字 『真誥』卷八「甄命授」第四(D 638, S 34・27400)「志道之人、雖有一生之心、鑽求匪懈、徒復遭遇眞文、耽玄精微、慕向者衆、得升騰者稀」。庾信「道士步虛詞」十首之八(『庾子山集』卷五)「龍泥印玉策、大火煉眞文。」「史記」卷一三〇太史公自序「上會稽、探禹穴」、正義「吳越春秋云……禹乃登宛委之山、發石乃得金簡玉字」。宇文道「道教實花序」(『初學記』卷二三道釋部道)「金簡玉字之音、瓊笈銀題之旨」。

- (814) 元始 蕭統『文選』序「式觀元始、眇觀玄風」。

- (815) 大羅玉京山玄臺 注(461)を見よ。

- (816) 災所不及 本論十「崑崙飛浮」章に引く『度人妙經』に、「五億重天之上、大羅之天、有玉京山、災所不及」とある。

- (817) 自然之文 『隋書』卷三五經籍志「道經者、……所說之經、亦稟元一之氣、自然而有、非所造爲、亦與天尊常在不滅、天地

不壞、則蘊而莫傳、劫運若開、其文自見」。

- (818) 七祖生天 『靈寶无量度人上品妙經』卷1(D 1, S 1・7)「有聞靈音、魔王敬形、敕制地祇、侍衛送迎、拔出地戶五苦八難、七祖昇遷、永離鬼官、魂度朱陵、受鍊更生」。『宋書』卷六七謝靈運傳「太守孟顗事佛精懇、而爲靈運所輕、嘗謂顗曰、得道應須慧業文人、生天當在靈運前、成佛必在靈運後」。

- (819) 轉輪聖王、代代不絕 『太子瑞應本起經』卷上(T 3・473)「壽終卽生第一天上、爲四天王、畢天之壽、下生人間、作轉輪聖王。飛行皇帝、七寶自至」。『太上諸天靈書度命妙經』(D 26, S 2・1207)「自然道眞、壽命長遠、命過之日、逕上天堂、世世不絕。轉輪聖王」。『拾遺記』卷二「樂府皆傳此伎、至末代猶學焉、得粗亡精、代代不絕」。

- (820) 度人本行經云…… 本論三「元爲天人」章にもより簡約な引用があるが、『雲笈七籤』卷一〇一「太上道君紀」に引く『洞玄本行經』につきのようにある。「道言、天元輪轉、隨劫改運、一成一敗、一死一生、滅而不絕、幽而復明、靈寶出法、隨世度人、自元始開光、至于赤明元年、經九千九百億萬劫、度人有如塵沙之衆、不可勝量、赤明之前、於眇莽之中、劫劫出化、非可思議、赤明已後、至上皇元年、宗範大法、得度者衆、終天說之、亦當不盡、今爲可粗明眞正之綱維、標得道者之遐迹爾、今聊以開示於後來、領會於靈文之妙、我濯紫晨之流芳、蓋皇上之胃胤、我隨劫死生、世世不絕、常與靈寶、相值同出、經七百億劫中、會青帝劫終、九氣改運、於是託胎於洪氏之胞、凝神於瓊胎之府、

積三千七百年、至赤明開運、歲在甲子、誕於扶刀蓋天西那玉國浮羅之嶽、復與靈寶、同出度人、元始天尊以我因緣之勳、錫我太上之號、封鬱悅那林昌玉臺天帝君、位登高聖、治玄都玉京、實由我身尊承大法、靈寶真文、世世不絕、廣度天人、慈心於萬劫、溥濟於衆生、功德之大、勳名繕於億劫之中、致今報爲諸天所宗焉。また、P三〇二二v.『太上洞玄靈寶真文度人本行妙經』（大淵忍爾『敦煌道經 圖錄編』五四頁）に見える。

- (821) 開光 李尤「牖銘」〔太平御覽〕卷一八八居處部窓「天設窓牖、開光照陰、施于明堂、以象八風。また注(792)に引いた『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』に、「至赤明開光、天地復位」。

- (822) 赤明 『隋書』卷三五經籍志道經部「……然其開劫、非一度矣、故有延康赤明。龍漢開皇、是其年號、其間相去經四十一億萬載」。

- (823) 恆沙衆生 『法華經』見寶塔品(T9・34b)「若人說法、令千萬億、無量無數、恆沙衆生、得阿羅漢、具六神通、雖有是益、亦未爲難」。

- (824) 上皇元年 本論二「年號差舛」章の議論を参照。

- (825) 度人无量 「度人」の語は注(132)を、「無量」の語は注(704)を見よ。また、『法華經』授記品(T9・21b)「佛於其中、度無量衆」。

- (826) 世世不絕 注(819)参照。「世世」の語は、『尚書』微子之命「世世享德、萬邦作式」。

- (827) 靈寶 M・カルタンマルク、川勝義雄譯「『太上靈寶五符序』に關する若干の考察」〔『東方學』六五輯〕、參照。

- (828) 經久 『三國志』卷一六魏志鄭渾傳「渾於蕭相二縣界、與陂退、開稻田、郡人皆以爲不便、渾曰、地勢落、宜溉灌、終有魚稻經久之利、此豐民之本也、遂躬率吏民、興立功夫、一冬間皆成」。「抱朴子」刺驕「此俗之傷破人倫、劇於寇賊之來、不能經久、豈所損壞一服而已」。

- (829) 九炁改運 『無上祕要』卷六「劫運品」(D768, S41.33386)「小劫交則九氣改正、萬帝易位、民亡鬼滅、善存清治、六合寧一、……小劫交則萬帝易位、九氣改度、日月縮運、……右出洞眞三天正法經」。「九炁」については、注(172)をも參照。「改運」の語は、『雲笈七籤』卷四「道教經法傳授部」靈寶經目序「道之隱淪、實經不彰、赤明革運、靈文興焉、諸天宗奉、各有科典、一劫之周、又復改運、遂積五劫、迫于開皇」。

- (830) 託胎 『辯正論』卷六「十喻篇」(T52・523a)「外一異曰、注、太上老君託神玄妙玉女、剖左腋而生、釋迦牟尼寄胎摩耶夫人、開右脇而出」。

- (831) 開通 『禮記』月令「季春之月、……是月也、命司空曰、時雨將降、下水上騰、循行國邑、周視原野、修利隄防、道達溝瀆、開通道路、毋有障塞」。宗欽詩〔『魏書』卷五二宗欽傳〕「開通有運、開遇當年、披衿暫面、定交一言」。

- (832) 因緣 『史記』卷一〇四田叔列傳褚先生補「(任安)……少孤貧困、爲人將車之長安、留求事爲小吏、未有因緣也」。「法華經」

妙音菩薩品 (T 9・56a) 「妙音菩薩、於萬二千歲、以十萬種伎樂、供養雲雷音王佛、并奉上八萬四千七寶鉢、以是因緣。果報、今生淨華宿王智佛國、有是神力」。

(833) 太上之號 しゃべっているのは太上道君。『左傳』襄公二十四年「太上有立德、其次有立功、其次有立言」。『魏書』卷七八張普惠傳「時靈太后父司徒胡國珍薨、贈相國太上秦公、普惠以前世后父無太上之號、詣關上疏、陳其不可」。

(834) 玄都玉京 注 (510) を見よ。

(835) 出沒 注 (6) を見よ。

(836) 長生不死 注 (578) を見よ。

(837) 形色 『孟子』盡心上「形色、天性也、惟聖人然後可以踐形」。『莊子』天道「故視而可見者、形與色也、聽而可聞者、名與聲也、悲夫、世人以形色名聲爲足以得彼之情」。

(838) 玉臺 本論十五「日月普集」章に「玉臺處澤山之陽」とあるが、ここは注 (510) の『妙門由起』が引く『太玄都玉京山經』に、「宮有七寶玄臺」というものか。

(839) 非常 『無量壽經』卷上 (T 12・266a) 「見老病死、悟世非常、棄國財位、入山學道」。

(840) 河漢 『莊子』逍遙遊「肩吾問於連叔曰、吾聞言於接輿、大而无當、往而不返、吾驚怖其言、猶河漢而无極也、大有逕庭、不近人情焉」。

(841) 服丹成金色 目次では「服丹金色」。「服丹」の語は、『抱朴子』對俗「仙經曰、服丹守一、與天相畢、還精胎息、延壽無

極」。

(842) 神仙金液經云…… 『抱朴子神仙金液經』卷上 (D 593, S 32・25502~25505) に、下記のごとく類似の文章が散見する。

「金液還丹、太一所服而神仙、白日昇天者也、求仙而不得此道、徒自苦也」。「水銀本丹、燒成水銀、今燒水銀、復成還丹、丹復本體、故曰還丹也」。「服之面皆黃色、此蓋得道之證、作此色也、非爲身內堅剛如金人」。「向日飲之、立爲金人、日初出時向日服也、昔韓衆服之、身立金色」。

(843) 金液還丹 『抱朴子』金丹「余考覽養性之書、鳩集久視之方、曾所披涉篇卷、以千計矣、莫不皆以還丹金液爲大要者焉、然則此二事、蓋仙道之極也」。

(844) 太上所服而神 『抱朴子』金丹「金液、太乙所服而仙者也、不減九丹矣」。「太上」の語は、注 (833) を見よ。

(845) 燒水銀、還復爲丹 『抱朴子』金丹「凡草木燒之即燼、而丹砂燒之成水銀、積變又還成丹砂、其去凡草亦遠矣、故能令人長生、神仙獨見此理矣」。「還復」の語は、『世說新語』文學「裴成公作崇有論、時人攻難之、莫能折、唯王夷甫來、如小屈、時人即以王理難、裴理還復申」。

(846) 服之得仙、白日昇天 『抱朴子』金丹「若取九轉之丹、內神鼎中、夏至之後、爆之鼎熱、內朱兒一斤於蓋下、伏伺之、候日精照之、須臾翕然俱起、煌輝煌輝、神色五色、即化爲還丹、取而服之一刀圭、即白日昇天」。「白日昇天」の語は、また注 (239) を見よ。

(847) 求仙不得此道、徒自苦耳 『抱朴子』金丹「然服他藥萬斛、爲能有小益、而終不能使人遂長生也、故老子之訣言云、子不得還丹金液、虛自苦耳」。「求仙」の語は、同對俗「知上藥之延年、故服其藥以求仙」。

(848) 韓終 『史記』卷六秦始皇本紀「因使韓終、侯公石生求仙人不死之藥。『抱朴子』金丹「韓終丹法、漆蜜和丹煎之、服可延年久視、立日中無影」。『真誥』卷一二「稽神樞」第二(D 639, S 34・27443)「協辰」夫人、漢司空黃瓊女黃景華也、韓終授其岷山丹、服得仙」。

(849) 面作金色 『抱朴子』金丹「真經云、金液入口、則其身皆金色。『三洞珠囊』卷八「相好品」(D 782, S 42・33875)「化胡經」云、老子體有金剛七十一相、頭髮紺青色、面目紫輝金色、面有五色光也」。

(850) 佛身黃金色 『法華經』藥王菩薩本事品(T 9・54a)「于時一切衆生、見菩薩、於大衆中、立此誓言、我捨兩臂、必當得佛金色之身、若實不虛、令我兩臂、還復如故」。

(851) 道法 「周滅佛法集道俗議事」の注(66)を見よ。

(852) 身内外剛堅如金、故號佛金剛身 『注維摩詰經』卷三(T 38・359a)「如來身者金剛之體。什曰、小乘人骨金剛、肉非金剛也、大乘中内外金剛、一切實滿、有大勢力、無病處故、生曰、如來身無可損、若金剛也」。『剛堅』の語は、『水經注』卷二河水「餘溜風吹、稍成龍形、西面向海、因名龍城、地廣千里、皆爲鹽而剛堅也」。

(853) 文始傳云……未詳。

(854) 太上老子太一元君 『抱朴子』金丹「復有太清神丹、其法出於元君、元君者老子之師也」。同「鄭君言、所以爾者、合此大藥皆當祭、祭則太一元君老君玄女皆來鑒省」。

(855) 一身 蘇武詩四首之一「文選」卷二九「四海皆兄弟、誰爲行路人、況我連枝樹、與子同一身」。

(856) 金液經云……未詳。

(857) 中黃丈夫 『神仙傳』白石先生傳「白石先生者、中黃丈人弟子也。また注(419)を見よ」。

(858) 昇天爲大神、調陰陽 『抱朴子』金丹「元君者大神仙之人也、能調和陰陽、役使鬼神風雨、驂駕九龍十二白虎、天下衆仙皆隸焉」。『真誥』卷五「甄命授」第一(D 637, S 34・27373)「昔周君兄弟三人、並少而好道、在於常山中、積九十七年、精思無所不感、忽然見老公、頭首皓白、三人知是大神、乃叩頭流血、涕淚交連、悲喜自搏、就之請道」。

(859) 常人 注(734)を見よ。

(860) 萬眞 『雲笈七籤』卷五一「祕要訣法」太上曲素五行祕符「太上五行祕文、與天地同生、混仙萬眞、總御神靈」。

(861) 多少 『南史』卷二九蔡搏傳「武帝嘗謂曰、卿門舊尙有堪事者多少」。

(862) 幾人 『漢書』卷六九趙充國傳「上遣問焉曰、將軍度羌虜何如、當用幾人」。

(863) 遍地 『國清百錄』卷二「王入朝遣使參書」(T 46・806b)

「伏以布金遍地、買園建立、奉置三尊、永流萬代。」

- (864) 火燒 注(228)を見よ。

- (865) 天仙 『抱朴子』論仙「按仙經云、上士舉形昇虛、謂之天仙。中士遊於名山、謂之地仙、下士先死後蛻、謂之尸解仙」。

- (866) 辛苦叩齒 『史記』卷三一吳太伯世家「伍子胥諫曰、……且勾踐爲人能辛苦、今不滅、後必悔之」。「叩齒」は道術の一種。

『無上祕要』卷六六「叩齒品」(D 776, S 42・33690)「叩齒之法、左左相叩、名曰折天鍾、右右相叩、名曰折天磬、中央上下相對叩、名曰鳴天鼓、若卒遇凶惡不祥、當折天鍾三十過、若經山辟邪、威神大祝、當椎天磬、若存思念道、致真招靈、當鳴天鼓、……右出洞真太上隱書經」。僧敏「戎華論折願道士夷夏論」(『弘明集』卷七、T 52・47c)「搏頰叩齒者、倒惑之至也」。

- (867) 虛過一生 蕭子良「淨住子」一志努力門第二十四「廣弘明集」卷二七、T 52・318a)「豈得空捨、一生虛過、三塗切己、力無所施、方復生悔、何嗟及矣」。『顏氏家訓』歸心篇「人身難得、勿虛過也」。陶淵明「飲酒」二十首之三「所以貴我身、豈不在一生、一生復能幾、倏如流電驚」。

- (868) 爲丹所悞 「古詩」十九首之十三(『文選』卷二九)「服食求神仙、多爲藥所誤」。

- (869) 捕影之談 注(380)を見よ。

- (870) 行因 蕭子良「淨住子」戒法攝生門第二十「廣弘明集」卷二七、T 52・315c)「凡論課勸要、必託境行因、若心志浮蕩、則進趣無寄、然託境行因、戒爲其始、可謂入聖之初門、出俗之

正路」。

- (871) 邪見 宗炳「答何(承天)書」(『弘明集』卷三、T 52・18b)「夫神光靈變、及無量之壽、皆由誠信幽奇、故將生乎佛土、親映光明、其壽無量耳、今沒於邪見、慢誕靈化、理固天隔、當何由觀其事之符乎」。

- (872) 偷改佛經爲道經 目次では「改佛爲道」。「辯正論」卷八「出道偽謬篇」偷改佛經爲道經謬(T 52・534c)にきぎのようにあるのを参照。

「靈寶妙真經偈云、假使聲聞衆、如稻麻竹葦、遍滿十方刹、盡思共度量、不能測道智、而靈寶唯改佛一字、以爲道字、及其體狀、全取法花、自餘之文、例皆採撮、宋人謝常侍爲駁道論、以問道士顧歡、歡答言、靈寶妙經、天文大字、出於自然、本非改法花爲之、乃是羅什姦妄、與弟子僧禪、改我道家靈寶、以爲法華、非改法華爲靈寶也、准如此狀、可以情求、靈寶之經、不言可見、若言羅什改靈寶經爲法華者、出何記傳、止可誑此東土、以惑下民、不應流向西域、所在皆有、今彼沙門、來游此國、其所持經、以樹葉抄寫、爾日又遣譯人、對之翻解、與今經文不異、以此驗之、定知道士偷改法華以爲道經、此事誠可信、如前所列、非止一部、凡是道書、除五千文之外、悉皆偷採、安置己典、誠如涅槃經之所說也、竊以佛之與僧、代代相承、前賢後哲、人人欽敬」。

「偷改」の語は、『辯正論』卷六「內九箴篇」(T 52・534b)「世間道士經及行道義理、則約數論而後通、言偷佛家經論、改

作道書。

- (873) 妙眞偈云……未詳。『辯正論』には「靈寶妙眞經偈」とある。

- (874) 聲聞衆……如恆沙 『法華經』序品 (T 9・4c) 「一一諸佛土、聲聞衆無數、因佛光所照、悉見彼大衆。同樂王菩薩本事品 (T 9・53a) 「其佛有八十億大菩薩摩訶薩、七十一恆河沙大聲聞衆。」「魏書」卷一一四釋老志「初階聖者、有三種人、其根業各差、謂之三乘、聲聞乘・緣覺乘・大乘、取其可乘運以至道爲名。」「恆沙」の語は、また注 (177) を見よ。

- (875) 盡思共度量 『抱朴子』彈禰 (劉) 表欲作書與孫權、……使諸文士立草、盡思而不得表意。『韓非子』難言「故度量雖正、未必聽也、義理雖全、未必用也」。

- (876) 道智 『道教義樞』卷八「境智義」(D 763, S 41・33196) 「宋法師云、道智實智權智、是爲三智、道智者、即起本無、謂始自生成、次能化道、實智者、即觀身守一之智、謂道即無形、應便有體、則以觀身爲教、令存於神、權智者、謂方便之力、偏於萬境、廣開法教、隨病受藥」。

- (877) 改法花佛智爲道智 『法華經』方便品 (T 9・6a) に、「假使滿世間、皆如舍利弗、盡思共度量、不能測佛智、……不退諸菩薩、其數如恆沙、一心共思求、亦復不能知」とある。また下記を参照。謝鎮之「重書與顧道士」(『弘明集』卷六、T 52・42c) 「道家經籍簡陋、多生穿鑿、至如靈寶妙眞、採撮法華、制用尤拙」。道安「二教論」明典眞僞第十(『廣弘明集』卷八、T 52・

141b) 「黃庭元陽、採撮法華、以道換佛、改用尤拙」。『辯正論』卷六「內九箴篇」(T 52・534b) 「如黃庭元陽靈寶上清等經及三皇之典、並改換法華及無量壽等經而作者也」。「佛智」の語は、『法華經』方便品 (T 9・5b) 「諸佛智慧、甚深無量、其智慧門、難解難入、一切聲聞辟支佛所不能知」、「十住毘婆沙論」卷一五 (T 26・105b) 「若人深樂佛慧、便疾得阿耨多羅三藐三菩提、以五因緣故、深樂佛慧、一佛慧無與等、二佛智能令人爲世中尊、三佛以佛智自度其身、四佛智亦度他人、五佛智是一切功德住處」。

- (878) 自餘 注 (415) を見よ。

- (879) 非一 『論衡』知實「孔子未嘗入廟、廟中禮器、衆多非一、孔子雖聖、何能知之」。

- (880) 昔有問道士顧歡……注 (877) の謝鎮之「重書與顧道士」、参照。謝鎮之が質問したのであろう。顧歡は『南齊書』卷五四高逸傳、「南史」卷七五隱逸傳に傳が備わる。

- (881) 靈寶妙經 『雲笈七籤』卷四「道教經法傳授部」靈寶經目序「夫靈寶之文、始於龍漢、龍漢之前、莫之追記」。

- (882) 天文大字、出於自然 『抱朴子』登涉「又天文大字、有北帝書、寫帛而帶之、亦辟風波蛟龍水蟲也」。同遐覽「鄭君言、符出於老君、皆天文也、老君能通於神明、符皆神明所授」。『雲笈七籤』卷七「三洞經教部」說三元八會六書之法「……二者、演八會爲龍鳳之文、謂之龍書、此下皆玄聖所述、以寫天文也」。『太上靈寶諸天內音自然玉字』卷一 (D 49, S 3・2160) 「天真

皇人曰、天書玉字、凝飛玄之氣以成靈文、合八會以成音和五、合而成章、……妙化之文、出於自然。

- (883) 羅什 すなわち鳩摩羅什。『高僧傳』卷二、『晉書』卷九五藝術傳に傳が備わる。道宣の「妙法蓮華經弘傳序」(T9・1b)にいう。「西晉惠帝永康年中、長安青門燉煌菩薩竺法護者、初翻此經、名正法華、東晉安帝隆安年中、後秦弘始、龜茲沙門鳩摩羅什次翻此經、名妙法蓮華」。

- (884) 僧肇 羅什の弟子。『高僧傳』卷六に傳が備わり、羅什の釋經を助けたこと、「姚興命肇、與僧叡等入逍遙園、助詳定經論」(T50・365a) 云々。

- (885) 東夏 道安「二教論」教旨通局第十一「廣弘明集」卷八、T52・142b「太伯文身斷髮、匪是西夷、范蠡易姓改名、寧非東夏」。

- (886) 西域 未詳作者「正誣論」『弘明集』卷一、T52・7c「原夫佛之所以夷跡於中天而曜奇於西域者、蓋有至趣、不可得而縷陳矣」。

- (887) 譯人所出 『高僧傳』卷三求那跋摩傳(T50・341a)「俄而於寺開講法華及十地、……跋摩神府自然、妙辯天絕、或時假譯人、而往復懸悟」。「出」は譯出、すなわち翻譯の意。

- (888) 不爽經文 『詩經』小雅蓼蕭「其德不爽、壽考不忘」。「出三藏記集」卷三「新集安公古異經錄」(T55・15b)「古異經者、蓋先出之遺文也、尋安錄、自道地要語迄四姓長者、合九十有二經、標爲古異、雖經文散逸、多有闕亡、觀其存篇、古今可辯」。

- (889) 爲實 『韓非子』說林上「今荆人起兵將攻齊、臣恐其攻齊爲聲、而以襲秦爲實也」。

- (890) 博約 陸機「文賦」(『文選』卷一七)「銘博約而溫潤、箴頓挫而清壯」、李善注「博約謂事博文約也」。

- (891) 詞義宏深 「詞義」の語は、注(738)を見よ。「宏深」の語は、蔡邕「郭有道碑文」(『文選』卷五八)「夫其器量弘深、姿度廣大、浩浩焉、汪汪焉、奧乎不可測已」。

- (892) 重文 この語の使用例未見。

- (893) 老經 嵇康「聖賢高士傳」(『後漢書』傳九耿弇傳注)「安丘望之字仲都、……少持老子經、恬淨不求進宦、號曰安丘丈人」。

- (894) 別計 この語の使用例未見。

- (895) 倚傍 『晉書』卷七六王廙傳「(王)彪之既知(桓)溫不臣迹已著、理不可奪、乃謂溫曰、公阿衡皇家、便當倚傍先代耳」。
慧遠「明報應論」『弘明集』卷五、T52・33b「然佛教深玄、微言難辯、苟未統夫旨歸、亦焉能暢其幽致、爲當依傍大宗、試敘所懷」。

- (896) 開張卷部 『高僧傳』卷八慧隆傳(T50・379c)「凡先舊諸義盤滯之處、隆更顯發開張、使昭然可了、乃立實法斷結義等」。
「出三藏記集」卷四「新集續撰失譯雜經錄」(T55・21b)「祐總集衆經、遍閱群錄、新撰失譯、猶多卷部」。

- (897) 五千之文 注(18)を見よ。

- (898) 八藏 『出三藏記集』卷一「菩薩處胎經出八藏記」(T55・4a)「菩薩處胎經云、迦葉告阿難言、佛所說法、一言一字、汝

勿使有缺漏、菩薩藏者集著一處、聲聞藏者亦集著一處、戒律藏者亦著一處、爾時阿難最初出經、胎化藏爲第一、中陰藏第二、摩訶衍方等藏第三、戒律藏第四、十住菩薩藏第五、雜藏第六、金剛藏第七、佛藏第八、是爲釋迦文佛經法具足矣。『菩薩處胎經』卷七(T 12・103b)からの引用。

(899) 後作 『抱朴子』鈞世「若舟車之代步涉、文墨之改結繩、諸後作而善於前事、其功業相次千萬者、不可復縷舉也」。

(900) 廣其類 孫楚「爲石仲容與孫皓書」(『文選』卷四三)「不復廣引譬類、崇飾浮辭」。

(901) 古來賢達 鮑照「白頭吟」(『文選』卷二八)「古來共如此、非君獨撫膺」。『後漢書』傳五三李固傳「天地之心、福謙忌盛、是以賢達功遂身退、全名養壽、無有怵迫之憂」。

(902) 諷誦 『法華經』化城喻品(T 9・23a~b)「……乃於四衆之中、說是大乘經、名妙法蓮華教菩薩法佛所護念、說是經已、十沙彌、爲阿耨多羅三藐三菩提故、皆共受持、誦誦通利」。

(903) 至今流傳 『墨子』非命中「列士桀大夫、聲聞不廢、傳流至今。『晉書』卷九五藝術鳩摩羅什傳「什曰、必使大化流傳、雖苦而無恨」。

(904) 代代不絕 注(819)を見よ。

(905) 道法 「周滅佛法集道俗議事」の注(66)を見よ。

(906) 誦持 『觀普賢菩薩行法經』(T 9・392a)「汝於今日、誦持大乘功德海藏、以是緣故、見十方佛、多寶佛塔、現爲汝證」。

(907) 舉國統括 李陵「答蘇武書」(『文選』卷四一)「匈奴既敗、

舉國興師、更練精兵、強踰十萬」。『魏書』卷三三封懿傳「(孫惠蔚每推(封)軌曰、封生之於經義、非但章句可奇、其標明綱格、統括大歸、吾所弗如者多矣」。

(908) 誦道 この語の使用例未見。

(909) 准的 『詩品』序「觀王公搢紳之士、每博論之餘、何嘗不以詩爲口實、隨其嗜欲、商榷不同、淄澠並泛、朱紫相奪、喧議競起、准的無依」。

(910) 儷佛經因果 目次では「儷佛因果」。『辯正論』卷八「出道僞謬篇」儷佛法四果十地謬(T 52・545 a~b)は、本章とほぼ同内容で、より詳細である。

「道經度國王品云、天尊告純陀王曰、諸得道大聖衆、至恆沙如來者、莫不從凡夫積行而得也、十仙者、無量無數衆、亦有一興而致一仙、復有從凡而得其住、所以者何、功高則一舉、功卑則十昇、十昇者、十住處、階級而往、從歡喜至法雲、相好具足、現身金剛、於是大王小王、聞天尊說法、即得四果、又案度身品云、尼乾子於天尊所、聞說法解定、便獲須陀洹果道、又云、玄中養於靈鷲山中、說五部尊經、度人無量、又云、與太和先生、於檀毒山中、大度王民、號曰沙門、案文始傳云、老子在闕賓國、彈指、引諸天王及羅漢五通飛天大衆、一時俱至、遣尹喜爲師、又云、得道菩薩爲老子作頌、又靈寶智慧罪根品云、恆沙天人、聞法得道、已成如來、此等妄說既多、爲謗亦甚、所以然者、佛之與道、教迹不同、出沒隱顯、變通亦異、道以自然爲宗、佛以因緣爲義、自然者、無爲而成、因緣者、積行乃證、是以小乘列

四果之梯、大乘顯十等之級、從凡入眞、具有文證、不知道家所列四果十地、名與佛同、修行品次、未見其說、又復道家所修、或有吸氣以冲天、或飲水而證道、或聞法以飛空、或餌草而尸解、行業既殊、證果理異、或云九重天、或云三萬六千、或云八十一天、或云六十大梵、或云三十六天、或云三十二帝、或云二十八天、或云二十四帝、或云一十八天、或云九眞天王、或云九氣天君、或云欲界六天、或云四方氣君、或云三元三天、或云九宮天曹、或云玉清大有、或云玄都紫微宮、或云三皇太極、諸如此類、略件其目、未識此天爲同爲別、爲重爲橫、爲高爲下、爲虛爲實、修何業行而能昇陟、服食何草而得往生、因緣次第、未聞其說、然後視其所以、觀其所由、察其所安、則虛妄之情見矣。

「因果」の語は、『觀無量壽經』(T 12・345a)「於第一義、心不驚動、深信因果、不謗大乘」。

(911) 度王品云……未詳。本論二十二「樹木聞誠枯死」章に「度國王品」の引用がある。

(912) 純陀王 『涅槃經』卷二「壽命品」(T 12・371c)「爾時會中有優婆塞、是拘尸那城工巧之子、名曰純陀、與其同類十五人俱」。

(913) 得道聖衆 「得道」の語は、注(177)を見よ。「聖衆」の語は、『般泥洹經』卷上(T 1・179b)「奈女歡喜、避坐長跪白言、欲設微食、願佛聖衆、俱屈威神」、『阿彌陀經』(T 12・347b)「其人臨命終時、阿彌陀佛與諸聖衆、現在其前」。

(914) 恆沙如來 本論三「元爲天人」章に引用の「靈寶罪根品」に、

「於是天尊命召神仙、各說因緣、恆沙得道、已成如來、其未成者、亦如恆沙」とあるのを参照。

(915) 從凡積行而得 『道教義樞』卷一「位業義」(D 762, S 41・33163)「陸先生云、起自凡夫、積行成道、始化曰仙、仙化成眞、眞化成聖、……今依玄門論中搖亮玄靖二法師義旨、……證位品者、始自發心、終乎極道、大有五位、……前四是因、後一是果。また注(13)、参照。

(916) 十仙 『道教義樞』卷一「位業義」(D 762, S 41・33163)「有十轉者、發心一位、卽爲一轉、伏道之中、凡有九轉、以一下就九、合成十轉」。後文にも「四果十仙」と見える。ちなみに、佛典には「十仙外道」がある。

(917) 一興 たとえば『佛所行讚』卷一(T 4・1b)の「如來出興世、淨居天歡喜」とある「興」の意か。

(918) 仙位 『眞誥』卷一四「稽神樞」第四(D 639, S 34・27455)「呂子華者、山陽人也、……常以幽隱方臺爲樂、不願造于仙位也」、『道教義樞』卷一「位業義」(D 762, S 41・33163)「太眞科……又云、名乃有七、位乃有三、一者仙位、二者眞位、三者聖位、神道賢靈、更無別位、名號雖異、猶附三階」。

(919) 積功 『法華經』提婆達多品(T 9・35b)「智積菩薩言、我見釋迦如來、於無量劫、難行苦行、積功累德、求菩提道、未曾止息」、『眞誥』卷五「甄命授」第一(D 637, S 34・27378)「積功滿千、雖有過、故得仙」。

(920) 一舉 王粲「從軍詩」五首之一(『文選』卷二十七)「一舉滅獯

虜、再舉服羌夷」。曹植「與楊德祖書」(『文選』卷四一)「然此數子、猶復不能飛軒絕跡、一舉千里」。

(921) 十階級……『華嚴經』卷十三「十地品」(T. 9. 52c~543a)

「菩薩摩訶薩智地有十、過去未來現在諸佛已說今說當說、爲是地故、我如是說、何等爲十、一曰歡喜、二曰離垢、三曰明、四曰焰、五曰難勝、六曰現前、七日遠行、八曰不動、九曰善慧、十曰法雲、……此十地是菩薩最上妙道、最上明淨法門」。「階級」の語は、『三國志』卷五二吳志顧譚傳「譚上疏曰、臣聞有國有家者、必明嫡庶之端、異尊卑之禮、使高下有差、階級踰邐……」。

(922) 相好具足『注維摩詰經』卷一〇(T. 38. 41b)「我作佛時、

莫向我禮、於大林中、變爲佛身、相好具足、放大光明」。

(923) 四果『阿毘曇毘婆沙論』卷三五(T. 28. 25a)「四沙門果、

謂須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、……經說有四向有住四果、住果者、住有爲沙門果、不住無爲沙門果」。

(924) 度身品……未詳。

(925) 尼乾子『四分律』卷七(T. 22. 608c)「……諸比丘見已語

言、汝等露形尼捷子、不足入祇洹、比丘報言、我等非尼捷子、是沙門釋子耳」。

(926) 須陀洹果 注(923)を見よ。本論五「明五佛並興」章に引用

の「廣說品」にも、「始老國王聞天尊說法、與妻子俱得須陀洹果」とある。

(927) 文始傳……本論五「明五佛並興」章に、「文始傳云、老子

……至闕賓檀特山中、……王求哀悔過、老子推尹喜爲師」、「又

文始傳、老子化胡、推尹喜爲師而化胡」とあるのを参照。

(928) 彈指『法華經』如來神力品(T. 9. 51c)「釋迦牟尼佛及寶

樹下諸佛、現神力時、滿百千歲、然後還攝舌相、一時響歎、俱共彈指、是二音聲、遍至十方諸佛世界、地皆六種震動」。『世說新語』政事「王丞相拜揚州、賓客數百人、並加霜接、……因過胡人前、彈指云、蘭闌蘭闌、群胡同笑、四坐並懂」。『周氏冥通記』卷一(D. 152, S. 9. 6793)「唯閉眼舉手、三彈指云、莫聲叫、莫聲叫」。

(929) 五通飛天『維摩經』佛道品(T. 14. 550b)「或現離婬欲、

爲五通仙人、開導諸群生、令住戒忍慈」。『幽明錄』(『太平御覽』卷八四九飲食部食)「海中有金臺、……上有百味之食、四丈(大)力神、常立守護、有一五通仙人、來欲甘膳、四神排擊遷延而退」。『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒經』卷上(D. 202, S. 11. 8829)「天尊命召十方飛天神人、開九幽玉匱長夜之函、出生死罪錄、惡對種根、十方飛天各說因緣、以告太上大道君焉」。

(930) 作頌『漢書』卷六四下王褒傳「褒既爲刺史作頌、又作其傳、

益州刺史因奏褒有軼材」。

(931) 佛之與道……續行乃證 本論卷首の「啓文」にほとんど同文

がある。

(932) 小乘、大乘『法華經』方便品(T. 9. 82)「佛自住大乘、如

其所得法、定慧力莊嚴、以此度衆生、自證無上道、大乘平等法、若以小乘化、乃至於一人、我則墮慳貪、此事爲不可」。『法華遊意』(T. 34. 644b)「佛教雖復塵沙、今以二義往收、則事無不盡、

一者赴小機說、名曰小乘、赴大機說、稱爲大乘教」。

(933) 從凡入眞 梁武帝「捨事李老道法詔」(『廣弘明集』卷四、T

52・112a)「老子周公孔子等、雖是如來弟子、而化迹既邪、止是世間之善、不能革凡成聖」。

『廣弘明集』卷二八啓福篇序(T

52・321c)「滯則增生、捨則增道、道據逆流、出凡入聖」。

(934) 經論 『晉書』卷九五藝術鳩摩羅什傳「羅什多所暗誦、無不

究其義旨、既覽舊經、多有紕繆、於是(姚)興使沙門僧叡僧肇等八百餘人、傳受其旨、更出經論、凡三百餘卷」。

(935) 修行因緣 注(17)に引用の『法華經』に「修行得道者」と

あり、『眞話』卷一二「稽神樞」第二(D 639, S 34・27440)にも「淳于斟……遇仙人慧車子、授以虹景丹經、修行得道、今在洞中、爲典柄執法郎」とある。

「因緣」については、注(337)を参照。

(936) 吸烝冲天 『黃庭內景玉經註』「口爲章」第三(D 190, S 11・

8288)「口爲玉池太和宮」、註「大洞經云、心存胃口有一女子、嬰兒形、無衣服、正立胃管、張口承注魂液、仰吸五氣、當即漱

滿口中……」。

『抱朴子』黃白(仙經)又曰、朱砂爲金、服之昇仙者、上士也、茹芝導引、咽氣長生者、中士也、餐食草木、千歲以還者、下士也。『楚辭』九歌大司命「乘龍兮騎麟、高馳兮冲天」。

(937) 飲水證道 『三國志』卷八魏志張魯傳注「典略」「教病人叩

頭思過、因以符水飲之」。

『抱朴子』仙藥「……疑其井水殊赤、乃試掘井左右、得古人埋丹砂數十斛、去數尺、此丹砂汁因泉漸入井、是以飲其水而得壽」。

蕭子良「淨住子」開物歸信門第二「廣弘明集」卷二七、T 52・307a)「聞聲者證道、見形者解脫」。

(938) 聞法飛空 『法華經』安樂行品(T 9・39b)「佛爲四衆、說

無上法、見身處中、合掌讚佛、聞法歡喜、而爲供養」。

『抱朴子』對俗「古之得仙者、或身生羽翼、變化飛行、失人之本、更受異形」。

「飛空」の語は、『法華經』分別功德品(T 9・44c)「釋梵如恆沙、無數佛土來、雨栴檀沈水、繽紛而亂墜、如鳥飛空下、供散於諸佛」。

(939) 餌草尸解 『抱朴子』仙藥「或以無類草、樗血合餌之、服之一

年、則病愈、三年、老公反成童子」。

『論衡』道虛「世學道之人、無少君之壽、年未至百、與衆俱死、愚夫無知之人、尙謂之尸解而去、其實不死」。

『抱朴子』論仙「數日而少君稱病死、久之帝令人發其棺、無尸、唯衣冠在焉、按仙經云、上士舉形昇虛、謂之天仙、中士遊於名山、謂之地仙、下士先死後蛻、謂之尸解。仙、今少君必尸解者也」。

(940) 行業 『無量壽經』卷上(T 12・270a)「佛語阿難、行業果

報、不可思議、諸佛世界、亦不可思議、其諸衆生、功德善力、住行業之地、故能爾耳」。

蕭子良「淨住子」出家順善門第九「廣弘明集」卷二七、T 52・310b)「但出家之人、行業階差、生熟難辨、然阡陌而觀、亦粗見其迹」。

(941) 證果 『注維摩詰經』卷六(T 38・388b)「辯乃如是。肇曰、

善其所說、非己所及、故問得何道證。何果、辯乃如是乎。『道教義樞』卷一「位業義」(D 762, S 41・33163)「位業者、登仙學道、階業不同、證果成真、高卑有別、三乘七號、從此可明、十轉九宮、因茲用辯、此其致也」。

(942) 天有五重 注(910)に引いた『辯正論』では「或云九重天」。

「九重天」については、注(507)を参照。

(943) 三千六千 未詳。本論九「日月周徑」章に、「文始傳云、日月周圍六千里、徑三千里」とあるのと關係があるか。注(910)

に引いた『辯正論』では「或云三萬六千」。

(944) 八十一天 本論九「日月周徑」章に、「化胡云、佛法上限、止極三十三天、不及道之八十一天上也」とある。

(945) 六十大梵 大梵は佛教の大梵天を借りたものか。色界二十三天の第四が大梵天と呼ばれる。『經律異相』卷一(T 53・38)参照。

(946) 三十六天 『眞誥』卷一「運題象」第一(D 637, S 34・27336)

「其後逮二皇之世、演八會之文、爲龍鳳之章、……乃爲六十四種之書也、遂播之于三十六天十方上下也。『道門經法相承次序』卷上(D 762, S 41・33124)「自玄都玉京已下、合有三十六天、二十八天是三界內、八天是三界外」。また本論九「日月周徑」章に、「(化胡)又云、崑山九重、重相去九千里、山有四面、面有一天、故四九三十六天」とある。

(947) 五億五萬餘天 本論一「造立天地」章に「又廣說品云、天地相去萬萬五千里、計紫微宮在五億重天之上」、十「崑崙飛浮」

章に「度人妙經云、五億重天之上、大羅之天、有玉京山、災所不及」、三十一「五億重天」章に「文始傳云、天有五億五萬五千五百五十五重」とある。

(948) 九眞天王 本論三「元爲天人」章に「三天正法經云、……而九天真王元始天王、生於九炁之中、炁結而形焉、便有九眞之帝、皆九天清炁、凝成九字之位」、四「結土爲人」章に「三天正法經云、九炁既分、九眞天王乃至三元夫人三元之君太上道君、於是而形」とある。

(949) 九炁天君 前注を参照。

(950) 四方炁君 未詳。

(951) 三元三天 『道門經法相承次序』卷上(D 762, S 41・33124)

「從乎妙一、分爲三元、……其三元者、第一混沌太无元、第二赤混太无元、第三冥寂玄通元、從混沌太无元化生天寶君、從赤混太无元化生靈寶君、從冥寂玄通元化生神寶君、大洞迹別、出爲化主、治在三清境、其三清境者、玉清上清太清是也、亦名三天、其三天者、清微天禹餘天大赤天是也」。

(952) 九宮天曹 本論三「元爲天人」章に「太上三元品云、……其九宮重數、官僚人衆、皆同紫微」、六「五練生尸」章に「三三元品中、天地大水三官九府九宮一百二十曹」とある。「天曹」の語は、『魏書』卷一一四「釋老志」(「太上老君」)謂(寇)謙之曰、

往辛亥年、嵩岳鎮靈集仙宮主、表天曹、稱自天師張陵去世已來、地上曠誠、修善之人、無所師授……」。

(953) 玉清大有、玄都紫微 注(517)に引用の『洞玄靈寶自然九天

生神章經』參照。

(954) 三皇太極 『靈寶自然九天生神三寶大有金書』(D73, S5・

3307) 「神寶君者則洞神之尊神、神寶丈人則神寶君之祖炁也、……經二劫至上皇元年出書時、號三皇洞神太清太極宮」。

(955) 諸如此類 嵇康『養生論』(『文選』卷五三)「……凡若此類、故欲之者、萬無一能成也。『晉書』卷三〇刑法志「……諸如此類、皆爲以威勢得財而罪相似者也」。

(956) 所緣 『抱朴子』詰鮑「賦歛之重於往古、民力之疲於末務、飢寒所緣」。

(957) 虛張 皇甫謐「三都賦序」(『文選』卷四五)「若夫土有常產、俗有舊風、方以類聚、物以群分、而長卿之儔、過以非方之物、寄以中域、虛張異類、託有於無」。「三國志」卷一九魏志陳思王植傳注「魏略」「夫爵祿者、非虛張者也、有功德然後應之、當矣」。

(958) 矯異 『高僧傳』卷一康僧會傳(T50・325b)「以吳赤烏十年、初達建鄴、營立茅茨、設像行道、時吳國以初見沙門、觀形未及其道、疑爲矯異」。同卷一曇摩耶舍傳(T50・329c)「(法)度便獨執矯異、規以攝物」。

(959) 丹草 『真誥』卷一八「握真輔」第二(D640, S34・27494)「吾方棲神岫室、蔭形深林、采汧谷之幽芝、掇丹草以成真矣」。

(960) 虛指 『管子』白心「上聖之人、口無虛習也、手無虛指也、物至而命之耳」。

(961) 更來 この語の使用例未見。

(962) 道經未出言出 本章も『辯正論』卷八「出道偽謬篇」道經未

出言出謬(T52・545b~c) 277.921.22。

「按玄都觀道士等所上一切經目云、取宋人陸修靜所撰之者、依而寫送、檢修靜舊目、注上清經有一百八十六卷、其一百一十七卷、已行於世、從始清以下有四十部、合六十九卷、未行於世、檢今經目、並云見在、修靜經目又云、洞玄經有三十六卷、其二十一卷、已行於世、其大小劫已下有十一部、合一十五卷、猶隱天宮未出、檢今經目、並注云見在、陸修靜者、宋明帝時人也、以太始七年、因敕上此經目、修靜注云、隱在天宮、未出於世、從此以來、二百許年、不聞天下降、又不見道士昇天、不知此經何因而來、昔文成以書飯牛、詐言王母命至、而黃庭元陽、以道換佛、張陵創造靈寶、以吳赤烏之年始出、其上清起於葛玄、宋齊之間乃行、鮑靜造三皇經、當時事露而寢、文成致戮於漢朝、鮑氏滅族於往昔、今之學者、仍踵其術、良可悲矣、漢劉焉傳稱張魯祖父陵、桓帝時、客於蜀、學道鶴鳴山中、造作符書、以惑百姓、受其道者、出米五斗、故謂之米賊、陵傳其子衡、衡爲繼師、衡傳子魯、魯爲嗣師、號曰三師、其來學者、初名鬼卒、後號祭酒、聚合醜徒、頗爲非據、三人之妻、號爲三夫人、陵爲蟒蛇所螫、弟子亦相次餒蛇、皆云白日昇天、欺詐妖妄、傳記所明也、案姚書云、上代已來、至於符姚、皆喚衆僧、名曰道士、魏太武時、有妖人寇謙之、欺詐誑惑、自號天師、始偷道士之名、私易祭酒之稱、案禮、良弓之子、必善爲箕、良冶之家、能爲裘者、以其事類然也、若陵道實朴素、其子孫何所承稟、妖誑若此、

又案三元品經稱、積善之人、則有積善子孫、來生其家、積惡之人、則有不善子孫、來生其家、張陵既白日昇天、有何不善、而招此妖妄子孫也、穿鑿之端、皆此類知矣。

なお本章に關しては、小林正美「劉宋における靈寶經の形成」(『東洋文化』六二號)、參照。

- (963) 玄都道士 『周書』卷五武帝紀上建德元年「帝幸玄都觀、親御法座講說、公卿道俗論難、事畢還宮」。

- (964) 陸修靜所撰者 『道教義樞』卷二「三洞義」(D 763, S 41・33169) に「又序三洞經洞者、其卷數題目、具如陸先生三洞經書目錄……三十六部尊經目等所明」とあり、『三洞經書目錄』とよばれた。陸修靜については、注(727)を參照。

- (965) 上清經 『雲笈七籤』卷四「道教經法傳授部」上清經述「述曰、尋經之意、乃太虛齊量、劫劫出化、非可籌算、自開皇之後、距天漢時、范陽桑平王褒字子登、以正月一日、辭二親、欲尋神仙、求不死之道、乃入華陰山、精思一十八年、遂感上聖太極真人西梁子下降、授餽飯方并服雲牙法、復五年、太極真人王總眞復降、以上清經三十一卷付子登……」。『眞誥』卷一九「翼眞檢」第1 (D 640, S 34・27502) 「伏尋上清眞經出世之源、始於晉哀帝興寧二年太歲甲子、紫虛元君上眞司命南嶽魏夫人下降、授弟子瑯琊王司徒公府舍人楊某、使作隸字寫出、以傳護軍長史句容許某并弟三息上計據某某」。

- (966) 始清 未詳。

- (967) 見在 『論衡』正說「夫尙書滅絕於秦、其見在者二十九篇」。

『眞誥』卷一九「翼眞檢」第1 (D 640, S 34・27502) 「凡三君手書、今見在世者、經傳大小十餘篇」。

- (968) 洞玄經 『道教義樞』卷二「三洞義」(D 763, S 41・33170) 「洞玄是靈寶君所出、高上大聖所撰、今依元始天王告西王母太上紫微宮中格玉書靈寶眞文篇目、十部妙經、合三十六卷」。

- (969) 天宮 『高僧傳』卷一康僧會傳(T 50・335c) 「行惡則有地獄長苦、修善則有天宮永樂」。『宋書』卷九七夷蠻訶羅陁國傳「臺殿羅列、狀若衆山、莊嚴微妙、猶如天宮」。

- (970) 爾來 諸葛亮「出師表」(『文選』卷三七) 「受任於敗軍之際、奉命於危難之間、爾來二十有一年矣」。

- (971) 天人下降 「天人」は本論三章のタイトル、「元爲天人」のそれ。「下降」の語は注(965)に引用の『眞誥』に見える。

- (972) 上昇 『抱朴子』雜應「上昇四十里、名爲太清、太清之中、其氣甚剛、能勝人也」。

- (973) 文成以書飯牛 『史記』卷二八封禪書「齊人少翁以鬼神方見上、……於是乃拜少翁爲文成將軍、……居歲餘、其方益衰、神不至、乃爲帛書以飯牛、詳不知、言曰、此牛腹中有奇、殺視得書、書言甚怪、天子識其手書、問其人、果是僞書、於是誅文成將軍、隱之」。

- (974) 王母 張衡「思玄賦」(『文選』卷一五) 「聘王母於銀臺令、羞玉芝以療飢」、注「王母、西王母也」。

- (975) 黃庭元陽、以道換佛 道安「二教論」明眞僞第十(『廣弘明集』卷八、T 52・141b) 「老子道經、朴素可崇、莊生內篇、

宗師可領、暨茲已外、製自凡情、黃庭元陽、採撮法華、以道換佛、改用尤拙。」「二教論」のこれ以下の文章も「笑道論」に類似する。すなわち、「靈寶創自張陵、吳赤烏之年始出、上清肇自葛玄、宋齊之間乃行、……晉元康中、鮑靖造三皇經被誅、事在晉史、後人諱之、改爲三洞、其名雖變、厥體尙存、猶明三皇、以爲宗極」。また、『辯正論』卷六「內九箴篇」(T52.534b)「如黃庭元陽靈寶上清等經及三皇之典、並改換法華及無量壽等經而作者也」。

(976) 張陵創造靈寶……前注の「二教論」参照。また『雲笈七籤』

卷四「道教經法傳授部」靈寶經目序「夫靈寶之文、始於龍漢、龍漢之前、莫之追記、延康長劫、混沌無期、道之隱淪、寶經不彰、赤明革運、靈文興焉……」。『創造』の語は、『後漢書』傳三八應劭傳「又刪定律令爲漢儀、建安元年乃奏之、曰、……又集駁議三十篇、以類相從、凡八十二事、……其二十七、臣所創造」。

(977) 上清起於葛玄……注(975)の「二教論」参照。葛玄の傳記資料は、陳國符『道藏源流攷』九二～九三頁に集められている。

(978) 鮑靖造三皇……注(975)の「二教論」参照。また『雲笈七籤』卷四「道法經法傳授部」三皇經説につきのようにいう。

「三皇經云、昔天皇治時、以天經一卷授之、天皇用而治天下、二萬八千歲、地皇代之、上天又以經一卷授之、地皇用而治天下、二萬八千歲、人皇代之、上天又以經一卷授之、人皇用而治天下、亦二萬八千歲、三皇所授經、合三卷、爾時號爲三墳是也、亦名三皇經、……至于晉武皇帝時、有晉陵鮑靚、官至南海太守、少

好仙道、以晉元康二年二月二日、登嵩高山、入石室清齋、忽見古三皇文、皆刻石爲字、爾時未有師、靚乃依法、以四百里絹爲信、自盟而受、後傳葛稚川、枝孕相傳、至于今日、三寶行世、自然之數、心與理契、因緣冥符、使之然也。」「事露」の語は、『後漢書』傳五八郭太傳「……後事露、衆人咸謝服焉」。鮑靖の傳記資料は、『道藏源流攷』七六頁に集められている。

(979) 致戮 この語の使用例未見。

(980) 漢書……『後漢書』傳六五劉焉傳「(張)魯字公旗、初祖父陵、順帝時客於蜀、學道鶴鳴山中、造作符書、以惑百姓、受其道者、輒出米五斗、故謂之米賊、陵傳子衡、衡傳於魯、魯遂自號師君、其來學者、初名爲鬼卒、後號祭酒」。

(981) 三師 本論七「觀音侍道」章に引く『蜀記』に、「陵子衡爲係師、衡子魯爲嗣師」とある。その注(319)、参照。

(982) 三夫人 出處未詳。注(319)に引いた玄光「辯惑論」注の「三女師」のことか。

(983) 白日昇天 やはり「觀音侍道」章に引く『蜀記』に、張陵について「白日昇天」という。「白日昇天」の語は、注(239)を見よ。

(984) 妖鄙 この語の使用例未見。

(985) 穿鑿濫行 「穿鑿」の語は、注(27)を見よ。「濫行」の語の使用例は未見。

(986) 文始傳云……『初學記』卷五地理上總載地に引用の「關令內傳」につきのようにある。「地厚萬里、其下得太空、太空四

角、下有自然金柱、輒方員五千里也」。また、『上清道寶經』卷二「地品」(D1036, S56・45286)「天地南午北子東卯西西」の注に、『真人內傳』からの引用としてつぎのようにある。「四隅空无、相去各九千萬萬里、地厚萬里、下得大空、四角下有自然金柱、復有三千六百金軸、柱方圓五千里、一一相連、神風爲剛、故能低昂前却、真人內傳」。

- (987) 天有五億五萬五千五百五十五重、地亦如之 本論十「崑崙飛浮」章に「度人妙經云、五億重天之上、大羅之天、有玉京山」とある。また、『辯正論』卷六「氣爲道本篇」(T52・536b)「靈書經云、大羅是五億五萬五千五百五十五重天之上天也」、「太上洞玄靈寶天關經」(D618, S33・26586)「……如是天地各有五億五萬五千五百五十五重也」。

- (988) 金柱金軸 注(986)、参照。また『博物志』(通行本卷一)「地下有四柱、四柱廣十萬里、地有三千六百軸、犬牙相舉」。

- (989) 方圓 嵇康「養生論」(『文選』卷五三)「或益之以畎澮、而泄之以尾閭」、李善注「莊子、海若曰、天下之水、莫大於海、萬川歸之、不知何時止而不盈、尾閭泄之、不知何時已而不虛、司馬彪曰、尾閭、水之從海水出者也、一名沃焦、在東大海之中、……在扶桑之東、有一石、方圓四萬里、厚四萬里、海水注者、無不焦盡、故名沃焦」、『眞誥』卷一四「稽神樞」第四(D639, S34・27463)「金庭有不死之鄉、在桐栢之中、方圓四十里」。
- (990) 神風 陸雲「大將軍譙會被命作詩」(『文選』卷二〇)「在昔姦臣、稱亂紫微、神風潛駭、有赫茲威」、『眞誥』卷二「運題象」

第二(D637, S34・27346)「交兵日會、三災向臻、神風驅除、臭氣參天」、『雲笈七籤』卷四二「存思」存大洞真經三十九眞法「七眞玄陽君、……便讀玉經畢、又祝曰、……手執錄籍、駕景乘龍、左廻靈曜、右扇神風」。

- (991) 以四海爲地脈 『楚辭』九歌雲中君「覽冀州兮有餘、橫四海兮焉窮」、『史記』卷八八蒙恬列傳「太史公曰、吾適北邊、自直道歸、行觀蒙恬所爲秦築長城亭障、塹山堙谷、通直道、固輕百姓力矣、……此其兄弟遇誅、不亦宜乎、何乃罪地脈哉」、『周處風土記』(『北堂書鈔』卷一五八地部穴)「太湖中有包山、山下有洞穴、潛行地中、無所不通、謂之洞庭地脈者也」。
- (992) 河漢 成公綏「天地賦」(『晉書』卷九二文苑傳)「河漢委蛇而帶天、虹蜺偃蹇於昊蒼」。

- (993) 通炁 『周易』說卦傳「天地定位、山澤通氣、雷風相薄、水火不相射、八卦相錯」、『公羊傳』僖公三十一年「河海潤于千里」、何休注「亦能通氣致雨、潤澤及于千里」。

- (994) 風雲皆從山出 『史記』卷六三老子列傳「至於龍、吾不能知其乘風雲而上天、吾今日見老子、其猶龍邪」、『禮記』祭法「山林川谷丘陵能出雲爲風雨、見怪物、皆曰神」。同孔子問居「天降時雨、山川出雲」。

- (995) 三天正法經云…… 本論三「元爲天人」章に、多少の文字の異同はあるがすでに引用がある。その注(168)、参照。

- (996) 稟自然之胤 嵇康「養生論」(『文選』卷五三)「夫神仙雖不可目見、然記籍所載、前史所傳、較而論之、其有必矣、似特受異

氣、稟之自然、非積學所能致也。

(997) 一里有三百步 『穀梁傳』宣公十五年「古者三百步爲里」。

(998) 一步有六尺 『國語』周語下「夫目之察度也、不過步武尺寸之間」、韋昭注「六尺爲步」。

(999) 地…載… 『禮記』郊特牲「地載萬物」。『莊子』天下「天能覆之而不能載之、地能載之而不能覆之、大道能包之而不能辯之」。

(1000) 文始傳云…… 『三洞珠囊』卷九「老子化西胡品」(D782, S42・3386)に引く『老子化胡經』につぎのようにあるのを參照。「……胡王歸國、復欲請老公、老公答王曰、言不可請、王曰、

吾大國之中、何所无有、何以不能請老公耶、刻日當會、到其日、老子與諸道士、共行就請、有四輩弟子、四天王百萬衆、今日一種人、明日復異種人、日日人各不同、如此四十餘日、人來不絕、王廚已盡、王乃大驚、語左右曰、此爲妖祥、必非常人、奈何殺之、……胡王敕國中、戶各取薪一束、積與市上燒之、老子與尹喜、爲胡王所繫薪上、胡子於下放火燒之、四十餘日、薪盡火滅、老子與尹喜、在炭中讀經如故、王復沈老子尹喜、以大石繫頭、著深淵之中、又復不沒、胡王大驚、今當奈何、舉國惶怖、欲來侍老子、以爲師也、老子語王曰、我非師也、前與我共上新被燒者、是爲師、師今到諸天中、索兵馬、當來以伐王國、以王前燒殺之故也、須臾間、諸天鬼神兵馬來下、皆長一丈四尺、數百萬衆、手持鐵杖、滿王國中、日日來之不絕、唯欲以殺胡子、并及王身、故胡王大驚、三十六國、各各失魂、王頭面指地、不敢視

老子、老子即變作金剛五色大人、身長一丈六尺、七十二相、面目紫輝、見於虛空、左入右出、乍下乍上、是謂十方空虛身也……」。

(1001) 大衆 『禮記』月令「孟春之月、……毋聚大衆、毋置城郭」。

『法華經』序品(T9・26)「是時天雨曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華、而散佛上及諸大衆」。

(1002) 身長丈六 注(473)を見よ。

(1003) 常臥不起 『陳書』卷三六始興王叔陵傳「夜常不臥、燒燭達曉、呼召賓客、說民間細事、戲謔無所不爲」。

(1004) 愕然大怪 『史記』卷五五留侯世家「有一老父、衣褐至良所、直墮其履圯下、顧謂良曰、孺子下取履、良愕然、欲歐之、爲其老、彊忍下取履」。『搜神記』(二十卷本)卷二二「吳時、將軍朱桓得一婢、每夜臥後、頭輒飛去、……桓以爲大怪、畏不敢畜、乃放遣之」。

(1005) 道士出入儀式 目次では「出入威儀」。「出入」の語は、潘岳「西征賦」(『文選』卷一〇)「飛翠綏、拖鳴玉、以出入禁門者衆矣」。「儀式」の語は、『三國志』卷一五張既傳注「魏略」(游)楚爲人短小而大聲、自爲吏、初不朝覲、被詔登階、不知儀式」。

(1006) 玄中經說…… 本論二十「以酒脯事邪求道」章にも『玄中精經』の引用がある。

(1007) 執簡 『左傳』襄公二十五年「南史氏聞大史盡死、執簡以往、聞既書矣、乃還」。

(1008) 金玉 『周禮』天官玉府「掌王之金玉玩好兵器凡良貨賄之藏」。

(1009) 中古 下文の「下古」とともに、注(521)を見よ。

(1010) 師君 玄光「辯惑論」(『弘明集』卷八、T52・49a)「昔張子魯漢中解福、大集祭酒及諸鬼卒」、注「又天公地公及稱臣妾・太平之道・五斗米道・大道・紫道・鬼神・師君、此作賊時假威名也」。「雲笈七籤」卷九一「七部名數要記」七報「六者、先身忠孝、恭奉尊親、崇敬勝己、宗禮師君、腹目相和、如同一身……」。

(1011) 雜木 『南史』卷五九任昉傳「遺言不許以新安一物還都、雜木爲棺、浣衣爲斂」。

(1012) 王宮聚落人室 『周禮』考工記匠人「設人重屋」、鄭玄注「重屋者、王宮正堂若大寢也」。「後漢書」傳二九王扶傳「少修節行、客居琅邪不其縣、所止聚落化其德」。「周禮」秋官司士「凡盜賊軍鄉邑及家人、殺之無罪」、注「鄭司農云、謂盜賊群輩若軍共攻盜鄉邑及家人者、殺之無罪、若今時無故入人室宅廬舍、上人車船、牽引人欲犯法者、其時格殺之、無罪」。

(1013) 巾帔 注(325)を見よ。

(1014) 側背 謝靈運「歸塗賦」(『藝文類聚』卷二七人部行旅)「路威夷而詭狀、山側背而易形」。

(1015) 素服 『左傳』僖公三十三年「秦伯素服郊次、嚮師而哭」。

(1016) 自顯損道法 『禮記』禮運「故百姓則君以自治也、養君以自安也、事君以自顯也」。「後漢書」傳一五魯恭傳「恭性謙退、奏

議依經、潛有補益、然終不自顯、故不以剛直爲稱」。「道法」の語は、注(681)を見よ。

(1017) 俗家 『陸先生道門科略』(D761, S41・33121)「奉道之家、靖室是致誠之所、……其中清虛、不雜餘物、……比雜俗之家、床座形像、幡蓋衆飾、不亦有繁簡之殊、華素之異耶」。「眞誥」卷七「甄命授」第三(D638, S34・27392)「有一白犬、俗家以許禱土地鬼神」。

(1018) 威儀 『儀禮』士冠禮「敬爾威儀、淑慎爾德」。「禮記」中庸「禮儀三百、威儀三千」。なお、佛典では行・住・坐・臥を四威儀という。

(1019) 香爐銅灌鉢針出家之具自隨 『金七十論』卷下(T54・1257b)「一切出家行道具、具有四種、謂三杖澡灌袈裟吉祥等」。これらの道具は、そもそも佛教の出家者のものであろう。とりあえず『釋氏要覽』卷中「道具」によれば、つぎのような説明がある。「手爐、法苑云、天人黃瓊說迦葉佛香爐、……佛說法時常執此爐、比觀今世手爐之製、小有做法焉」(T54・279c)。「銅灌」は淨瓶であらう。「淨瓶、梵語軍遲、此云瓶、常貯水隨身、用以淨手、寄歸傳云、軍持有二、若甕瓦者、是淨用、若銅鐵者、是觸用」(280a)。また、「鉢、梵云鉢多羅、此云應器、今略云鉢也、又呼鉢盂、即華梵兼名也、鉢者乃是三根人資身要急之物、佛聽用三種」(279a)。「自隨」の語は、『三國志』卷一五魏志張既傳注「魏略」(張)「楚不學問、而性好遊邀音樂、乃畜歌者、琵琶箏簫、每行來將以自隨」。「魏書」卷九七島夷劉裕傳

「又槌拍鍼鑿錐鋸之屬、常以自隨、或有忤意、輒如酷暴」。

(1020) 具足 『魏書』卷一四釋老志「其爲沙門者、初修十誠、曰

沙彌、而終於二百五十、則具足成大僧」。また、注(922)を見よ。

(1021) 十種功德 『法苑珠林』卷六八「業因篇」十善部(T.53.863

○「如修多羅說、有信者修行十種功德、行住睡寤等、日夜常生功德、增長功德」。

(1022) 自然經云…… 『辯正論』卷六「十喻篇」(T.52.336b)に

つぎのようにあるのを参照。「内九喻曰、開士曰、昔丹陽余玖與撰明真論一十九篇、以駁道士、出其僞妄、詳彼論焉、言巾褐之服、正是古日儒墨之所服也、在昔五帝鹿巾、許由皮冠、並俗者之服耳、褐身長三丈六尺、有三百六十寸、言法一歲三十六旬、或像一年三百六十日也、褐前有二帶、言法陰陽兩判、巾之兩角又法二儀」。

(1023) 褐長三丈六尺 下記を参照。『無上祕要』卷四三「修道冠服

部」(D.773, S.42.33574)「洞玄眞一自然經訣、太極真人言、受道執經、法衣巾褐、褐皆長三尺六寸、三十二條、若鹿皮巾褐、至佳、皮褐無條數也。『三洞法服科戒文』(D.563, S.30.24250)

「太上曰、上聖無形、實不資衣服、但應迹人間而有衣服、若歸眞反本、湛寂自然、形影尙空、何論衣服、今雖示迹、略有九階、要而言之、大歸二種、一者無衣之衣、……二者有衣之衣、謂三界以下、乃至棄賢、形質尙顯、未能合道、遊行出處、要藉威儀、衣服階修、致有差別、又有七種、須案奉行、劫運雖傾、此法無

變、一者初入道門、平冠黃帔、二者正一、芙蓉玄冠、黃帔絳褐、

三者道德、黃褐玄巾、四者洞神、玄冠青褐、五者洞玄、黃褐玄冠、皆黃裙對之、冠象蓮花、或四面兩葉、褐用三丈六尺、身長三尺六寸、女子二丈四尺、身長二尺四寸、袖領帶襍、就令取足、作三十二條、帔用二丈四尺、二十四條、男女同法、六者洞眞、褐帔用紫紗三十六尺、長短如洞玄法、以青爲裏、袖領帶、皆就取足、表二十五條、裏一十四條、合三十九條、飛青華帔、蓮花寶冠、或四面三葉、謂之元始冠、女子褐用紫紗二丈四尺、長二尺四寸、身二十三條、兩袖十六條、合三十九條、作青紗之帔、戴飛雲鳳炁之冠、七者三洞講法師、如上清衣服、上加九色若五色雲霞山水袖帔、元始寶冠、皆環佩執板、師子文履、謂之法服、悉有天男天女、玉童玉女、侍奉護持、不得叨謬、諸天敬仰、群魔束形、子其勉之。

(1024) 中兩角法兩儀 「中」は「巾」の誤字とみなす。「兩儀」の

語は、『周易』繫辭傳上「是故易有太極、是生兩儀」。その正義に、「不言天地而言兩儀者、指其物體、下與四象相對、故曰兩儀」。

(1025) 冠法蓮花巾 注(1023)の『三洞法服科戒文』に、「冠象蓮花」

とあるのを参照。

(1026) 科律 『三國志』卷一三魏志鍾繇傳「夫五刑之屬、著在科律、

自有減死一等之法、不死即爲減」。同卷二二魏志盧毓傳「毓上論古今科律之意、以爲法宜一正、不宜有兩端、使姦吏得容情」。

(1027) 張魯黃巾之服 本論七「觀音侍道」章に、「時傳黃衣當王、

(張) 魯遂令其部衆、改著黃衣巾帔、代漢之徵、自爾至今、黃服不絕」とあるのを参照。

(1028) 無識 注(137)を見よ。

(1029) 道士奉佛 『法苑珠林』卷五五「破邪篇」道教敬佛(T53・705b~706c)を同時に参照のこと。「奉佛」の語は、『世說新語』排調「二郗奉道、二何奉佛」。

(1030) 化胡去…… 法琳『破邪論』卷上(T52・477c、また『廣弘明集』卷一一、T52・162b)にも、「化胡經」¹⁾として同文の引用がある。ただし、そちらでは第一句を「願探優曇花」に作る。

(1031) 優曇花 『法華經』方便品(T9・10a)「譬如優曇花、一切皆愛樂、天人所希有、時時乃一出」。

(1032) 梅檀香 『法華經』法師功德品(T9・48b)「以是清淨鼻根、聞於三千大千世界上下内外種種諸香、須曼那華香、闍提華香、……梅檀香、沈水香……」。

(1033) 供養千佛身 『韓非子』外儲說左上「子盛壯成人、其供養、薄父母怒而諍之」。蕭子良「淨住子」奉養僧田門第二十七「廣弘明集」卷二七、T52・319b)「故凡施者、教多在僧、獨供養於僧、備有三寶、故佛有言、隨順我語、供養佛也、爲解脫故、供養法也、衆僧受用、供養僧也」。『法華玄義』卷六下(T33・756b)「摩耶是千佛之母、淨飯是千佛之父」。

(1034) 稽首禮定光 『智度論』卷九(T25・124b)「如燃燈佛、生時一切身邊如燈故、名燃燈太子、作佛亦名燃燈、丹注云、舊名

定光佛也」。『稽首』の語は、注(440)を見よ。

(1035) 又云…… 注(1030)にあげた『破邪論』のつぎに、「又云、佛生何以晚、泥洹一何早、不見釋迦文、心中常懊惱、^{舊本皆言、我生何以晚、佛何早}」と見え、また『辯正論』卷五「佛道先後篇」(T52・522b)につきのように見える。「案西域傳云、老子至闕賓國見浮圖、自傷不及、乃說偈供養、對像陳情云、我生何以晚^{新本改云、佛出一何早}泥洹一何早、不見釋迦文、心中常懊惱」。それらは『高僧傳』卷一曇摩難提傳(T50・328c)に、「(趙正)及(符)堅死後、方遂其志、更名道整、因作頌曰、佛生何以晚、泥洹一何早、歸命釋迦文、今來投大道」とあるのパロディーであろう。

(1036) 泥洹 「涅槃」と同じ。『肇論』「涅槃無名論」(『肇論研究』、五八頁)「泥洹、泥洹、涅槃、此三名前後異出、蓋是楚夏不同耳」。

(1037) 懊惱 『樂府詩集』卷四六「清商曲辭」懊惱歌十四首之十四「懊惱奈何許、夜聞家中論、不得儂與汝」。『宋書』卷三一五行志二「晉安帝隆安中、民忽作懊惱歌、其曲中有草生可攀結、女兒可攀抱之言」。『百喻經』卷二「雇借瓦師喻」(T4・547c)「此弊惡驢、須臾之頃、盡破我器、是故懊惱」。

(1038) 大誠云…… 『上清洞真智慧觀身大戒文』(D1039, S56・45448)「道學當念遊大梵天流景宮、禮四天帝王、聽諸天誦詠、霄絕雅妙」。『破邪論』卷上(T52・477c)「智慧觀身大戒經云、道學當念遊大梵流影宮禮佛」。

(1039) 流景宮 何晏「景福殿賦」(『文選』卷一一)「晨光内照、流

景外燧」李善注「晨光、日景也、日光照於室中、而流景外發而延起也」。

(1040) 數齋經……未詳。

(1041) 右玄真人 『太上洞玄靈寶智慧定志通微經』(D 167, S 9. 734f)「靈寶天尊……即遣侍臣、召左玄真人右玄真人、須臾二真人立便躬到。『雲笈七籤』卷四五「祕要訣法」朝真儀「存思太上道君著九色雲霞之帔、戴九德之冠、左玄真人在左、右玄真人在右、龍虎君玉童玉女並在左右、天師在西位」。

(1042) 轉輪生死法化世 『智度論』卷五(T 25. 100a)「生死輪轉人、諸煩惱結使、大力自在轉、無人能禁止。『管子』水地……是以聖人之化世也、其解在水、故水一則人心正、水清則民心易」。

(1043) 天老 張衡「應閒」(『後漢書』傳四九)「方將師天老而友地典、與之乎高睨而大談」、李賢注「帝王紀曰、黃帝以風后配上台、天老配中台、五聖配下台、謂之三公」。

(1044) 仙度 『抱朴子』極言「……然按神仙經皆云、黃帝及老子奉事太乙元君、以受要訣、況乎不逮彼二君者、安有自得仙度世者乎、未之聞也」。

(1045) 不死之大法 『抱朴子』金丹「有積金盈櫃、聚錢如山者、復不知有此不死之法。『尚書』洪範孔傳「洪、大、範、法也、言天地之大法」。

(1046) 老子序云…… 本論八「佛生西陰」章に、「老子序云、陰陽之道、化成萬物、道生於東、爲木陽也、佛生於西、爲金陰也、

道父佛母、道天佛地、道生佛死、道因佛緣、並一陰一陽、不相離也」とあるのを参照。

(1047) 忌穢 この語の使用例未見。

(1048) 天分 『廣弘明集』卷六「列代王臣滯惑解」序(T 52. 123b)「此則古來行事、釋判天分、未廣見者、謂爲新致」。

(1049) 大判 『文心雕龍』總術「才之能通、必資曉術、自非圖鑒區域、大判條例、豈能控引情源、制勝文苑哉」。

(1050) 清虛大道 『漢書』卷三〇藝文志「道家者流、蓋出於史官、歷記成敗存亡禍福古今之道、然後知秉要執本、清虛以自守、卑弱以自持、此君人南面之術也。『老子』三十四章「大道汎兮其可左右」。

(1051) 穢惡 『三國志』卷三七蜀志法正傳「恐聖聽穢惡其聲、故中間不有賤敬、顧念宿遇、瞻望懷恨」。

(1052) 古昔殷太宰問……西方之人有聖者焉 『列子』仲尼「商太宰見孔子曰、丘聖者歟、孔子曰、聖則丘何敢、然則丘博學多識者也、商太宰曰、三王聖者歟、孔子曰、三王善任智勇者、聖則丘不知、曰、五帝聖者歟、孔子曰、五帝善任仁義者、聖則丘弗知、曰、三皇聖者歟、孔子曰、三皇善任因時者、聖則丘弗知、商太宰大駭曰、然則孰者爲聖、孔子動容有閒曰、西方之人有聖者焉、不治而不亂、不言而自信、不化而自行、蕩蕩乎民無能名焉、丘疑其爲聖、弗知眞爲聖歟、眞不聖歟。『古昔』の語は、班固「東都賦」(『文選』卷一)「案六經而校德、眇古昔而論功」、左思「詠史詩」八首之七(同卷二二)「英雄有屯遭、由來自古

昔」。

(1053) 化胡云……道安「二教論」孔老非佛第七の注〔廣弘明集〕

卷八、(T.52・139c)に、「老子西升經云、天下大術、佛術第一」の引用がある。

(1054) 大術『抱朴子』遐覽「其次有玉女隱微一卷、亦化形爲飛禽走獸及金木玉石、與雲致雨方百里、雪亦如之、……亦大術也」。

(1055) 昇玄云……道安「二教論」孔老非佛第七の注〔廣弘明集〕

卷八、(T.52・139c)に、「又西昇玄經云、吾師化由天竺、善入泥洹」の引用がある。

(1056) 符子曰……前注のつづきに同文の引用がある。なお『隋書』

卷三四經籍志子部道家類に、「符子二十卷、東晉員外郎符朗撰」を著録する。

(1057) 道齋經又云……未詳。

(1058) 外國讀經、多是梵天 曹植「辯道論」の末〔廣弘明集〕卷

五、(T.52・119b)に「つぎのようにあるのを参照。」「嘗遊魚山、聞空中梵天之響、乃摹而傳于後、則備見梁法苑集」。そして、

『法苑珠林』卷三十六「梵唄篇」讚歎部(T.53・576a)に「う。

「陳思王曹植……嘗遊魚山、忽聞空中梵天之響、清雅哀婉、其聲動心、獨聽良久、而侍御皆聞、植深感神理、彌瞻法應、乃摹其聲節、寫爲梵唄、纂文製音、傳爲後式、梵聲顯世、始於此焉、其所傳唄、凡有六契」。

(1059) 靈寶三十二天……七祖同昇南宮 『太上靈寶諸天內音自然玉

字』卷三「大梵隱語无量洞章」(D.49, S.3・2180)に「う。

「三十二天、天有八字、……合三十二天、合二百五十六字、皆三十二天大梵隱語无量之音、天有飛玄自然之炁、合和五音、以成天中无量洞章、上演諸天之玄奧、讚大有之開明、中理自然之炁、普度學仙之人、下度生死之命、拔出長夜之魂、元始妙法、億劫長存」。また(218c)、「元始天尊告太上道君曰、赤明始開、其八天之炁、分度並屬東方青天、天有八字、合六十四音、皆天中大梵隱語无量之音、行九炁天君之道、當佩其音、誦其章、出入遊行、……萬徧道成、即得飛行、其道尊法弘教、普度無窮、七祖同福、皆昇南宮」。

(1060) 南宮 注(617)を見よ。

(1061) 道士合炁法 目次では「道士合炁」。本章は『辯正論』卷八「出道僞謬篇」道士合氣謬(T.52・545c~546a)により詳細な引用がある。

「真人內朝律云、真人曰、禮法、男女至朔望之日、先齋三日、入朝師、入私房、來詣師、立功德、陰陽並進、命聽許、立功訖出、日夜六時、常立功德、又案真人內禮道家內侍律稱、不得失內侍之序、不得貪外道失中御之教、不得好外交接失內養之禮、不得好在前失內修之事、老子曰、我師教我金丹經、使我專心養玉莖、三五七九還陰精、呼吸玉池入玄冥、行道半守昇太清、又云、老子曰、我師教我通師精、會食金丹昇太清、我行三五住七九、呼吸太玄生門口、堅守玉池拜道母、赤松子曰、我師教我金丹經、使我專心養玉莖、三五七九還陰精、呼吸玉池入玄城、行氣半守昇太清、又真人內禮詣師家行道律云、行氣以次、不得任

意排醜近好、抄載越次、又道士禮律云、玄子曰、不鬲戾、得度世、不嫉妬、世可度、陰陽和合乘龍去、赤松子曰、木昇仙、開生門、真人紫府開腸戶。

甄鸞笑曰、昔年二十之時、心好道術、就諸道士、先行黃書合氣三五七九男女交接之道、四目四鼻孔兩口兩舌四手、令心正對陰陽、法二十四氣之數、行道眞決、在於丹田、唯以禁祕爲急、不泄道路、不得更相嫉妬、行者災厄皆除、號爲真人、度世延年、交夫易婦、唯色爲先、父兄立前、不知羞恥、自稱中氣眞術、今民間道士、常行此法、以之求道、有所未許。

「合氣」の語は、僧敏「戎華論折願道士夷夏論」(『弘明集』卷七、T.52・47c)「反縛伏地者、地獄之貌也、符章合氣者、姦校之窮也」、僧順「答道士假稱張融三破論」(同卷八、T.52・53c)「嘗聞子道又有合氣之事」、玄光「辯惑論」の「合氣釋罪是其三逆」(同卷八、T.52・48b-c)をも参照。H・マスベロ、川勝義雄譯『道教』一八三頁に「合氣」の儀式についての言及があるほか、とりわけおなじくH・マスベロ、持田季未子譯『道教の養性術』(せりか書房アジア文化叢書、一九八三)の第二部「陰陽養性法」が本章の理解をたすける。

(1062) 真人内朝律云……明槩「決對傳突廢佛法僧事」(『廣弘明集』卷一一、T.52・172b)につきのようにあるのを参照。「又依老子金丹之經、真人内朝之律、朔望之祭、侍師私房、情意相親、男女交接、使四目兩鼻、上下相當、兩口兩舌、彼此相對、陰陽既接、精氣遂通、此則夫婦禮成、男女道合」。

(1063) 朔望 潘岳「悼亡詩」三首之三(『文選』卷二三)「茵幘張故房、朔望臨爾祭、爾祭詎幾時、朔望忽復盡」。『玄都律文』制度律(D.78, S.5・360)「律曰、道士女官主者錄生、朔望皆朝拜」。

(1064) 先齋 『抱朴子』金丹「合丹當於名山之中、無入之地、結伴不過三人、先齋百日、沐浴五香」。

(1065) 私房 『周書』卷三一韋孝寬傳「所得俸祿、不入私房、親族有孤遺者、必加振贍」。

(1066) 立功德 『抱朴子』對俗「或問曰、爲道者當先立功德、審然否」。

(1067) 陰陽並進 『抱朴子』至理「……然又宜知房中之術、所以爾者、不知陰陽之術、屢爲勞損、則行氣難得力也」。『魏書』卷一一四釋老志「(太上老君)謂(寇)謙之曰、……授汝天師之位、賜汝雲中音誦新科之誡二十卷、號曰並進」。また、「文錄有五等、一曰陰陽太官、……五曰並進錄主」。

(1068) 六時 『南齊書』卷三武帝紀「喪禮每存省約、不須煩民、百官停六時入臨、朔望祖日可依舊」。『佛說阿彌陀經』(T.12・347a)「晝夜六時、天雨曼陀羅華」。

(1069) 猥雜 『南齊書』卷九禮志上「晉初太學生三千人、既多猥雜、惠帝時欲辯其涇渭、故元康三年始立國子學、官品第五以上得入國學」。

(1070) 聞說 『法華經』見寶塔品(T.9・32c)「今多寶如來塔、聞說法華經故、從地踊出」。『維摩經』弟子品(T.14・539c)「時

我世尊、聞說是語、默然而止、不能加報」。

- (1071) 道律 『辯正論』の道士合氣謬では、「真人内禮詣師家行道律」。

- (1072) 行炁以次 魏文帝『典論』(『三國志』卷二九魏志方技華佗傳注)「甘陵甘始亦善行氣、老有少容」。「抱朴子」釋滯「欲求神仙、唯當得其至要、至要者在於寶精行炁、服一大藥便足、亦不用多也、……雖云行炁、而行炁有數法焉」。「漢書」卷六九趙充國傳「充國至金城、須兵滿萬騎、欲渡河、恐爲虜所遮、即夜遣三校銜枚先渡、渡輒營陳、會明畢、遂以次盡渡」。

- (1073) 任意排醜近好 仲長統詩(『後漢書』傳三九仲長統傳)「大道雖夷、見幾者寡、任意無非、適物無可」。「抱朴子」論仙「其賢愚邪正、好醜脩短、清濁貞淫、緩急遲速、趨舍所尚、耳目所欲、其爲不同、已有天壤之覺、冰炭之乖矣」。

- (1074) 抄載越次 『三國志』卷二二魏志陳羣傳「……且斜谷阻險、難以進退、轉運必見鈔載、多留兵守要、則損戰士、不可不熟慮也」。「列子」仲尼「伯豐子之從者越次而進曰、大夫不聞齊魯之多機乎」。「漢書」卷九九王莽傳上「……於是莽上書曰、臣以外屬、越次備位、未能奉稱」。

- (1075) 玄子 『隋書』卷三四經籍志子部道家類に「玄子五卷」を著録する。「北齊書」卷二九に傳の備わる李公緒は「玄子五卷」を撰したというが、果してこの書物かどうか。

- (1076) 高辰 この語の使用例未見。
- (1077) 度世 『楚辭』遠遊「欲度世以忘歸兮、意恣睢以擔擗」。「抱

朴子」至理「……況乎告之以金丹可以度世、芝英可以延年哉」。

- (1078) 嫉妬 『楚辭』離騷「羌內恕己以量人兮、各興心而嫉妬」。
- (1079) 乘龍 『淮南子』原道訓「射者扞烏號之弓、彎棊衛之箭」、高誘注「……一說、黃帝鑄鼎於荆山鼎湖、得道而仙、乘龍而上、其臣援弓射龍、欲下黃帝、不能也、烏、於也、號、呼也、於是抱弓而號、因名其弓爲烏號之弓也」。「抱朴子」論仙「又按漢禁中起居注云、少君之將去也、武帝夢與之共登高高山、半道有使者、乘龍持節、從雲中下、云太乙請少君」。

- (1080) 道術 『抱朴子』論仙「陳思王著釋疑論云、初謂道術、直呼愚民詐僞空言定矣」。同(劉)向本不解道術、偶偏見此書、便謂其意盡在紙上、是以作金不成耳」。

- (1081) 黃書合炁三五七九男女交接之道 「黃書合炁」については、注(381)を見よ。また、『道藏』に『洞真黃書』(D1081, S35, 45101~45102)があつてこぎのようになう。「天師以漢安元年壬午二年癸未、從老子稽首受黃書八卷、赤炁三炁九符七符各一、玄籙一、混成一、中章三、神籙一」。また(45107)、「以漢安元年七月七日日中時、太上老君授與張陵、……道陵以二年歲在癸未正月七日日中時、授與趙升王長王稚王英等、施行黃書契令、……升等授三夫人於莊山北望治、分別卷契、先授赤炁口訣天地六合三五正行七九配炁」。「三五七九」に關しては、道安「二敎論」服法非老第九(『廣弘明集』卷八、T52.140c)「或合氣釋罪」の注記にも、「妄造黃書、兒癩無端、乃開命門、抱真人嬰兒、龍迴虎戲、備如黃書所說、三五七九、天羅地網、士女瀾漫、

不異禽獸、用消災禍、其可然乎」といふ、また『辯正論』卷六

「内九箴篇」(T 52・531c~532a) 2、「尋漢安元年、歲在壬午、道士張陵分別黃書云、男女有和合之法、三五七九交接之道、其道眞決、在於丹田、丹田者玉門也、唯以禁秘爲急、不許泄於道路、道路、溺孔也、呼爲師父、父母鼻根之名」とあるが、とく下記を参照。『洞眞黃書』(D 1031, S 55・45104)「三五七九、與二十四神相應、三五者、但行左炁上右玄老中太上」。『洞眞太上素靈洞元大有妙經』(D 1026, S 55・44828)「又當兼行帝一太一五神及三五七九之事、兼行之者而一神之感致易也」。

『洞眞太一帝君太丹隱書洞眞玄經』(D 1030, S 55・45011)「九天九宮中有九神、是謂天皇、……三五之號、其位不同、一曰太清之中、則三五帝君、二曰三一丹田神、又五者符籙之神、太一公子白元司命桃康君是也、合而名爲三五、三五各有宮室、若三眞各安在其宮、五神上見帝君、帝君左有元老丈人、右有玄一老君、此則無極之中所謂九君、上一則眞一也」。なお「交接」の語は、『漢書』卷三八高五王傳「青州刺史奏終古使所愛奴與八子及諸御婢姦、終古或參與被席、或白晝使羸伏、犬馬交接」、「抱朴子」釋滯「一塗之道士、或欲專守交接之術、以規神仙、而不作金丹之大藥、此愚之甚也」。

- (1082) 正對 『文心雕龍』麗辭「故麗辭之體、凡有四對、言對爲易、事對爲難、反對爲優、正對爲劣」。『眞誥』卷一一「稽神樞」第一注 (D 639, S 34・27431)「今正對、邏前小近下、復有一穴」。

- (1083) 行道在於丹田 『玄都律文』虛无善惡律 (D 78, S 5・3563)

「律曰、凡此十三者、混沌爲虛无、行道守眞者、敬奉師法、順天教令、窮極无爲之道……」。『眞誥』卷六「甄命授」第二 (D 638, S 34・27382)「念行道信道、遂得信根、其福無量也」。

『抱朴子』地眞「一有姓字服色、男長九分、女長六分、或在臍下二寸四分下丹田中、或在心下絳宮金闕中丹田也、或在人兩眉間、却行一寸爲明堂、二寸爲洞房、三寸爲上丹田也」。

- (1084) 度厄延年 玄光「辯惑論」『弘明集』卷八、(T 52・49a)「至於使六甲神而跪拜清醕」、注「如郭景純亦云、仙流登清度厄、竟不免災」。「延年」の語は、注(525)を見よ。

- (1085) 易婦 この語の使用例未見。

- (1086) 父兄 『孟子』梁惠王上「入以事其父兄、出以事其長上」。

- (1087) 羞恥 『顏氏家訓』治家「近世嫁娶、遂有賣女納財、買婦輸絹、比量父祖、計較錙銖、責多還少、市井無異、或猥墮在門、或傲婦擅室、貪榮求利、反招羞恥、可不慎歟」。

- (1088) 求道 注(757)を見よ。

- (1089) 諸子爲道書 「目次」では「諸子道書」。「諸子」の語は、『漢書』卷三〇藝文志「諸子十家、其可觀者九家而已、皆起於王道既微、諸侯力政、時君世主、好惡殊方、是以九家之術讞出並作」。「道書」の語は、『抱朴子』金丹「合此金液九丹、既當用錢、又宜入名山絕人事、故能爲之者少、且亦千萬人中時當有一人得其經者、故謂作道書者、略無說金丹者也」。

なお、本章も『辯正論』卷八「出道僞謬篇」諸子爲道書謬 (T 52・546b~547a) 2より詳細な引用がある。

「檢玄都觀經自稱、道家傳記符圖論等、總有六千三百六十三卷、其二千四十卷見有本、計須紙四萬五十四張、其一千一百五十六卷、是道經傳及符圖、其八百八十四卷、是諸子論等、其四千三百二十三卷、披檢道士陸修靜答宋明帝所上目錄、其目及本、今並未見、

養生經一部十卷彭祖撰 神仙傳一部十卷抱朴子撰 列仙傳一部十卷葛洪撰
劉向撰 夷夏論一部五卷道士顧歡撰 莊子一部十七卷莊周所出、葛洪撰 抱朴子一部二十卷葛洪撰 廣成子一部四卷商洛公撰 尹文子一部二卷劉歆撰 淮南子一部二十卷漢淮南王撰 文子一部十一卷文陽所撰 列子一部八卷列寇所撰 抱朴子服食方一部四卷葛洪撰 崔文子經一部七卷崔文子撰 鬼谷子經一部十三卷鬼谷先生撰 服食禁忌經一部五卷 黃帝龍首經一部五卷玄女皇人等說 治練五石一部八卷 怪異志一部十二卷 興利宅舍法一部五卷 治病經一卷 說陰陽經一卷 日月明鏡經一卷 太玄鏡經一卷 案摩經一卷 崔文子肘後經一卷 陶朱變化術經一卷陶朱公撰 彭祖記經一卷 養性經一卷彭祖等難出 定心經一卷 鬼谷先生變化類經一卷 師曠爲西宮子授藥經一卷 九宮著龜序經一卷 導引圖一部一卷 河圖文一部九卷何承天撰 芝草圖經一卷 芝草圖六卷 鄒陽子經一卷 江都王思聖一部二卷 道德玄義三十三卷孟智周撰 必然論一卷 榮隱論一卷 遂通論一卷 歸根論一卷 明法論一卷 自然因緣論一卷 五符論一卷 三門論一卷 右八論陸修靜撰

道士所上經目皆云、依宋人陸修靜所列、檢修靜目中、見有經書藥方符圖等、合有一千二百二十八卷、本無雜書諸子之名、而道

士今列乃有二十四卷、其中多取漢書藝文志目、妄注八百八十四卷爲道經論、據如此狀、理有可怪、何者、指如韓子孟子淮南之徒、並言道事、又復八老黃白之方、陶朱變化之術、翻天倒地之符、辟兵殺鬼之法、及藥方呪厭、並得爲道書者、其連山歸藏周林太玄黃帝金匱太公陰符陰陽書五姓宅圖七十二葬書等、亦得爲道書乎、案修靜目中、並無前色、今輒集之、彼將何據、笑道論云、妄注諸子三百五十卷爲道經也、若有依據、何以前後注列不同乎、且人之有惡、恐人知之、己若有善、慮人不見、所以道士自書云、不受道戒者、不得轉讀道經、即如此狀、道有何醜、慮人知乎、若道士所注、以諸子爲道書者、民中諸子、悉須追入已不、案陶朱者、即是范蠡也、范蠡親事越王勾踐、君臣悉囚於吳堂、食屎飲尿、亦以甚矣、又復范蠡之子、被戮於齊、父既有變化之術、何以不能變化免之、案造立天地記稱、老子託生幽王皇后腹中、即是幽王之子、又身爲柱史、復是幽王之臣、化胡經言、老子在漢爲東方朔、若審爾者、知幽王爲犬戎所殺、豈可不愛君父與神符、令君父不死耶、又漢武窮兵、疲弊中國、天下戶口、至減太半、老子何忍不與其符、令用辟兵、以此驗之、呪厭之方、何其謬歟、何其謬歟、玄都館經目錄云、道經記符圖論、凡六千三百六十三卷、二千四十卷、已有本見行、其四千三百二十三卷、指陸修靜目錄、既無正本、何謬之甚也、然修靜爲目、已是大僞、今玄都錄復是僞中之僞」。

(1090) 玄都經目 本論三十一「道經未出言出」章に、「玄都道士所上經目」というもの。

(1091) 傳記 『漢書』卷三六劉向傳「采傳記行事、著新序說苑凡五十篇奏之」。

(1092) 符圖 『黃庭內景玉景註』卷下「仙人掌」第二十八 (D190, S11・8234)「火兵符圖備靈關」、梁丘子注「符者、八素・六神・陽精・玉胎・鍊仙・陰精・飛景・黃華・中景・內化・洞神・鑒乾等諸符也、圖謂太一混合三五圖・六甲上下陰陽圖・六甲玉女通靈圖・太一真人圖・東井沐浴圖・老子內視圖・西昇八史圖・九變合景圖・赤界等諸圖」。梁武帝「捨事李老道法詔」序(『廣弘明集』卷四、T52・1123)「舊事老子、宗尚符圖、窮討根源、有同妄作」。

(1093) 陸修靜錄 やはり「道經未出言出」章に、「宋人陸修靜所撰」というもの。その注(964)を見よ。

(1094) 道士所上經目……『法苑珠林』卷五五「破邪篇」妄傳邪教(T53・704b)にもいう。「又案宋太始七年道士陸修靜答明帝云、道家經書并藥方符圖等、總一千二百二十八卷、云一千九百卷已行於世、一百三十八卷、猶在天宮、案今玄都經目云、依宋人陸修靜所上目、今乃言有六千三百六十三卷、云二千四十卷見有其本、四千三百二十三卷、云並未見」。

(1095) 藥方 『後漢書』志二六百官志三「藥丞方丞各一人、本注曰、藥丞主藥、方丞主藥方」。

(1096) 雜書 『抱朴子』遐覽「鄭君……語余曰、雜道書卷卷有佳事、但當校其精粗、而擇所施行」。『眞誥』卷一九「翼眞檢」第一(D640, S34・27504)「許丞……語(馬)朗云、此經並是先靈

之迹、唯須我自來取、縱有書信、慎勿與之、乃分持經傳及雜書十數卷自隨」。

(1097) 取漢藝文志目……『法苑珠林』卷五五「破邪篇」妄傳邪教(T53・703b)に「笑道論」を引用している。「又甄鸞笑道論云、道家妄注諸子三百五十卷爲道經、又驗玄都目錄、妄取藝文志書名、矯注八百八十四卷爲道經」。

(1098) 經論 注(934)を見よ。

(1099) 八老黃白之方 「八老」は淮南八公。『抱朴子』仙藥「昔仙人八公、各服一物、以得陸仙、各數百年、乃合神丹金液而昇太清耳」。『搜神記』(二十卷本)卷一「淮南王安好道術、設廚宰以候賓客、正月上旬、有八老公詣門求見、門吏白王、王使吏自以意難之、曰、吾王好長生、先生無駐衰之術、未敢以聞、公知不見、乃更形爲八童子、色如桃花、王便見之、盛禮設樂、以享八公」。『風俗通』正失「俗說、淮南王安招致賓客方術之士數千人、作鴻寶苑祕枕中之書、鑄成黃白、白日升天」。『抱朴子』黃白「神仙經黃白之方二十五卷、千有餘首、黃者金也、白者銀也」。また同遐覽篇の道經リストに「八公黃白經」あり。

(1100) 陶朱變化之術 注(1089)に引いた『辯正論』の道經リストに、「陶朱變化術經一卷、陶朱公撰」とあり、「變化之術」の語は、『抱朴子』遐覽「其變化之術、大者唯有墨子五行記、本有五卷、昔劉君安未仙去時、鈔取其要、以爲一卷、其法用藥用符、乃能令人飛行上下、隱淪無方、含笑即爲婦人、蹙面即爲老翁、踞地即爲小兒、執杖即成林木、種物即生瓜果可食、畫地爲河、撮壤

成山、坐致行廚、與雲起火、無所不作也」。

- (1101) 翻天倒地 『太上玄一真人說三途五苦勸戒經』(D202, S11. 8297)「不顧宿命所行元惡、翻天倒地、無所不作」。

- (1102) 辟兵煞鬼 『漢書』卷三〇藝文志兵書略陰陽「辟兵威勝方七十篇」。「抱朴子」徵旨「是以斷穀辟兵、厭劾鬼魅、禁禦百毒、治救衆疾、……此皆小事、而不可不知」。同題覽「又家有五岳眞形圖、能辟兵凶逆、人欲害之者、皆還反受其殃」。『太上洞淵神呪經』卷11 (D170, S10・7503)「道言、甲申垂至、洪水不久、今有疫鬼殺人、世間多惡少善、……我今遣八部禁兵、祛殺疫鬼、遣令斥去、道士化人、令奉三洞矣」。

(1103) 呪厭 後文に「厭人呪鬼之方」とあり、『廣弘明集』卷五辯惑篇序 (T52・117c) に「黃書度命、赤章厭祝、斯言孟浪、無足可稱」とある。

- (1104) 引來 この語の使用例未見。

- (1105) 連山、歸藏 『周禮』春官大卜「掌三易之灋、一曰連山、二曰歸藏、三曰周易」、鄭玄注「易者、揲著變易之數可占者也、名曰連山、似山出内氣也、歸藏者、萬物莫不歸而藏於其中、杜子春云、連山、宓戲、歸藏黃帝」。また、『隋書』卷三二經籍志經部易類に「歸藏十三卷、晉太尉參軍薛貞註」を著録し、その小序にいう。「及乎三代、實爲三易、夏曰連山、殷曰歸藏、周文王作卦辭、謂之周易、……歸藏漢初已亡、案晉中經有之、唯載卜筮、不似聖人之旨」。

- (1106) 易林 『隋書』經籍志子部五行類に、「易林十六卷、焦贛撰」、

「易林變占十六卷、焦贛撰」、「易林二卷、費直撰」等を著録。

- (1107) 太玄 『漢書』卷三〇藝文志諸子略儒家に、「揚雄所序三十八篇、太玄十九、法言十三、樂四、箴二」を著録。

- (1108) 黃帝金匱 『漢書』卷三〇藝文志方技略醫經に「黃帝內經十八卷」を、『隋書』卷三四經籍志子部醫方に「金匱錄二十三卷、目一卷、京里先生撰」を著録するが、下の「太公六韜」とにらみあわせれば、一書の名とるのがよいであろう。

- (1109) 太公六韜 『隋書』卷三四經籍志子部兵に、「太公六韜五卷、梁六卷、周文王師姜望撰」を著録。

- (1110) 剩安 この語の使用例未見。

- (1111) 人之有惡、惟恐人知…… 『三國志』卷二七魏志胡質傳注「晉陽秋」につぎのようにあるのを参照。「帝歎其父清、謂(胡)威曰、卿清孰與父清、威對曰、臣不如也、師曰、以何爲不如、對曰、臣父清恐人知、臣清恐人不知、是臣不如者遠也」。

- (1112) 道士自書云…… たとえば『太上老君戒經』(D562, S30・24218) につきのようにあるのを参照。「老君曰、若復男子女人、受正戒已、進求經法」。

- (1113) 道戒 『抱朴子』微旨「……然覽諸道戒、無不云欲求長生者」。

- (1114) 人中 『晉書』卷九四隱逸宋纖傳「酒泉太守馬岌……造焉、織高樓重閣、距而不見、岌歎曰、名可聞而身不可見、德可仰而形不可觀、吾而今而後知先生人中之龍也」。

- (1115) 追取 『三國志』卷一四魏志蔣濟傳「……於是帝意解、遣追

取前詔。『文心雕龍』宗經「至根柢槃深、枝葉峻茂、辭約而旨豐、事近而喻遠、是以往者雖舊、餘味日新、後進追取而非晚、前修文用而未先、可謂太山徧雨、河潤千里者也。」

(116) 流例 使用例としては時代がくだるが、駱賓王「代女道士王靈妃贈道士李榮」に「別有衆中稱黜帝、天上人間少流例。」

(117) 老子黃子 未詳作者「漢顯宗開佛法本傳」(『廣弘明集』卷一、T.52・93a)「南岳道士褚善信……等、各齋靈寶真文太上玉訣三元符錄等五百九卷、置於西壇、茅成子許成子黃子老子等二十七家、子書二百三十五卷、置於中壇、饌食莫祀百神、置於東壇。」吳主孫權論敍佛道三宗(同上、T.52・100a)「至漢景帝以黃子老子、義體尤深、改子爲經、始立道學、敕令朝野悉誦誦之。」

(118) 儒流七經 『漢書』卷三〇藝文志「儒家者流、蓋出於司徒之官、助人君順陰陽明教化者也。」「謝承書」(『後漢書』傳一七趙典傳注)「典學孔子七經、河圖洛書、內外藝術、靡不貫綜、受業者百有餘人。」「後漢書」傳二五張純傳「純以聖王之建辟雍、所以崇尊禮義、既富而教者也、乃案七經・讖・明堂圖・河間古辟雍記・孝武太山明堂制度及平帝時議、欲具奏之、李賢注「七經・謂詩書禮樂易春秋及論語也。」

(119) 班固先六經後二篇 班固の『漢書』藝文志は六藝略をまずさいしょに置き、つづく諸子略道家に『老子』を著録する。「二篇」の語は、葛玄「老子道德經序」「關令尹喜曰、大道將隱乎、願爲我著書、於是作道德二篇五千文上下經焉。」

(120) 序道爲中上賢類 『漢書』古今人表において老子は中上に序せられている。九等の序列のうち上上は聖人、上中は仁人、上下は智人、下下は愚人。從つて中上から下中までは賢人ということになる。

(121) 實錄 『漢書』卷六二司馬遷傳贊「然自劉向揚雄、博極群書、皆稱遷有良史之才、服其善序事理、辨而不華、質而不俚、其文直、其事核、不虛美、不隱惡、故謂之實錄。」注「應劭曰、言其錄事實。」「宋書」卷九三隱逸陶潛傳「嘗著五柳先生傳以自況、曰……、其自序如此、時人謂之實錄。」

(122) 陶朱者卽范蠡也…… 『史記』卷四一越王勾踐世家「范蠡浮海出齊、變姓名、自謂鴟夷子皮、……聞行以去、止于陶、以爲此天下之中、交易有無之路通、爲生可以致富矣、於是自謂陶朱公」。この話は『吳越春秋』卷七勾踐入臣外傳につきのごとく見える。「越王勾踐五年五月、與大夫種范蠡入臣於吳、……吳王知范蠡謂不可得爲臣、謂曰、子既不移其志、吾復置子於石室之中、范蠡曰、臣請如命、吳王起入宮中、越王范蠡趨入石室、……後一月越王坐石室、召范蠡曰、吳王疾、三月不愈、吾聞人臣之道、主疾臣憂、且吳王遇孤、恩甚厚矣、疾之無瘳、惟公卜焉、范蠡曰、吳王不死明矣、到己巳日當瘳、惟大王留意、越王曰、孤所以窮而不死者、賴公之策耳、中復猶豫、豈孤之志哉、可與不可、惟公圖之、范蠡曰、臣竊見吳王、眞非人也、數言成湯之義、而不行之、願大王請求問疾、得見、因求其養而嘗之、觀其顏色、當拜賀焉、言其不死以瘳、起日期之、既言信後、則大王

何憂、越王明日謂太宰嚭曰、囚臣欲一見問疾、太宰嚭即入言於吳王、王召而見之、適遇吳王之便、太宰嚭奉洩惡以出、逢戶中、越王因拜請嘗大王之洩、以決吉凶、即以手取其便與惡而嘗之、因入曰、下囚臣勾踐、賀於大王、王之疾、至己巳日有瘳、至三月壬申病愈、吳王曰、何以知之、越王曰、下臣嘗事師、聞羹者順穀味、逆時氣者死、順時氣者生、今者臣竊嘗大王之羹、其惡味苦且楚酸、是味也、應春夏之氣、臣以是知之、吳王大悅曰、仁人也、乃赦越王、得離其石室去、就其宮室、執牧養之事如故……」。

(1123) 嘗屎飲尿 『太平經』卷一一七(王明『太平經合校』六五五頁)「開耳精聰、爲子詳陳道大瑕病所起、使天下後學者、令昭然知其失道也、……第三曰食糞飲其小便」。

(1124) 尊崇 注(157)を見よ。

(1125) 蠡子被戮於齊 『史記』卷四一越王勾踐世家「朱公中男殺人囚於楚、……(楚王)令論殺朱公子、明日遂下赦令、朱公長男竟持其弟喪歸至」。「齊」とあるのは「楚」の誤りであろう。

(1126) 自免 顏延之「陶徵士誄」(『文選』卷五七)「長卿棄官、稚賓自免」。

(1127) 造天地經…… 本論一「造立天地」章につぎのようにあるのを参照。「太上道君造立天地初記稱、老子以周幽王德衰、欲西度關、與尹喜期三年後於長安市青羊肝中相見、老子乃生皇后腹中……」。

(1128) 柱史 注(127)を見よ。

(1129) 化胡云…… 未詳。『風俗通』正失につぎのようにあるのを参照。「俗言、東方朔太白星精、黃帝時爲風后、堯時爲務成子、周時爲老聃、在越爲范蠡、在齊爲鴟夷子皮」。

(1130) 審爾 『眞誥』卷一二「稽神樞」第二(D 639, S 34.27441)「我聞易遷中人竇氏言云、北河司命禁保侯、似有所擬、想當審爾」。

(1131) 幽王爲犬戎所煞 『史記』卷四周年本紀「……申侯怒、與緡西夷犬戎攻幽王、幽王舉烽火徵兵、兵莫至、遂殺幽王驪山下」。

(1132) 君父 『左傳』僖公二十三年「晉人伐諸蒲城、蒲城人欲戰、重耳不可、曰、保君父之命、而享其生祿、於是乎得人、有人而校、罪莫大焉、吾其奔也、遂出奔狄」。

(1133) 神符 「抱朴子」極言「若不曉帶神符、行禁戒、思身神、守眞一、則正可令內疾不起、風濕不犯耳、若卒有惡鬼邪山精水毒害之、則便死也」。

(1134) 漢武窮兵、疲役中國 荀悅『漢紀』(『藝文類聚』卷一二帝王部漢武帝)「奢侈無限、窮兵極武、百姓空竭、萬民罷弊」。「莊子」齊物論「終身役役而不見其成功、繭然疲役而不知其所歸」。

(1135) 天下戶口、至減太半 『漢書』卷七昭帝紀贊「承孝武奢侈餘敵師旅之後、海內虛耗、戶口減半」。「史記」卷七項羽本紀「張良陳平說曰、漢有天下太半、而諸侯皆附之……」、集解「韋昭曰、凡數三分有二爲太半、一爲少半」。

(1136) 辟穀 『史記』卷五五留侯世家「留侯性多病、卽道引不食穀」、集解「漢書音義曰、服辟穀之藥、而靜居行氣」。牟子「理

惑論」『弘明集』卷一、(T 52・1b)「是時靈帝崩後、天下擾亂、獨交州差安、北方異人、咸來在焉、多爲神仙辟穀長生之術、時人多有學者」。

- (1137) 厭人呪鬼 道安「二教論」服法非老第九(『廣弘明集』卷八、T 52・141a)「敬尋道家、厭品有三、一者老子無爲、二者神仙餌服、三者符錄禁厭、就其章式、大有精竊、竊者厭人殺鬼、精者練屍延壽」。「呪鬼」の語は、注(316)を見よ。

- (1138) 護漢國 『漢書』卷一一哀帝紀建平二年「詔曰、漢興二百載、曆數改元、皇天降非材之佑、漢國再獲受命之符……」。「彌勒菩薩所問本願經」(T 12・188a~b)「佛語阿難、菩薩以四事不取正覺、何等爲四、一者淨國土、二者護國土、三者淨一切、四者護一切」。

- (1139) 眼看流弊 『北齊書』卷二四杜弼傳「高祖罵之曰、眼看人瞋、乃復牽經引禮、叱令出去」。明槩「決對傳突廢佛法僧事」(『廣弘明集』卷一一、T 52・170c)「自有帝王喜捨、靈神影助、滅度之後、爲興塔廟、舍利不滅、威靈尚存、毀之立見惡徵、破之眼、看致禍」。『三國志』卷一六魏志杜畿傳「今之學者、師商韓而上法術、競以儒家爲迂闊、不周世用、此最風俗之流弊、創業者之所致慎也」。『晉書』卷七成帝紀論「帝亦克儉于躬、庶能激揚流弊者也」。

- (1140) 无心取救 『抱朴子』行品「既無心於修尚、又怠惰於家業者、懶人也」。「取救」の語の使用例は未見。

- (1141) 欺誑 『尚書』無逸「民無或胥壽張爲幻」、孔傳「譎張、誑也、君臣以道相正、故下民無有相欺誑幻惑也」。

- (1142) 統收 この語の使用例未見。

- (1143) 覈論 『後漢書』傳五八許劭傳「初劭與(從兄)靖俱有高名、好共覈論鄉黨人物、每月輒更其品題、故汝南俗有月旦評焉」。

- (1144) 虛指 注(960)を見よ。

- (1145) 鉛墨 江總「陶貞白先生集序」(『藝文類聚』卷五五雜文部集序)「奉敕校之鉛墨、緘以緹綱、藏彼鴻都、副在延閣」。

- (1146) 經本 慧叡「噉疑」(『出三藏記集』卷五、T 55・42a)「有慧祐道人、私以正本雇人寫之、客書之家、忽然火起、三十餘家、一時蕩然、寫經人於灰火之中、求銅鐵器物、忽見所寫經本、在火不燒」。『眞誥』卷二〇「翼眞檢」第二注(D 640, S 34・27506)「章(靈民)云、于時又有曲素金眞含華等數卷、魚爛穿壞、既未悟其眞手、不知掄錄、惟寫取文字而已、經本悉埋藏之也」。

- (1147) 自餘 注(415)を見よ。

- (1148) 孟浪紛綸 「孟浪」の語は、注(108)を見よ。「紛綸」の語は、司馬相如「封禪文」(『文選』卷四八)「紛綸威蕤、湮滅而不稱者、不可勝數」、李善注「張揖曰、紛綸、亂貌」。

廣弘明集卷第八 第三張 庚

得志於朝廷也。列辟莫敢致言。便以太平真君七年三月下詔。一切蕩除。所有圖像。胡經皆擊破焚毀。沙門無少長。志坑之斯。並崔浩之意致也。及後帝遭癘。浩被族誅。呼嗟長慨。無所及矣。事迹如前。釋老志廣之。

周滅佛法集道俗議事

周高祖猜忌為心。安忍嫌隙。沙門大家宰晉國公護。權衡百揆。決通庶政。帝竊嫉之。恐有陵奪。召護入內。親自誅之。并大目六家。並從族滅。帝以得志於

(1)

天下。一無所慮也。然信任讖緯。偏以為心。自古相傳。黑者得也。謂有黑相。當得天下。猶如漢末訛言。黃衣當王。以黃代赤。承運之像。言黑亦然。所以周太祖挾魏西奔。衣物旗幟。並變為黑。用期訛識之言。斯亦漢光武之餘命也。昔者高洋之開齊運。流俗亦有此謠。洋言黑者稠禪師。黑衣天子也。將欲誅之。會稠遠識。悟而得免。倘如別說。故周祖初重佛法。下札沙門。並著黃衣。為禁黑故。有道士張賓。謫詐罔上。私達其黨。以黑釋為國忌。以黃老

(2)

為國祥。帝納其言。信道輕佛。親受符錄。躬服衣冠。有前僧衛元嵩。與賓屑齒相扇。感動帝情。云僧多怠惰。貪逐財食。不足欽尚。帝召百僧入內。七宵行道。時既密知。各加懇到。帝亦同僧寢處。覘候得失。或為僧讀誦。或讚唄禮悔。僧皆慄厲。莫不訝帝之微行也。既期已滿。無何而止。至天和四年。歲在己丑。二月十五日。勅召有德衆僧。名儒道士。文武百官二千餘人。帝御正殿。量述三教。以儒教為先。佛教為後。道教最

(3)

上。以出於無名之前。起於天地之表。故也。時議者紛紜。情見乖各。不定而散。至其月二十日。依前集論。是非更廣。莫簡帝心。帝曰。儒教道教。此國常導。佛教後來。朕意不立。愈議如何。時議者陳理。無由除削。帝曰。三教被俗。義不可俱。至四月初。更依前集。必須極言陳理。無得面從。又勅司隸大夫甄鸞。詳度佛道二教。定其深淺。辯其真偽。天和五年。鸞乃上笑道論三卷。用笑三洞之名。至五月十日。帝大集羣臣。詳鸞上論。以為傷臺道法。

(4)

唐書卷第八十五
帝躬受之。不恆本圖。即於殿庭焚蕩。
時道安法師又上二教論。云。內教外
教也。練心之術名三乘。內教也。教形
之術名九流。外教也。道無別教。即在
儒流。斯乃易之謙謙也。帝覽論。以問
朝宰。無有抗者。於是遂寢。乃經五載。
至建德三年。歲在甲午。五月十七日。
初斷佛道兩教。沙門道士。並令還俗。
三寶福財。散給臣下。寺觀塔廟。賜給
王公。餘如別述。于時衛王不忍其事。
直入宮。燒軋化門。攻帝不下。退至虎

室千

(5)

牢。捉從入京。父子十二人。并同謀者。
並誅。二教論 沙門釋道安
歸宗顯本第一
儒道昇降第二
君為教主第三
詰驗形神第四
仙異涅槃第五
道仙優劣第六
孔老非佛第七
釋異道流第八
服法非老第九
明典真偽第十

(6)

唐和明集卷第九

典

大唐西明寺沙門釋道宣撰

辯惑篇第二之五

笑道論其文腐拙取可笑者

目竄為啓奉

勅令詳佛道二教定其

先後淺深同異。目不揆踈短。謹具錄以聞。目竊以佛之與道。教迹不同。出沒隱顯。變通亦異。幽微妙密。未易詳度。且一往相對。佛者以因緣為宗。道以自然為義。自然者。無為而成。因緣者。積行乃證。守本則事靜而理均。違宗則意悖而教偽。理均則始終若一。

(7)

教偽則无所不為。案老子五千文。辯義俱偉。諒可貴已。立身治國。君民之道。富焉。所以道有符書。厭詛之方。佛業恠力背哀之術。彼此相形。致使世人疑其邪正。此豈大道自然。虛寂無為之意哉。將以後人背本。妄生穿鑿。故也。又道家方術。以昇仙為神。因而誑惑。偷潤目下。昔徐福欺妄。分國於夷丹。文成五利。嬖偽於漢世。三張詭惑。於西梁。孫恩搔擾於東越。此之巨蠹。自

(8)

古稱諛以之。主政政多邪僻以之導。唐和明集卷第九 第二張曲
民多詭惑。驗其書曲。卷卷自違。論其理義。首尾无取。昔行父之為人。也。見有禮於其君者。詔之如孝子之養父母。見无禮於其君者。惡之如鷹鷂之逐鳥雀。宣尼云。君子之事上也。進思盡忠。退思補過。將順其美。匡救其惡。故上下能相親也。春秋傳曰。君所謂可而有否焉。臣獻其可。以去其否。曰亦何人。奉勅降問。敢不實答。其道德二卷。可為儒林之宗。所疑紕繆。

(9)

者。去其兩端。請量刪定。案五千文曰。上士聞道。勤而行之。中士聞道。若存若亡。下士聞道。大笑之。不笑不名為道。目輒率下士之見。為笑道論三卷。合三十六條。三卷者。笑其三洞之名。三十六條者。笑其經有三十六部。戰汗上呈。心魂失守。謹啓。

大周天和五年二月十五日。前司隸母極縣開國伯日甄鸞啓。
笑道論卷上

造立天地一年号癸亥二
元為天人三結士為人

(10)

笑道論卷中

廣弘明錄卷第九 第三張典
五佛並出五 五練生尸六
觀音侍老七 佛西法陰八

日徑不同九

崐崙飛浮十

法道玄官十一

稱南无佛十二

鳥跡前文十三

張騫取經十四

日月普集十五

太上尊貴十六

五穀命鑿十七

老子作佛十八

勅使瞿曇十九

事邪求道二十

邪炁乱政二十一

誠木枯死二十二

笑道論卷下

(11)

道立天地一

北方礼始二十三 宮親求道二十四
延主平符三十五 椿與劫齋三十六
隨劫生死二十七 服丹金色二十八
改佛為道二十九 偷佛回果三十
道經未出言出三 五億重天三十二
出入威儀三十三 道士奉佛三十四
道士合炁三十五 諸子道書三十六
一。太上道君造立天地初記稱。老子
以周幽王德衰。欲西度關。與尹喜期
三年後於長安市青羊肝中相見。老
子乃生皇后腹中。至期。喜見有青氣。

(12)

廣弘明集卷第九卷四張典

半肝者。因訪見老子從母懷中起頭。
鬚皓首。身長丈六。戴天冠。捉金杖。將
尹喜化胡。隱首陽山。紫雲覆之。胡王
疑娥。鑊煮而不熟。老君大瞋。考煞胡
王七子及國人一分。並死。王方伏。令
國人受化。髡頭不妻。受二百五十戒。
作吾形。香火禮拜。老子遂變形。左目
為日。右目為月。頭為崑崙山。髮為星宿。
骨為龍肉。為豺。腸為地。腹為海。指為
五岳。毛為草木。心為華蓋。乃至兩腎
合為真要父母。

(13)

日竊為笑曰。漢書云。長安本名咸陽。漢
祖定天下。將都雒邑。因婁詒之諫。乃
歎曰。朕當長安於此。因尔名之。周幽
未有。何得老子預知長安。與尹喜期乎。
又案三天正法混茫經六。混茫之始。
清氣為天。濁氣為地。便有七曜万像
之形。其來久矣。豈有化胡之後。老子
方變為日月山川之類乎。若尔者。
是則幽王之前。天地未生万物。云何
道經有三皇五帝三王乎。然則天地
起自幽王矣。又造天地記云。崑崙
山高四千八百里。上有玉京山大羅

(14)

廣明集卷第九第五張曲
山各高四千八百里。三山合則高一萬四千四百里。又廣說品云。天地相去万万五千里。計紫微宮在五億重天之上。是則高於崑崙山數百万里。而老君以心為華蓋。肝為青帝宮。脾為紫微宮。頭為崑崙山。不知老君何罪。倒豎於地。頭在下。肝在上。以顛倒故。見亦倒乎。以長安為度關之年。幽王為開闢之歲。將以化物。詐可承平。二年号美殂者。道德經序云。老子以上皇九年丁卯。下為周師。无極九年

(15)

笑曰。去周度關。笑曰。古光帝王。五年无号。至漢武帝。創起建元。後王國之。遂至今日。上皇孟浪。可笑之深。又文始傳云。老子從三皇已來。代為國師。化胡又云。湯時為錫壽子。周初郭射子。既為國師。應傳典籍。何為不述。但列伊尹傳說。呂望康邵之人乎。而傳說者。惟注老子為柱下史。道家注為周師。便是俗官。如何史傳不說。又上皇七年。歲在丁卯。計姬王一代。七百餘年。未聞上皇之号。檢諸史傳。皆云。老子以景王時度關。曾哀十六

(16)

廣弘明集卷第九 第六張 雲
孔丘卒。即周懿王時。懿王即景王之
子。景王即幽王之後。一十餘世。此則
孔老同時。而化胡經乃云。幽王之曰
度關。不聞更返。何得與孔子相見乎。
化胡又云。為周柱史七百年。計周初
至幽王止。有三百餘年。何得妄作。然
上皇之年。道門說。故靈寶云。我於
上皇元年。年劫度人。其時人壽。萬八
千歲。如何超取。年劫前。將來近世
用乎。一何可笑。且上皇無極。並是無
識。穿鑿作者。欲神其術。仍以年。加

(17)

曰。異有信者從之。
又云。代為國師。葛洪神仙序中。具說
已。恠。尋聖人既出。匡救為先。而夏桀
陵虐。塗炭生民。成湯武丁。思賢若渴。
老子何以賢君不輔。虐政不師。修身
養性。自守而已。期頤將及。自知死至。
潛行西度。獨為尹說。直令讀誦。不勸
授人。身死關中。墳廬見在。秦供帛之。
三。辨而出。究前傳經。後人妄論。雖曰
尊崇。翻成辱道。
三。元為天人者。太上三。元品。太。上。元。一。
品。天宮。元。炁。始。凝。三。光。開。明。青。黃。之。

(18)

廣明集卷第九 第七張 典
炁。置上炁三宮。第一宮名玄都。元陽
七寶紫微宮。則有青炁始陽之氣。惣
主上真自然玉宮靈寶上皇諸天帝
王上聖大神。其宮皆五億五千萬五
百五十五億萬重青陽之炁。其中
神仙官僚人衆。各有五億五萬乃至
如上一萬重。皆結自然青炁之炁。而為
人也。其九宮重數。官僚人衆。皆同紫
微。目笑曰。三天正法經云。天光未朗。
蔚積未澄。七千餘劫。玄景始分。九炁
存焉。一炁相去九萬九千九百九十里。

(19)

青炁高澄。濁混下降。而九天真主元
始天王。生於九炁之中。炁結而形焉。
便有九真之帝。皆九天清炁。凝成九
宇之位。三炁夫人。從炁而生。在洞房
宮。善炁三千而侍。以天為父。以炁
為母。生於三炁之君。又衆靈寶罪根
品六。太上道君。礼元始天尊。問十善
等法。於是天尊命召神仙。各說因緣。
恒沙得道。已成如來。其未成者。亦如
恒沙。又元始傳云。天堂對地獄。善
者昇天。惡者入地。若以此說。理則不
然。付者。元始天王及太上道君。諸天

(20)

神人皆結自然清炁之炁而化為之。廣明集卷第九第八張典
本非修戒而成者也。彼本不因持戒
而成者。何得令我獨行善法而望得
之乎。

又案度人本行經云。太上道君言。我
元量劫度人無數。元始天尊以我因
緣之勲。賜我太上之号。推此有疑。如
有元生成品云。空為万物母。道為万
物父。此則先有於道。乃有衆生。然此
為道之父。非衆生所作。道既如此。衆
生何用脩善而作乎。又道生万物。生

(21)

物之初。是時無物。我始始生。未有清炁。
何得有大道。四生皆樂之。別乎。天下
可也。又云。衆生神識。本来自有。非道
生者。道既能生万物。神識豈非物乎。
又不可也。

四結土為人者。三天正法經云。九炁
既分。九真天王乃至三元夫人三元之
君。太上道君於是而形。逮至皇帝。始
立生民。結土為像於曠野。三年能言。
各在一方。故有脩素夷菴。五情合德。
五法自然。承上真之炁。而得為人。也。
目笑曰。三元品。善惡業對。皆由一身。

(22)

廣弘明集卷第九 第九張 典
又元始傳云。若姦盜不孝。死入地獄。受五苦八難。後生六畜邊夷之中。推此而言。乖違太甚。且皇帝土像之日。經于三年。上真悉入。乃能言語。此上清之炁。與太上同源。論先未有惡善。何為入土像中。即墮八難為蠻夷乎。此土為像。先亦无因。云何造作之後。乃有中邊之別乎。又上真之炁。為癡為黠。若其癡也。不應入土能言。如其黠也。應識五苦八難。如何不樂善樂而貪為苦難乎。推此諸條。可笑之。

(23)

深也。
五明五佛並興者。元始傳云。老子以
上皇九年。下為周師。无極元年。乘青
牛薄板車。度關。為尹喜說五千文。曰。
吾遊天地之間。汝未得道。不可相隨。
當誦五千文万遍。耳當洞聰。目當洞
視。身能飛行。六通四達。期於成道。喜
依言獲之。既訪相見。至劉賓檀特山
中。乃至王以水火燒沈。老子乃坐蓮
花中。誦經如故。王求哀悔過。老子推
尹喜為師。語王曰。吾師号佛。佛事无
上道。王從受化。男女昆弟。不娶妻。受

(24)

廣和明集卷第九第十張 與 蓋
无上道承佛威神。委尹喜為劉賓。國
佛。号明光偏童。目笑曰。廣說品云。
始老國王聞天尊說法。與妻子俱得
須陀洹果。清和國王聞之。與群目造
天尊所。皆白曰。昇天。王為梵王。号
玄中法師。其妻隨法同飛。為妙梵天
王。後生劉賓。号憤隨力王。然害无道。
玄中法師須化度之。化生季氏之胎。
八十二年。剖左腋。生而白首。經三月。
乘白鹿。與尹喜西遊。應檀持。五年。憤
隨至。見便燒沉。老子不死。王伏。便

(25)

剃髮改衣。姓釋名法。号沙門。成果為
釋迦牟尼佛。至漢世。法流東秦。又文
始傳。老子化胡。推尹喜為師而化胡。
消冰經云。尹喜推老子為師也。文始
傳云。吾師号佛。佛事无上道。又云。
无上道承佛威神。委尹喜為佛。推此
衆途。師弟亂矣。何名教之存乎。又
化胡消冰經皆言。老子化劉賓。身自
為佛。廣說品。憤隨力王。老之妻也。得
道。号釋迦牟尼佛。即秦漢所流者。玄
妙篇云。老子入關。至天竺維衛國。於
夫人清妙口中。至後年四月八日。剖

(26)

左腋而生。舉手曰。天上天下。惟我為尊。三界皆苦。何可樂者。尋芻蕘一國。乃有五佛俱出。一是尹喜。号儒童者。二是老子。化芻蕘者。三老子之妻。憤。隋王。号釋迦者。四老子。在維衛作佛。亦号釋迦。五白淨王子。悉達。作佛。復号釋迦。案文始傳云。五百年一賢。千年一聖。今五佛並出。不覺煩乎。若言聖人能分身化物。說經亦必多方。何為老化則多。經惟二卷不變。至於儒童尹喜。憤。隋王。无聞於今。但是白

(27)

淨王子所說。以此推之。老喜為佛。盛妄可曝。且老經秘說。不許人聞。爾後相番。誠有遠意。然老能作佛。止是一人。道士不知奉佛。惑之甚矣。如父為道士。豈以道人子為道士。豈以道人故而不認其父乎。

六。五練生尸者。五練經云。滅度者用色。繒。天子一疋。公王一大。庶民五尺。上金五兩。而作一龍。庶民用鐵。五色石五枚。以書玉文。通夜露。埋深三尺。女青文曰。九祖幽魂。即出長夜。入光明天。供其厨飯。三十二年。還其故形。

(28)

廣弘明集卷第九 第三張 而更生矣。目笑曰。三九品中。天地大水三宮九府九宮一百二十曹。罪福功行。考官書之。无有差錯。善者壽。惡者奪年。豈有不因業行。直用五尺繒。而今九祖幽魂。入光明天。三十二年。還故形耶。不然之談。於斯可見。計五練之文。出天地未分之前。至今亦應用者。則三十二年後。穿冢而出也。耳目所知。何為義皇已來。不聞道士死尸九祖從地出者耶。不然之狀。又可笑也。今郊野古冢。亦有穴開焉。非道

(29)

士祖父更生之處乎。亦可發齒。七。觀音侍道者。有道士造老像。二菩薩侍之。一曰金剛藏。二曰觀世音。又道士服黃布帔。或似服把。通身被之。偷佛僧袈裟法服之相。其服黃帔。乃是古賢之衣。橫被加前。兩帶者。今悉削除。學僧服像。目笑曰。案諸天內音八字文曰。梵形落空。九重推前。天真皇人解曰。梵形者。元始天尊於龍漢之世号也。至赤明年号觀音矣。又案蜀記云。張陵避瘴丘社中。得呪咒之術。自造符書。以誑百姓。為大池

(30)

廣明集卷第九 第三十
所吞。弟子耻之。玄白。漢書云。劉焉以焉為督義司
為係師。衡子曾為顯。以。亂天下。漢書云。劉焉以焉為督義司
馬。遂煞漢中太守。漢書云。劉焉以焉為督義司
道化人。時傳黃衣巾。漢書云。劉焉以焉為督義司
泉。改著黃衣巾。漢書云。劉焉以焉為督義司
今。黃服不絕。像服沙門。良可悲也。且
立身之本。忠孝為先。子像父侍。天地
不立。觀音極位大士。老子不及大賢。
而令祖父立侍子孫。是不孝也。又
張曾逆人之罪。是不忠也。既扶不忠

(31)

不孝。何足踵焉。
八。佛生西陰者。老子序云。陰陽之道。
化成万物。道生於東。為木陽也。佛生
於西。為金陰也。道父佛母。道天佛地。
道生佛死。道因佛緣。並一陰一陽。不
相離也。佛者道之所生。大乘守善。道
者自然。无所從生。佛會大坐。法地方
也。道會小坐。法天圓也。道人不兵者。
乃是陰炁女人像也。故不加兵役。道
作兵者。可知道人見天子王侯不拜。
像女人深宮不干政也。道士見天子
守令拜者。以干政為目僚也。道會

(32)

廣弘明集卷第九第十張典金

酒者。無過也。佛會不飲。以女人飲酒。犯七出也。道會不齋。以主生。生須食也。佛會持齋。以主死。死不食也。以女人節食也。道人獨坐。以女人守一也。道士聚宿。故無所制也。

且笑曰。文始傳云。道生東。木男也。佛生西。金女也。今以五行推之。則金能刻木。木以金為官鬼。金以木為妻財。推此則佛是道之官鬼。道是佛之妻財也。又云。道生佛者。理則不然。陰陽五行。豈有生金之木。故知道不生

(33)

佛。道人大坐。以是道之官。而道士小坐。以上逼於官也。道人不兵租者。以本王種故免也。道士庶賤。兵租是常。道經若此。若免兵租。便違道教。又靈寶大誡云。道士不飲酒。不干貴。如何故違犯大誡乎。後之紘紘。全無指。又云。道士以齋為死法。故不齋者。何不飽食終日。養此形骸。而興絕粒服炁。以求長生之術乎。卒不見之。終為捕影之論矣。又云。道人獨卧。道士聚宿。據此合氣黃書。不可妄乎。九。日月周徑者。文始傳云。天去地四

(34)

十萬九千里。日月直度各三千里。周迴六千里。天地午子相去九千萬萬里。卯酉四隅亦尔。轉形濟苦經云。崑崙山高一万五千里。

目笑曰。依濟苦經云。天地相去萬萬五千里。與前文始全所不同。文始傳云。日月周圍六千里。徑三千里。據法則圍九千里。如何但止六千耶。又天圓地方。道家恒述。今四隅與方等量。則天地俱圓矣。化胡云。佛法上。限止極三十三天。不及道之八十一天上也。又云。

(35)

崑崙山九重。重相去九千里。山有四面。面有一天。故四九三十六天。第一重帝釋居之。今計崑崙山高一万五千里。而有九重。重高九千。則高八万一千。而言万五千者。何太乖各。大可笑也。十。崑崙飛浮者。文始傳云。万万億万万歲一大水。崑崙飛浮。今時飛仙迎取天王及善民。安之山上。復万万億歲大火起。今時聖人飛迎天王及人。安于山上。

目笑曰。濟苦經云。天地劫燒。洞然空蕩。清炁為天。濁炁為地。乃使巨靈胡

(36)

廣弘明集卷第九第六張典

意

交。造立山川日月如前。崑山飛浮。客可迎人安山之上。若天地洞然。山為火焚。義不獨立。如何迎取王人安山上乎。

又度人妙經云。五億重天之上。大羅之天。有玉京山。災所不及。計太上慈愍。何不迎之。以在玉京乎。若看死不迎。是不慈也。若不能迎。是欺詐也。又度人奉行經云。道言。我隨劫生死。然太上道君居大羅之上。災所不及。猶云隨劫生死。自餘飛仙。如何迎取天王

(37)

善人安于上。令免死者。深大惡。縣。又可笑也。

十一。法道天置官者。五符經云。中黃道君曰。天生万物。人為貴也。人身苞含天地。无所不法。立天子。置三公九卿二十七大夫八十一元士九州百二十郡千二百縣也。膳為天子大道君。脾為皇后。心為太尉。左腎為司徒。右腎為司空。封八神及齋為九卿。珠樓神十二。胃神十二。三焦神三。合為二十七大夫。四支神為八十一元士。合之百二十。以法郡數也。又肺為尚書

(38)

府。肝為蘭臺府。臣笑曰。檢道經州縣之名。文似近代所出。古縣大而郡小。見于春秋及周書洛誥。今反以郡大於縣。是則非春秋已前道經乎。誣悞迷謬。不可觀而可笑也。

十二。稱南無佛者。化胡經云。老。化胡王。不受其教。老子曰。王若不信。吾南入天竺。化諸國。其道大興。自此已南。無尊於佛者。胡王猶不信受。曰。若南化天竺。吾當替首。稱南無佛。又流沙塞有加夷國。常為劫盜。胡王患之。使

(39)

男子守塞。常憂。曰。吾男為憂塞。安子又畏加夷所據。兼憂其夫為夷所困。乃因号憂婆夷。臣笑曰。胡言南無。此言歸命。亦云救我。胡言憂婆塞。此言善信男也。憂婆夷者。云善信女也。若以老子言佛出於南。便云南無佛者。若出於西方。可云西無佛乎。若言男子守塞。可名憂塞。女子憂夫。恐夷。可名為憂夷。未知婆者復可憂其祖母乎。如此依字釋詁。醜拙困辱。大可笑也。

十三。鳥跡前文者。洞神三皇經稱。西

(40)

廣弘明集卷第九第十卷
域仙人曰。皇文者。乃是三皇已前鳥跡之始文章也。又云。三皇者。則三洞之尊神。大有之祖炁。天皇主炁。地皇主神。人皇主生。三合成德。萬物化生。臣笑曰。南極真人問事品稱。靈寶真文三十六卷。在玉京山玄臺玉室。真文大字滿中。天地淪沒。萬成萬壞。真文獨明。此之真文。即三洞文也。三皇即三洞之尊神。必不在三洞之後。亦時未有鳥獸。何得云三皇已前鳥跡之始文也。若以伏羲為三皇者。案淮

(41)

南子云。皇帝使倉頡觀鳥跡。造文字。此則止在皇帝之時。何得云三皇已前鳥文之始乎。
十四。張騫取經者。化胡經曰。迦葉菩薩云。如來滅後五百歲。吾來東遊。以道授韓平子。白日昇天。又二百年。以道授張陵。又二百年。以道授建平子。又二百年。以授于室。余後漢末陵遲。不奉吾道。至漢明永平七年甲子。歲星晝現。西方夜明。帝夢神人。長一丈六尺。項有日光。旦問群臣。傳毅曰。西方胡王太子。成道号佛。明帝即遣

(42)

廣和明集卷第九 第九張
塞等。窮河源。經三十六國。至舍衛。佛
已涅槃。寫經六十萬五千言。至永平
十八年乃還。
日笑曰。漢書云。張陵者。後漢順帝時
人。客學於蜀。入鶴鳴山。為地所吞。計
順帝乃是明帝七世之孫。理不在明帝
之前百餘年也。又云。明帝遣張騫尋
河源者。此亦妄作。案漢書。張騫為前
漢武帝尋河源。云何後漢明帝復遣
尋耶。不知騫是何長仙乎。代代受使。
一何苦哉。又可笑其妄引也。

(43)

十五。日月普集者。請天內音第三宗
飄天八字文曰。澤落覺菩基。緣大羅
千。天真皇人解曰。澤者。天中山名。衆
龍所窟。落覺者。道君之內名。菩基者。
真人之隱号。玉臺處澤山之陽。三万
日月。明其左右。羅漢月夫人。大劫既
完。諸天日月。會玉臺之下。大千世界
之分。天下改易。大千洞然。日笑曰。
濟苦經云。乾山洞然之後。乃使巨靈
胡文造山川。玄中造日月。崑山南三
十兆里。復有崑山。如是次第有千崑
山。名小千界。復有千小千。名中千界。

(44)

黃和明集卷第九 第三十張 鈞 考二
復有千中千。名一大千世界。計大千
世界中有百億日月。又經云。大劫既
交。天地改易。日月星辰。无有存者。若
其普集。則百億俱來。何為但三千而
至。若餘不集者。為是灾所不及。為是
本界闕少。若必少者。地上凡人。尚蒙
日月之照。天上福勝。如何獨无照乎。
又日月之下。乃是欲界下人。不名大
羅上界。灾所不及。今不來者。理其然
乎。將知造此經者。惟聞大千之名。迷
於日月之數。故其然哉。

(45)

十六。太上尊貴者。文始傳稱。老子與
尹喜遊天上。入九重白門。天帝見老
便拜。老命喜。為天帝相。老子曰。太
上尊貴。剋日引見。太上在玉京山七
寶宮。出諸天上。寂寂冥冥。清遠矣。
目笑曰。神仙傳云。吳郡沈義。白日登
仙。四百年後。還家說云。初上天時。欲
見天帝。尊貴不可見。遂先見太上。在
正殿坐。男女侍數百人。如此狀明。則
知太上劣於天帝矣。言太上尊貴。治
在衆天之上者。妄也。今據九天生神
章。太上住在玄都宮也。其玉清宮在

(46)

玄都之上。何重宮復在玉清之上。便高玄都兩重矣。而老子云太上治在衆天之上者。何謬如斯。

十七。五穀為剗命之鑿者。化胡經云。三皇修道。人皆不死。上古時。天生甘露。地生醴泉。食之。中。古。來。天。生。五炁。地。出。五。味。食。之。延。年。下。古。世。薄。天。生。風。雨。地。養。百。獸。人。捕。食。之。吾。傷。此。際。故。嘗。百。穀。以。食。非。民。於。是。三。皇。各。奉。粟。五。斗。為。信。求。世。世。子。孫。不。絕。五。穀。生。神。州。目。突。曰。五。符。經。云。三。仙。王。

(47)

告皇帝曰。人所以壽考者。不食五穀故也。大有經曰。五穀剗命之鑿。皇五穀。命促縮。此糧入腹。无希久壽。汝欲不死。腸中无屎。五符經云。黃精者三陽之炁。上太清宮。食之甘美。又長生也。未解老子何不嘗此。而嘗五穀腐人之腸乎。又三皇者皆神人也。何以不令子孫王於長生之國。而以五斗穀請子孫王於神州。求剗命腐腸之短壽乎。又可笑耳。

十八。老子作佛者。玄妙內篇云。老子入關。往維衛國。入清妙夫人口中。後剖

(48)

廣弘明集卷第九第三張興 无

左腋生。行七步曰。天上天下。惟我為尊。於是乃有佛法。目笑曰。化胡經云。老化胡賓。一切奉佛。老曰。却後百年。兜率天上。更有真佛。託生舍衛白淨王宮。吾於尔時。亦遣尹喜。下生從佛。号曰阿難。造十二部經。老子去後百年。舍衛國王果生太子。六年苦行。成道号佛。字釋迦文。四十九年。欲入涅槃。老子復見於世。号迦葉。在雙樹間。為諸大眾。請咎如來。三十六問。訖。佛便涅槃。迦葉菩薩焚燒佛屍。取舍利。

(49)

分國造塔。阿育王又起八万四千塔。即以事推。老子本不作佛。若作佛者。豈可老還自燒老尸而起塔耶。且可一笑。且老子諸經多云作佛。或作國師。豈可天下國師與佛並待。伯陽乎。度人化俗。要須李耳耶。若云佛不能作。要須道者。從始炁已來。獨一老子。不許餘人悟大道而為國師耶。是則老為自伐。惟我能也。然佛經人人行行。皆得佛果。道經不述。惟一老君。如何佛教如此之弘。道經如斯之隘乎。且妄言虛述。首尾无據。蜀記。張陵弛散。而注白

(50)

廣弘明集卷第九 第三張曲成
日昇天。漢書。劉安伏鉞。乃言長生不死。道家誣老子作佛。詐可恠哉。

又造天地經云。西化胡王。老子變形而去。左目為日。右目為月。索玄妙經云。老子乘日精。入清妙口中。是則老子乘一目之精而入口也。計大道洞神。何所不在。乃要馮一精而入胎乎。若必藉精。精依於首。若乘頭入。兩眼俱來。今乃乘一眼而入。使成偏見之大道乎。亦可笑也。

十九。勅瞿曇遣使者。老子化胡歌曰。

(51)

我在舍衛時。約勅瞿曇身。汝共摩訶薩。賣經來東秦。歷落神州界。迫至東海間。廣宣世尊法。教授韻俗人。與子威神法。化道滿千年。年滿時當還。慎莫戀東秦。元今天帝怒。太上蹋地瞋。目笑曰。索瞿曇者。即釋迦也。化胡經云。周莊本初三年。太歲丙辰。白淨王子。既得正覺。号佛釋迦。老子見其去世。恐人懈怠。復下多羅果落。号曰迦葉。親近於佛。焚尸取骨。起塔分布。若如上文。釋迦未生。不得預遣瞿曇往東土也。如其已生成佛者。中間无客

(52)

廣和明集卷第九 第四張
得受迦葉之約勅。充千年之使乎。豈
有菩薩親侍於佛。而勅佛為使乎。又
周莊一政。止有一十五年。元年乙酉。
全无丙辰。本初之号。何譌如斯。足令
掩耳。亦使太上瞞地而瞞乎。
二十。以酒脯事邪求道者。度人妙經
稱。三界魔王。各有歌辭。誦之百遍。召
度南宮。千遍。魔王保迎。万遍。飛昇大
空。過三界。登仙公。又玄中精經。道士
受誡符錄。置五岳位。設酒脯。舞拜。
自笑曰。觀身大誠士。道學不得祠祀

(53)

鬼神。及向禮拜。既是欲畧魔王。未度
諸有。焉能誦通百遍度南宮耶。
又案三張之法。春秋二分。祭社祠靈。
冬夏兩至。同俗祠祀。兵符社契。軍將
交兵。都无戒勸之文。此之神社。為神
為道。若是神者。道士不拜。如其道也。
設酒脯。豈有口誦魔言。身行礼祭。求
出三界。良可悲夫。
二十一。佛邪乱政者。化胡經。佛興胡
域。西方金炁。剛而无礼。神州之士。効
其儀法。起立浮圖。處處尊尚。皆本經
末。詳言迂蕩。不合妙法。飾詭經像。以

(54)

誑王臣。致天下水旱兵革相伐。不過十年。災變叠出。五星失度。山河崩竭。王化不子。皆由佛亂。帝主不事宗廟。庶人不享其先。而以神祇道烝。不可復理。目笑曰。智慧罪根品云。元始天尊曰。我於上皇元年。半切度人。延命萬八千年。我去後。人心頽壞。淫祀邪神。然生禱祈。更相殘害。自取天傷。壽无定年。以此推之。淫祀邪神。万神歡喜。無與道合。應獲福利。云何命促。壽无定年。又漢明以前。佛法未行。道烝隆

(55)

盛。何乃兵戈屢作。水旱相尋。兩血山崩。飢荒荐集。更有禁紂。炮烙生靈。自明帝後。佛法行來。五百餘年。寧有妖災虐政。甚於前者。以今驗古。誰有誑欺。事彰竹帛。不可掩也。噫。乃甯疎。頗尋兩教。道法謙退。行偽以顯佛真。佛法澄正。存理而開物性。若不如此。通道則可笑煞人。

二十二。樹木間誠枯死者。老子百八十戒重律云。吾戒大重。向樹說之則枯。向畜說之則死。又靈寶經云。玄素之道。古人修之。延年益壽。今人修

(56)

清和明集卷第九 第三十五張典
之消年損命。

又道士受三五將軍禁獸之法。有怨憎者。癩狂殞命。又度國王品。東方開明招真神。身著黑幘。有立丈。身廣百步。頭柱天。主食邪魔口容山。朝食五百。暮取三千。五十五合衣吞。呂笑曰。三元大誡云。天尊說十誡。十善等法。无量人得道。誡云。不得懷惡心。聞誡生謗得罪。今樹木无情。不慮獲罪起謗。何須戒之令枯。若必枯死。此則有知。若有知者。聞法應悟。然无此

(57)

理。何用斯言。公知今人修則損命。災毒已行。大道寬容。檢而不檢。致令殃延後代。而不收錄之耶。

又案三張之術。畏鬼科曰。左佩太極章。右佩昆吾鐵。指日則停雲。擬鬼千里血。又造黃神赤章煞鬼。朱章煞人。或為塗炭齋者。黃土泥面。驢驅泥中。懸頭著柱。打拍使熟。自晉義熙中。道士王公期除打拍法。而陸修靜猶以黃土泥額。及縛懸頭。如此淫祀。衆滿同爨。案漢燒好。帝疑其誑。對曰。若鬼神有知。不受无理之誑。如其无知。誑

(58)

之何益。故不為此。以事推測。常人之智。尚識達之。况鬼有靈。聰明正直。而受愚獸者。未之有也。今觀其文。詞義无取。有同俗巫解奏之曲。何期大道若此。客而不非乎。將不就嗜糟汁。酒淫終歲。以理推誠。豈得尔耶。

二十三。起礼北方為始者。依十誠十四持身經云。北方礼一拜。北方為始。東向而周十方。想見太上真形。

自笑曰。文始傳云。老子與尹喜遊天上。喜欲見太上。老曰。太上在火羅天。

(59)

五京山。極幽遠。可遙礼闕。遂不見而逐。以此推之。玄都玉京。太上所住。今在上方。何不以上為首。而浪礼北方耶。然道生東。陽也。何不東方為始。滿生西。陰也。北亦陰也。前已鄙之。今復尊重而前礼乎。又罪根品云。太上道君同陽館中。稽首礼元始天尊。問十善等法。此誠乃天尊所說。何以不礼天尊。而想見太上乎。捨本逐末。誰之各也。

二十四。宮親求道者。老子消冰經云。老子語尹喜曰。若求學道。先去五情。一

(60)

廣弘明集卷第九 第三人張曲

父母。二妻子。三情色。四財寶。五官爵。若除者。與吾西行。喜精銳。因斷七人首持來。老笑曰。吾試子心。不可為事。所然非親。乃禽獸耳。伏視七頭為七寶。七尸為七禽。喜疑反家。七親皆存。又造立天地記云。老子化胡。胡主不伏。老子打煞胡王七子國人一分。目笑曰。三元誠云。道學不得懷扶惡心。不孝父母。不愛妻子。計喜所然父母。如是。何得懷疑反視。如其實心。依誠懷惡。已犯重罪。何況斬二親之

(61)

首乎。又胡王不伏。煞其七子。亦以甚矣。又然國人一分。何斯不仁之深乎。若作法於後代。則令求道者。皆然二親妻子矣。又不可以一王不伏。而濫誅半國之人乎。進退二三可笑。恠也。二十五。延生符者。三元品云。紫微宮青延生符。書八方則八氣應之。便成人。毀符以燒者。人隨烟化為炁。其文四万劫一出。目笑曰。文始傳云。万億万億歲一大水。崑崙飛浮。有仙飛迎天王善人。安之山上。乃至前前万万歲。天地混走。

(62)

如鷄子黃。名曰一劫。案大水之日。天人不死。不應迎之山上。

又濟苦經。乾以洞然之後。潰然空蕩。計一劫之時。人物不存。其延生符四万劫乃出。豈可四万劫中。絕无天人。幽幽冥冥。何其遠也。又万万止是一億。億億止是一兆。止言一億兆年。而六万億万億者。蓋新學造經。不知數之大小耳。

二十六。椿與劫齊者。洞玄東方青帝頌曰。九五不常居。天地有傾危。大劫

(63)

終一椿。百六乘運迴。目笑曰。大水既漂。崑崙飛浮。後有大火。金鐵融。地无草。乃至万万億歲。天地如鷄子黃。搃名一劫。然椿是世木。以世火燒之。則灰。值劫火便絕。而言大劫齊椿者。一何謬歟。亦可笑矣。

二十七。隨劫生死者。如度命妙經云。大劫交周。天崩地淪。欲界滅无。太平道經。佛法華大小品。周遊上下十八天中。在色界內。至大劫交。其文乃沒。其玉清上道三洞神經真文玉字。出於元始。在二十八天无色界上。大羅

(64)

廣弘明集卷第九 弟子護教 經
玉京山玄臺。災所不及。故自然之文。
與運同生同滅。能奉之。七祖生天。轉
輪聖王。代代不絕。

目笑曰。度人本行經云。道言。自元始
開光以來。赤明九年。經九千餘億劫。
度一恒沙衆生。尔後至上皇九年。度人无
量。我随劫生死。世世不絕。恒與靈寶
同出。經久劫終。九炁改運。詔胎洪氏。
積三千餘年。至赤明開通。歲在甲子。
誕於扶力蓋天。復與靈寶同出度人。
元始天尊以我因緣。賜我太上之号。

(65)

在玄都玉京。以此推之。真文在玉京。
災所不及。而去自然之文。與運同生同滅。
同生同滅。豈非災也。

又云。我與靈寶同時出沒。又云。我随
劫生死。計靈寶運滅。太上隨亡。而高炁
不死。此為妄也。又玉京在衆天之上。
災所不及。理合可疑。一切形色。无有
存者。玉京玉臺。斯為色界。色界非
常。玉京豈存。又赤明甲子之号。磬同
河漢之寶矣。

二十八。服丹成金色者。神仙金液經
云。金液還丹。太上所服而神。今燒水

(66)

銀。還復為丹。服之得仙。白曰昇天。
與別集卷第九 第三張典
仙不得此道。徒自苦耳。燒丹成水銀。燒水銀成丹。
故曰。昔韓終服之。面作金色。
又佛身黃金色者。蓋道法驗也。令身
內外。剛堅如金。故号佛金剛身也。
目笑曰。文始傳云。太上老子太一元
君。此二聖亦可為一身。金液經云。太
一者。惟有中黃丈夫及太一君。此二
仙人主也。飲金液。昇天為大神。調陰
陽矣。
尋韓終未服金液。止是常人。既服昇

(67)

天。即老君是也。而老君為太上萬真
之主。何所不能。而乃須金液後調陰
陽乎。
又太一大神。成者多少。調陰陽者。復
須幾人。若言服者皆得。何其多耶。又
丹與水銀。遍地皆有。火燒成丹。作之
不難。何為道士不服。白曰。昇天。為天
仙之主。而辛苦叩齒。歷過一生。良可
哀哉。若不服者。明知為丹所候。故捕
影之談耳。
又大佛身金色。由丹所成。此乃不須
行因。一炷丹得。邪見之重。可為悲夫。

(68)

廣弘明集卷第九 第五張典 法華

二十九。偷改佛經為道經者。如妙真偈云。假使聲聞衆。其數如恒沙。盡思共度量。不能測道智。

目笑曰。此乃改法花佛智為道智耳。自餘並同。諸文非一。昔有問道士顧歡。歡答。靈寶妙經。天文大字。出於自然。本非法華。乃是羅什妄與僧肇。改我道經為法華也。且靈寶偷於法華。可誑東夏。法華之異靈寶。不殊西域。今譯人所出。不棄經文。以此推之。故知偷改為實。且佛經博約。詞義宏深。千

(69)

卷百部。无重文者。不同老經。自无別計。倚傍佛經。開張卷部。且五千之文。全无及佛。佛之八藏。亦不論道。自餘後作。皆竊佛經。後自明之。不廣其類。是以古來賢達。諷誦佛經。至今流傳。代代不絕。道法必勝。何不誦持。舉國統括。誦道誰是。是故知非可為准的。三十。偷佛經因果者。度王品云。天尊告純陀王曰。得道聖衆。至恒沙如來者。莫不從凡積行而得也。十仙者无數。亦有一興而致一仙位。復有積功而登。由功高則一舉。功卑則十昇。有階

(70)

級。從歡喜至法雲。相好具足。於是諸王聞說。即得四果。

又度身品。丘軋子於天尊所聞法。獲須陀洹果。

又文始傳。老子在闕賓彈指。諸天王羅漢五通飛天俱至。遣尹喜為師。得道。菩薩為老子作頌。

目笑曰。佛之與道。教迹不同。變通有異。道以自然為宗。佛以因緣為義。自然者。无為而成。因緣者。積行乃證。是以小乘列四果之老。大乘有十等之位。

(71)

從凡入真。具有經論。未知道家所列四果十仙。名與佛同。修行因緣。未見其說。然道家所修。吸炁冲天。飲水證道。聞法飛空。餌草尸解。行業既殊。證果理異。但說天有五重。或三千六十。或八十一。或六十大梵。或三十六天。或五億五萬餘天。或九真天王。九炁天君。四方炁君。三元三天。九宮天曹。玉清大有。玄都紫微。三皇太極。諸如此類。理有所緣。豈有虛張。自取矯異。請說此天為重為橫。為虛為實。服何丹草而獲此天。脫所未詳。則徒為虛損。

(72)

更來可笑矣。

黃和明集卷第九第三十五張

三十一道經未出書出者。案玄都道士所上經目。取宋人陸修靜所撰者。目云。上清經一百八十六卷。一百一十七卷已行。始清已下四十部六十九卷。未行於世。檢今經目。並云見在。乃至洞玄經一十五卷。猶隱天宮。今檢其目。並注見在。

目笑曰。修靜宋明時人。太始七年。因勅而上經目。既云隱在天宮。亦來一百餘年。不聞天下降。不見道士上

(73)

昇。不知此經從何至此。昔文成以書飯牛。詐言王母之命。而黃庭元陽。以道檢佛。張陵創造靈寶。吳赤烏時始出。上清起於葛玄。亦齊之間乃行。鮑靜造三皇。事露而被誅。文成書飯牛。致戮於漢世。今之學者。又踵其術。又可悲乎。漢書。張魯祖父陵。桓帝時造符書以惑眾。受道者出米五斗。俗謂米賊。陵傳子衡。衡傳子曾。号曰三師。三人之妻。為三夫人。皆云白日昇天。初受道名鬼卒。後号祭酒。後鄙之甚。穿鑿濫行。皆此例矣。

(74)

三十二。五億重天者。文始傳云。天有五億五萬五千五百五十五重。地亦如之。厚一万里。四角有金柱金軸。方圓三千六百里。神風持之。以四海為地脉。天地山川河漢通系。風雲皆從山出。目笑曰。三天正法經云。天光未明。七千餘劫。玄景始分。九氣存焉。九真天王。元始天王。稟自然之胤。置九天之号。上中下真。真為一。九有三。三天上。尤宮即太上大道君所治。計一天相去九万九千九百九十里。則九天相

(75)

去七十九万九千九百二十里。一里有三百步。一步有六尺。則有一十四億三千九百八十五万六千尺。以五億重天分之。則天天相去二尺。豈有厚万里之地。上載二尺之天乎。文始傳云。老子引四天王大衆。皆身長丈六。短者丈二。計人大而天小。何以自容。常卧不起。愕然大恠。三十三。道士出入儀式。玄中經說。道士執簡者。用金玉廣二寸。長五寸五分。執之為况。中古王執朝師君。下古金玉隱。執雜木長九寸。名為手簡。執

(76)

以去慢。誠於道士。若入王宮聚落人室。在舍外十步。著巾帔。執況而入。勿有側背。出舍外。脫巾帔。著素服。行勿自顯。損道法。若入俗家。整威儀。執簡坐。勿使俗怪。道士行百里外。執杖巾帔。香爐銅灌鉢。針出家之具。自隨。威儀具足。得十種功德。

呂笑曰。自然經云。道士巾褐帔法。褐長三丈六尺。三百六十寸。法年三十六旬。年有三百六十日。一身兩角。角各有六條。兩袖。袖各六條。合二十四

(77)

條。法二十四炁。二帶法陰陽。中兩角法兩儀。乃至冠法蓮花巾也。自然經既有科律。何以不依。乃法張魯黃巾之服。違律而無識也。

三十四。道士奉佛者。化胡云。願將優曇花。願燒栴檀香。供養千佛身。稽首礼定光。

又云。佛生何以晚。泥洹何以早。不見釋迦文。心中大懊惱。

又大誠云。道學當念遊大流景宮礼佛。呂笑曰。敷齋經。天尊令右真人曰。釋迦文以轉輪生死法化世。使天

(78)

老右玄真人以仙度之道不死之大法。
又老子序云。道主生。佛主死。道忌穢。
佛不忌。道屬陽生忌穢。佛則反之。據
此。清濁天分。死生大判。何為不念清
虛大道。而願生死穢惡佛乎。古昔殷
太宰問孔子聖人。孔荅。三皇五帝三
王及丘。俱不聖也。西方之人。有聖者
焉。故知孔子以佛為聖。不以道為聖
也。化胡云。天下大術。佛術第一。昇玄
云。吾師化遊天竺。符子曰。老氏之師。
名釋迦文。此道齋經又云。稱仙梵天。

(79)

稱佛隱文。外國讀經。多是梵天。道士
所好梵。即佛也。此即學佛久矣。由無
梵也。又靈寶三十二天大梵隱語。天
各八字。誦之万遍。即飛行。七祖同昇
南宮。此又道士學佛之證也。然道士
止知學梵。亦不知梵是何佛。愚而信
之。亦應有福。不知可笑以不。
三十五。道士合炁法。真人內朝律云。
真人曰。凡男女至朔望日。先齋三日。
入私房。詣師所。立功德。陰陽並進。日
夜六時。此諸猥雜。不可聞說。又道律
云。行炁以次。不得任意排醜。近好抄藏。

(80)

廣弘明集卷第九第三張典

越次。又玄子曰。不萬矣。得度世。不嫉妬。世可度。陰陽合。乘龍去六六。

呂笑曰。呂年二十之時。好道術。就觀學。先教呂黃書合炁三五七九男女交接之道。四目兩舌正對。行道在於丹田。有行者。度厄延年。教夫易婦。惟色為初。父兄之前。不知羞耻。自稱中炁真術。今道士常行此法。以之求道。有所未詳。

三十六。諸子為道書者。玄都經目六。道經傳記符圖論。六千三百六十

(81)

三卷。二千四十卷有本。須臾四萬五十四張。其一千一百餘卷。經傳符圖。其八百八十四卷。諸子論。其四千三百二十三卷。陸修靜錄有其數目及本。並未得。

呂鸞笑曰。道士所上經目。陸修靜目中。見有經書藥方符圖。止有一千二百二十八卷。本無雜書諸子之名。而道士今列二千餘卷者。乃取漢藝文志目。八百八十四卷。為道之經論。據如此狀。理有可疑。何者。至如韓子孟子淮南之徒。並言道事。又有八老黃

(82)

廣弘明集卷第九第三十九張典 碑
白之方。陶朱變化之術。翻天倒地之
符。辟兵煞鬼之法。及藥方呪厭。得為
道書者。可湏引來。未知連山歸藏易
林太玄黃帝金匱太公六韜。何以不
在道書之例乎。修靜目中。本無諸子。今
乃剽安。不知何據。且去年七月中道
士所上經目。止注諸子三百五十卷。燕
道經。今去八百餘卷。何以前後不同。
又人之有惡。惟恐人知。已之有善。慮
人不見。故道士自書去。不受道戒者。
不得讀道經。即如此狀。恐人知其醜。

(83)

乎。若以諸子為道書者。人中諸子。悉
湏追取。何得遺之。且道士引例。我老
子道德。本是諸子。今尊為經。流例相
附。有何過歟。若尔。則知老子黃子諸
子之流。如何得與儒流七經而相抗
乎。班固先六經。後二篇。序道為中上
賢類。斯實錄矣。
又陶朱者。即范蠡也。既事越王勾踐。
君目囚吳石室。嘗屎飲尿。亦以甚矣。
今尊崇其術。不亦昧乎。
又彘子被戮於齊。何為不行父術。變
化而自免乎。

(84)

廣弘明集卷第九第四十張
又造天地經。老子託幽王皇后腹。即幽王之子也。身為柱史。即幽王之目也。化胡云。老子在漢為東方朔。若審尔者。幽王為犬戎所煞。豈可不愛君父與神符。令不死乎。
又漢武窮兵。疲役中國。天下戶口。至減太半。禰老子為方朔者。何忍不與辟兵辟穀之符。獸人呪鬼之方。以護漢國乎。眼看流弊若此。无心取救。將非欺誑謬乎。

(85)

又魏收道經目錄。乃有六千餘卷。覈論見本。止有二十四卷。餘者虛指未出。將非鈇墨未脩。致經本未成乎。自餘孟浪紛綸。无足更廣。
廣弘明集卷第九

(86)